文化課保存用

茨城県教育財団文化財調査報告 Ⅲ

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3

—沖　餅　遺　跡—

茨城県教育庁文化課
水戸市三の丸1丁目5番38号
電話（水戸局）6111

昭和55年3月

財団法人　茨城県教育財団

081
2-1
3

茨城県教育庁文化課
水戸市三の丸1丁目5番38号
電話（水戸21局）3111

沖餅遺跡正誤表

ページ数	誤	正	ページ数	誤	正
例言 上から4行目	茨城県数育委員会	茨城県教育委員会	P70 下から4行目	土層土層は	堆積土層は
P5 上から3行目	茨域県教育財団	茨城県教育財団	P77 下から8行目	長径3.78㎝	長径3.78m
P14 下から14行目	E591~E~E695	E591~E695	P80 下から7行目	住居址実側図	住居址実測図
P56 下から1行目	短径90㎝の楕円形	短径90㎝の楕円形	P136 下から3行目	山状の通続	山状の連続
P67 下から8行目	北側30.5㎝	北側30.5m	P161 下から11行目	非常に軽く	非常に硬く

序

竜ケ崎ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，「北竜台及び龍ケ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」という名称で，財団法人茨城県教育財団が宅地開発公団からの委託を受け，昭和52年度から実施してまいりました。本書は昭和53年度に実施した沖餅遺跡の調査結果を集録したものであります。

これらの資料は，郷土の原始文化を究明するにあたって貴重な資料であると考えます。その意味からも，本書がより多くの方々にご活用いただけるよう希望いたします。

なお，この遺跡の調査にあたりまして，茨城県教育委員会，竜ケ崎市教育委員会をはじめ関係機関及び関係者各位の御協力と御指導をいただき，心から感謝を申し上げます。

昭和55年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹内　藤男

茨城県教育庁文化課
水戸市三の丸1丁目5番38号
電話（水戸21局）8111

例　　言

1．本書は，宅地開発公団と財団法人茨城県教育財団との委託契約に基づいて，昭和53年度に実施した竜ケ崎市若柴町沖餅に所在する沖餅遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，財団法人茨城県教育財団調査課第２班班長寺内寛，渡辺俊夫調査員，人見暁朗調査員，川井正一調査員が担当し，宅地開発公団竜ケ崎事業所，茨城県教育委員会，竜ケ崎市教育委員会等の諸機関をはじめ地元協力員の御協力を得た。

3．出土遺物等の整理は，渡辺俊夫が実施し，また，東京都教育庁社会教育部文化課学芸員小田静夫氏，茨城大学教授徳永正之，高瀬一男両氏の御指導を得た。

4．本書は渡辺俊夫が執筆し，その内容について発掘調査担当者間等で協議を重ねた結果である。

5．前述の御指導，御協力を賜わった諸機関に対し，文末ではあるが感謝の意を表わしたい。

目　　次

序

例　言

目　次

挿図目次

図版目次

第１章　調査の経緯…… 2

　第１節　調査に至る経過…… 2

　第２節　調査組織…… 2

　第３節　調査経過…… 4

第２章　遺跡の立地と環境…… 9

　第１節　地理的環境…… 9

　第２節　歴史的環境…… 9

第３章　遺構・遺物…… 11

　第１節　先土器時代…… 11

　　1　概要…… 11

　　2　層位…… 12

　　3　遺物分布…… 15

　　4　遺物…… 23

　第２節　縄文時代…… 56

　　1　遺構…… 56

　　2　遺物…… 58

　第３節　古墳時代…… 59

　　1　遺構…… 59

　　2　遺物…… 87

　第４節　その他…… 122

　　1　土壙…… 122

　　2　溝…… 125

　　3　遺物…… 125

第4章　グリット出土遺物……127
第1節　縄文時代の遺物……127
第2節　古墳時代の遺物……153
第5章　まとめ……157
第1節　先土器時代の遺物……157
第2節　住居址について……161
第3節　土壙について……163
第4節　溝について……164

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　沖餅遺跡全体図…… 3
第３図　遺構配置図(1)…… 4
第４図　遺構配置図(2)…… 6
第５図　先土器遺物表面コンタ…… 11
第６図　Ｅ５ｈ１～Ｅ５ａ１　西壁土層セクション…… 13
第７図　Ｅ５ｇ１～Ｅ６ｇ５　北壁土層セクション…… 14
第８図　樋田大宮・後野・沖餅遺跡土層対比…… 15
第９図　石器全体分布図…… 16
第10図　Ａ群石器平面図及び垂直分布図…… 18
第11図　Ｂ群石器平面図及び垂直分布図…… 20
第12図　Ｃ群石器平面図及び垂直分布図…… 21
第13図　Ｄ群石器平面図及び垂直分布図…… 22
第14図　Ａ群石器実測図…… 24
第15図　Ａ群石器実測図…… 26
第16図　Ａ群石器実測図…… 28
第17図　Ａ群石器実測図…… 29
第18図　Ｂ群石器実測図…… 30
第19図　Ｃ群石器実測図…… 32
第20図　Ｄ群石器実測図…… 34
第21図　その他・石器実測図…… 36
第22図　その他・石器実測図…… 38
第23図　その他・石器実測図…… 39
第24図　第11号住居址実測図…… 57
第25図　第11号住居址出土遺物…… 58
第26図　第１号住居址実測図…… 60
第27図　第１号住居址貯蔵穴…… 61
第28図　第２号住居址実測図…… 62
第29図　第３号住居址実測図…… 64

第30図　第４号住居址実測図…… 66
第31図　第４号住居址貯蔵穴…… 67
第32図　第５号住居址実測図…… 68
第33図　第５号住居址貯蔵穴…… 69
第34図　第６号住居址実測図…… 71
第35図　第６号住居址貯蔵穴…… 72
第36図　第７号住居址実測図…… 73
第37図　第７号住居址貯蔵穴…… 74
第38図　第８号住居址実測図…… 75
第39図　第８号住居址貯蔵穴…… 76
第40図　第９号住居址実測図…… 78
第41図　第９号住居址貯蔵穴…… 79
第42図　第10号住居址実測図…… 80
第43図　第12号住居址実測図…… 82
第44図　第12号住居址貯蔵穴…… 83
第45図　第13号住居址実測図…… 84
第46図　第14号住居址実測図…… 86
第47図　第１号住居址　接合平面・垂直分布図…… 88
第48図　第２号住居址　接合平面・垂直分布図…… 90
第49図　第１・２号住居址出土遺物…… 92
第50図　第３号住居址　接合平面・垂直分布図…… 94
第51図　第３号住居址出土遺物…… 95
第52図　第４号住居址　接合平面・垂直分布図…… 96
第53図　第４号住居址出土遺物…… 98
第54図　第５号住居址　接合平面・垂直分布図……101
第55図　第５号住居址出土遺物……102
第56図　第６号住居址　平面・垂直分布図……104
第57図　第７号住居址　接合平面・垂直分布図……105
第58図　第７号住居址出土遺物……106
第59図　第８号住居址　接合平面・垂直分布図……107
第60図　第８号住居址出土遺物……108
第61図　第９号住居址　平面・垂直分布図……110

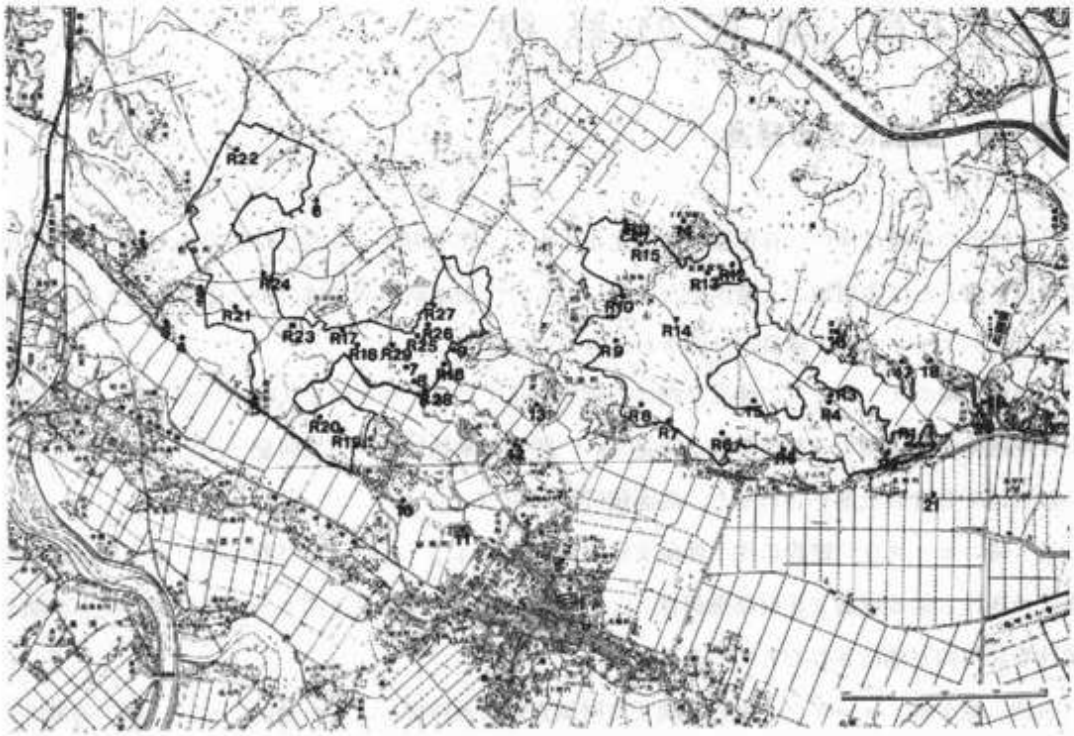
第62図　第10号住居址　平面・垂直分布図……111
第63図　第12号住居址　接合平面・垂直分布図……113
第64図　第12号住居址出土遺物……115
第65図　第１・２号住居址覆土出土遺物……117
第66図　第２・３・４号住居址覆土出土遺物……118
第67図　第５号住居址覆土出土遺物……119
第68図　第６・７・８号住居址覆土出土遺物……120
第69図　第８・９・10号住居址覆土出土遺物……121
第70図　土壙実測図……123
第71図　第１号溝実測図……126
第72図　グリット出土遺物(1)……129
第73図　グリット出土遺物(2)……130
第74図　グリット出土遺物(3)……132
第75図　グリット出土遺物(4)……134
第76図　グリット出土遺物(5)……135
第77図　グリット出土遺物(6)……137
第78図　グリット出土遺物(7)……139
第79図　グリット出土遺物(8)……141
第80図　グリット出土遺物(9)……142
第81図　グリット出土遺物(10)……144
第82図　グリット出土遺物(11)……145
第83図　グリット出土遺物(12)……146
第84図　グリット出土遺物(13)……148
第85図　土製品実測図……149
第86図　グリット出土石器実測図……152
第87図　グリット出土遺物……155
第88図　茨城県内先土器時代主要遺跡分布図……160
第89図　住居址主軸方向表……162
第90図　土壙主軸方向表……164

図 版 目 次

PL 1　沖餅遺跡全景……166
PL 2　沖餅遺跡遠景……166
PL 3　沖餅遺跡全景……167
PL 4　沖餅遺跡遠景……167
PL 5　沖餅遺跡遠景……168
PL 6　E5i1北壁土層セレクション……168
PL 7　先土器遺物出土状況(1)……169
PL 8　先土器遺物出土状況(2)……170
PL 9　先土器遺物出土状況(3)……171
PL 10　先土器遺物出土状況(4)……172
PL 11　先土器遺物出土状況(5)……173
PL 12　先土器遺物出土状況(6)……174
PL 13　先土器遺物出土状況(7)……175
PL 14　先土器遺物出土状況(8)……176
PL 15　第1号住居址遺物出土状況……177
PL 16　第1号住居址……177
PL 17　第2号住居址……178
PL 18　第3号住居址……178
PL 19　第4号住居址遺物出土状況……179
PL 20　第4号住居址……179
PL 21　第5号住居址遺物出土状況……180
PL 22　第5号住居址……180
PL 23　第6号住居址遺物出土状況……181
PL 24　第6号住居址……181
PL 25　第7号住居址遺物出土状況……182
PL 26　第7号住居址……182
PL 27　第8号住居址遺物出土状況……183
PL 28　第8号住居址遺物出土状況……183
PL 29　第8号住居址遺物出土状況……184

PL 30　第8号住居址……184
PL 31　第9号住居址……185
PL 32　第10号住居址……185
PL 33　第11号住居址……186
PL 34　第12号住居址……186
PL 35　第13号住居址……187
PL 36　第14号住居址……187
PL 37　第1号溝……188
PL 38　第1号土壙……188
PL 39　第2号土壙……189
PL 40　第3号土壙……189
PL 41　第4号土壙……190
PL 42　第5号土壙……190
PL 43　第6号土壙……191
PL 44　沖餅遺跡全景……191
PL 45　出土遺物　石核・舟底形石器……192
PL 46　出土遺物　舟底形石器……193
PL 47　出土遺物　舟底形石器……194
PL 48　出土遺物　掻器……195
PL 49　出土遺物　掻器・尖頭器・Uフレイク・削器……196
PL 50　出土遺物　削器……197
PL 51　出土遺物　削器……198
PL 52　出土遺物　削器・石核調整剥片……199
PL 53　出土遺物　剥片……200
PL 54　出土遺物　掻器・剥片・敲石……201
PL 55　出土遺物　A群出土剥片……202
PL 56　出土遺物　D群出土剥片……203
PL 57　出土遺物　その他出土剥片……203
PL 58　出土遺物　その他出土剥片……204
PL 59　グリット出土遺物　縄文式土器(1)……205
PL 60　グリット出土遺物　縄文式土器(2)……205
PL 61　グリット出土遺物　縄文式土器(3)……206

PL 62　グリット出土遺物　縄文式土器(4)……206
PL 63　グリット出土遺物　縄文式土器(5)……207
PL 64　グリット出土遺物　縄文式土器(6)……207
PL 65　グリット出土遺物　縄文式土器(7)……208
PL 66　グリット出土遺物　縄文式土器(8)……208
PL 67　グリット出土遺物　縄文式土器(9)……209
PL 68　グリット出土遺物　縄文式土器(10)……209
PL 69　グリット出土遺物　縄文式土器(11)……210
PL 70　グリット出土遺物　縄文式土器(12)……210
PL 71　グリット出土遺物　縄文式土器(13)……211
PL 72　グリット出土遺物　土製品……212
PL 73　出土遺物　石鏃・　局部磨製石斧……213
PL 74　第1（8・10）第3住居址（1・2・4～6）出土遺物（縮尺不同）……213
PL 75　第4号住居址出土遺物（縮尺不同）……214
PL 76　第4（11・13～15）・第5（1・2）・第7号住居址(1)出土遺物（縮尺不同）……215
PL 77　第8号住居址出土遺物（縮尺不同）……216
PL 78　第12号住居址出土遺物（縮尺不同）……217



第1図　遺　跡　位　置　図

番号	遺　跡　名	種　　類	番号	遺　跡　名	種　　類	番号	遺　跡　名	種　　類
R1	長峰城跡	城館跡	R17	大羽谷津遺跡 昭和54年度調査	集落跡	5	稲荷古墳	古　墳
R2	長峰古墳群	古墳群	R18	廻り地A遺跡 昭和55年度調査	集落跡	6	永山前遺跡	集落跡
R3	十三塚塚群	塚　群	R19	平台遺跡	集落跡	7	中根台遺跡	集落跡・古墳
R4	尾坪台遺跡	集落跡	R20	成沢遺跡	集落跡	8	奈戸岡古墳群	古墳群
R5	外人代遺跡 昭和52・53年度調査	集落跡・城館跡	R21	松葉遺跡 昭和52年度調査	集落跡・塚群	9	堂ノ下貝塚	貝塚群
R6-A	屋代遺跡 昭和54年度調査	集落跡	R22	庚申塚遺跡	集落跡	10	駟馬城跡	城館跡
R6-B	屋代城跡	城館跡	R23	沖鰐遺跡 昭和53年度調査	集落跡	11	愛宕山古墳	古　墳
R7	稲荷塚古墳群	古墳群	R24	赤松遺跡 昭和53・54年度調査	集落跡	12	奈戸岡祭祀遺跡	祭祀跡
R8	南三島遺跡	集落跡	R25	打越A遺跡 昭和54年度調査	集落跡	13	西花輪貝塚群	貝塚群
R9	ダンゴ塚	塚	R26	打越C遺跡 昭和54年度調査	集落跡	14	貝原塚城跡	城館跡
R10	町田塚群	塚　群	R27	ウツブタ遺跡 昭和54年度調査	集落跡	15	向井原遺跡群	集落跡
R11	かがみ塚	塚	R28	中根台塚群 昭和54年度調査	塚　群	16	西平遺跡	集落跡
R12	高井城下塚跡	城館跡・寺院跡	R29	廻り地B遺跡 昭和54年度調査	集落跡	17	馬込稲荷遺跡	集落跡
R13	前清水遺跡 昭和54年度調査	集落跡・貝塚・塚群	1	金塚遺跡	集落跡	18	要害山館跡	集落跡
R14	塚下遺跡 昭和54年度調査	塚群他	2	林遺跡	集落跡	19	半田遺跡	集落跡
R15	町田遺跡	集落跡	3	若柴遺跡	城館跡	20	登城山館跡	城館跡
R16	行部内遺跡	集落跡・貝塚	4	宿畑遺跡	城館跡	21	向須賀遺跡	包蔵地

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

日本経済の発展に伴い，首都圏の都市化が膨大し，住宅用地の需要に対処するため，良好な居住環境を備えた住宅用地の大量供給が必要に迫られ，茨城県南部地域の中心である竜ケ崎市北部台地上に，ニュータウン建設が計画されたものである。

この竜ケ崎ニュータウンの建設計画は，昭和46年1月に「竜ケ崎牛久都市計画事業」として，市街地開発事業に関する都市計画が決定され，開発対象地域は，宅地開発公団所有の土地及び，一般土地所有者の土地を合わせた，総面積671.5haである。

竜ケ崎ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，「北竜台及び龍ケ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」という名称で，宅地開発公団と茨城県教育財団との間で業務委託契約が締結されたものである。

当初，竜ケ崎ニュータウン内の埋蔵文化財調査対象遺跡は，北竜台地区7遺跡，龍ケ岡地区15遺跡であったが，工事を開始すると，新たに遺跡が発見されている。そこで茨城県教育委員会による北竜台地区の新遺跡の分布調査が実施され，その結果，新調査対象遺跡として7遺跡が新たに加えられた。本調査地（沖餅遺跡）は，その中の1つの遺跡である。

本遺跡の発掘調査は，宅地開発公団と財団法人茨城県教育財団との間に業務委託契約を締結し，昭和53年4月1日から翌年3月31日に至るまでの期間，発掘調査を実施したものである。

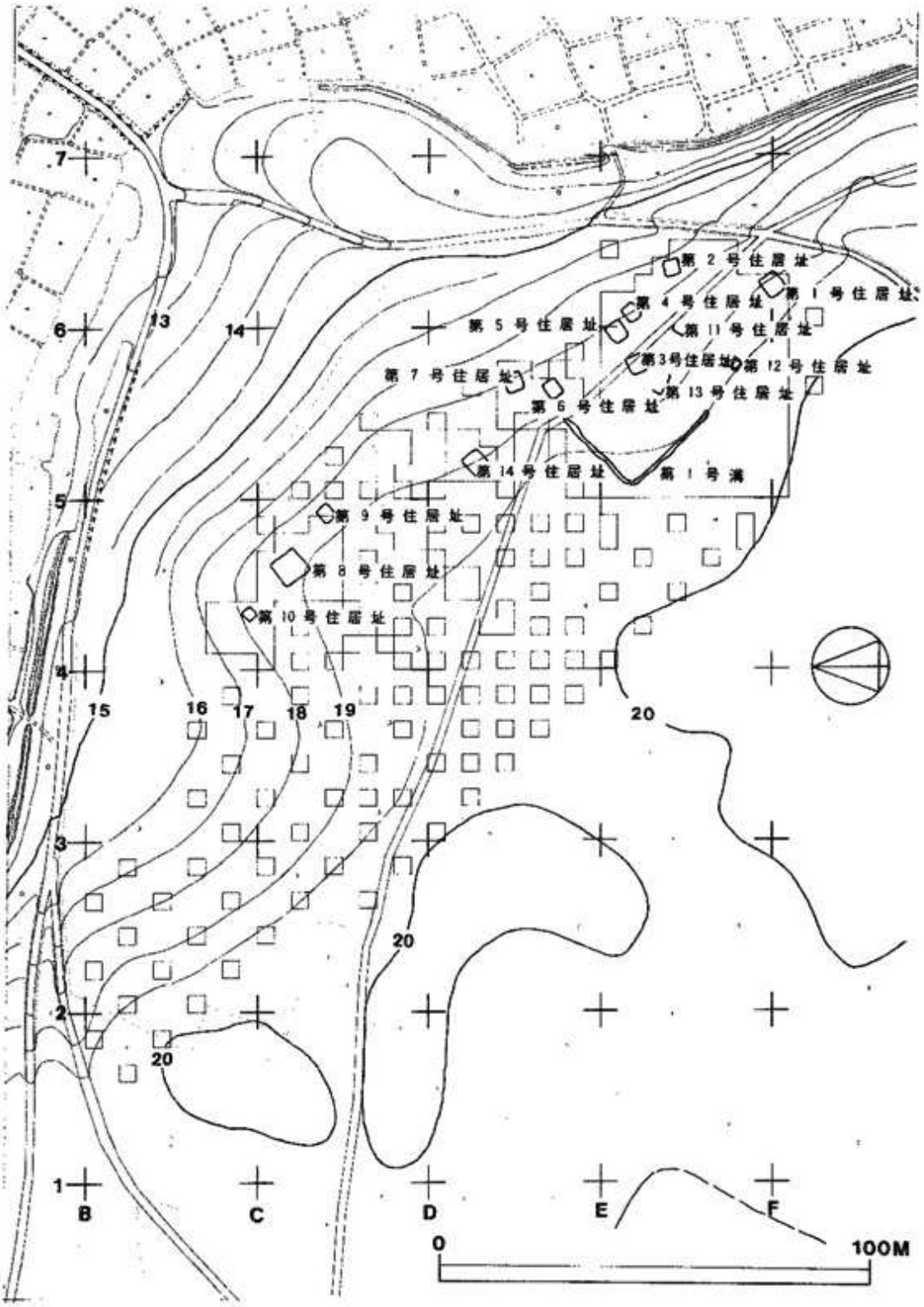
第2節　調査組織

竜ケ崎ニュータウン内の埋蔵文化財発掘調査は，財団法人茨城県教育財団本部に調査課を設置し，昭和53年4月1日から昭和54年3月31日に至る「北竜台及び龍ケ岡特定土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を宅地開発公団と締結した。

前述の事業を実施するために，調査課内の組織を改め，昨年度設置した事業所を廃止し，新たに班の組織に改正して，企画管理班をはじめ調査第1班，調査第2班，調査第3班とし，竜ケ崎に関する調査班を「調査第2班」として調査員6名が配置され，発掘調査を実施する。

昭和53年度ニュータウン内発掘調査遺跡は，北竜台地区赤松遺跡（R24），沖餅遺跡（R23），大羽谷津遺跡（R17），龍ケ岡地区は昨年度より継続の外八代（R5）の発掘調査を行う。

沖餅遺跡の発掘調査は，当初，班長寺内寛，調査員渡辺俊夫，調査員人見暁朗，調査員川井正一が担当したが，発掘中途より，寺内，渡辺によって調査が進められた。


第2号住居址
第1号住居址
第4号住居址
第11号住居址
第5号住居址
第3号住居址
第12号住居址
第7号住居址
第13号住居址
第6号住居址
第14号住居址
第1号溝
第9号住居址
第8号住居址
第10号住居址
7
6
5
4
3
2
1
13
14
15
16
17
18
19
20
20
20
B
C
D
E
F
0
100M

第2図 沖 餅 遺 跡 全 体 図

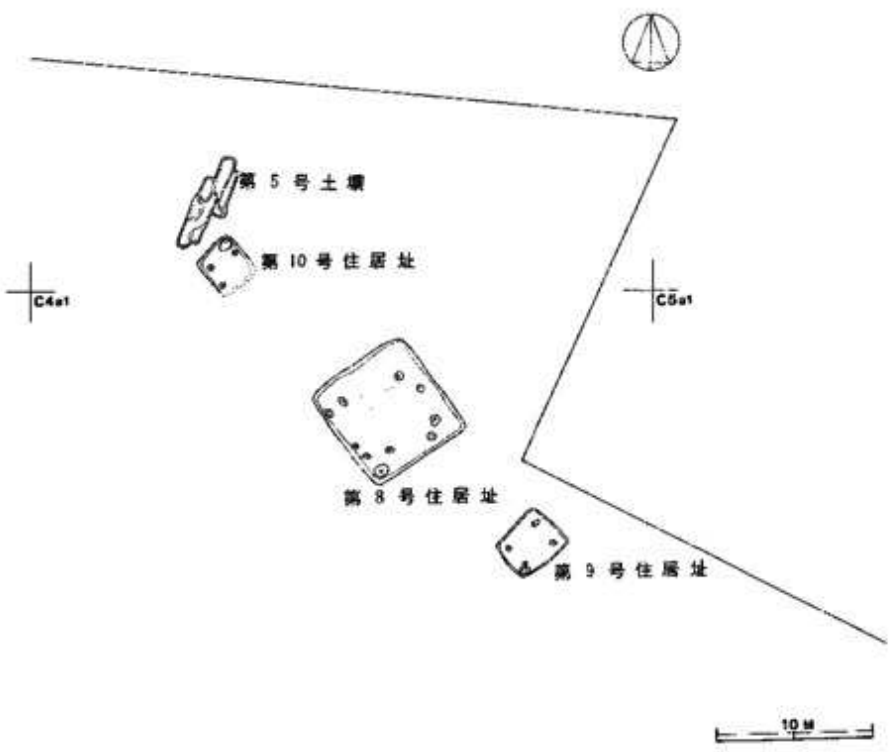
出土品等の整理作業は，昭和54年４月より調査員渡辺俊夫が実施した。

第３節　調査経過

沖餅遺跡の調査対象面積は14860㎡で，西側の一部を除いて大部分がナラ，クヌギ等を主とする雑木林であった。昭和52年度茨城県教育委員会が実施した分布調査によって，縄文時代の集落址として調査対象遺跡となったものである。

地区設定基準杭は昭和52年度に発掘した松葉遺跡（R21）において，宅地開発公団１等多角点No.291を基準杭として設定したX軸，Y軸を南へ120m，東へ440m平行移動した点（B１）を起点として40m四方の大調査区を設定し，さらに大調査区を４m四方の小調査区に分割する。すなわち，40m四方の大調査区内に100個の小調査区が設定されるわけである。

大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」・「C」……とし，西から東へ「１」・「2」・「3」……とする。小調査区は北から南へ「a」・「b」……「i」・「j」とし，西から東へ



第3図　遺構配置図（1）

「1」・「2」……「9」・「0」の数字で表わす。以上のように小調査区を分割すると，小調査区の名称は「A1a1」・「B2b2」のように表記する。また，沖餅遺跡の調査区分割は，大調査区18地区，その内部の小調査区は906ほどになり，調査方法等については茨城県教育財団の調査要項に基づいて調査を実施した。以下発掘調査の経過について，段階的に記述する。

4月下旬～5月上旬

4月26日より現場作業を開始し，諸器材の搬入，発掘調査対象区域内の清掃作業及び小調査区設定のための杭打ち作業を行う。5月12日，発掘調査前の遺跡全景の航空写真撮影を実施する。

6月上旬～7月上旬

5月中旬より6月上旬まで赤松遺跡の調査を実施していたため，一時沖餅遺跡の発掘を中断する。6月6日より本遺跡の第1次調査を開始する。この間，調査区全域にわたり，小調査区127グリットの表土（第1層）及び暗褐色土（第2層）の排土作業を行う。その結果，遺物，遺構の分布は北側台地縁辺部の大調査区C4・C5・E5・E6・F5・F6地区に多く分布している事が明らかになる。また，A2・B1・B2・C3地区からは遺物の出土が疎であるにもかかわらず，遺構（土壙）を多く確認する。

8月上旬～9月上旬

7月上旬より8月中旬まで赤松遺跡の発掘調査を実施していたために，その間に伸びた雑草の除去作業を実施すると共に，先の第1次調査の継続で，さらに遺構の分布などの状況を詳細に把握するために，C4・C5・D5・E5・E6地区をさらに38ケ所の小調査区の発掘調査を行い，9月上旬をもって第1次調査を終了した。その結果，遺物はB1・B2地区を除くほぼ全調査区から，縄文土器，土師式土器が検出され，特にF5，E5地区からは先土器時代の遺物と思われる石核，石器等を検出する。また，遺構として住居址・土壙・溝を確認し，主に台地縁辺部に多く分布していることを確認する。

第1次調査を終了した段階で航空写真撮影を実施する。

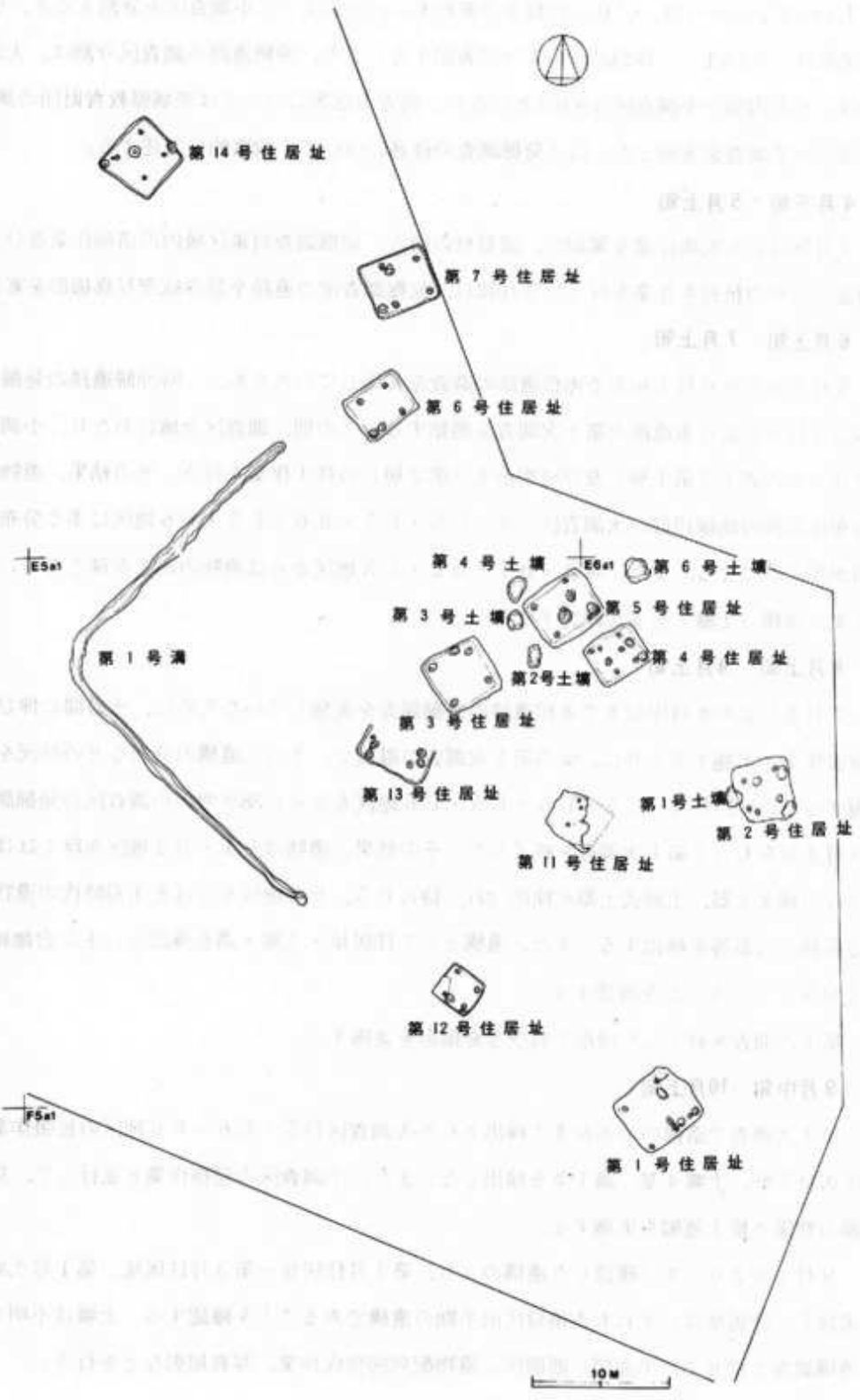
9月中旬～10月上旬

第1次調査で遺構の分布が多く検出された大調査区D5・E6・F6地区の拡張作業を実施し，住居址7軒，土壙4基，溝1条を検出した。また，小調査区の発掘作業と並行して，排土運搬道路の整備と排土運搬を実施する。

9月下旬より，先に確認した遺構のうち，第1号住居址～第3号住居址，第1号土壙の調査を実施し，住居址はいずれも古墳時代前半期の遺構であることを確認する。土壙は不明である。尚，遺構調査と併せて，平面図，断面図，遺物配列図作成作業，写真撮影などを行う。

10月中旬～10月下旬

大調査区，D5・E5地区に検出された溝の追跡調査を実施する。その結果，D5地区で検出


第14号住居址
第7号住居址
第6号住居址
E5a1
第1号溝
第4号土壙
E6a1
第6号土壙
第3号土壙
第5号住居址
第4号住居址
第2号土壙
第3号住居址
第13号住居址
第1号土壙
第2号住居址
第11号住居址
第12号住居址
F5a1
第1号住居址
10M

第4図 遺構配置図 (2)

された溝と，Ｅ５地区で検出された溝は連結され，しかも小調査区Ｅ５ｂ２からほぼ直角に屈折し，南東方向に伸びていることが判明する。

Ｅ５・Ｅ６地区の拡張によって確認されている遺構，第４号住居址，第５号住居址，第２号土壙～第４号土壙の調査及び，平面図，断面図，遺物配列図作成作業を実施する。住居址は前述した住居址と同時期のものと思われる。土壙については不明である。

Ｅ６地区から小調査区発掘の際，多量の剥片，チップ等を検出しているので，Ｅ６ｆ４～Ｅ６ｆ５の精査を行った結果，Ｅ６ｆ４区から安山岩製の尖頭器１個と黒曜石のチップを多量に検出した。

11月上旬～11月中旬

大調査区Ｃ４・Ｄ５・Ｅ５地区の拡張作業と並行して，Ｄ５地区から検出されている第６・７号住居址とＣ４地区から検出されている第８号住居址の調査を実施し，いずれも古墳時代前半期の遺構であることが確認される。尚，第８号住居址の北壁から一括の甕形土器を検出する。

Ｅ６地区内の先土器遺物の精査と平面図作成並びに遺物取り上げを実施する。尚，Ｅ６地区の精査から出土する石は，大部分が黒曜石で，しかもチップ，剥片が多い。

11月下旬～12月中旬

遺構の確認されているＣ４・Ｂ４地区の第９・10号住居址，第５号土壙の調査と，大調査区Ｄ５・Ｅ５区にまたがる第１号溝の調査を並行して行う。住居址は前述した住居址と同時期の遺構であり，土壙は最近の農作物を貯蔵する土壙群であることが確認される。

Ｅ５地区の先土器遺物の精査を実施する。その結果，Ｅ５ｈ１～Ｅ５ｈ２地区附近から多くの石器，剥片類を検出し，またＥ５ｊ０より尖頭器１個を出土している。

各遺構の平面図，断面図，遺物配列図作成，写真撮影は遺構の調査と並行して随時行い，先土器遺物は平面図，レベルを計測しながら遺物取り上げを行う。

12月下旬から現場作業を一時中断するので，器材等の点検，整備を行う。

12月下旬～１月上旬

年末年始のため現場作業を中断する。

１月中旬～２月中旬

１月９日に器材等の諸準備を行い，10日より調査を再開する。

Ｅ５地区とＤ５地区に確認されている遺構，第11号住居址～第14号住居址の調査を実施し，第11号住居址は本遺跡の中で確認された唯一の縄文前期後葉の遺構であることが判明した。その他の住居址は古墳時代前半期の遺構である。また，Ｅ６地区の第６号土壙の調査も併せて行う。

先土器時代の遺物の精査はＥ５・Ｆ５地区を実施し，その結果，石器，剥片等数点を検出した。

全遺構の調査及び実測図作成，写真撮影を２月中旬をもって終了し，その後，先土器時代の遺物の平面図作成，遺物取り上げ等を行う。

２月15・22日に発掘調査後の遺跡全景の航空写真撮影を実施する。

２月19日に調査器材等の整備を行い，昭和53年度沖餅遺跡の発掘調査を終了する。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

沖餅遺跡は，茨城県竜ケ崎市若柴町字沖餅1773番地の６他に所在する。竜ケ崎市の市街地中心より北西約４kmの台地上にある。

竜ケ崎市の中心地は，利根川の支流である小貝川など数本の川によって形成された広大な低地帯の沖積地に立地している。この広大な沖積地は，北は標高10～30ｍほどの稲敷台地の南端部と，西は標高20～21ｍほどの猿島台地まで広がり，その距離は約10kmにまでおよんでいる。

尚，最近まで主に稲作中心の純農村地帯として発達してきたが，最近，日本経済の高度成長，人口増加などによって，首都圏との関連が深まり，衛星都市的発展が見られるようになった。

稲敷台地の南端部の北竜台地区は，前述の低地より北西部にある人工の蛇沼から南または南東に向う谷をはじめ，数本の南または東方向へ走る支谷が入り込んでおり，さらにこの支谷より亜支谷が樹枝状に入り込んで，複雑な台地形成がなされている。また台地上は山林原野が多く，全面積の70％を占めており，主に針葉樹林帯で，中央部には山火事跡地で原野化したものが広い面積にわたって存在している。

沖餅遺跡は北竜台地区のほぼ中央部より北側に位置し，稲敷台地の端部が半島状に張り出し，標高20ｍの若柴地区の台地北東縁辺部に所在する。北東側は，幅 150ｍ前後の細長く複雑に入組んだ蛇沼へ至る支谷が走り，支谷は現在は水田として利用され，台地との比高は約６～８ｍほどである。

調査対象区域は，14860㎡の面積を有し，遺跡の北縁辺部は，ややゆるやかな傾斜を示し，集落形成はこの傾斜地の立ち上がり部に，谷を囲む状態で形成されている。当遺跡の西側はかって開墾によって利用された畑地の形跡が見られ，その他はナラ，クヌギ等を主とする山林で，西側には若柴から女化へ通じる道路が通っている。

第２節　歴史的環境

沖餅遺跡は竜ケ崎ニュータウン建設等の工事によって発見され，昭和52年度茨城県教育委員会による北竜台地区の新遺跡の分布調査が実施された。その結果，縄文時代の遺物の散布が認められ，茨城県教育委員会刊行の「茨城県遺跡地図」（昭和52年）等には遺跡番号3972として記載されている。

北竜台地区台地の複雑に入り込む谷津の谷頭を中心に多数の遺跡の分布が知られ，いかに昔から当台地が自然的環境に恵まれていたかがうかがわれる。

沖餅遺跡の周辺の遺跡として，赤松遺跡（R24），松葉遺跡（R21），林遺跡（3）等が所在し，赤松遺跡は当遺跡と同じ昭和53年4月～昭和54年7月にかけて発掘調査が実施され，縄文時代中期の住居址40軒，土壙240基，古墳時代前半期の住居址1軒などが確認された。また当遺跡の500mほど西には昭和52年度に発掘調査を実施した松葉遺跡（R21）があり，古墳時代前期の住居址11軒，土壙41基，溝2条，塚4基の調査が実施されている。いずれも前述の遺跡は財団法人茨城県教育財団によって調査が行われた遺跡である。

若柴の台地の東側には大羽谷津の台地があり，この台地上にも数多い遺跡が存在している。沖餅遺跡の南東の谷を隔てた台地上に昭和54年度発掘調査を実施した大羽谷津遺跡（R17），廻り地A遺跡（R18）があり，大羽谷津遺跡からは古墳時代前期の住居址5軒が検出され，廻り地A遺跡は縄文時代後期の土器が濃密に分布し，所によって地点貝塚も見られる。

昭和54年度には一部調査が進められたが，非常に密度の濃い遺跡であり，多くの遺構が確認されている。

また駒馬側の台地上には平台遺跡（R19），成沢遺跡（R20）があり，縄文時代，古墳時代の複合の集落址である。成沢遺跡は昭和43年に県立竜ケ崎第二高等学校が中心になって発掘調査が実施され，古墳時代前期の住居址が調査された。

若柴町の宿内には宿畑遺跡（2），若柴城跡（1）があり，宿畑遺跡からは昭和52年に芋穴の穿掘の際に，台付甕形土器等の完形品が出土し，古墳時代前期の集落址である。以上の他にも，北竜台地区には各時代にわたる遺跡が多数分布している。

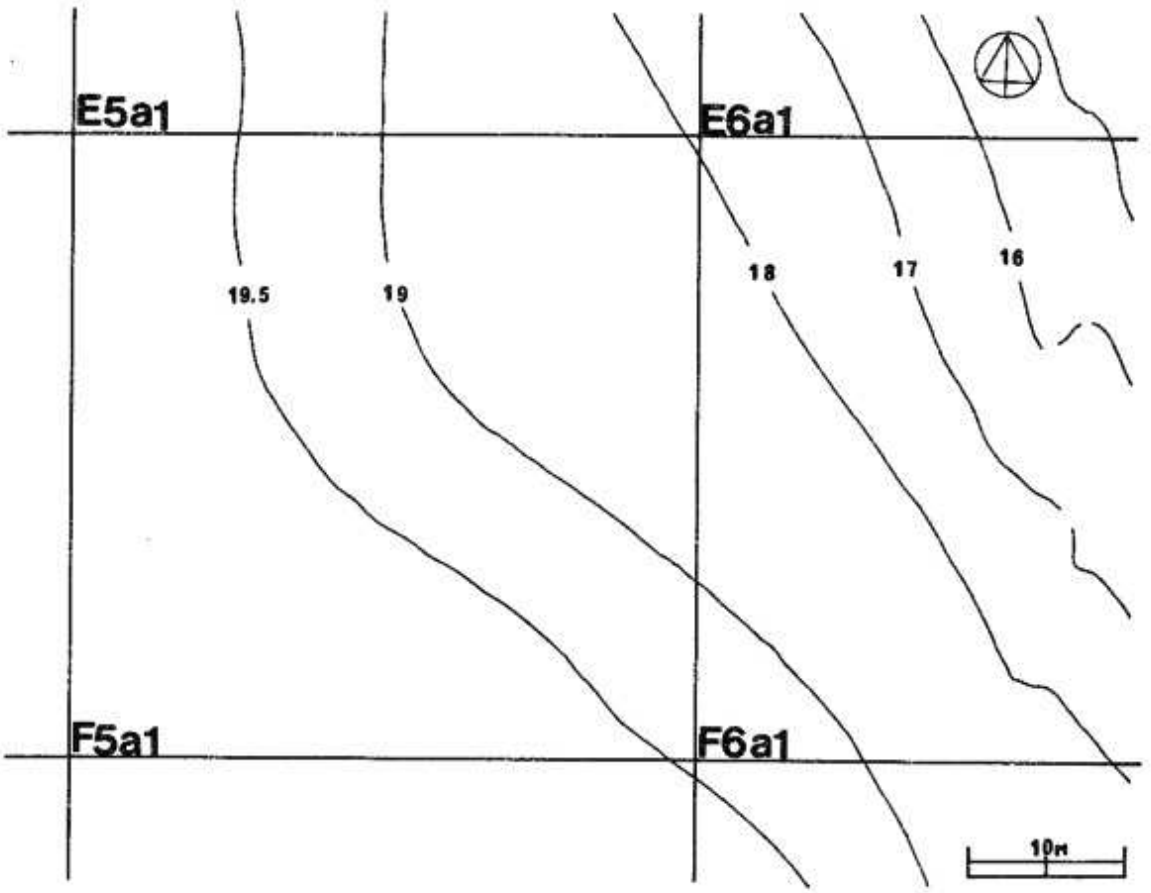
第3章　遺構・遺物

第1節　先土器時代

1．概　要

沖餅遺跡は当初縄文，古墳時代の集落址として考えられていた遺跡である。しかし，遺構確認のため調査を進めて行くと，海抜19.5m前後で，北東へやや緩やかな斜面へ変化する位置の大調査区Ｅ５地区，Ｆ５地区のグリットから先土器時代の遺物と思われる石核，石器等を検出した。その後，Ｅ５ｅ６，Ｅ５ｃ７附近とＥ６地区より，頁岩，黒曜石の剥片，チップ等の分布が見られた。尚，石器等の分布の範囲はＥ５・Ｅ６・Ｆ５地区に広がっていることが明確になった。

調査は最初石器等が分布していた地区をグリットごとに全体にわたって深さ約10cm程度ずつ掘



第5図　先土器遺物表面コンタ

り下げて調査を進めていった。その後，集中的に分布していた地区，Ｅ５ｇ２・Ｅ５ｈ２・Ｅ５ｉ２とＦ５地区を重点的に掘り下げて行き，Ｅ５地区からは舟底形石器，掻器等が出土し，いずれも頁岩質のものであった。またＦ５地区からは石核，掻器，削器等を検出し，Ｅ６地区よりは大部分が黒曜石の剥片，チップ等の分布が見られた。

出土遺物は主に第３層褐色土（ローム漸移層）から出土し始め，掘り下げていくに従って遺物出土量は除々に多くなり，遺物が最も集中的に検出されたのは第４層（軟質ローム）の上位である。

出土遺物は大きく分類すると４群に分けることができる。すなわち小調査区Ｅ５ｈ２を中心にした１つの群があり，遺物は長軸12m，短軸６ｍの不整楕円形の範囲に散布していた。この群から東南東へ約12m離れた小調査区Ｆ５ａ６にもう１つの群がある。この群からはグリット発掘の際，三角錐状の石核が検出された地区であり，遺物は長軸７ｍ，短軸４ｍの不整楕円形の範囲に分布されている。その他，小調査区Ｅ５ｅ７を中心に小集団が見られ，Ｅ６地区に集団として把握しにくい多数の遺物が集中して検出されている。

出土遺物の石材は主に頁岩，黒曜石が多量で，その他少数ではあるが，チャート，安山岩が見られる。尚，頁岩は色調などから細分は可能である。

２．層　　位（第６・７・８図）

沖餅遺跡の地層の堆積状態は稲敷台地における標準的な堆積を示している。表土層から粘土層までの深さは約４ｍを測る。計測ベルトは石器等が多数検出されたＥ５・Ｅ６地区の東西，南北で，テストピットはＦ５ａ１の南壁を計測，観察したものである。

第１層（表土層）

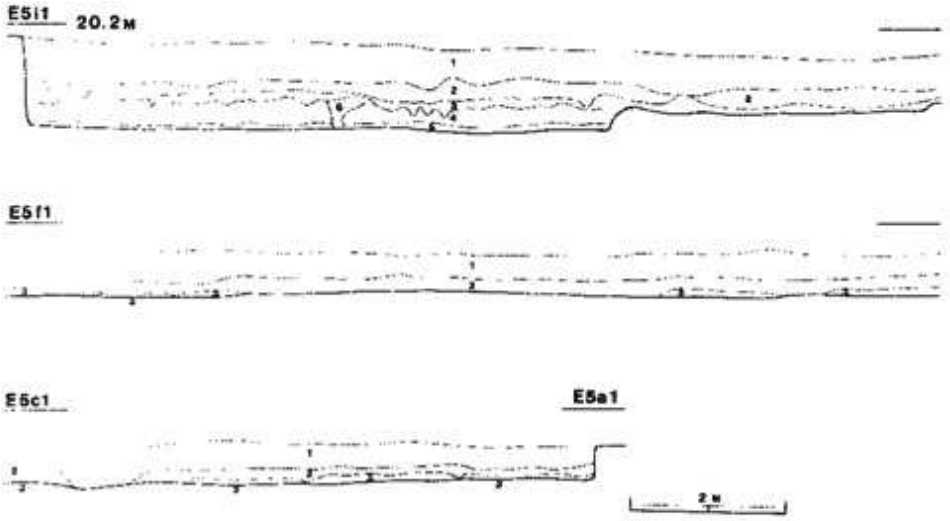
色調は黒褐色を呈し，堆積土層の厚さは20～30cmほどである。上位は腐蝕した木葉などが堆積して土壌粒子は粗く，全体にサラサラした土質である。

第２層

色調は暗褐色を呈し，土質は１層に比較してやや粘性を増して，全体にしまりがうかがわれる。堆積土層の厚さは20cm前後である。本層の下位部分から縄文式土器，土師式土器が検出され，Ｅ６地区より安山岩の尖頭器を出土した。

第３層

部分的に黒褐色の粒子を含み，色調は全体に褐色を呈しており，いわゆるローム漸移層である。粘性は少し強いが，乾燥するとザラザラになり，黄褐色に変色する。堆積土層の厚さは30cmほどであり，上位層からは古墳時代の遺構が確認される。遺物は頁岩，黒曜石の石器，剥片と縄文式土器を検出する。



第6図　E5a1～E5h1　西壁土層セクション

E5a1～E5h1西壁土層解説

1.Hue7.5YR　3/2　黒褐色
2.Hue7.5YR　3/4　暗褐色（ローム粒子少量含む）
3.Hue7.5YR　4/4　褐色（黒褐色の粒子を上層に含む）
4.Hue7.5YR　5/6　褐色（やわらかく粘りがある）
5.Hue7.5YR　6/6　明褐色（ハードロームで大ブロックのパカパカした粘りのない土質である）
6.Hue7.5YR　3/3　暗褐色

第4層（ソフトローム）

色調は褐色を呈し，粘性はほとんどなく，柔かい土質である。軟質のローム層に相当するもので，本層の土層の厚さは約20～30cmほどである。出土遺物は頁岩の石器，剥片等が上位から中位層にかけて検出する。

第5層（ハードローム）

色調は明褐色で，削ると艶があり，また粘性が強く，非常に硬い土質である。本層の上位層まで調査を実施したが，本層からの遺物の包含は認められなかった。堆積土層はほぼ水平で40～50cmほどの厚さである。

第6層～第8層

いずれも褐色を呈する土層で，下位に行くに従って除々に粘性を増し，硬くしまった土質である。部分的に茶褐色の鉄分を含んだところも認められる。

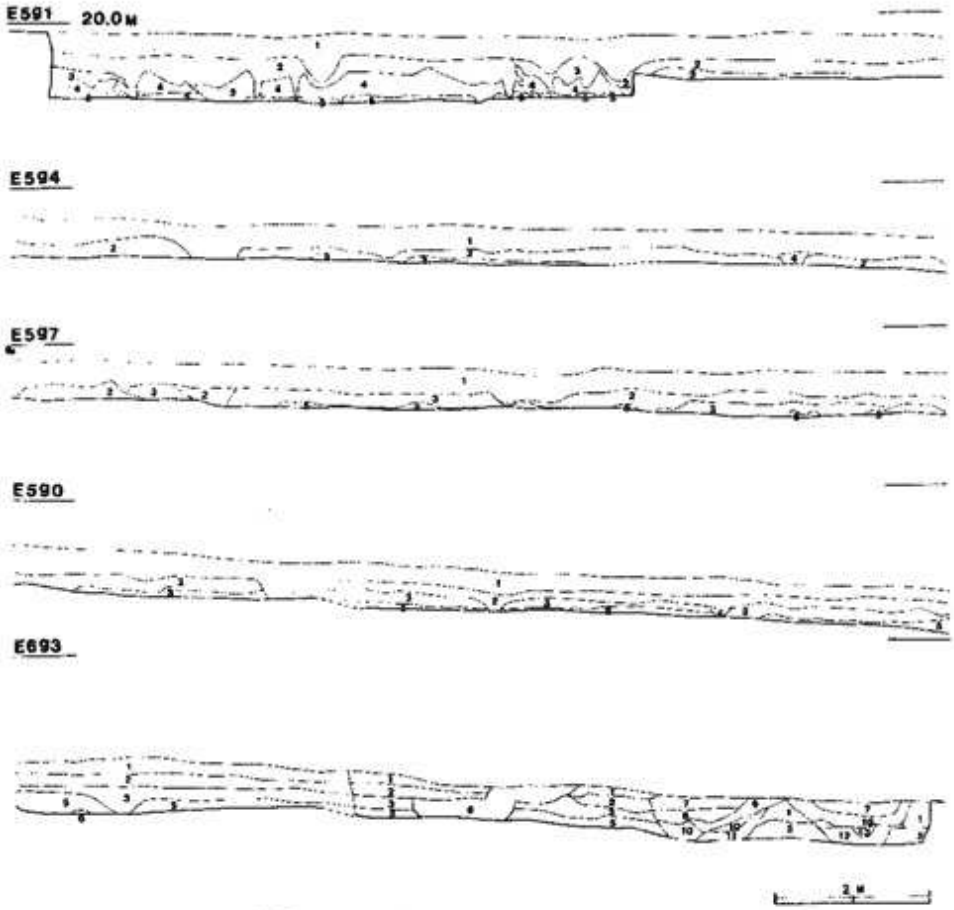
第9層～第10層

色調は褐色を呈し，非常に粘性が強くなり，灰色の粘土を部分的に含んでいる。第10層より下層は白灰色の粘土層である。

また，遺物包含層について，額田大宮遺跡と後野遺跡と当遺跡とを比較すると，額田大宮遺跡

は細石器を中心にした遺物を軟質ローム層中から大部分を出土し，一部硬質ローム層から検出された遺物もある。

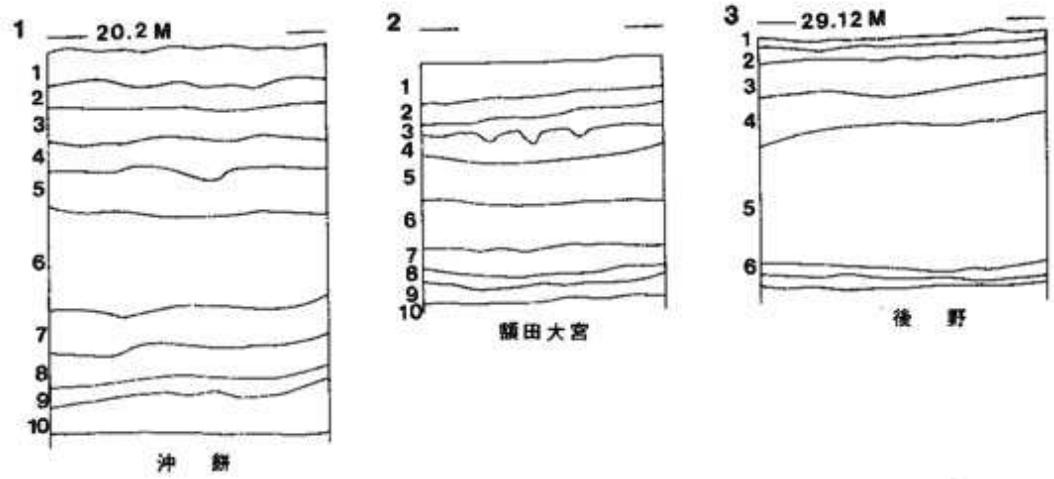
後野遺跡からは石器類と無文土器を黄褐色パミス層から褐色軟質ローム層にかけて検出されている。沖餅遺跡は第3層褐色と第4層褐色軟質ローム層の境界に多く出土し，一部軟質ローム上層まで及んでいる事を確認する。



第7図　E5g1～E6g5　北壁土層セクション

E5g1～E　～E6g5北壁土層解説

1. Hue7.5YR 3/1 黒褐色
2. Hue7.5YR 3/2 暗褐色（ローム粒子少量含む）
3. Hue7.5YR 3/3 褐色（黒褐色の粒子を上層に含む）
4. Hue7.5YR 3/4 褐色（やわらかく粒りがある）
5. Hue7.5YR 3/4 明褐色（ハードロームで大ブロックのパカパカした粘りのない土質である）
6. Hue7.5YR 3/4 褐色（ロームブロック大小含む）攪乱
7. Hue7.5YR 3/3 暗褐色（ローム粒子含む）
8. Hue7.5YR 3/2 極暗褐色（ローム粒子・ブロック含む）
9. Hue7.5YR 3/4 褐色（ロームブロック，黒褐色粒子含む）
10. Hue7.5YR 3/3 暗褐色（ローム粒子含む）
11. Hue7.5YR 3/4 褐色（黒褐色粒子含む）
12. Hue7.5YR 3/3 黒褐色（ロームブロック含む）
13. Hue7.5YR 3/2 黒褐色（ロームブロック含む）



第8図　額田大宮・後野・沖餅遺跡土層対比

沖餅遺跡

1.Hue7.5YR　3/3　黒褐色
2.Hue7.5YR　3/4　極暗褐色
3.Hue7.5YR　4/4　褐色
4.Hue7.5YR　5/6　明褐色
5.Hue7.5YR　4/6　褐色
6.Hue7.5YR　5/6　褐色
7.Hue7.5YR　4/4　褐色
8.Hue7.5YR　5/6　褐色
9.Hue7.5YR　5/6　褐色
10.Hue 10YR　5/6　褐色

額田大宮遺跡

1.表土層
2.黒褐色
3.褐色
4.褐色軟質ローム層
5.褐色硬質ローム層
6.暗褐色硬質ローム層
7.暗褐色硬質ローム層
8.鹿沼軽石層

後野遺跡

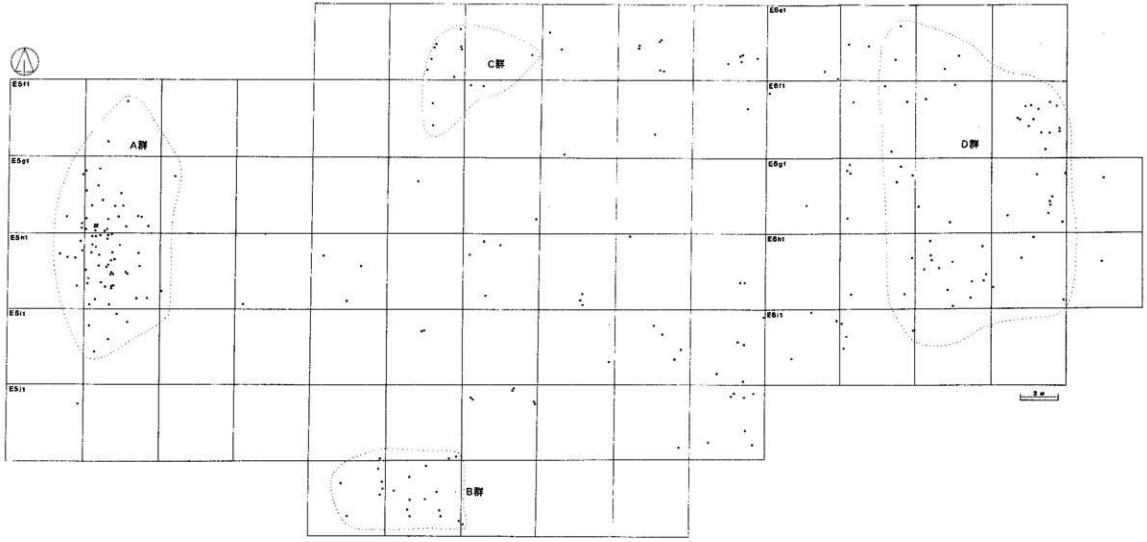
1.表土層
2.黒褐色
3.黄褐色パミス層
4.褐色軟質ローム層
5.褐色硬質ローム層
6.鹿沼土層
7.暗褐色ローム層

3　遺物の平面分布（第9・10・11・12・13図）

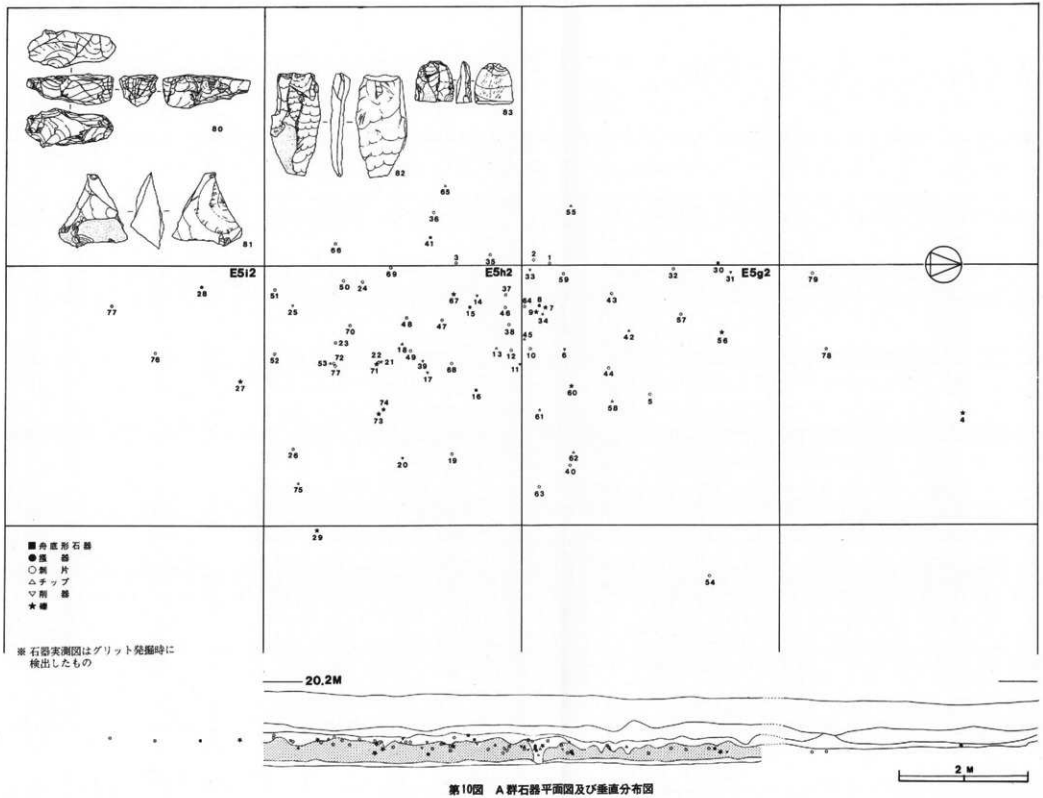
沖餅遺跡から検出された遺物は石器，縄文式土器，土師式土器で，石器の組成は石核1点，舟底形石器6点，掻器17点，削器20点，Uフレイク15点，剥片140点，チップ59点，尖頭器2点，敲石2点，凹石1点，その他礫を120点出土し，総計383点である。

石器等の素材は14種類に分類され，特に頁岩を素材にした石器類が多く検出されている。黒曜石は剥片，チップの出土数が多く，石器の数は少ない。また分布位置を見ると頁岩，安山岩，泥質砂岩は，E5区，F5区に大多数が分布し，黒曜石はE6地区に集中的に分布している。

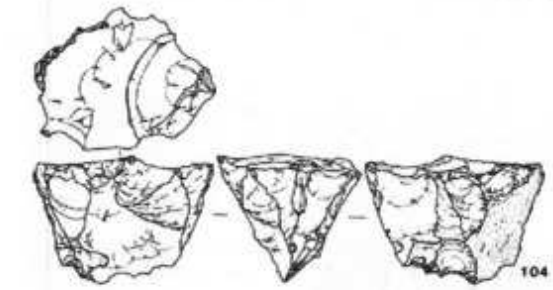
以上のように黒曜石と他の石器の出土位置が区分され，出土層も若干異なっている。

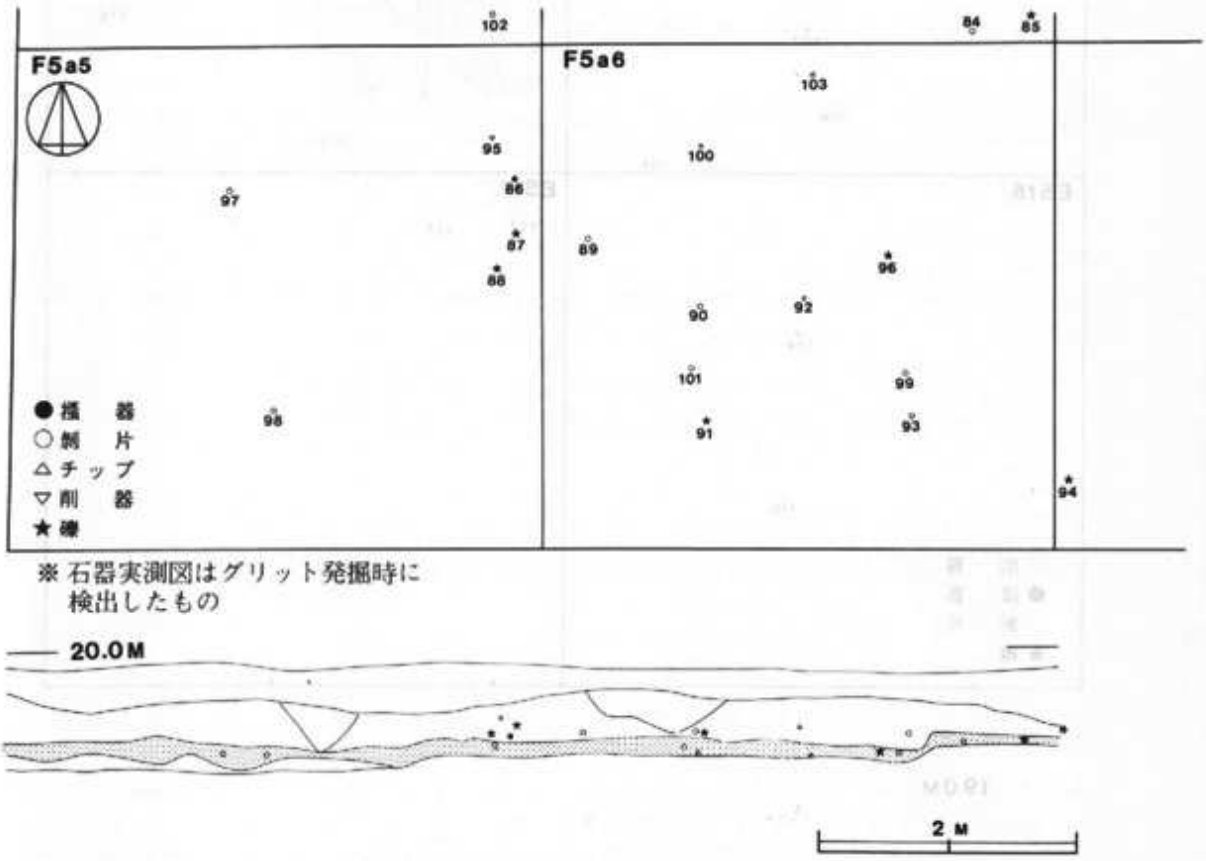

A群
B群
C群
D群
E5f1
E5g1
E5h1
E5i1
E5j1
E6e1
E6f1
E6g1
E6h1
E6i1
2m

第9図 石器全体分布図



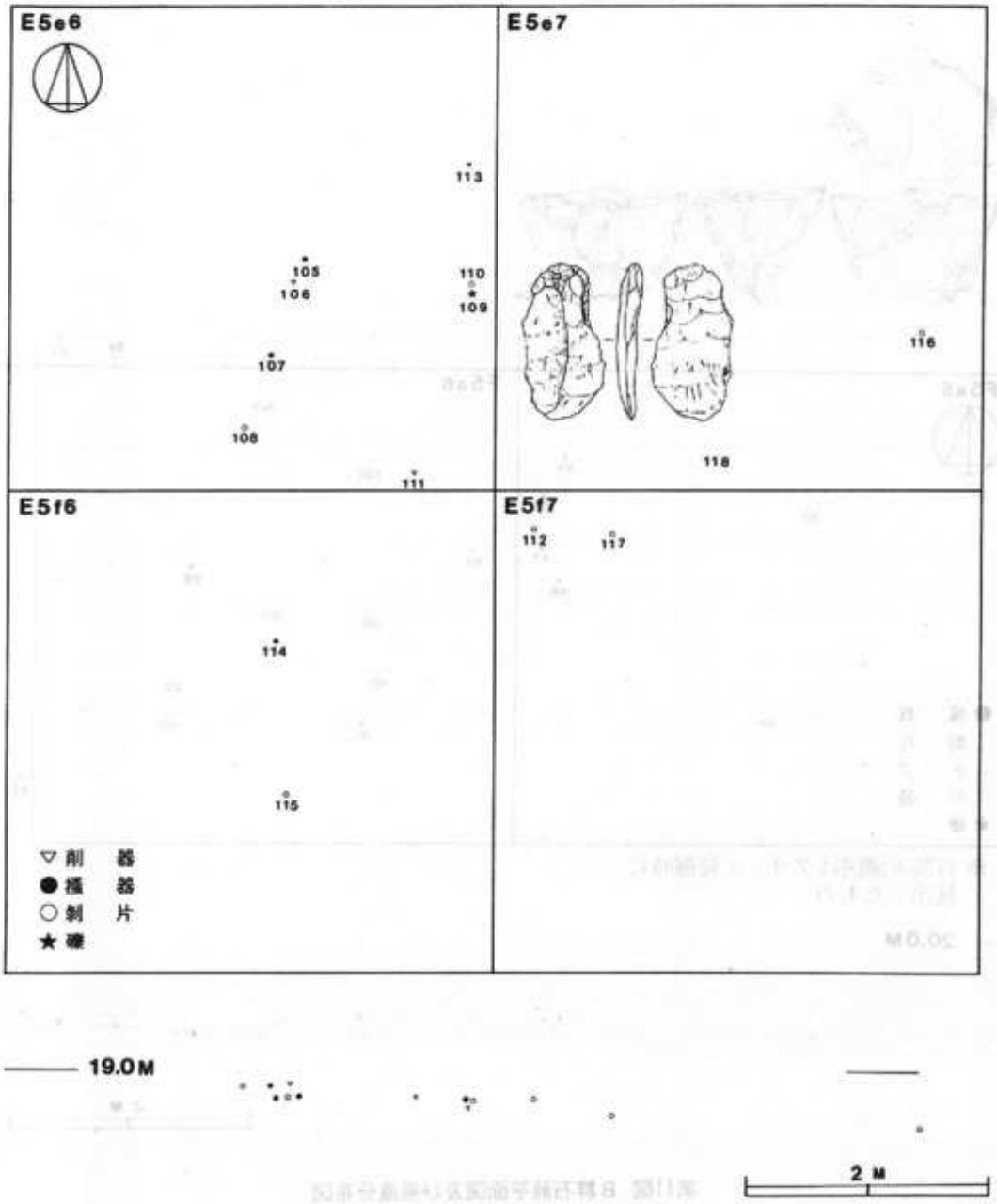
第10図　A群石器平面図及び垂直分布図





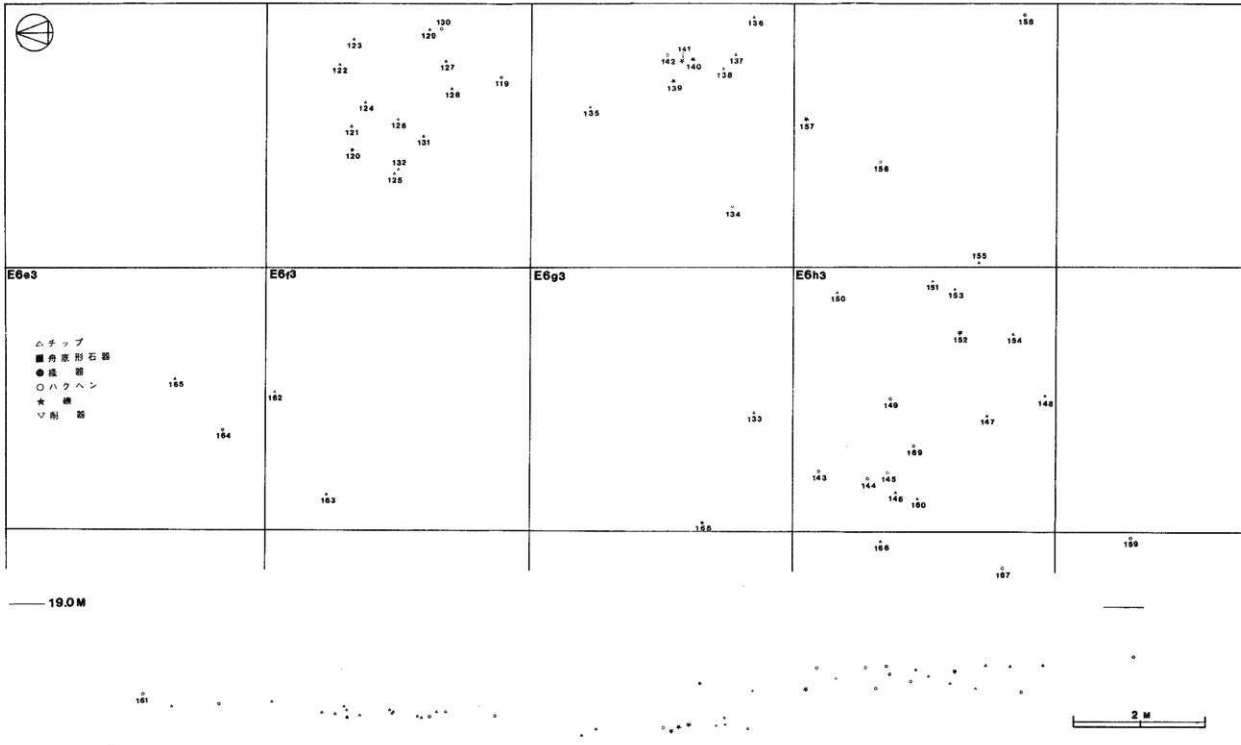
※ 石器実測図はグリット発掘時に
検出したもの

第11図　B群石器平面図及び垂直分布図



※ 石器実測図はグリット発掘時に
検出したもの

第12図　C群石器平面図及び垂直分布図



第13図　D群石器平面図及び垂直分布図

出土遺物の分布を見ると，４ケ所のユニットが考えられ，Ｅ５ｇ２・Ｅ５ｈ２を中心とするＡ群，Ｆ５ａ５を中心とするＢ群，Ｅ５ｅ７を中心とするＣ群，Ｅ６ｇ２・Ｅ６ｈ２を中心とするＤ群の４ケ所に区分される。

Ａ群は頁岩を素材にした石器（舟底形石器４点，掻器２点，削器９点等）と，泥質砂岩を素材にした石器（舟底形石器１点，削器１点）を出土している。Ａ群は特に本遺跡の中では多数の石器を検出した地区で，しかも軟質ローム層にまで遺物の包含が認められ，また，この地区からだけ舟底形石器５点を出土している点は特に留意しなければならない。石器を出土した同じ層より炭化材の分布と，かすかな赤褐色を示す地点を確認している。

Ｂ群はＡ群と同じ頁岩を素材にした石器（削器１点，Ｕフレイク１点，剝片６点）と三角錘状の石核をグリット発掘時に１点検出し，また安山岩を素材にした石器（掻器１点，剝片２点等）を出土した。

Ｃ群は頁岩，安山岩を素材にした石器（掻器３点，削器３点等）を検出している。

Ｄ群は黒曜石を中心にした集団で，チップの数が他の遺物に対して非常に多い。石器としては掻器２点，Ｕフレイク２点，安山岩製の尖頭器１点を検出している。

また，前述の群に入らなかった石器類をその他の群として取り扱い，考，実測図を作成している。

4．遺　物

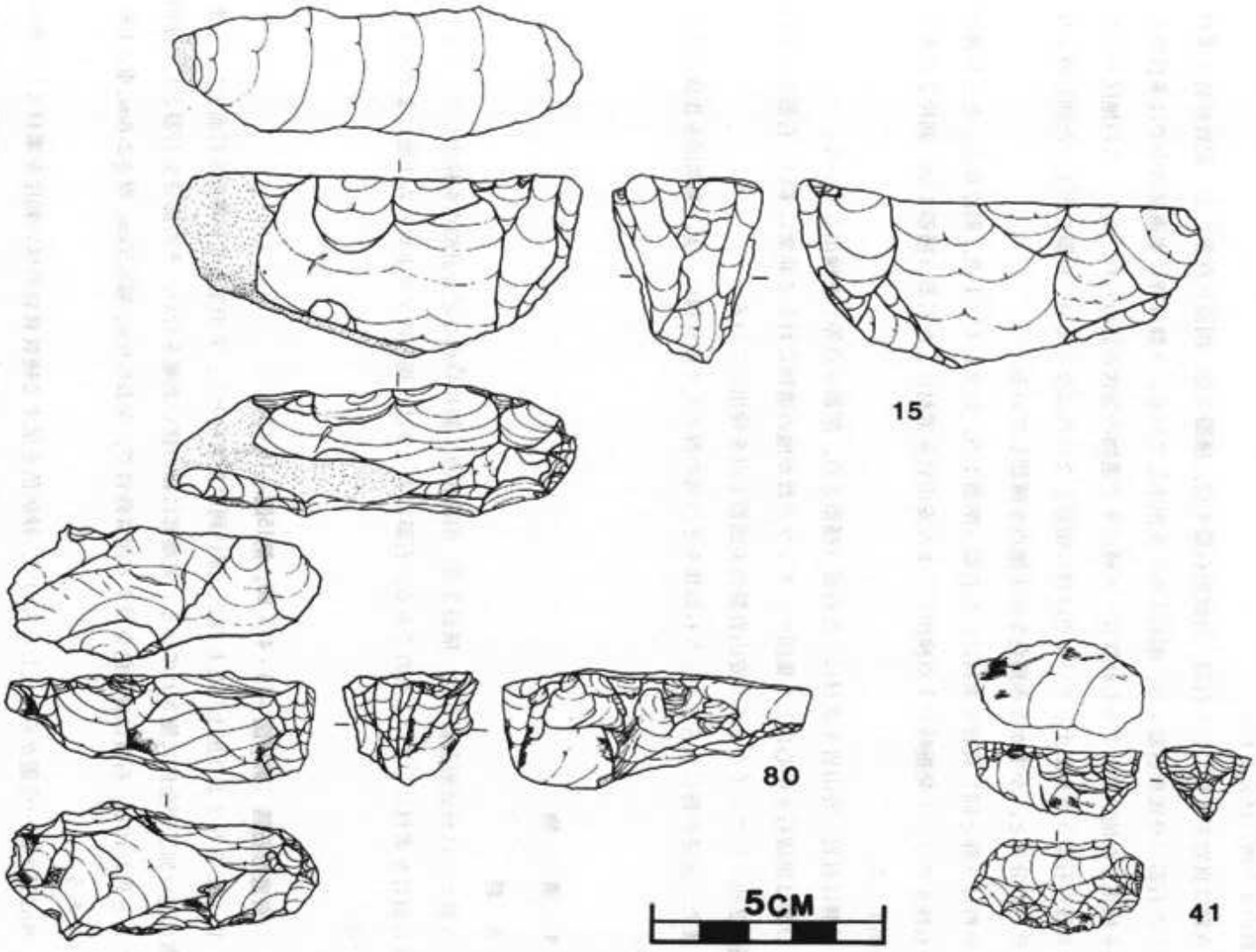
Ａ　群

Ａ群からは舟底形石器５点，掻器３点，削器10点，剝片43点など合計83点を検出した。石質は主に頁岩を素材にしているものである。石器によっては，褐色のソフトローム上面にまで及んでいる。

○舟底形石器（第14図—15・41・80。第15図—16・30）

15はＥ５ｈ２より出土したもので，厚い剝片を素材とし，平坦な主要剝離面を打面として，垂直に近い加工が全体に施されている。先端部に幅の狭い剝離を行い，その部分を石器として使用したと思われる。石質は青灰色を呈する泥質砂岩で，全長8.6cm，幅3.55cm，厚さ2.8cm，重さ106ｇである。

80は15と同一位置から出土したもので，緑灰色を呈する硬質頁岩の厚い剝片を素材として作られた舟底形石器である。平坦な主要剝離面を打面にして垂直に加工が施され，先端部には特に幅の狭い細かな調整剝離が行われている。全長6.8cm，厚さ2.4cm，幅2.7cm，重さ43ｇである。



第14図　A 群 石 器 実 測 図

41はＥ５ｈ１より出土したもので，縦長の厚い剥片を素材にして作られている舟底形石器である。平担な主要剥離面を打面にして全体に剥離が施されている。先端部には幅の狭い加工が施され，石質は白色の硬質頁岩である。石器の大きさは全長2.7cm，幅2.3cm，厚さ1.4cm，重さ８ｇである。

30はＥ５ｇ１より出土した舟底形石器である。縦長の厚い剥片を素材にし，やや平担な主要剥離面を打面にして剥離を行い，先端部に幅の狭い剥離調整を加えている。石質は褐色を呈する硬質頁岩で，全長3.7cm，幅3.3cm，厚さ1.8cm，重さ23ｇである。

16はＥ５ｈ２より出土したもので，舟底形石器の未製品かと思われるものである。作りそこないか，これから作ろうとしたものか明確ではない。平担な主要剥離面を打面として剥離が施されており，細かい調整剥離は行われていない。石質は白色系の頁岩で，全長4.76cm，幅3.55cm，厚さ2.8cm，重さ21ｇを測る。分類は舟底形石器として扱った。

○掻　器（第15図－８．28）

８はＥ５ｇ２より出土した。縦長剥片を素材にし，裏面はやや彎曲しており，片側縁部に鋭角なスクレイパーエッジが施されている。石質は安山岩で，全長6.3cm，幅2.1cm，厚さ0.62cm，重さ38ｇを測る。

28はＥ５ｉ２より出土した。薄手の縦長剥片を素材にし，裏面はやや彎曲をなし平坦である。先端部に細かいスクレイパーエッジが施されてる。石質は白色の頁岩で，全長5.6cm，幅2.1cm，厚さ0.62cm，重さ８ｇである。

○石核調整剥片（第15図－37）

37はＥ５ｈ２より出土した。褐色頁岩の石核調整剥片と思われるもので，全長6.1cm，幅4.4cm，厚さ1.8cm，重さ50ｇを測る。

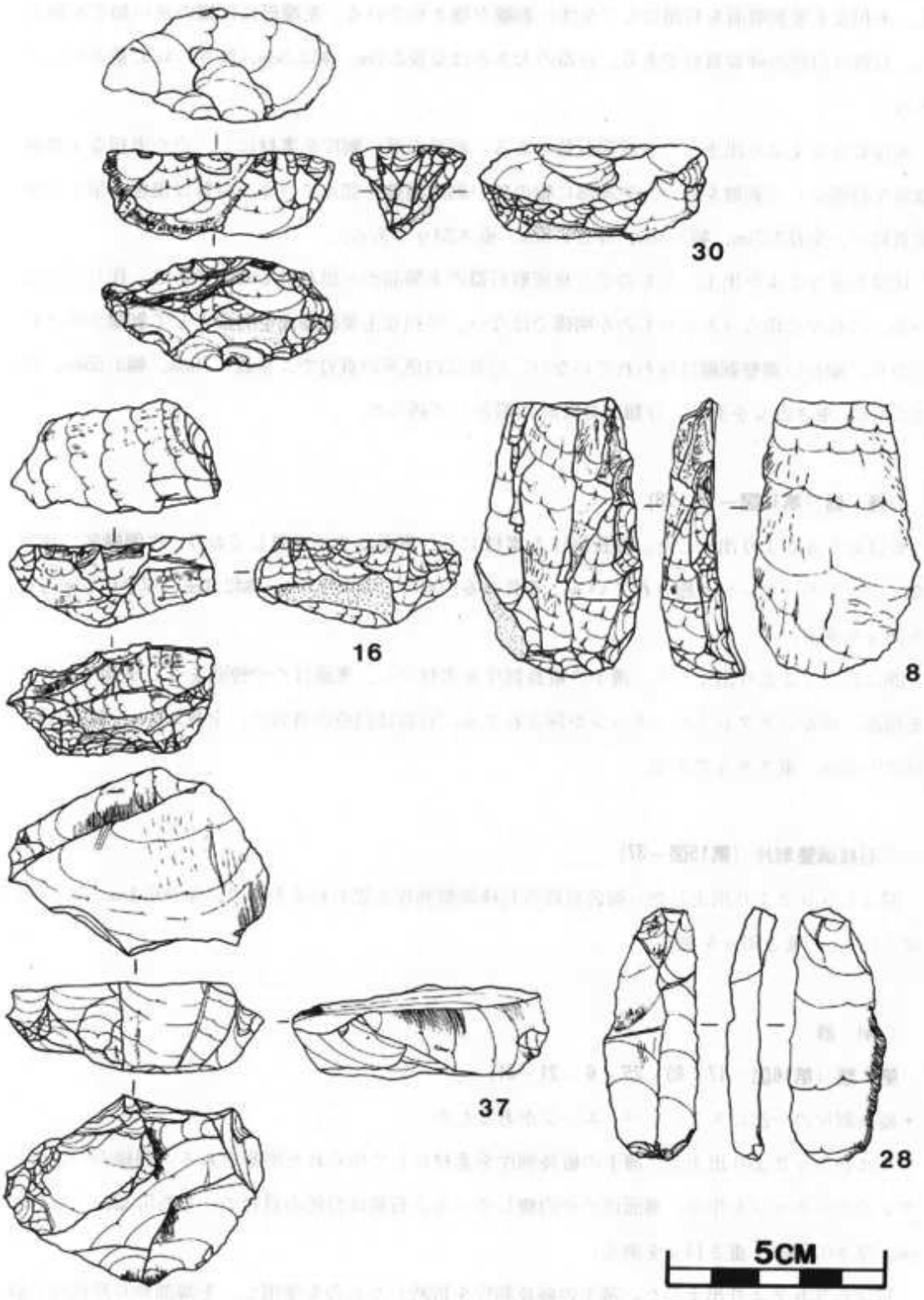
○削　器

第１類（第16図－17・83・25・６・21・31）

・縦長剥片の一部にスクレイパーエッジがあるもの

６はＥ５ｇ２より出土し，薄手の縦長剥片を素材にして作られた削器である。側縁の一部にスクレイパーエッジを作り，裏面はやや内彎している。石質は白色の頁岩で，全長5.32cm，幅4.05cm，厚さ0.53cm，重さ14ｇを測る。

17はＥ５ｈ２より出土した。薄手の縦長剥片を折断したものを使用し，先端部から片側縁に鋭角なスクレイパーエッジが施されている。裏面は平坦を呈している。石質は褐色の頁岩で，全長



第15図　A 群 石 器 実 測 図

5.6cm，幅2.55cm，厚さ 1.0cm，重さ14g である。

21はE5h2より出土し，破損している削器である。縦長剥片を素材にし，先端部に細かいスクレイパーエッジが施されている。表面には一部礫面が残されている。石質は灰黄色の頁岩で，現全長 3.5cm，幅 2.9cm，厚さ 0.9cm，重さ11g である。

25はE5h2より出土した。縦長剥方を折断したものを素材にし，側縁の一部にスクレイパーエッジが施されている。また側縁の一部に使用痕が認められ，裏面は平坦である。石質は灰緑色の泥質砂岩で，全長5.72cm，幅4.05cm，厚さ0.53cm，重さ14g である。

31はE5g2より出土し，60と接合される削器である。薄手の縦長剥片を素材にし，側縁の一部にスクレイパーエッジが施されている。裏面は平坦でやや内彎ぎみである。石質は褐色を呈する頁岩で，現全長 4.6cm，幅 2.8cm，厚さ 0.6cm，重さ7g である。

83はE5h2より出土し，基部が破損している削器である。縦長剥方を素材にし，両側縁にスクレイパーエッジが施され，一部に使用痕が認められる。石質は黄褐色を呈する頁岩で，現全長3cm，幅2.75cm，厚さ0.78cm，重さ11g である。

第2類（第16図－14・39。第17図－33）

・剥方の一部にスクレイパーエッジがあるもの

14はE5h2より出土し，板チョコ手法によって剥離された厚い剥片を切断し，片側縁にスクレイパーエッジが施されている。石質は黄褐色の頁岩で，全長 6.1cm，幅4.15cm，厚さ 2.4cm，重さ45g である。

39はE5h2より出土した。「V」字状の厚さをもつ縦長剥方を素材にし，片側縁に細かいスクレイパーエッジを施している。石質は褐色の頁岩で，全長 4.9cm，幅2.65cm，厚さ0.64cm，重さ60g である。

33はE5g2より出土し，普通の剥片を使用し，先端部，側縁の一部にスクレイパーエッジが施されている。石質は褐色の頁岩で全長3.55cm，幅 3.4cm，厚さ 1.5cm，重さ14g である。

第3類（第17図－81）

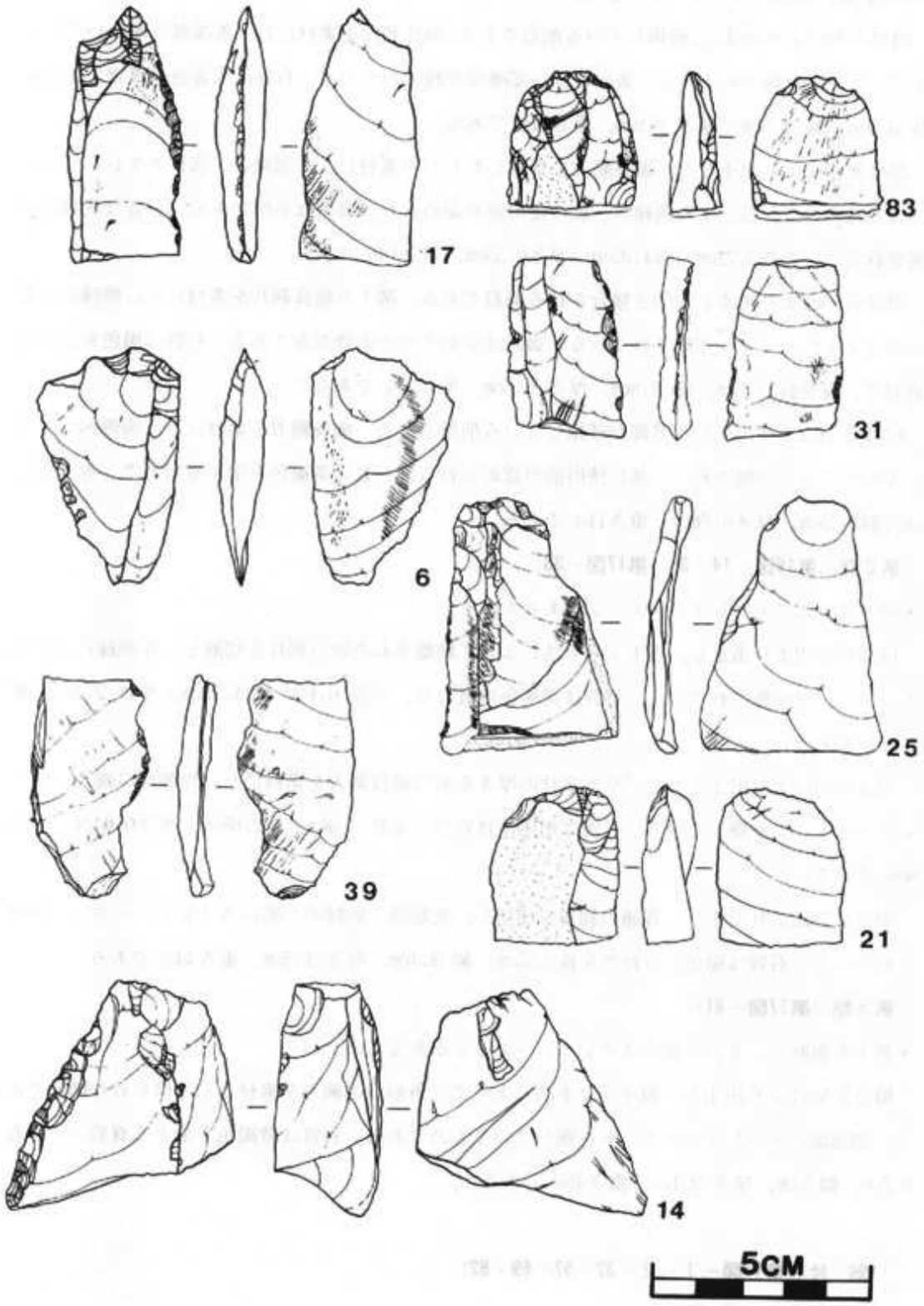
・剥方を折断し，その一部にスクレイパーエッジがあるもの

81はE5h2より出土し，板チョコ手法によって三角形状の剥方を素材にして作られた削器である。頂端部にスクレイパーエッジを施しているものである。石質は黄褐色を呈する頁岩で，全長5.7cm，幅5cm，厚さ 2.1cm，重さ45g である。

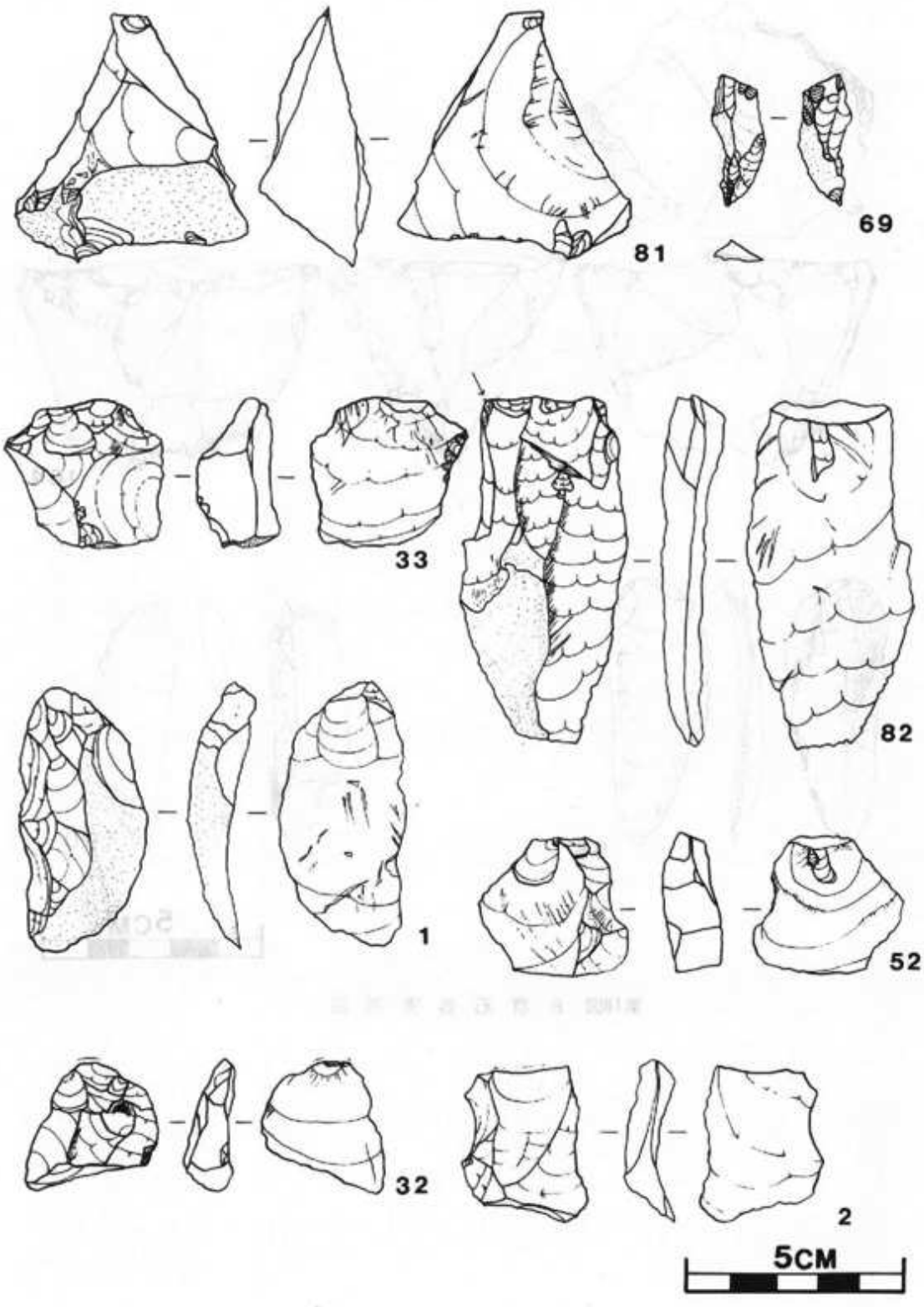
○剥　片（第17図－1・2・32・52・69・82）

1・32は泥質砂岩の剥片である。

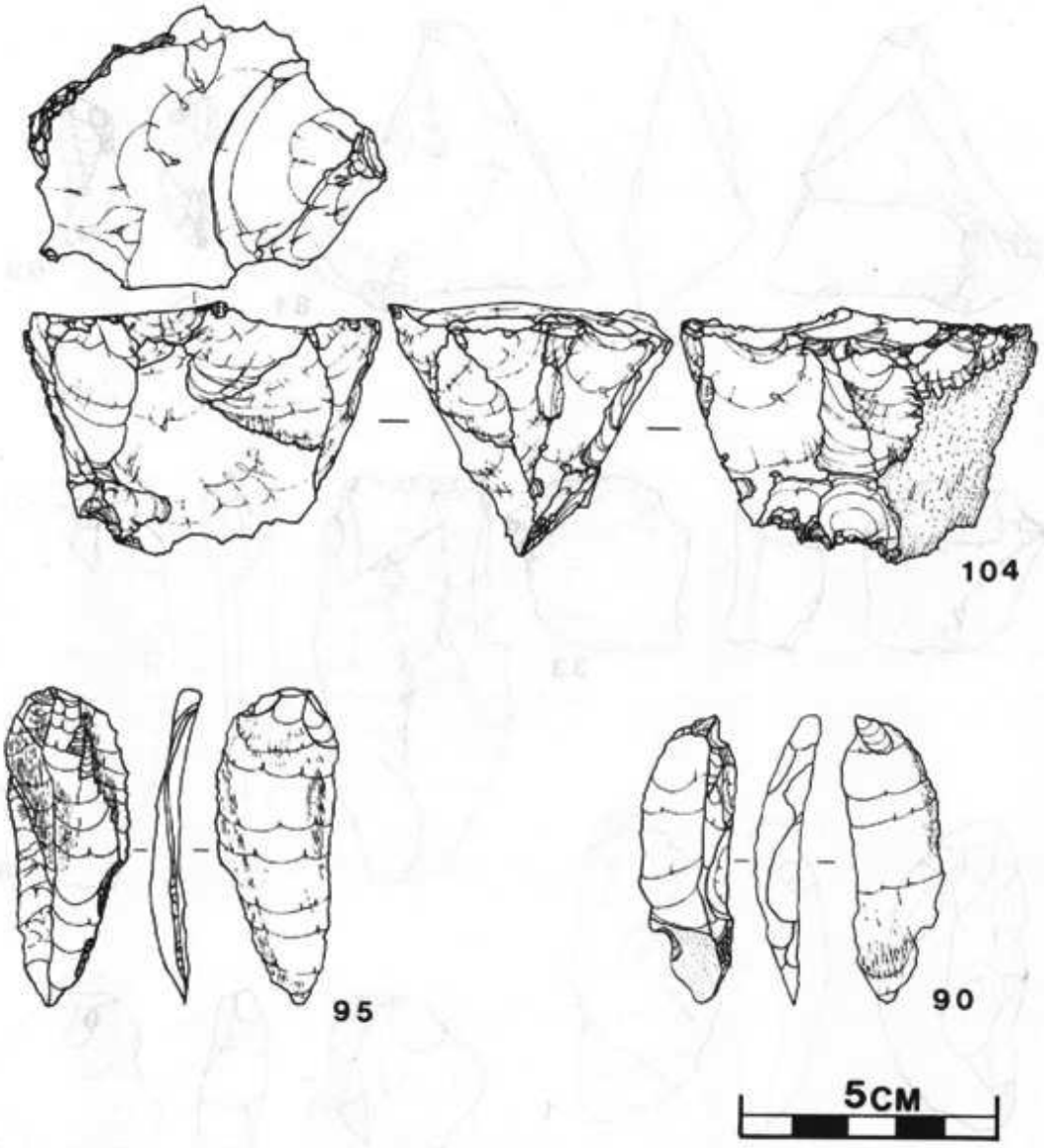
2・52・69・82は頁岩の剥片であり，82はE5h2より出土したもので，分類では剥片とした



第16図　A 群 石 器 実 測 図



第17図　A 群 石 器 実 測 図



第18図　B 群 石 器 実 測 図

が，一部（矢印）に彫器の疑いがもたれる剥片である。

B 群

B群からの出土遺物は石核1点，掻器1点，削器1点，Uフレイク1点，剥片9点など合計21点を出土し，主に頁岩を素材にしている。

○石 核（第18図－104）

104は本遺跡のF5a5より出土した唯一の頁岩を原石にした石核である。平坦な剥離面を打面として，ほぼ全体に剥離が行われたもので，残核は不整円錐形を呈している。

○削 器（第18図－95）

95はF5a5より出土したもので，非常に薄手の縦長剥片を素材にし，側縁の一部に鋭角なスクレイパーエッジが施されているものである。裏面は平坦で，石質は暗褐色の頁岩で，全長6.18cm，幅2.08cm，厚さ0.6cm，重さ6gである。

○剥 片（第18図－90）

90はF5a6より出土した縦長の剥片である。石質は褐色の頁岩で，全長3.88cm，幅1.9cm，厚さ0.62cm，重さ4gを測る。

C 群

C群より出土した遺物は掻器3点，削器3点，チップ7点などを検出し，石質は主に頁岩，安山岩である。

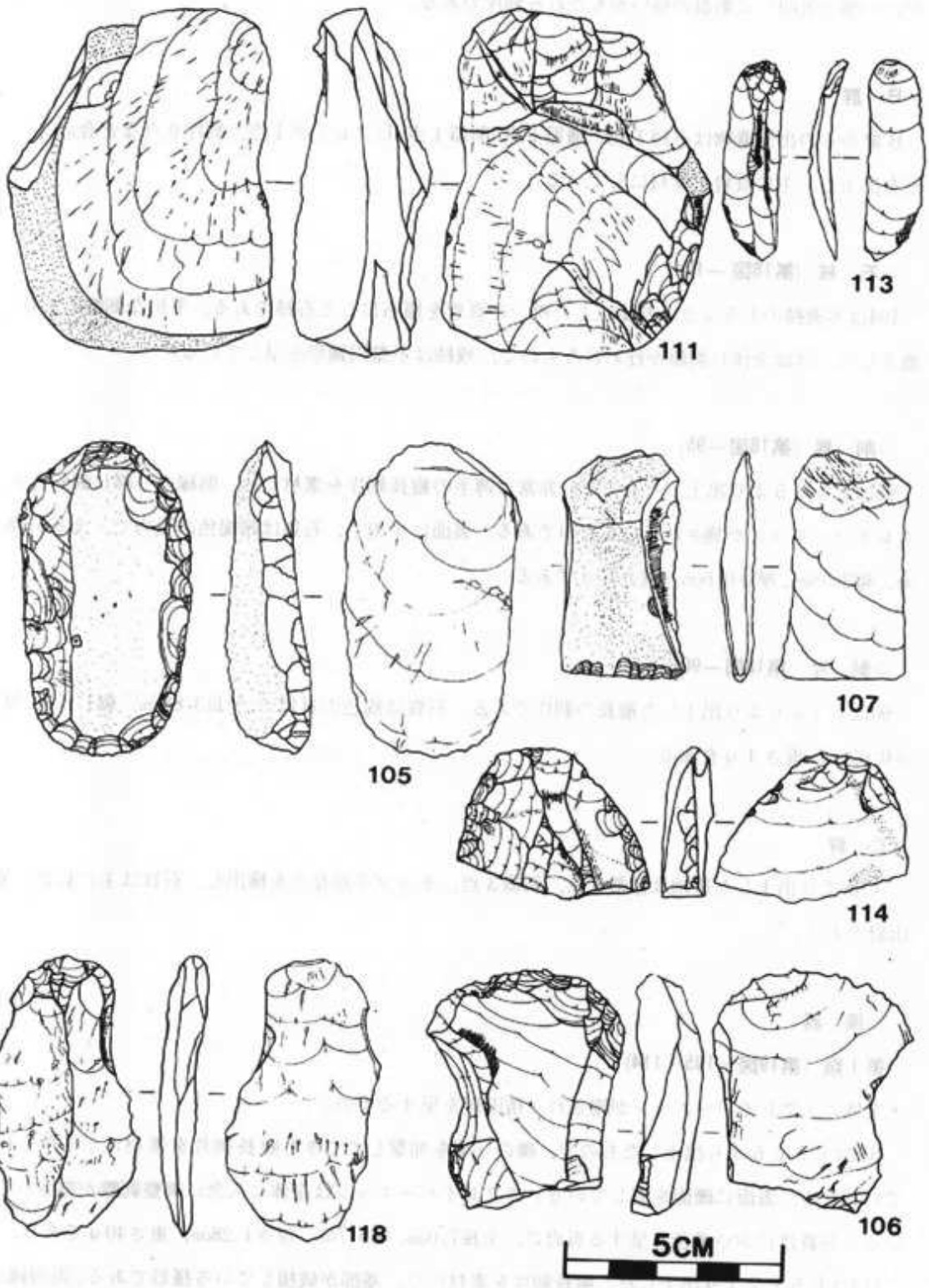
○掻 器

第1類（第19図－105・114）

・全体にスクレイパーエッジが施され，楕円形を呈するもの。

105はE5e6から出土したもので，礫の一端を加撃してできた縦長剥片を素材にして作られているため，表面に礫面を有している。スクレイパーエッジは全体に入念に調整剥離が施されている。石質はにぶい黄色を呈する頁岩で，全長7.0cm，幅3.7cm，厚さ1.28cm，重さ40gである。

114はE5f7より出土した。縦長剥片を素材にし，基部が破損している掻器である。両側縁には，入念にスクレイパーエッジが施されている。裏面は平坦を呈している。石質は褐色の頁岩で，現全長4.5cm，幅3.2cm，厚さ1.0cm，重さ16gである。



第19図　C 群 石 器 実 測 図

第2 類 (第19図—107)

・先端部に直線的なスクレイパーエッジが施されているもの。

107はＥ５ｅ６より出土した掻器で，礫の一端を加撃してできた薄手の縦長剥片を素材にしているため，表面に礫面を有している。裏面は直線的で平坦である。スクレイパーエッジは先端部に入念に施されている。石質は灰色を呈する安山岩で，全長5.15cm，幅2.7cm，厚さ0.8cm，重さ14ｇである。

○削　器

第１類 (第19図—111)

・縦長剥片の一部にスクレイパーエッジを施すもの。

111はＥ５ｅ６より出土したもので，安山岩の縦長剥片を素材とし，片側縁の一部にスクレイパーエッジを施した削器である。全長7.8cm，幅5.75cm，厚さ2.6，重さ115ｇである。

第２類 (第19図—106・113)

・剥片の一部にスクレイパーエッジが施されているもの。

106はＥ５ｃ６より出土したもので，幅の広い剥片を素材にして作られた削器である。スクレイパーエッジは先端部にやや粗雑に施されている。石質は褐色の頁岩で，全長5.4cm，幅4.5cm，厚さ1.15cm，重さ32ｇである。

113はＥ５ｃ６より出土し，小形の縦長剥片を素材にして作られた削器である。スクレイパーエッジは先端部から側縁にかけて細かく施されている。石質は褐色の頁岩で，全長4.6cm，幅1.3cm，厚さ0.475cm，重さ３ｇを測る。

○剥　片 (第19図—118)

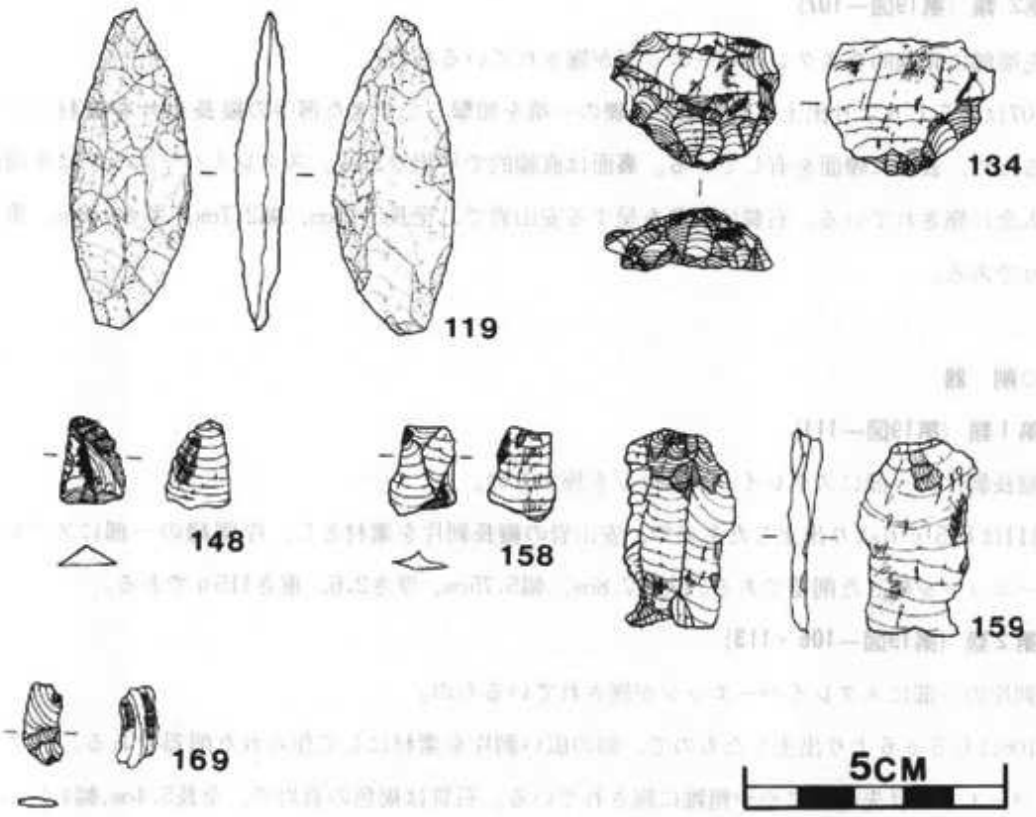
118はＥ５ｅ７より出土したもので，黒褐色を呈する安山岩の剥片である。裏面には打瘤を有し，全長6.3cm，幅3.2cm，厚さ0.775cm，重さ15ｇである。

Ｄ　群

Ｄ群より出土した石器の数は少なく，掻器２点，削器１点，尖頭器１点である。その他剥片，チップなど黒曜石を素材にしたものが多く出土した。

○尖頭器 (第20図—119)

119はＥ６ｆ４より出土した尖頭器である。安山岩を素材にし，表裏共に周縁からやや粗い剥離によって両面加工が施されている。先端部が少し破損している。現全長6.03cm，幅2.23cm，厚



第20図　D 群 石 器 実 測 図

さ0.9cm，重さ10ｇである。

○剝　片（第20図－134）

134はＥ６ｇ４より出土した黒曜石の円形削器である。全体の側縁にスクレイパーエッジが施されており裏面はほぼ平坦である。全長3.2cm，幅2.45cm，厚さ1.15cm，重さ６ｇである。

○Ｕフレイク（第20図－148）

148はＥ６ｈ３より出土した使用痕のある剝片である。石質は黒曜石で，全長1.56cm，幅1.16cm，厚さ0.41cmである。

○剝　片（第20図－156．159．169）

いずれも黒曜石の剝片である。

その他

ユニットとして把握することのできなかった石器類をその他とし，出土遺物は舟底形石器1点，掻器8点，削器5点，Uフレイク12点，剥片67点など合計214点が検出された。素材とした石は主に黒曜石，頁岩である。

○舟底形石器（第21図－194）

194はE6f2より出土したもので，縦長の厚い剥片を素材にして作られているもので，舟底形石器の未製品かと思われるものである。石質は黒曜石で，全長4.38cm，幅2cm，厚さ1.4cm，重さ10gである。

○掻　器

第1類（第21図－251）

・全体にスクレーエッジが施され，楕円形状を呈するもの。

251はE5d2より出土した。剥片を素材にし，全体に入念なスクレイパーエッジが施されているものと思われる掻器である。基部は砂損しており，裏面は平坦である。石質は褐色の頁岩で現全長3.26cm，幅2.9cm，厚さ1.0cm，重さ10gである。

第2類（第21図－204・330）

・先端部にわずかなスクレイパーエッジが施されているもの。

204はE5e9より出土したもので，薄手の剥片を素材にして，先端部を中心に細かいスクレイパーエッジが施され，基部が破損している掻器である。裏面は平坦である。石質は灰黄色を呈する頁岩で，現全長4.6cm，幅4.2cm，厚さ0.59cm，重さ10gである。

330は発掘後E5地区より採集したもので，縦長の剥片を素材とし，剥離の打瘤のある側を石器の基部としている掻器である。先端部にはやや粗いスクレイパーエッジが施され，裏面は直線的で平坦である。また表面の一部には礫面を有している。石質は明緑灰色を呈する頁岩で，全長6.01cm，幅5.15cm，厚さ1.25cm，重さ34gである。

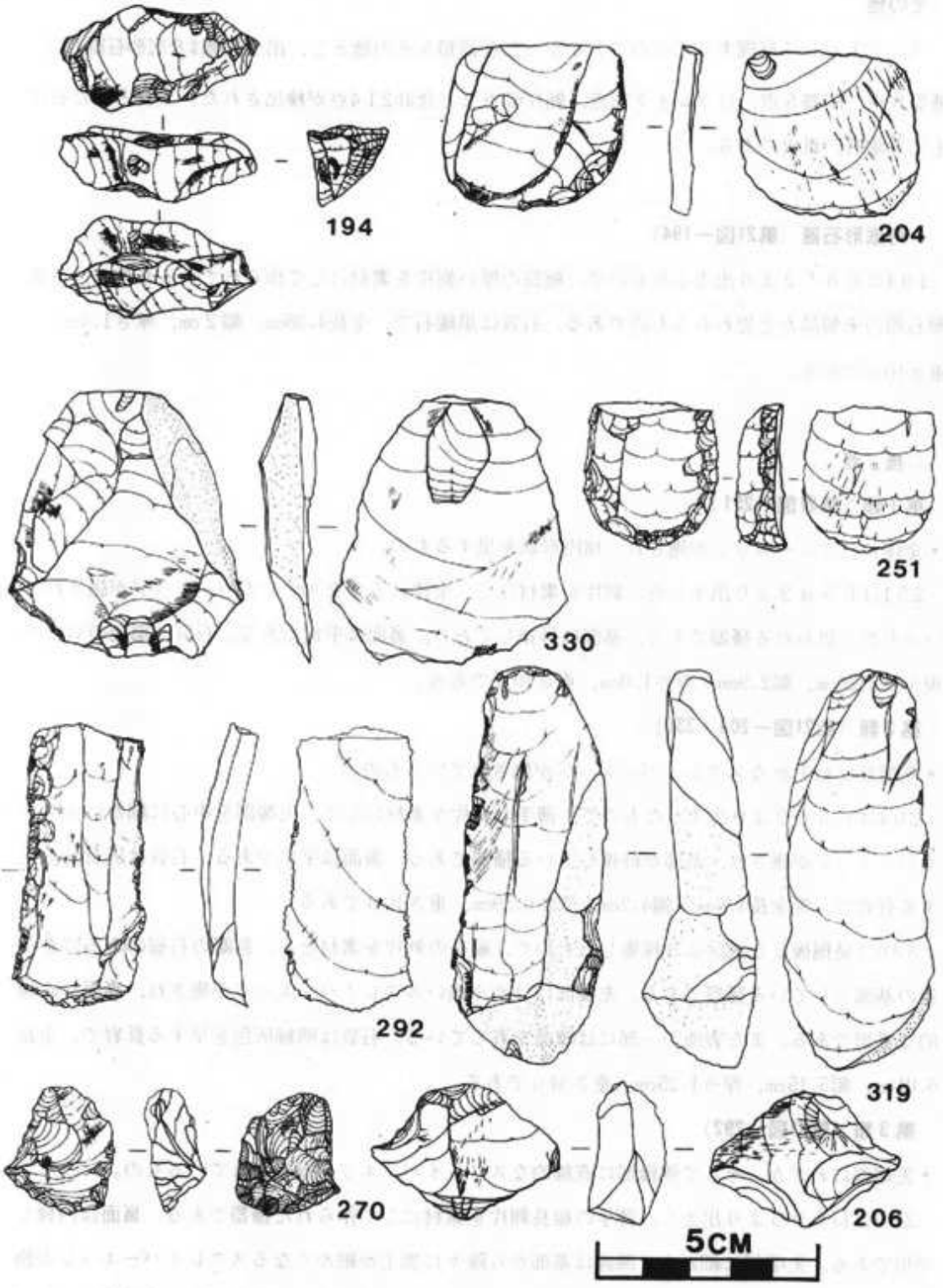
第3類（第21図－292）

・先端部にわずか，そして側縁部に直線的なスクレイパーエッジが施されているもの。

292はD5h5より出土し，薄手の縦長剥片を素材にして作られた掻器である。裏面は内彎し平坦である。先端部に細かく，側縁は基部から除々に加工が細かくなるスクレイパーエッジが施されている。石質は黒褐色の樹脂性頁岩で，全長6.4cm，幅2.78cm，厚さ0.69cm，重さ16gである。

第4類（第21図－270）

・全体にスクレイパーエッジが施されているが，不整形なもの。



第21図　その他・石器実測図

270はＥ６ｅ２より出土した全長2.94cmを測る黒曜石の掻器である。全体にスクレイパーエッジが施されているが，剥離は粗雑で，一部に使用痕が認められる。先端部には裏面にも剥離調整が施されている。幅2.55cm，厚さ1.18cm，重さ６ｇである。

○削　器（第21図－206・319。第22図－202・238・264）

・剥片の一部にスクレイパーエッジが施されているもの。

206はＥ５ｃ９より出土した頁岩の菱形状を呈する剥片を素材にして作られた削器である。スクレイパーエッジは２つの頂点部に施されており，全長4.2cm，幅2.9cm，厚さ1.5cm，重さ14gである。

319はＥ６ｄ９より出土したもので，側面を「Ｖ」字状を呈した縦長剥片を素材にして作られた削器である。スクレイパーエッジは側縁に細かく配され，裏面に打瘤を有している。石質は黄灰色の硬質頁岩で，全長9.06cm，幅3.33cm，厚さ2.2cm，重さ55ｇである。

202はＥ５ｅ９より出土したもので，全長4.2cmを測る剥片を素材にし，スクレイパーエッジが側縁の一部に施されている削器である。裏面に打瘤を有し，石器の基部としている。石質は緑灰色の頁岩で，幅3.28cm，厚さ1.2cm，重さ14ｇである。

238はＥ５ｊ７より出土したもので，黒曜石の剥片を素材にして作られた削器である。スクレイパーエッジは側縁に細かく施されている。全長３cm，幅２cm，厚さ0.35cm，重さ２ｇである。

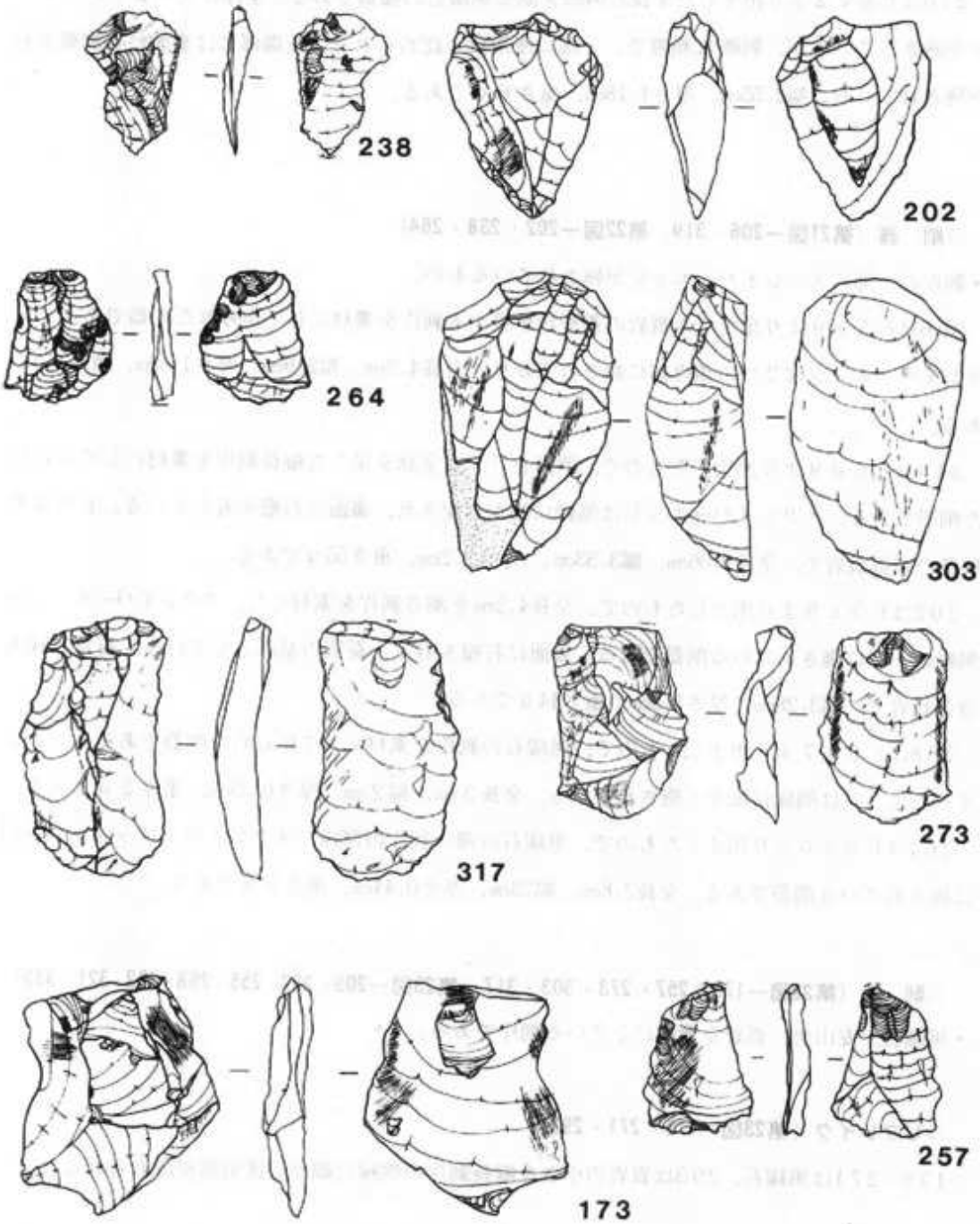
264はＥ５ｈ０より出土したもので，黒曜石の薄い剥片の側縁にスクレイパーエッジが部分的に施されている削器である。全長2.8cm，幅23cm，厚さ0.44cm，重さ５ｇである。

○剥　片（第22図－173・257・273・303・317。第23図－209・237・255・268・282・321・332）

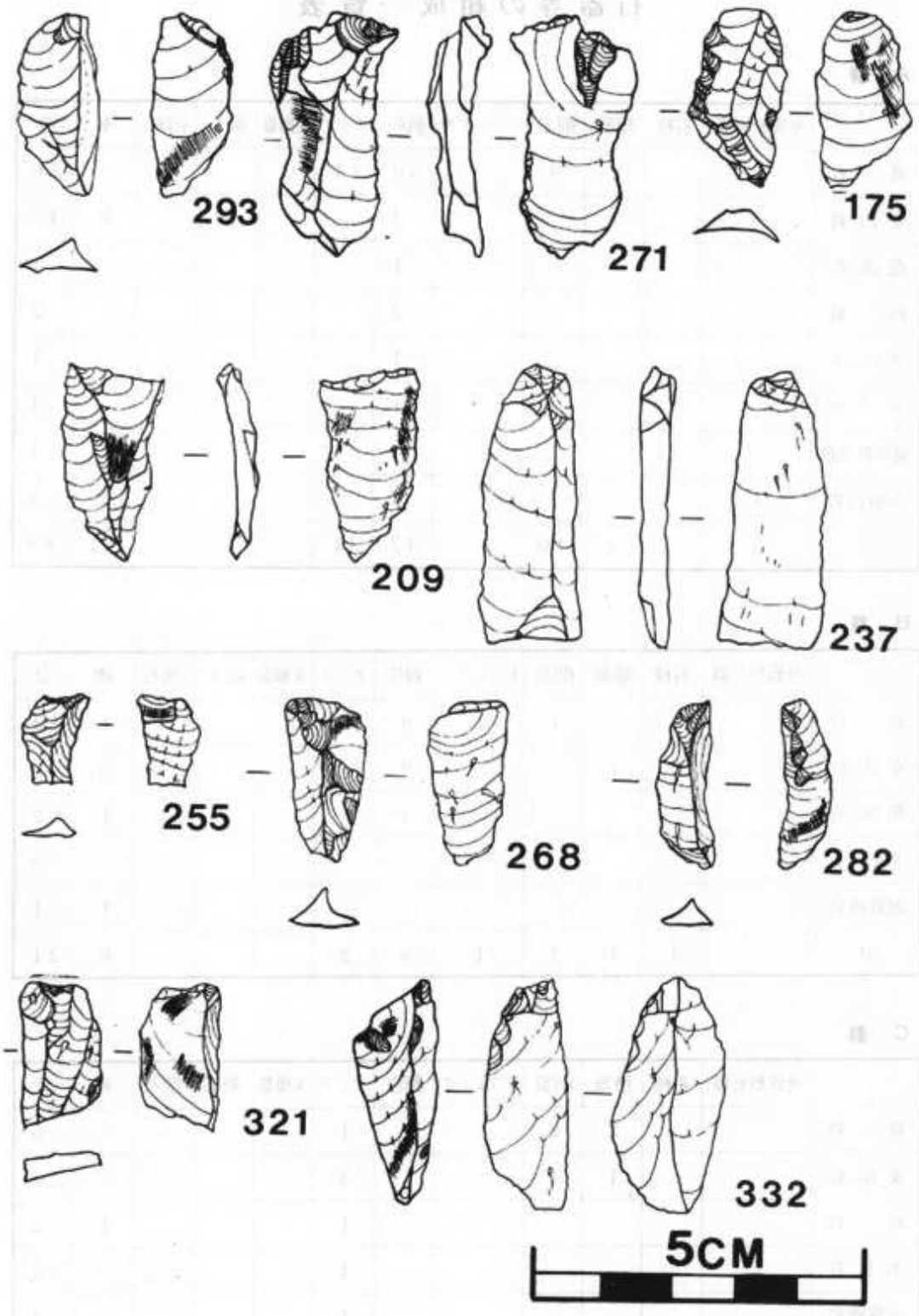
・黒曜石，安山岩，頁岩を素材にしている剥片である。

○Ｕフレイク（第23図－175・271・293）

175・271は黒曜石，293は頁岩の小さな縦長剥片の側縁に細かい使用痕が認められる。



第22図　その他・石器実測図



第23図　その他・石器実測図

石器等の組成一覧表

A 群

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩	4		2	9		30	11					56
安山岩			1			3					9	13
花崗岩						1						1
砂岩						2						2
チャート						1						1
メノウ						1						1
凝灰質泥岩						1						1
泥質砂岩	1			1		4					2	8
計	5		3	10		43	11				11	83

B 群

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩		1		1	1	6	2				1	12
安山岩			1			2					3	6
花崗岩						1					1	2
チャート												0
泥質砂岩											1	1
計		1	1	1	1	9	2				6	21

C 群

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩			2	2			1					5
安山岩			1	1			3					5
砂岩							1				1	2
木化石							1					1
泥質砂岩							1					1
計			3	3			7				1	14

D 群

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩						1						1
黒曜石				1	2	13	26					42
安山岩								1			4	5
花崗岩											1	1
チャート			2									2
計			2	1	2	14	26	1			5	51

その他

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩			5	3	5	13	2				5	33
黒曜石	1		1	2	7	35	17					63
安山岩			1			6		1	1		63	72
花崗岩						5					11	16
砂岩						1			1		13	15
チャート						1	1				2	4
メノウ			1									1
木化石						3						3
泥質砂岩											2	2
ヘンマ岩						2						2
雲母片岩										1		1
軽石						1						1
石英											1	1
計	1		8	5	12	67	20	1	2	1	97	214

全体集計

	舟底形石器	石核	掻器	削器	Uフレイク	剥片	チップ	尖頭器	敲石	凹石	礫	計
頁岩	4	1	9	15	6	51	13				6	107
黒曜石	1		1	3	9	48	43					105
安山岩			4	1		14		2	1		79	101
花崗岩						7					13	20
砂岩						4			1		14	19
チャート			2			2	1				2	7
メノウ			1			1						2
凝灰質泥岩						1						1
木化石						4						4
泥質砂岩	1			1		5					5	12
ヘンマ岩						2						2
黄母片岩										1		1
軽石						1						1
石英											1	1
計	6	1	17	20	15	140	59	2	2	1	120	383

石器等出土遺物一覧表

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	Level 層位	備考
1	剥片	A	E 5 g 1	泥質砂岩	5.98	2.87	1.15	19.294	実測(第17図)
2	〃	〃	〃	頁岩	3.90	2.90	0.73	19.279	実測(第17図)
3	〃	〃	E 5 h 1	安山岩	2.95	2.05	0.42	19.333	
4	礫	〃	E 5 f 2	〃				19.212	
5	削器	〃	E 5 g 2	頁岩	2.00	1.52	0.53	19.241	
6	削器	〃	〃	〃	5.32	3.3	0.90	19.157	実測(第16図)
7	礫	〃	〃	泥質砂岩				19.193	
8	掻器	〃	〃	安山岩	6.30	3.70	1.35	19.193	実測(第15図)
9	礫	〃	〃	泥質砂岩				19.184	
10	剥片	〃	〃	頁岩	3.50	2.07	0.74	19.296	破損
11	剥片	〃	E 5 h 2	〃	2.92	2.68	0.740	19.191	
12	削器	〃	〃	〃	1.70	0.95	0.51	19.196	
13	チップ	〃	〃	〃	1.40	0.70	0.130	19.221	
14	削器	〃	〃	〃	6.10	4.15	2.40	19.239	実測(第16図)
15	舟底形石器	〃	〃	泥質砂岩	8.60	3.55	2.80	19.364	実測(第14図)
16	舟底形石器	〃	〃	頁岩	4.67	2.50	1.90	19.301	実測(第15図)
17	削器	〃	〃	〃	5.60	2.55	1.0	19.257	実測(第16図)
18	チップ	〃	〃	〃	0.98	0.90	0.170	19.267	
19	剥片	〃	〃	安山岩	1.55	1.40	0.58	19.226	
20	〃	〃	〃	頁岩	2.10	1.60	0.720	19.301	破損
21	削器	〃	〃	〃	3.50	2.90	0.90	19.249	破損 実測(第16図)
22	〃	〃	〃	〃	1.30	1.21	0.300	19.249	
23	〃	〃	〃	〃	2.17	1.10	0.350	19.321	
24	〃	〃	〃	〃	1.48	1.10	0.250	19.314	
25	〃	〃	〃	泥質砂岩	5.72	4.05	0.530	19.286	実測(第16図)
26	剥片	〃	〃	花崗岩	4.17	3.00	2.50	19.271	
27	礫	〃	E 5 i 2	安山岩				19.306	
28	掻器	〃	〃	頁岩	5.60	2.10	0.620	19.298	実測(第15図)
29	礫	〃	E 5 h 3	安山岩				19.3	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
30	舟底形石器	A	E 5g 1	頁岩	3.7	3.3	1.80	19.168	実測(第15図)
31	削器	〃	E 5g 2	〃	4.60	2.80	0.60	19.106	実測(第16図)
32	剥片	〃	〃	泥質砂岩	3.35	2.50	1.04	19.174	実測(第17図)
33	削器	〃	〃	頁岩	3.55	3.40	1.50	19.160	破損
34	チップ	〃	〃	〃	1.55	1.00	0.30	19.145	
35	剥片	〃	E 5h 1	〃	1.9	1.5	0.58	19.15	
36	〃	〃	〃	〃	1.70	1.20	0.31	19.164	
37	石核調整剥片	〃	E 5h 2	〃	6.10	4.40	1.80	19.17	実測(第15図)
38	剥片	〃	〃	〃	2.10	1.43	0.420	19.13	
39	削器	〃	〃	〃	4.90	2.65	0.64	19.2	実測(第16図)
40	剥片	〃	E 5g 2	〃	1.40	1.40	0.55	19.095	
41	舟底形石器	〃	E 5h 1	頁岩白色	2.70	2.30	1.31	19.085	実測(第14図)
42	チップ	〃	E 5g 2	頁岩	1.50	0.90	0.380	19.185	
43	剥片	〃	〃	メノウ	1.30	1.24	0.17	19.187	
44	〃	〃	〃	砂岩	6.04	2.90	1.60	19.219	
45	チップ	〃	〃	頁岩	1.13	0.63	0.145	19.195	
46	剥片	〃	E 5h 2	泥質砂岩	3.56	1.74	1.30	19.105	
47	〃	〃	〃	頁岩	3.17	2.30	0.835	19.238	
48	〃	〃	〃	〃	2.4	1.2	0.61	19.256	
49	〃	〃	〃	〃	3.00	1.90	1.28	19.258	
50	〃	〃	〃	チャート	1.54	1.30	0.42	19.299	
51	〃	〃	〃	頁岩	1.46	1.35	0.40	19.364	
52	〃	〃	〃	〃	3.05	2.95	0.97	19.359	実測(第17図)
53	チップ	〃	〃	〃	0.70	0.51	0.350	19.318	
54	剥片	〃	E 5g 3	〃	2.03	1.15	0.43	19.175	
55	チップ	〃	E 5g 1	〃	1.25	1.10	0.180	19.236	
56	礫	〃	E 5g 2	安山岩				19.122	
57	剥片	〃	〃	頁岩	2.14	1.900	0.420	19.158	
58	チップ	〃	〃	〃	1.48	0.90	0.400	19.155	
59	剥片	〃	〃	〃	2.12	1.60	0.400	19.206	
60	礫	〃	〃	安山岩				19.106	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
61	チップ	A	E 5g 2	頁岩	1.55	1.10	0.36	19.088	
62	〃	〃	〃	〃	1.73	0.90	0.37	19.085	
63	剥片	〃	〃	〃	1.55	1.10	0.24	19.075	
64	〃	〃	〃	〃	3.50	1.30	0.925	19.175	
65	チップ	〃	E 5h 1	〃	1.28	1.10	0.190	19.239	
66	剥片	〃	〃	〃	1.82	1.03	0.45	19.236	
67	礫	〃	E 5h 2	安山岩				19.184	
68	剥片	〃	〃	頁岩	2.05	1.85	0.485	19.139	
69	〃	〃	〃	〃	2.95	1.02	0.39	19.173	実測(第17図)
70	〃	〃	〃	泥質砂岩	2.78	1.08	0.710	19.233	
71	礫	〃	〃	安山岩				19.094	
72	剥片	〃	〃	砂岩	1.02	0.93	0.25	19.275	
73	礫	〃	〃	安山岩				19.257	
74	〃	〃	〃	〃				19.149	
75	チップ	〃	〃	頁岩	1.22	0.45	0.180	19.179	
76	剥片	〃	E 5i 2	凝灰質泥岩	3.20	1.03	0.56	19.294	
77	〃	〃	〃	頁岩	2.70	1.78	0.23	19.339	
78	〃	〃	E 5f 2	安山岩				19.133	
79	〃	〃	〃	頁岩	3.25	1.47	0.90	19.121	
80	舟底形石器	〃	E 5h 2	頁岩	6.85	2.8	2.35		実測(第14附図)
81	削器	〃	〃	頁岩	5.3	5.35	2.38		実測(第17図)
82	剥片	〃	〃	頁岩	7.85	3.85	1.32		実測(第17図)
83	削器	〃	〃	頁岩	3.15	1.18	2.9		破損 実測(第16図)
84	剥片	B	E 5j 6	頁岩	2.13	1.03	0.85	19.265	
85	礫	〃	〃	安山岩				19.247	
86	掻器	〃	F 5a 5	〃	3.32	2.44	0.90	19.32	破損
87	礫	〃	〃	泥質砂岩				19.425	
88	〃	〃	〃	頁岩	5.50	4.40	3.05	19.335	
89	剥片	〃	F 5a 6	〃	3.04	2.98	0.975	19.340	
90	〃	〃	〃	〃	3.80	1.90	0.620	19.360	実測(第18図)
91	礫	〃	〃	花崗岩				19.33	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	Level 層位	備考
92	じフレイク	B	F 5a 6	頁岩	3.60	2.50	1.10	19.38	
93	剥片	〃	〃	花崗岩	3.80	2.90	1.40	19.338	
94	礫	〃	F 5a 7	安山岩				19.39	
95	削器	〃	F 5a 5	頁岩	6.18	2.08	0.60	19.227	実測(第18図)
96	礫	〃	F 5a 6	安山岩					
97	剥片	〃	F 5a 5	〃	3.07	2.23	0.82	19.207	
98	〃	〃	〃	頁岩	2.52	2.38	0.55	19.215	
99	〃	〃	〃	〃	3.32	1.70	0.60	19.173	
100	チップ	〃	F 5a 6	〃	1.94	1.10	0.36	19.188	
101	剥片	〃	〃	安山岩	3.10	1.90	0.65	19.218	破損
102	〃	〃	E 5j 5	頁岩	2.80	1.40	0.68	19.278	
103	チップ	〃	F 5a 6	〃	1.50	1.30	0.17	19.148	
104	石核	〃	F 5a 5	チャート	6.2	3.9	2.75	Ⅱ～Ⅲ	実測(第18図)
105	掻器	C	E 5e 6	頁岩白色	7.0	3.70	1.28	18.798	実測(第19図)
106	削器	〃	〃	頁岩	0.10	4.50	1.15	18.879	実測(第19図)
107	掻器	〃	〃	安山岩	5.15	2.70	0.80	18.889	実測(第19図)
108	剥片	〃	〃	泥質砂岩	4.10	2.72	2.00	18.899	
109	礫	〃	〃	砂岩				18.759	
110	剥片	〃	〃	木化石	4.20	2.80	2.50	18.77	
111	削器	〃	〃	安山岩	7.80	5.75	2.60	18.801	実測(第19図)
112	剥片	〃	E 5f 7	頁岩	5.80	3.60	1.60	18.771	
113	削器	〃	E 5e 6	〃	1.20	0.54	0.475	18.663	実測第19図))
114	掻器	〃	E 5f 6	〃	4.50	3.20	1.00	18.788	実測(第19図) 破損
115	剥片	〃	〃	砂岩	1.60	0.75	0.25	18.769	
116	〃	〃	E 5e 7	安山岩	3.0	2.30	0.67	18.551	
117	〃	〃	E 5f 7	〃	2.20	1.66	0.270	18.642	
118	〃	〃	E 5e 7	〃	6.30	3.20	0.775	(Ⅱ)	実測(第19図)
119	尖頭器	D	E 6f 4	〃	6.03	2.28	0.900	17,369	実測(第20図)
120	掻器	〃	〃	チャート	2.01	1.05	0.95	17.432	
121	チップ	〃	〃	黒曜石	0.65	0.38	0.060	17.506	
122	〃	〃	〃	〃	0.58	0.28	0.04	17.384	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	Level 層位	備考
123	チップ	D	E 6f 4	黒曜石	0.85	0.80	00.10	17.344	
124	〃	〃	〃	〃	0.61	0.42	0.09	17.374	
125	〃	〃	〃	〃	0.70	0.48	0.100	17.454	
126	〃	〃	〃	〃	0.67	0.28	0.080	17.392	
127	〃	〃	〃	〃	1.20	0.75	0.200	17.414	
128	〃	〃	〃	〃	1.00	0.500	0.140	17.414	
129	〃	〃	〃	〃	0.95	0.700	0.175	17.336	
130	剥片	〃	〃	〃	1.20	0.800	0.560	17,348	
131	チップ	〃	〃	〃	1.25	0.34	0.17	17.353	
132	〃	〃	〃	〃	1.30	0.70	0.270	17,415	
133	〃	〃	E 6g 3	〃	0.80	0.70	0.140	17.764	
134	削器	〃	E 6g 4	〃	3.20	2.45	1.15	17.356	実測(第20図)
135	チップ	〃	〃	〃	1.02	0.62	0.11	17.178	
136	〃	〃	〃	〃	1.13	0.82	0.25	17.144	
137	〃	〃	〃	〃	1.17	0.70	0.160	17.246	
138	〃	〃	〃	〃	0.84	0.80	0.230	17.231	
139	礫	〃	〃	安山岩				17.14	
140	〃	〃	〃	〃				17.224	
141	〃	〃	〃	〃				17.214	
142	剥片	〃	〃	黒曜石	1.30	0.07	0.280	17,204	
143	〃	〃	E 6h 3	〃	2.46	1.75	0.360	18.094	
144	〃	〃	〃	〃	2.07	1.62	0.460	18.106	
145	〃	〃	〃	〃	1.30	0.56	0.300	18.126	
146	チップ	〃	〃	〃	0.52 0.27	0.78 0.51	0.115 0.125	18.061	
147	〃	〃	〃	〃	0.65	0.44	0.115	18.13	
148	Uフレイク	〃	〃	〃	1.56	1.16	0.41	18.124	実測(第20図)
149	〃	〃	〃	〃	13.5	11.7	0.36	17.995	
150	チップ	〃	〃	〃	0.59	0.50	0.225	17.934	
151	〃	〃	〃	〃	0.95	0.90	0.11	17.919	
152	礫	〃	〃	安山岩				18.037	
153	チップ	〃	〃	黒曜石	0.58	0.24	0.040	17,884	

遺物番号	品種	群	出土位置	石質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	Level 層位	備考
154	チップ	D	E6h3	黒曜石	0.64	0.38	0.110	18.113	
155	〃	〃	E6h4	〃	0.90	0.80	0.30	17.793	
156	剥片	〃	〃	〃	1.30	1.15	0.175	17.793	
157	礫	〃	〃	花崗岩				17.771	
158	剥片	〃	〃	黒曜石	2.84	1.32	0.24	17.725	実測(第20図)
159	〃	〃	E6i2	〃	3.50	2.00	0.43	18.38	実測(第20図)
160	チップ	〃	E6h3	〃	0.975	0.81	0.160	18.077	
161	剥片	〃	E6e2	頁岩	4.13	2.63	1.22	17.840	
162	〃	〃	E6f3	黒曜石	2.68	1.70	1.700	17.57	
163	チップ	〃	〃	〃	1.20	0.80	0.170	17.7	
164	剥片	〃	E6e3	〃	1.52	0.93	0.20	17.51	
165	チップ	〃	〃	〃	1.20	0.90	0.410	17.476	
166	Uフレイク	〃	E6h2	〃	1.35	0.85	0.31	18.047	
167	剥片	〃	〃	〃	2.300	2.100	0.390	18.066	
168	楔器	〃	E6g3	チャート	1.90	1.50	0.55	17.856	
169	剥片	〃	E6h3	黒曜石	1.50	0.60	0.190	17.893	実測(第20図)
170	〃	他	E5e0	〃	2.20	1.40	1.25	18.118	
171	〃	〃	〃	〃	5.00	2.36	1.10	17.934	
172	〃	〃	〃	〃	5.43	2.76	0.52	17.982	
173	〃	〃	〃	〃	4.74	4.45	0.74	17.926	実測(第22図)
174	敲石	〃	〃	砂岩	5.90	2.10	1.90	17.941	
175	Uフレイク	〃	E6e1	黒曜石	2.64	1.35	0.35	17.92	実測(第23図)
176	礫	〃	E6f1	安山岩				18.134	
177	チップ	〃	E6f4	黒曜石	0.96	0.42	0.115	17.475	
178	礫	〃	E6g3	安山岩				17.927	
179	剥片	〃	E6h3	黒曜石	1.56	1.16	0.41	18.124	
180	〃	〃	〃	〃	13.5	11.7	0.36	17.995	
181	チップ	〃	〃	〃	0.59	0.50	0.225	17.934	
182	〃	〃	〃	〃	0.95	0.90	0.11	17.919	
183	礫	〃	〃	安山岩				18.037	
184	チップ	〃	〃	黒曜石	0.58	0.24	0.04	17.884	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
185	チップ	他	E6h3	黒曜岩	0.64	0.38	0.11	18.113	
186	〃	〃	〃	〃	0.535	0.25	0.21	17.971	
187	〃	〃	E6h4	〃	0.90	0.80	0.30	17.954	
188	〃	〃	〃	〃	1.30	1.15	0.175	17.793	
189	礫	〃	〃	花崗岩				17.771	
190	剥片	〃	〃	黒曜石	1.52	1.25	0.310	17.725	
191	礫	〃	E6h5	安山岩				17.594	
192	剥片	〃	E6g5	黒曜石	1.80	1.10	0.53	17.352	
193	〃	〃	〃	頁岩	3.90	1.60	0.80	17.466	
194	舟底形石器	〃	E6f2	黒曜石	4.38	2.00	1.40	17.966	実測(第21図)
195	剥片	〃	E6g2	〃	3.18	2.55	0.56	18.128	
196	掻器	〃	〃	〃	1.88	1.90	0.55	18.113	
197	剥片	〃	〃	〃	1.30	0.90	0.39	18.113	
198	〃	〃	E5h1	頁岩	2.20	0.98	0.38	19.375	
199	礫	〃	E5g6	花崗岩				19.03	
200	〃	〃	E5g7	安山岩				18.824	
201	〃	〃	E5e9	〃				18.827	
202	削器	〃	〃	頁岩	4.20	3.28	1.20	18.34	実測(第22図)
203	礫	〃	〃	安山岩				18.333	
204	掻器	〃	〃	頁岩	4.6	4.2	0.590	18.231	実測(第21図) 破損
205	Uフレーク	〃	〃	〃	3.4	2.1	0.76	18.243	
206	削器	〃	〃	〃	4.20	2.90	1.50	18.277	実測(第21図)
207	礫	〃	E5g0	花崗岩				18.313	
208	〃	〃	E6g1	〃	5.06	4.18	3.26	18.266	
209	剥片	〃	E5h6	黒曜石	2.80	1.40	0.34	19.044	実測(第23図)
210	〃	〃	E5h7	〃	2.40	1.80	0.57	18.976	
211	礫	〃	〃	安山岩				19.004	
212	〃	〃	〃	〃				18.166	
213	〃	〃	〃	〃				19.103	
214	〃	〃	E5h8	〃				18.876	
215	〃	〃	〃	〃				18.891	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
216	礫	他	E5h8	安山岩				18.890	
217	〃	〃	E5h9	〃				18.725	
218	剥片	〃	E5h0	ヘンマ岩	1.76	1.04	0.95	18.671	
219	〃	〃	〃	黒曜石	2.0	1.60	0.270	18.703	
220	礫	〃	〃	安山岩				18.785	
221	〃	〃	E5i6	〃				18.992	
222	剥片	〃	E5j7	頁岩	2.05	1.38	0.56	19.127	
223	〃	〃	〃	黒曜石	1.83	0.85	0.33	19.249	
224	礫	〃	〃	安山岩				19.235	
225	チップ	〃	E5g5	頁岩	0.95	0.48	0.29	19.045	
226	礫	〃	E5h4	安山岩				19.214	
227	チップ	〃	E5h5	頁岩	0.80	0.60	0.38	19.166	
228	礫	〃	〃	花崗岩				19.180	
229	剥片	〃	〃	安山岩	2.25	1.95	0.720	19.129	
230	〃	〃	E5i6	花崗岩	2.60	1.80	0.81	19.114	
231	礫	〃	E5i8	安山岩				18.939	
232	尖頭器	〃	E5i9	〃				18.821	調査中に紛失
233	剥片	〃	〃	黒曜石	1.50	1.40	0.260	18.811	
234	掻器	〃	〃	メノウ				18.990	調査中に紛失
235	礫	〃	〃	砂岩				18.848	
236	Uフレイク	〃	E5i0	黒曜石	2.20	1.20	0.52	18.839	
237	剥片	〃	E5j7	頁岩	4.00	1.42	0.56	19.125	実測(第23図)
238	削器	〃	〃	黒曜石	3.00	2.00	0.35	19.253	実測(第22図)
239	礫	〃	〃	頁岩				19.242	
240	剥片	〃	E5j9	黒曜石	1.40	1.28	0.445	19.162	
241	チップ	〃	〃	チャート	0.85	0.80	0.140	19.031	
242	〃	〃	E5j0	黒曜石	1.30	0.44	0.265	19.837	
243	剥片	〃	〃	〃	1.97	1.10	0.390	18.824	
244	チップ	〃	〃	〃	0.81	0.92	0.18	18.795	
245	〃	〃	〃	〃	0.86	0.75	0.21	18.795	
246	剥片	〃	〃	〃	1.50	0.97	0.335	18.822	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
247	礫	他	E5j0	安山岩				18.974	
248	〃	〃	〃	〃	4.5	4.1	3.0	18.978	
249	チップ	〃	〃	黒曜石	0.75	060	0.14	18.791	
250	〃	〃	〃	〃	0.80	0.60	0.15	18.907	
251	掻器	〃	E5d2	頁岩	3.26	2.90	1.0	19.140	破損 実測(第21図)
252	チップ	〃	E6i1	黒曜石	1.26	0.85	0.38	18.588	
253	剥片	〃	〃	〃	1.90	1.30	0.250	18.479	
254	〃	〃	〃	〃	1.04	1.00	0.280	18.527	
255	〃	〃	E6i2	〃	1.30	0.80	0.210	18.417	実測(第23図)
256	〃	〃	〃	〃	2.40	2.00	0.36	18.437	
257	〃	〃	〃	〃	3.30	2.30	0.42	18.606	実測(第22図)
258	〃	〃	E6h2	〃	1.34	0.94	0.240	18.291	
259	〃	〃	E5e7	頁岩	3.00	2.30	0.67	18.551	
260	〃	〃	E5f8	安山岩	3.34	3.10	1.80	18.551	
261	〃	〃	E5e9	頁岩	2.32	1.85	0.47	18.219	
262	礫	〃	E5f9	安山岩				18.435	
263	Uフレイク	〃	E5h0	黒曜石	2.00	1.70	0.63	18.629	
264	削器	〃	〃	〃	2.80	2.30	0.44	18.409	実測(第22図)
265	礫	〃	E5i0	安山岩				18.715	
266	Uフレイク	〃	〃	頁岩	5.00	3.10	1.10	18.627	
267	礫	〃	〃	安山岩				18.627	
268	剥片	〃	〃	黒曜石	2.15	1.00	0.64	18.518	実測(第23図)
269	〃	〃	E5g2	頁岩	3.45	2.08	0.74	19.095	
270	掻器	〃	E6e2	黒曜石	2.94	2.55	1.18	17.83	実測(第21図)
271	Uフレイク	〃	〃	〃	3.63	2.00	0.42	17.5	実測(第23図)
272	礫	〃	〃	安山岩				17.86	
273	剥片	〃	E6f2	黒曜石	4.30	2.60	0.87	17.9	実測(第22図)
274	チップ	〃	〃	〃	0.60	0.30	0.12	17.72	
275	剥片	〃	〃	頁岩	7.30	3.10	2.40	17.75	
276	礫	〃	〃	安山岩				17.93	
277	剥片	〃	〃	〃	1.70	1.20	0.96	17.74	

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
278	剥片	他	E5i0	花崗岩	3.10	1.80	0.60	18.728	
279	〃	〃	E5j0	砂岩	2.17	1.25	0.58	18.852	
280	Uフレイク	〃	E6g1	黒曜石	2.30	1.20	0.64	18.24	
281	礫	〃	E6g2	安山岩				17.985	
282	剥片	〃	〃	黒曜石	2.30	0.70	0.40	17.824	実測(第23図)
283	〃	〃	〃	〃	1.60	1.40	0.37	17.834	
284	〃	〃	〃	〃	2.80	2.14	0.725	17.895	
285	〃	〃	〃	〃	1.23	1.48	0.29	18.145	
286	礫	〃	E5g2	安山岩				19.022	
287	剥片	〃	E5f7	木化石	4.80	4.10	2.60	18.588	
288	〃	〃	〃	〃	3.96	2.95	1.50	18.606	
289	〃	〃	E5e8	花崗岩	2.05	1.86	0.435	18.404	
290	掻器	〃	E5i2	頁岩	2.88	2.44	0.856	19.034	破損 基部
291	礫	〃	E6e1	安山岩					
292	掻器	〃	D5h5	頁岩	6.4	2.78	0.69	18.66	実測(第21図)
293	じフレイク	〃	E5j1	〃	2.57	1.10	0.52	19.263	実測(第23図)
294	礫	〃	E6i5	安山岩					
295	〃	〃	E5g1	花崗岩					
296	〃	〃	E6c1	砂岩					
297	〃	〃	E5e7	安山岩					
298	〃	〃	E5e7	木化石	5.0	4.95	2.6		
299	〃	〃	E5e3	安山岩					
300	〃	〃	C3i7	〃					
301	〃	〃	C3e3	〃	8.0	4.34	0.9		
302	〃	〃	C2c7	頁岩	9.4	5.7	5.55		
303	剥片	〃	E5c7	安山岩	6.45	3.6	2.05		実測(第22図)
304	礫	〃	E6e3	〃					
305	〃	〃	D5c2	〃					
306	〃	〃	E5c7	砂岩					
307	〃	〃	D5j3	安山岩					
308	凹石	〃	E6e3	雲母片岩	8.4	5.6	1.60		

遺物番号	器種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
309	剥片	他	C4g6	花崗岩	4.75	2.70	1.80		
310	〃	〃	D4c6	軽石	6.70	3.80	2.20		
311	〃	〃	C5h4	安山岩	4.4	2.30	0.75		
312	礫	〃	E6i3	砂岩					
313	〃	〃	E6g1	安山岩	9.98	4.9	4.3		
314	Uフレイク	〃	〃	頁岩	3.52	2.09	1.35		
315	チップ	〃	〃	黒曜石	1.10	0.95	0.260		
316	剥片	〃	E6e0	頁岩	2.24	1.76	1.50		
317	〃	〃	E6d1	〃	2.85	1.03	0.9		実測(第22図)
318	礫	〃	F6a2	安山岩	7.0	5.98	2.5		
319	削器	〃	E6d9	頁岩	9.06	3.33	2.20		実測(第21図)
320	剥片	〃	E5d0	安山岩	4.05	2.54	1.58		
321	〃	〃	E6d3	黒曜石	2.09	1.3	00.89		実測(第23図)
322	〃	〃	E6h5	〃	1.85	1.13	0.45		
323	礫	〃	E6f4	安山岩	11.2	5.12	4.10		
324	Uフレイク	〃	E6j1	黒曜石	1.82	1.33	0.260		
325	〃	〃	E6h3	頁岩	4.3	1.9	0.89		
326	剥片	〃	E5e2	〃	3.2	1.8	0.9		
327	〃	〃	B3g7	〃	2.8	1.7	0.85		
328	〃	〃	C3c9	安山岩	3.9	2.4	1.5		
329	〃	〃	B1c7	花崗岩	4.05	3.0	2.5		
330	掻器	〃	表採	頁岩	6.05	5.3	1.2		実測(第21図)
331	Uフレイク	〃	E5d5	〃	4.5	2.4	1.05		
332	剥片	〃	E5j9	黒曜石	3.55	1.6	1.23	19.026	実測(第23図)
333	チップ	〃	E6i2	〃	0.8	0.4	0.2	18.377	
334	剥片	〃	E6f1	〃	1.5	1.02	0.88	18.032	
335	〃	〃	F5c7	頁岩	3.34	2.20	0.99		
336	〃	〃	E5i0	ヘンマ岩	1.90	1.32	0.78	18.661	
337	礫	〃	D5e5	頁岩					
338	〃	〃	E5b0	安山岩					
339	〃	〃	E5b8	頁岩					

遺物番号	品種	群	出土位置	石質	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	Level 層位	備考
340	礫	他	C4 h 9	花崗岩					
341	〃	〃	C4 e 9	安山岩					
342	〃	〃	D5 h 7	砂岩					
343	〃	〃	C5 c 1	〃					
344	〃	〃	E5 d 5	安山岩					
345	〃	〃	E6 f 1	〃					
346	〃	〃	D5 d 3	〃					
347	〃	〃	D4 a 7	泥質砂岩					
348	剝片	〃	D4 c 5	チャート	2.3	1.5	0.7		
349	礫	〃	C2 c 0	花崗岩					
350	礫	〃	E5 b 6	砂岩					
351	礫	〃	F5 a 8	泥質砂岩					
352	剝片	〃	E6 i 3	安山岩	4.3	2.3	1.8		
353	礫	〃	E6区	砂岩					
354	〃	〃	F5 a 2	安山岩					
355	〃	〃	E6 h 4	〃					
356	〃	〃	E6 h 3	〃					
357	〃	〃	E6区	〃					
358	〃	〃	E6 h 3	砂岩					
359	〃	〃	D5 i 7	安山岩					
360	〃	〃	E6 g 2	チャート					
361	〃	〃	E5 g 1	安山岩					
362	〃	〃	E5 i 0	〃					
363	〃	〃	E6 h 3	砂岩					
364	〃	〃	B4 i 2	安山岩					
365	〃	〃	E5 g 0	花崗岩					
366	〃	〃	E6 g 1	チャート					
367	〃	〃	C4 i 1	安山岩					
368	〃	〃	E6 f 3	〃					
369	〃	〃	E5 j 0	花崗岩					
370	〃	〃	〃	安山岩					

遺物番号	品種	群	出土位置	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	Level 層位	備考
371	礫	他	E 6 g 1	安山岩					
372	〃	〃	D 5 h 5	砂岩					
373	〃	〃	D 5 i 9	安山岩					
374	敲石	〃	D 5 i 5	〃					
375	礫	〃	E 6 i 5	〃					
376	〃	〃	E 6 a 5	〃					
377	〃	〃	E 6 a 3	砂岩					
378	〃	〃	F 6 a 3	花崗岩					
379	〃	〃	E 4 a 5	砂岩					
380	〃	〃	F 5 a 9	石英					
381	〃	〃	D 5 c 3	安山岩					
382	〃	〃	E 6 a 5	頁岩					
383	〃	〃	F 5 a 2	安山岩					

第2節　縄文時代

1　遺　構

(1)　住　居　址

本遺跡からの縄文式土器の遺物は，多く検出されたが，遺構は住居址一軒の確認に留まった。

第11号住居址（第24図）

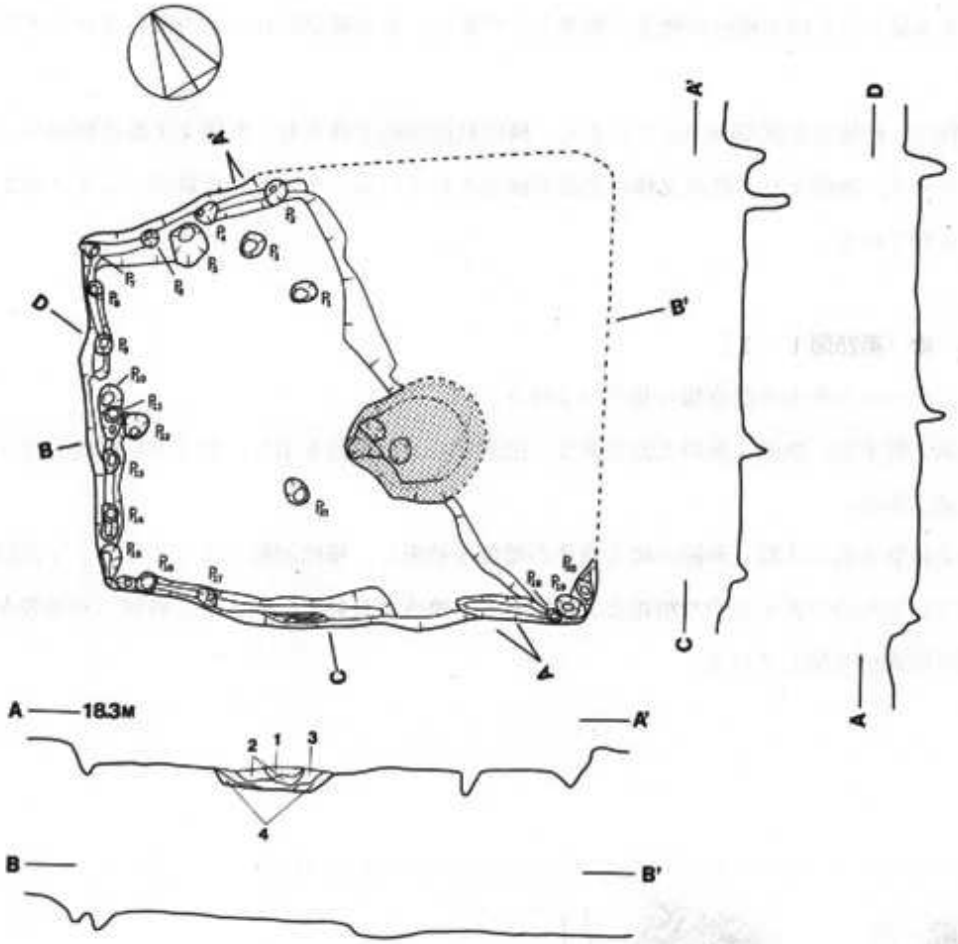
本住居址は，調査地区，Ｅ５ｅ０・Ｅ６ｅ１・Ｅ５ｆ０・Ｅ６ｆ１に確認され，第３号住居址，第４号住居址の南側約７ｍのところに位置している。

規模は，長径3.7m，短径2.71ｍほどの不整方形の平面形を呈しており，主軸方向は，Ｎ－0.5°－Ｅである。

遺構確認面より床面までの深さは，15～20cmほどであり，床面は全体的に平坦で，ローム の柔かい褐色土である。壁は，ゆるやかに外反しながら立ち上がり，壁溝は，部分的に切れてはいるが，北側，西側，南側を，15～20cmの幅で周っており，深さは，約15cmほどである。壁溝内には直径15cm内外の壁孔が19個検出され，13～32cmの深さを有している。その他には，３個のピットが検出されているが，いずれも本住居址の主柱穴とは考えられない。

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　考
Ｐ１	20	15	26		Ｐ12	22	19	15	
Ｐ２	22	17	24		Ｐ13	19	12	21	
Ｐ３	22	19	38		Ｐ14	15	12	16	
Ｐ４	18	15	22		Ｐ15	28	16	14	
Ｐ５	34	27	23		Ｐ16	19	16	18	
Ｐ６	14	13	13		Ｐ17	18	13	17	
Ｐ７	15	10	26		Ｐ18	13	9	13	
Ｐ８	12	11	15		Ｐ19	20	15	17	
Ｐ９	17	13	19		Ｐ20	17	12	14	
Ｐ10	43	17	15		Ｐ21	23	17	21	
Ｐ11	14	13	24						

炉址は，本住居址の中央よりやや南側に位置しており，規模は，長径110cm・短径90cmの楕円形



第24図　第 11 号 住 居 址 実 測 図

第11号　住居址土層解説

A—A′　1.Hue2.5YR　½　暗赤褐色（炭化材少量含む）
2.Hue2.5YR　½　暗赤褐色（炭化材少量含む）
3.Hue　5YR　½　暗赤褐色（焼土粒子多量含む，ハードローム中央部に有り）
4.Hue7.5YR　½　褐色（焼土粒子少量含む，ハードローム中央部に有り）

「標準土色帳」（農林水産技術会議事務局　監修）

1M

状の平面形を呈し，床面より18cmほど掘り込み，皿状を呈している。炉址内部には，炭化粒子，焼土粒子を多量に含む暗赤褐色の焼土が充満し，炉床は，火を帯びたロームの硬いブロックである。

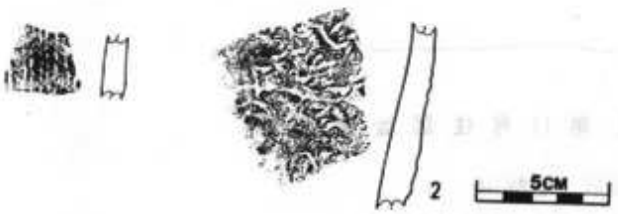
出土遺物は，炉址の北側35cmのところから，横位結節回転文様を有した縄文土器の胴部や，北側のコーナーと，西側より，撚糸文様の土器が検出されている。その他，頁岩のフレイクが2点ほど検出されている。

2　遺　物（第25図1・2）

分類は，グリット出土土器分類に基づいて行う。

1は（第1群土器）撚糸文系の土器である。色調はにぶい褐色を示し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

2は（第11群土器－3類）無節の縄文原体の端部を結束し，横位回転によって「S」字状結束を施文しているものである。やや粗雑な文様である。焼成は良好で，胎土中に砂粒，石英等を含み，色調は明褐色を呈している。



第25図　第11号住居址出土遺物

第3節　古墳時代

1　遺　構

(1)　住　居　址

住居址は，谷を囲む北東の標高約18～20ｍの緩やかな傾斜面に確認され，緩斜面の立ち上がり部に構築されている。また，住居遺構の集中は，遺跡の東部端に見られ，その他は，北側縁辺部にある。これら13軒の住居址は，いずれも複合は見られず，同一時期，あるいは，それに近い時期に構築された集落と考えられる。半数以上の住居址内から，焼土塊が検出され，火災に遭遇しているものと思われる。

第１号住居址（第26図）

本住居址は，遺跡の南東端，調査地区，Ｅ６ｊ１・Ｅ６ｊ２・Ｅ６ｊ３・Ｆ６ａ１・Ｆ６ａ２Ｆ６ａ３に確認され，第12号住居址のほぼ東側10ｍのところに位置している。

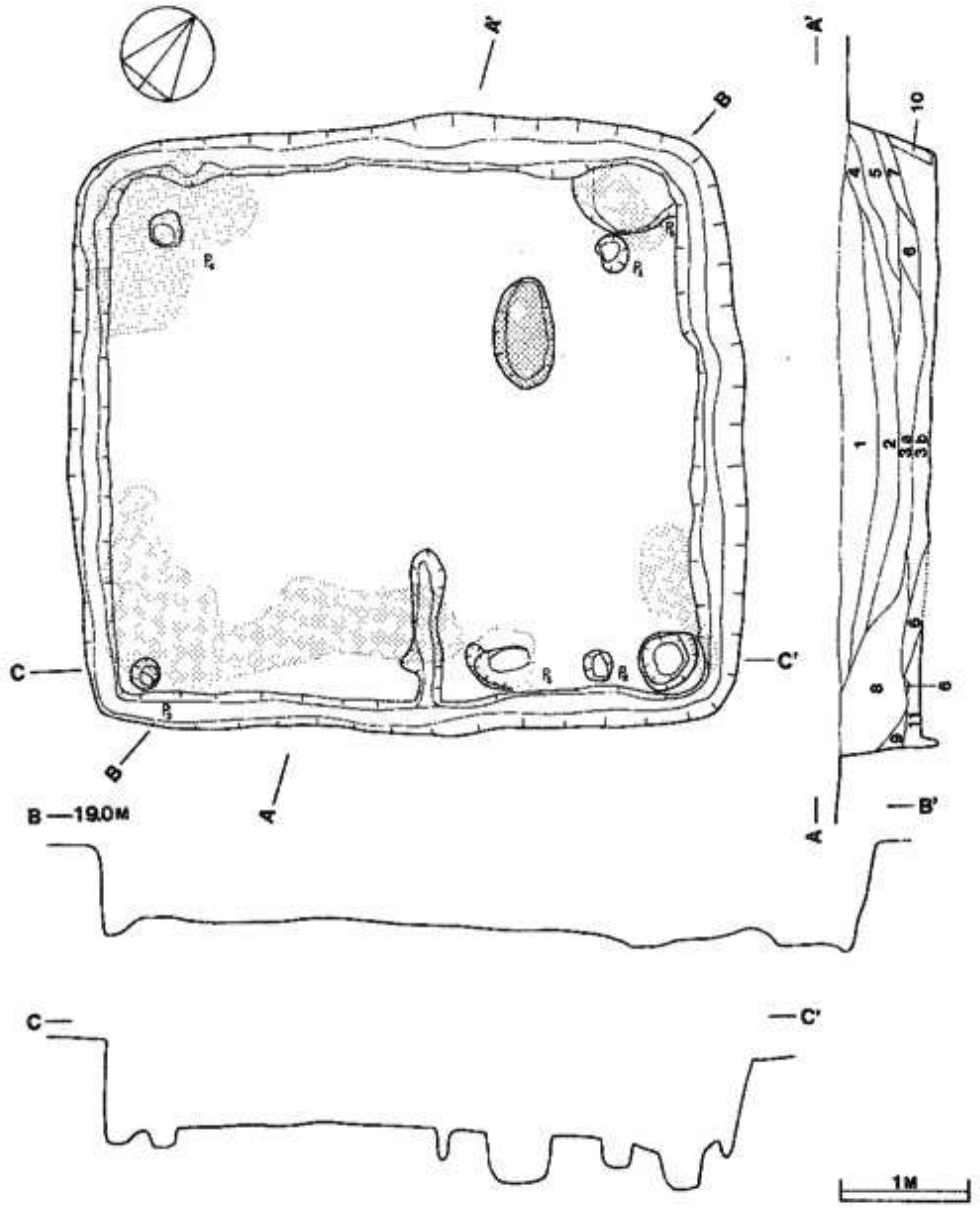
規模は，長径5.2ｍ，短径4.6ｍほどの隅丸方形の平面形を呈し，主軸方向は，Ｎ－50°－Ｅである。また，各コーナー部には，厚さ13cmほどの焼土が検出され，特に，南側のコーナーの焼土は，壁に沿って２ｍぐらい東に伸びて検出されている。

壁高は，60cm前後で垂直ぎみに立ち上がり，床面は平坦で，全体的に火を帯びた硬質の貼床である。また，壁下には，幅20cm，深さ10～15cmほどの壁構が，住居址全体に周り，南側の中央部から住居址内へ，約1.3ｍほど入り，深さは20～30cmほどで，間仕切りの役目を果たしていたのではないだろうか。

炉址は，中央部より1.2ｍほど北東へ沿って位置し，長径85cm，短径45cmの楕円形の平面形を呈し，皿状に，12cmほど掘り込み，内部には，橙色の焼土が充満し，炉床は硬く焼けている。

床面上には，ピットが６個検出され，Ｐ２・Ｐ３は，南側壁に隣接しており，Ｐ１・Ｐ２が，本住居址の主柱穴であろうと思われる。また，Ｐ６は北側のコーナーの隅にあり，平面形は楕円形で，深さが16cm前後の皿状を呈し，堆積土層は焼土粒子を含む赤褐色，暗褐色が上層にあり，下層はロームブロックを含む褐色の土層で，自然堆積の状態を示している。本住居址と関係のあるピットであろうと思われる。

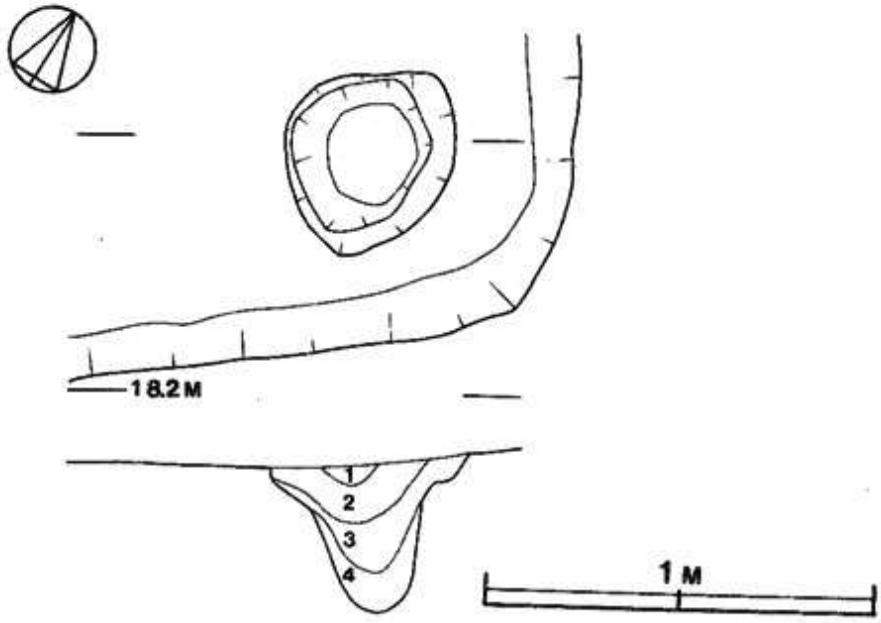
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	30	23	20	主柱穴	Ｐ４	30	27	18	
Ｐ２	25	22	20	主柱穴	Ｐ５	50	33	26	
Ｐ３	26	23	40		Ｐ６	87	55	12	



第26図　第 1 号 住 居 址 実 測 図

第1号　住居址土層解説

A—A'　1.Hue7.5YR　3/1　極暗褐色
2.Hue7.5YR　3/2　黒褐色
3.3a-Hue7.5YR　3/3　暗褐色（ローム粒子含む）
3b-Huc7.5YR　3/3　暗褐色（ローム粒子含む）
4.Hue7.5YR　3/3　暗褐色
5.Hue7.5YR　5/3　褐色
6.Hue7.5YR　5/4　褐色
7.Hue7.5YR　5/4　褐色（ローム粒子含む）
8.Hue7.5YR　5/6　褐色
9.Hue7.5YR　5/4　褐色
10.Hue7.5YR　5/4　褐色（ロームブロック含む）
11.Hue7.5YR　5/4　褐色（ロームブロック含む）



第27図　第１号住居址貯蔵穴

土層解説

1.Hue 5YR 3/4 暗赤褐色（焼土粒子含む）
2.Hue 10R 3/6 暗赤色（焼土を主として，やや土混入）
3.Hue7.5YR 3/4 褐色（焼土粒子含む）
4.Hue7.5YR 3/4 褐色

貯蔵穴（第27図）は，本住居址の東側のコーナー部に検出され，長径50cm，短径45cmほどの楕円形の平面形を呈し，深さは床面より約40cmほど掘り込まれている。断面土層は，自然堆積の状態を示し，１・２層は焼土粒子を含む暗赤褐色で，３層は焼土粒子を含む褐色の土層堆積が見られる。また，焼土の広がりの状態，覆土に含まれる焼土粒子等から，火災にあったものと思われる。

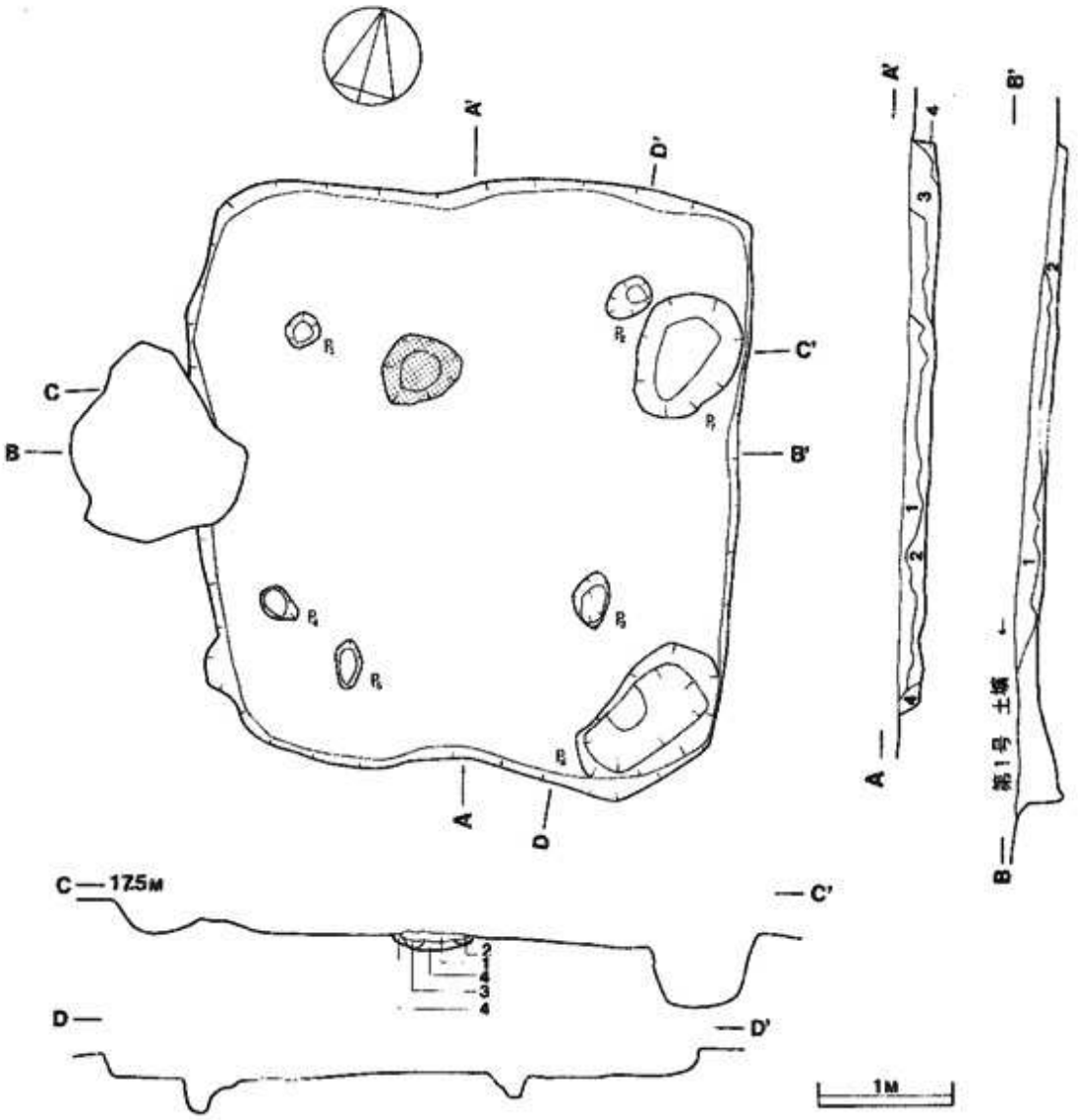
出土遺物は，Ｐ３の北側床面直上から，小型壺形土器（第49図10），貯蔵穴の東側床面直上から，椀の口縁部（第49図２），その他，甕の底部，高杯の破片等が出土している。

第２号住居址（第28図）

本住居址は，調査地区，Ｅ６ｄ３・Ｅ６ｄ４・Ｅ６ｅ３・Ｅ６ｅ４に確認され，遺跡の東側端のゆるやかな傾斜面を掘り込んで構築し，第１号住居址の北北東28ｍのところに位置しており，第１号土壙と重複している。

規模は，長径4.2m，短径3.95ｍほどの隅丸方形の平面形を呈し，南東のコーナー部の一部が張り出しており，主軸方向は，Ｎ－15.5°－Ｗである。

壁高は20cm前後で，垂直ぎみに立ち上がり，床面は平坦であり，中央部から炉址付近にかけて黒褐色の小ブロックを含んだ硬質の床面で，その他の壁部周辺はそれほど硬いものではない。



第28図　第 2 号 住 居 址 実 測 図

第２号　住居址土層解説

A—A′　1.Hue7.5YR 3/3 極暗褐色
B—B′　2.Hue7.5YR 3/3 暗褐色
　　3.Hue7.5YR 4/4 褐色
　　4.Hue7.5YR 5/6 褐色

C—C′　1.Hue 5YR 5/6 橙色（橙色の粒が混入）
　　2.Hue 5YR 5/6 赤褐色（黒色の粒が混入）
　　3.Hue 5YR 4/6 赤褐色
　　4.Hue 5YR 5/6 明赤褐色

炉址は，本住居址の中央部よりやや北側の位置に有し，長径60cm，短径50cmの楕円形の平面形を呈し，皿状に12cm程度掘り込み，内部は赤褐色，明褐色の焼土が充満し，炉床はロームが大ブロックになり，硬く焼けている。

床面上には，ピットが6個検出され，P1～P4は，いずれも本住居址の主柱穴である。P5・P6は本住居址より新しい土壙であり，本址とは関係がない。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	27	26	23	主柱穴	P5	37	20	10	
P2	38	26	26	主柱穴	P6	125	73	38	
P3	43	28	15	主柱穴	P7	100	75	42	
P4	34	22	40	主柱穴					

住居址内覆土は，北側と南側の壁から堆積した自然堆積の状態を示し，覆土第1層は，極暗褐色，第2層は，ロームブロック焼土粒子を含む暗褐色，第3層は，褐色の土層堆積が見られる。

出土遺物は，縄文式土器片と，土師式土器片が検出され，土師式土器片は，北東側床面直上から，甕形土器（第49図1），高杯脚部（第49図3・5）等が出土している。

第3号住居址（第29図）

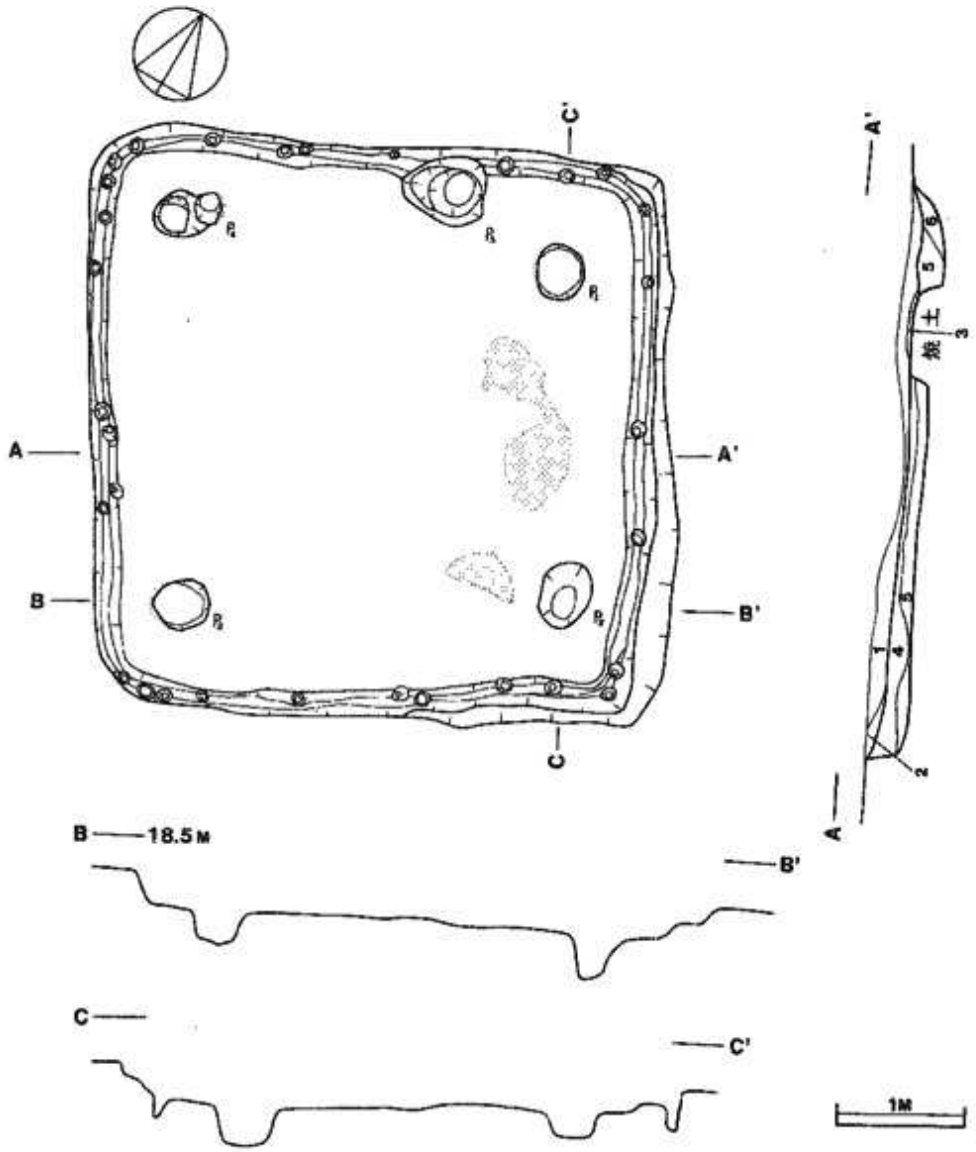
本住居址は，調査地区，E5b8・E5b9・E5c8・E5c9に確認され，第1号住居址の北側30mのところに位置している。

規模は，長径4.45m，短径4.35mほどの隅丸方形の平面形を呈し，主軸方向は，N－34°－Wである。また，中央部よりやや東側の場所に，南北に1.4mの長楕円形の焼土塊と，それより南側のところに楕円形の焼土が2個所に検出されている。

本住居址は，貼床の住居址で，構築する前に，40cmほどロームを掘り込んだ後に，約20cm程度埋め戻した灰褐色のやや柔かい床面である。また，壁下には，幅20cm内外，深さ15～20cm前後の壁構が住居址全体に周り，しかも深さ約10cm前後の壁柱穴が，全体で31個検出されている。

床面上には，ピットが5個検出され，P1～P4は，いずれも主柱穴である。P5は北側の壁直下に有り，深さは約20cmで，本住居址との関係については不明である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	44	36	18	主柱穴	P2	54	37	15	主柱穴
P2	53	38	33	主柱穴	P5	66	55	30	
P3	44	39	23	主柱穴					



第29図　第 3 号 住 居 址 実 測 図

第3号　住居址土層解説

A—A'
1. Hue7.5YR 3/1 黒褐色
2. Hue7.5YR 3/3 黒褐色（焼土粒子少量含む）
3. Hue 5YR 3/4 暗褐色（焼土粒子含む）
4. Hue7.5YR 4/2 灰褐色（ロームブロック含む）
5. Hue7.5YR 3/2 黒褐色
6. Hue7.5YR 4/4 褐色

住居址内覆土は，自然堆積の状態を示し，覆土第１層は，黒褐色であり，第２層は，焼土粒子を少量含む黒褐色で，貼床の土層は，焼土粒子を含む暗褐色を示している。

出土遺物は，縄文式土器片，土師式土器片が検出され，特に土師式土器には，壺，小型壺，器台など，完形品が出土している。

第４号住居址（第30図）

本住居址は，調査地区，Ｅ６ｂ１・Ｅ６ｂ２・Ｅ６ｃ１・Ｅ６ｃ２に確認され，第１号住居址の北側29.5m，第３号住居址の東側６m，第５号住居址の北側１mのところに位置している。

規模は，長径4.1m，短径3.4mほどの隅丸方形の平面形を呈し，東側と北側の壁が一部張り出しており，主軸方向は，Ｎ－60°－Ｅである。また，西側のコーナー部を除く，３コーナー部と，東側，南側付近には，暗褐色の焼土が，深さ約10～15cm程度堆積して検出されている。

壁高は55cm前後で，やや外反しながら立ち上がり，床面は平坦で，全体に火を帯びた，暗褐色土の硬質の床面である。また，壁下には，幅10～15cm，深さ10cm前後の壁溝が，本住居址を一周している。

炉址は，本住居址の中央部より，やや東側の位置に有し，長径65cm，短径55cmの楕円形状の平面形を呈しており，皿状に約10cm程度掘り込み，暗赤褐色の焼土が堆積している。

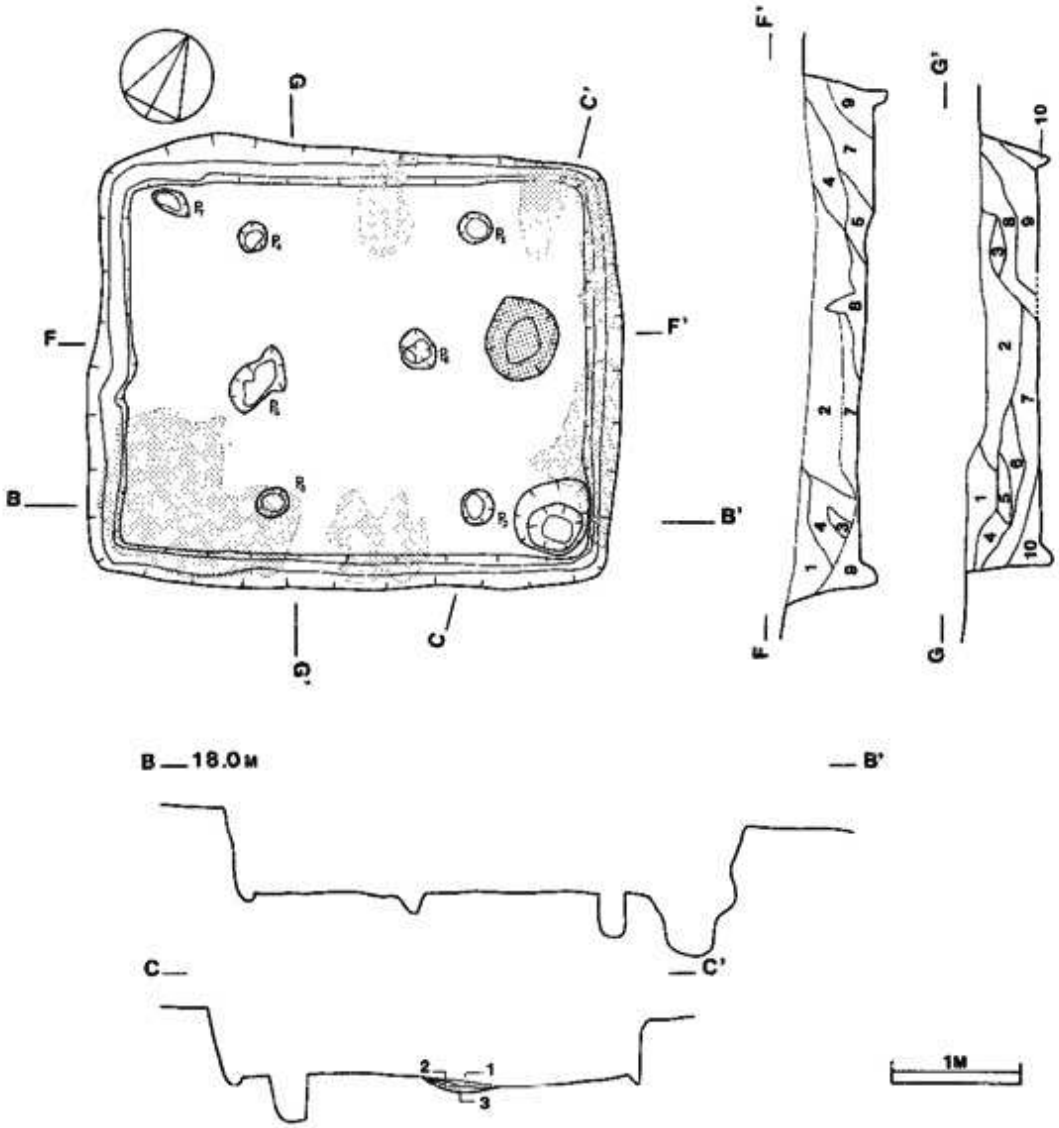
床面上には，ピットが６個検出され，Ｐ１・Ｐ４は，北側に隣接し，Ｐ２・Ｐ３は，南壁に隣接したピットで，本址の主柱穴である。その他のピットは，遺構との関係は不明である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	26	14	17	主柱穴	Ｐ５	57	28	17	
Ｐ２	27	25	17	主柱穴	Ｐ６	35	27	34	
Ｐ３	25	23	17	主柱穴	Ｐ７	34	18	11	
Ｐ４	23	22	17	主柱穴					

本住居址の覆土上層は，ローム粒子を若干含む暗褐色，覆土中位層は，ローム粒子，焼土粒子を少量含む暗褐色，覆土下層は，焼土粒子，炭化粒子を含む褐色土で，自然堆積の状態を示している。

貯蔵穴（第31図）は，南東のコーナー部に有り，長径70cm・短径55cmの楕円形の平面形を呈し２段の掘り込みを有している。床面から，底面までの深さは，50cmで，段部までの深さは，約10cmほどである。

出土遺物は，縄文式土器片，土師式土器片が出土し，土師式土器では小形甕，小型壺の完形品さらに装飾器台形土器等が出土している。

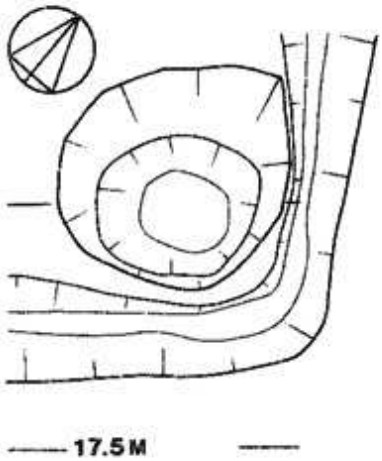


第30図　第４号住居址実測図

第４号　住居址土層解説

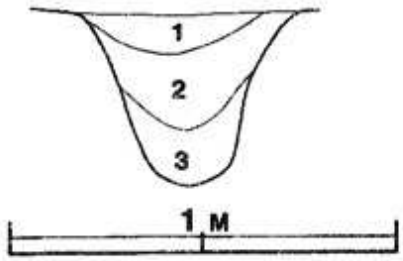
F－F′　1.Hue7.5YR　⅓　極暗褐色
G－G′　2.Hue7.5YR　¼　暗褐色
　　3.Hue7.5YR　⅓　褐色
　　4.Hue7.5YR　⅓　暗褐色
　　5.Hue7.5YR　¼　暗褐色
　　6.Hue7.5YR　¼　暗褐色
　　7.Hue7.5YR　⅓　褐色
　　8.Hue7.5YR　¼　暗褐色（黒色土混入）
　　9.Hue7.5YR　⅓　暗褐色
　　10.Hue7.5YR　⅓　褐色

C－C′　1.Hue　5YR　¼　暗赤褐色
　　2.Hue2.5YR　¼　暗赤褐色（炭火材含む）
　　3.Hue7.5YR　¼　褐色（焼土粒子含む）



土 層 解 説

1.Hue7.5YR 3/1 黒褐色（焼土炭化材含む）
2.Hue7.5YR 3/4 暗褐色
3.Hue7.5YR 3/3 極暗褐色



第31図 第 4 号 住 居 址 貯 蔵 穴

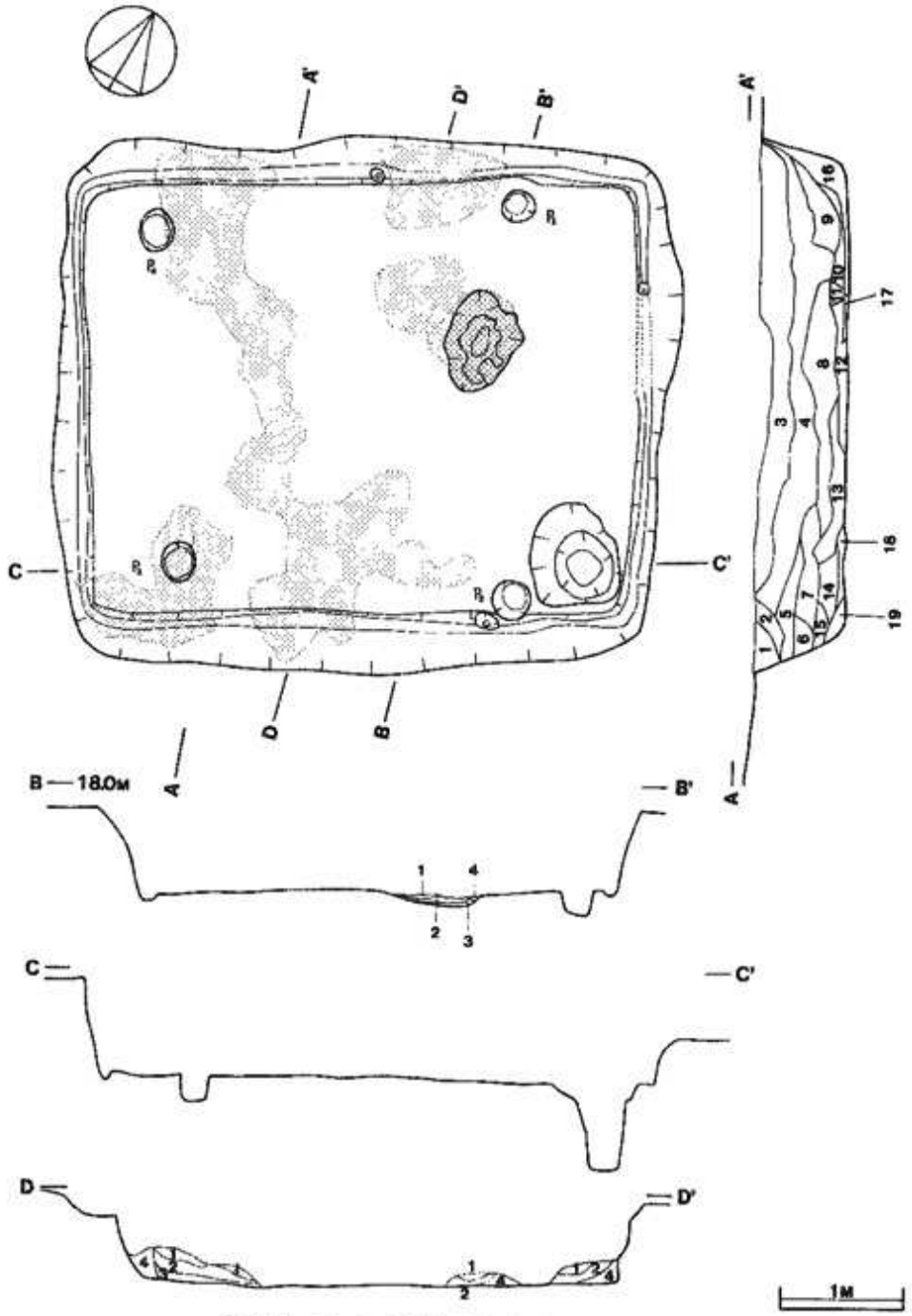
第 5 号住居址（第32図）

本住居址は，調査地区，Ｅ５ａ０・Ｅ５ｂ０・Ｅ６ａ１・Ｅ６ｂ１に確認され，第１号住居址の北側30.5cm，第３号住居址の東側４ｍ，第４号住居址の北側５ｍのところに位置している。

規模は，長径５ｍ，短径4.3m前後の隅丸方形を呈し，南側の壁が一部張り出しており，主軸方向は，Ｎ－55°－Ｅである。また，南のコーナー部と，北側から南側の壁にかけて，幅60～80cm，厚さ10～30cmの帯状の焼土が床面から浮いた状態で検出されている。

壁高は，70cmと，本遺跡の住居址の中では，最も深く外反して立ち上がっており，床面はほぼ平坦で，暗褐色土の焼けた硬質の床面である。また，壁下には，幅10cm，深さ８cm前後の壁溝が本住居址を一周している。

炉址は，本住居址の中央部より北東方向へ１ｍの場所に有し，長径80cm，短径60cmの楕円形状



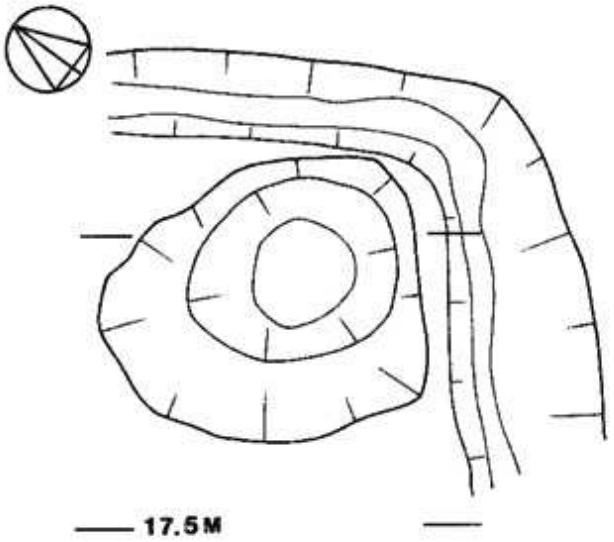
第32図　第 5 号 住 居 址 実 測 図

第 5 号　住居址土層解説

A—A'
1. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
2. Hue7.5YR 3/4 褐色
3. Hue7.5YR 3/4 黒褐色
4. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
5. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
6. Hue7.5YR 3/4 褐色
7. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
8. Hue7.5YR 3/4 褐色
9. Hue7.5YR 3/4 褐色
10. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
11. Hue7.5YR 3/4 褐色
12. Hue7.5YR 3/4 褐色 } 焼土を含む
13. Hue7.5YR 3/4 褐色 }
14. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
15. Hue2.5YR 3/4 赤褐色
16. Hue7.5YR 3/4 極暗褐色
17. Hue2.5YR 3/4 赤褐色
18. Hue7.5YR 3/4 黒褐色
19. Hue7.5YR 3/4 暗褐色

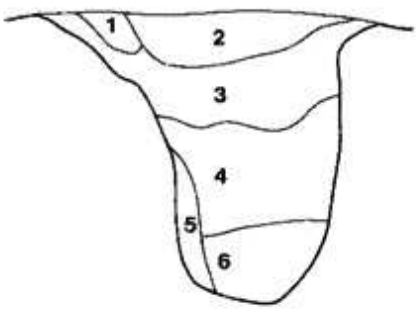
B—B'
1. Hue7.5YR 3/4 黒褐色
2. Hue2.5YR 3/4 赤褐色
3. Hue7.5YR 3/4 褐色
4. Hue7.5YR 3/4 褐色
Hue7.5YR

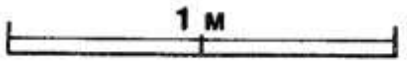
D—D'
1. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
2. Hue 10R 3/4 赤
3. Hue7.5YR 3/4 黒褐色
4. Hue7.5YR 3/4 極暗褐色



土 層 解 説

1.Hue2.5YR ½ 明赤褐色
2.Hue7.5YR ½ 褐色
3.Hue7.5YR ½ 褐色
4.Hue7.5YR ½ 暗褐色
5.Hue7.5YR ½ 褐色
6.Hue7.5YR ½ 暗褐色





第33図　第５号住居址貯蔵穴

の平面形を呈し，皿状に約８cm程度掘り込んでいる。

床面上には，ピットが４個検出たれ，Ｐ１・Ｐ４は，北壁に隣接し，Ｐ２・Ｐ３は南壁に隣接した，深さ約20～23cmの柱柱穴である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	28	25	20	主柱穴	Ｐ３	32	27	22	主柱穴
Ｐ２	32	31	23	主柱穴	Ｐ４	35	28	23	主柱穴

貯蔵穴（第33図）は，第４号住居址と同じように南東のコーナー部にあり，直径が80cmの円形状を呈し，２段の掘り込みを有している。床面から底面までの深さは70cmで，段部までの深さは約20cmほどである。

堆積土層は，覆土上層部ではロームブロックを含む黒褐色,暗褐色土,覆土中層部は,ロームブロック，炭化粒子を含む暗褐色，褐色土，覆土下層部は，ローム粒子，焼土ブロック，粒子，炭化粒子を含む黒褐色，暗褐色土層の堆積が見られる。

出土遺物は，覆土中より縄文式土器片を検出し，床面付近から，土師式土器片と土製品(土玉)を出土している。

第6号住居址（第34図）

本住居址は，調査地区，D5g6・D5g7・D5h6・D5h7に確認され，第1号住居址より，北側50mのところに位置している。

規模は，長径3.95m，短径3.5m前後の長方形状の平面形を呈しており,主軸方向はN－54－Eである。また，西側壁直下から，南側に幅約70cm，長さ170cmの帯状の焼土の焼土が広がり,北側の壁直下から一部焼土が検出されている。

壁高は，傾斜面のところに構築されているため，西側で約45cm，東側で10cm程度でいずれも外反しながら立ち上がり，床面は，東側へやや傾斜し，中央部より西側は，黒褐色土の硬い床面であり，東側は，ロームの柔かい土で覆われている。また，壁下には，幅15～20cm，深さ約5～10cm前後の壁溝が本住居址を一周し，しかも深さ10cm前後の壁柱穴が，20～40cmの間隔に，全体で35個ほど検出されている。

炉址は，本住居址の中央部より，やや西側の位置に有し，規模は，長径65cm，短径50cm程度の楕円形状を呈しており，皿状に10cmほど掘り込み，暗赤褐色の焼土が堆積している。

炉床は，ロームが大ブロックになり，硬く焼けている。

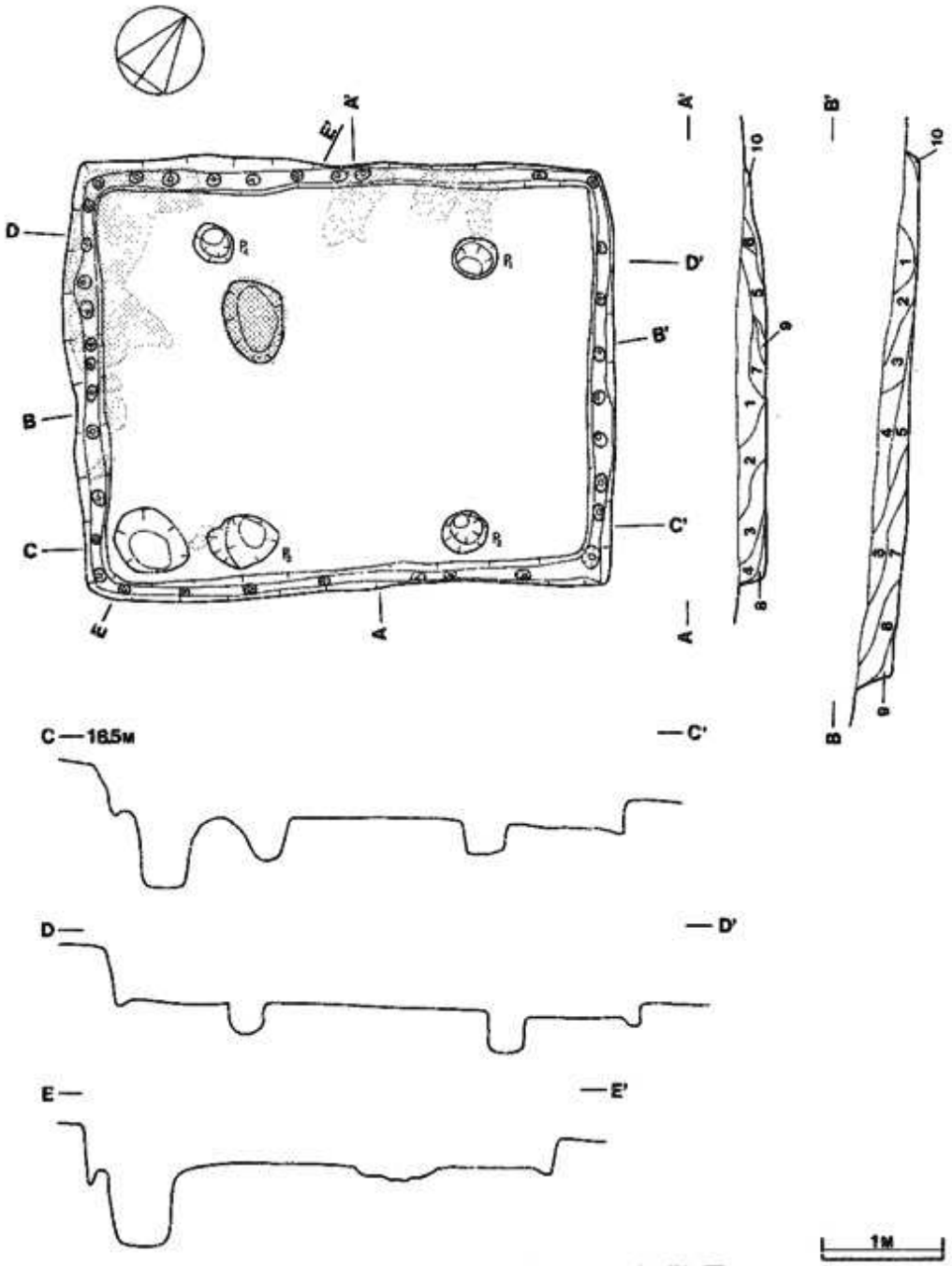
床面上には，ピットが4個検出され，P1・P4は，北壁により，P2・P3は南壁に隣接し深さは26～40cmほどで，いずれも本住居址の主柱穴である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	38	33	40	主柱穴	P 3	59	45	34	主柱穴
P 2	40	33	26	主柱穴	P 4	37	30	32	主柱穴

貯蔵穴（第35図）は，南西のコーナー部に有り，長径65cm，短形55cmの楕円形の平面形を呈し，底部は平坦で，床面からの深さは，約65cmである。貯蔵穴内の土層は，極暗褐色，黒褐色，暗褐色の3層からなり，いずれも焼土粒子を含み，自然堆積を示している。

本住居址の土層土層は，自然堆積を示し`東側に傾斜した場合に構築されているため，東側は黒褐色，暗褐色の土が堆積し，西側の方は，ローム粒子焼土粒子を含む黒褐色の土が堆積している。

出土遺物は，縄文式土器片と土師式土器片等が微量出土している。

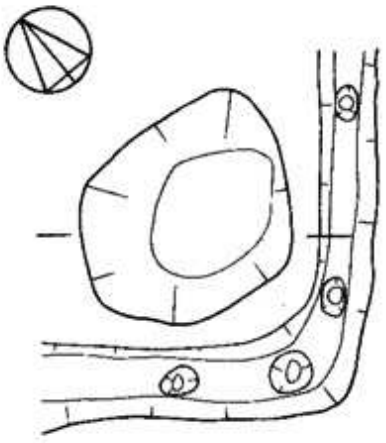


第34図　第 6 号 住 居 址 実 測 図

第6号　住居址土層解説

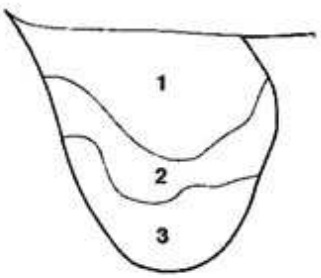
A—A'
1. Hue7.5YR 3/1 黒褐色
2. Hue7.5YR 3/3 極暗褐色
3. Hue7.5YR 3/2 黒褐色
4. Hue7.5YR 3/3 暗褐色
5. Hue7.5YR 3/4 極暗褐色
6. Hue7.5YR 3/1 黒褐色
7. Hue7.5YR 3/3 暗褐色
8. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
9. Hue7.5YR 3/3 極暗褐色
10. Hue7.5YR 3/3 極暗褐色（焼土粒子含む）

B—B'
1. Hue7.5YR 3/1 黒褐色
2. Hue7.5YR 3/3 極暗褐色
3. Hue7.5YR 3/3 暗褐色
4. Hue7.5YR 3/2 黒褐色
5. Hue7.5YR 3/4 暗褐色（焼土粒子少量含む）
6. Hue7.5YR 3/2 黒褐色（下層に焼土含む）
7. Hue7.5YR 3/4 暗褐色
8. Hue7.5YR 3/2 黒褐色（焼土粒子少量含む）
9. Hue7.5YR 3/2 黒褐色（焼土粒子少量含む）
10. Hue7.5YR 3/4 暗褐色（炭化材焼土粒子含む）



土層解説
1. Hue 7.5YR 3/1 極暗褐色
2. Hue 7.5YR 3/2 黒褐色
3. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色

18.5M



第35図　第6号住居址貯蔵穴

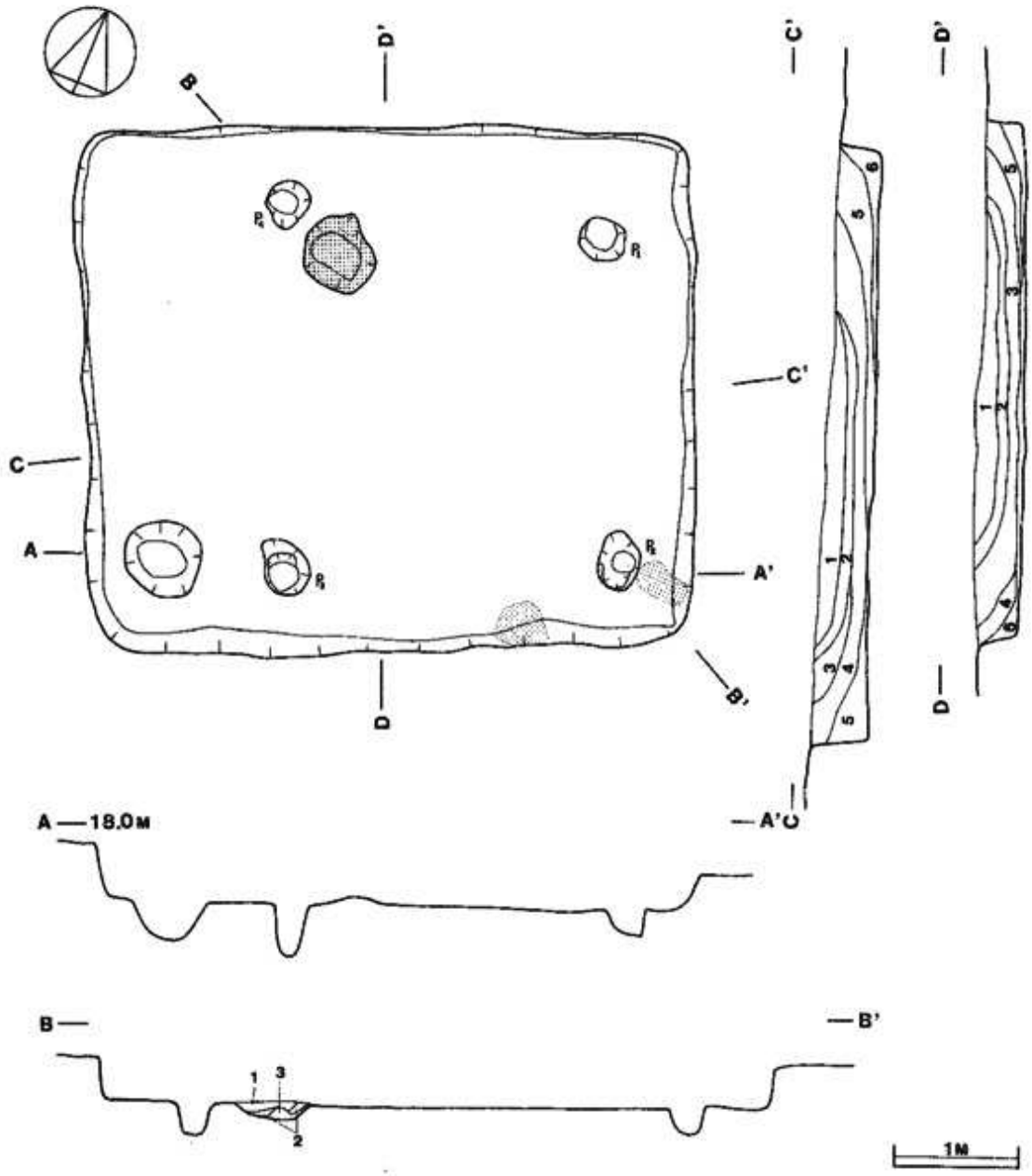
第7号住居址（第36図）

本住居址は，調査地区，D5e7・D5e8・D5f7・D5f8に確認され，第6号住居址の北東側3.5mのところに位置している。

規模は，長径4.8m，短径4.2mの隅丸長方形を呈し，主軸方向は，N－22.5°－Wである。また，南東のコーナー部と，南壁のところに，2個所の焼土が検出されている。

壁高は，本住居址が，東側に傾斜した場所に構築されているため，西側で50cm，東側で30cm程度掘り込まれている。内部は，暗赤褐色の焼土が充満し，炉床は硬く焼けている。

床面上には，ピットが4個検出され，P3・P4は，西壁より，やや離れた位置に有している



第36図　第 7 号住居址実測図

第7号住居址土層解説

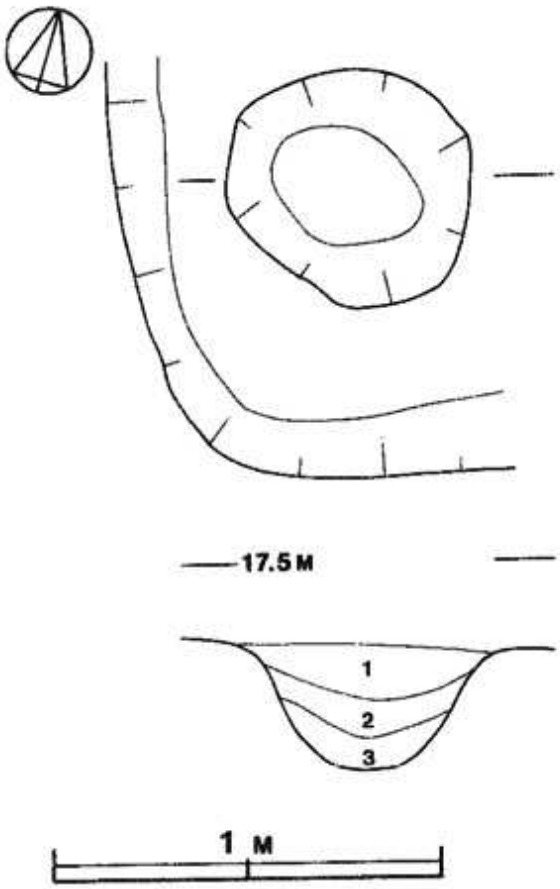
C—C'　1.Hue7.5YR　3/1 黒色（同一位層でも中心に近い方が黒さが濃い）
D—D'　2.Hue7.5YR　3/1 黒褐色（同一位層でも中心に近い方が黒さが濃い）
　　3.Hue7.5YR　3/3 極暗褐色（ロームブロックを含む箇所が多い）
　　4.Hue7.5YR　3/4 暗褐色（ロームブロックを含む箇所が多い）
　　5.Hue7.5YR　3/4 暗褐色
　　6.Hue7.5YR　3/4 褐色

B—B'　1.Hue2.5YR　3/4 暗赤褐色
　　2.Hue7.5YR　3/4 暗褐色（焼土粒子含む
　　3.Hue2.5YR　3/4 暗赤褐色（黒褐色の粒子含む）

がいずれも本住居址の主柱穴である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	39	33	18	主柱穴	P 3	50	38	46	主柱穴
P 2	48	33	23	主柱穴	P 4	40	34	26	主柱穴

貯蔵穴（第37図）は，第6号住居址と同じように，南側のコーナー部に有り，長径65cm，短径60cmの楕円形の平面形を呈しており，底面は平坦で，深さは床面上より30cmほどで，外反しながら立ち上がっている。



第37図　第7号住居址貯蔵穴

土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色
2. Hue 7.5YR 3/3 極暗褐色
3. Hue 7.5YR 3/1 黒褐色

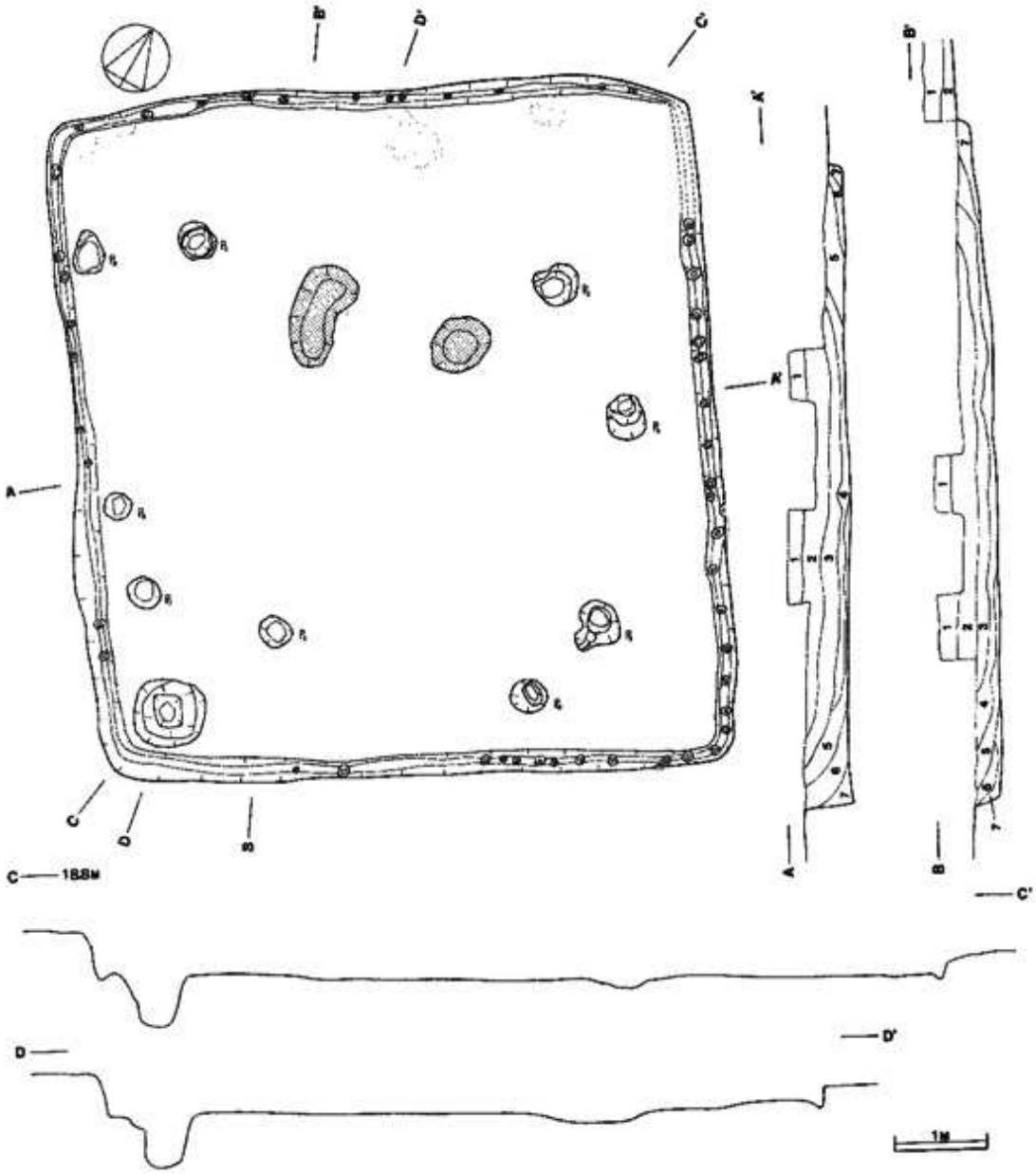
本住居址の覆土土層は，中央部に第1層の黒色土が約 2.5m の広がりをもち，第2層は黒褐色，暗褐色の土層で，壁付近は褐色土が堆積し，堆積の状態はレンズ状の自然堆積を示している。

出土遺物は，縄文式土器片を微量検出し，土師式土器は高杯の脚部（第58図1）が出土し，その他土製品（土玉）を2点検出した。

第8号住居址（第38図）

本住居址は，調査地区，C4a6・C4a7・C4b5・C4b6・C4b7・C4c5・C4c6・C4c7に確認され，第1号住居址より北西へ，123mのところに位置している。

規模は，本遺跡の住居址の中で最も大きく，長径7.4m，短径6.75mの隅丸長方形を呈しており主軸方向はN－33.5°－Wである。



第8号　住居址土層解説

1．Hue 7.5YR ¾暗褐色
2．Hue 7.5YR 1/7黒　色
3．Hue 7.5YR ¼黒　色
4．Hue 7.5YR ⅘褐　色
5．Hue 7.5YR ¼褐　色
6．Hue 7.5YR ⅗暗褐色（ロームブロック少量含む）
7．Hue 7.5YR ⅝明褐色

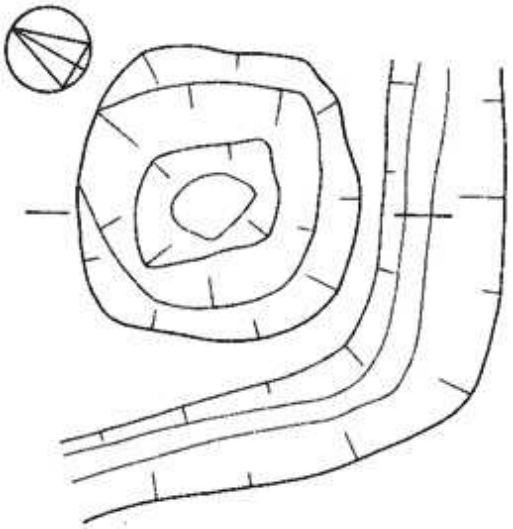
第38図　第 8 号 住 居 址 実 測 図

壁高は，本住居址が東側に傾斜している場所に構築されているため，西側壁のところで，45～50cm，東壁側は20cm程度掘り込んで作られており，やや外反しながら立ち上がっている。

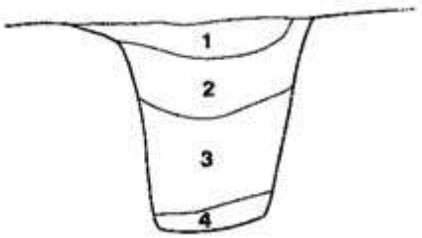
南側壁付近の床面は，幅１ｍ，前後壁面に沿ってその場所より，５cm程度高くなり，その他の場所は，ほぼ平坦である。また，炉址付近は，ロームブロックを含む暗褐色の硬い土で覆われており，壁近くはやや柔かい褐色土で覆われている。

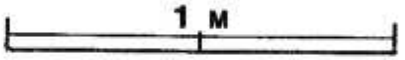
炉址は，本住居址の中央部より少し北側の場所に，２個所検出され，Ｆ１の規模は，長径110cm，短径50cmの楕円形の平面形を呈し，また，Ｆ２の規模は，長径65cm，短径60cmの楕円形を呈している。深さは，10～15cmで，いずれも皿状を有しており，内部は焼土粒子，炭化粒子を含む暗赤褐色の土が充満し，炉床は焼けた硬いロームである。

床面上には，ピットが９個検出され，Ｐ１～Ｐ４は，主柱穴であり，Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４は，いずれも深さ22～38cmを有し，Ｐ１は，非常に深く，71cmを測る。その他のピット，Ｐ５～Ｐ９の



18.5M





土層解説

1．Hue 7.5YR ¾ 暗褐色
2．Hue 7.5YR ¾ 暗褐色
3．Hue 7.5YR ⅜ 黒褐色（炭化材含む）
4．Hue 7.5YR ¾ 褐 色

第39図　第８号住居址貯蔵穴

本址との関係は不明である。

貯蔵穴（第39図）は，第６号住居址，第７号住居址と同じように，南西のコーナー部に検出され，直径が80cmのほぼ円形状を呈しており，床面はほぼ平坦で，外反しながら55cm立ち上がっている。内部の堆積土層は，上層部は暗褐色であり，中層部には，炭化粒子を含む黒褐色の土が堆積している。

本住居址の覆土土層は，中央部土層に黒色の土が堆積し

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	45	38	71	主柱穴	P 6	40	35	25	
P 2	50	45	27	主柱穴	P 7	36	32	30	
P 3	58	50	38	主柱穴	P 8	31	30	17	
P 4	36	32	22	主柱穴	P 9	46	33	21	
P 5	48	45	31						

下層部には，ロームブロックを含む，暗褐色の土が堆積し，レンズ状の自然堆積状態を示している。

出土遺物は，覆土中より，縄文式土器片を少量検出し，土師式土器は，北側壁付近から甕形土器（第60図1），高杯形土器（第60図5・6），土玉の破片を少量検出した。

第9号住居址（第40図）

本住居址は，調査地区，C4d8・C4d9・C4e8・C4e9に確認され，第8号住居址の南東7mのところに位置している。

規模は，長径3.78cm，短径2.8mの隅丸長方形を呈しており，主軸方向は，N－45°－Wである。また，中央部と西側に数ケ所の焼土が広がっている。

壁高は，東側に傾斜した場所に構築されているため，確認面より西側で15cm前後外反しながら立ち上がっている。但し，東側は，地面とほぼ水平に近くなっている。

床面は，褐色のロームであり，ほぼ平坦をなし，全体的に柔かい。

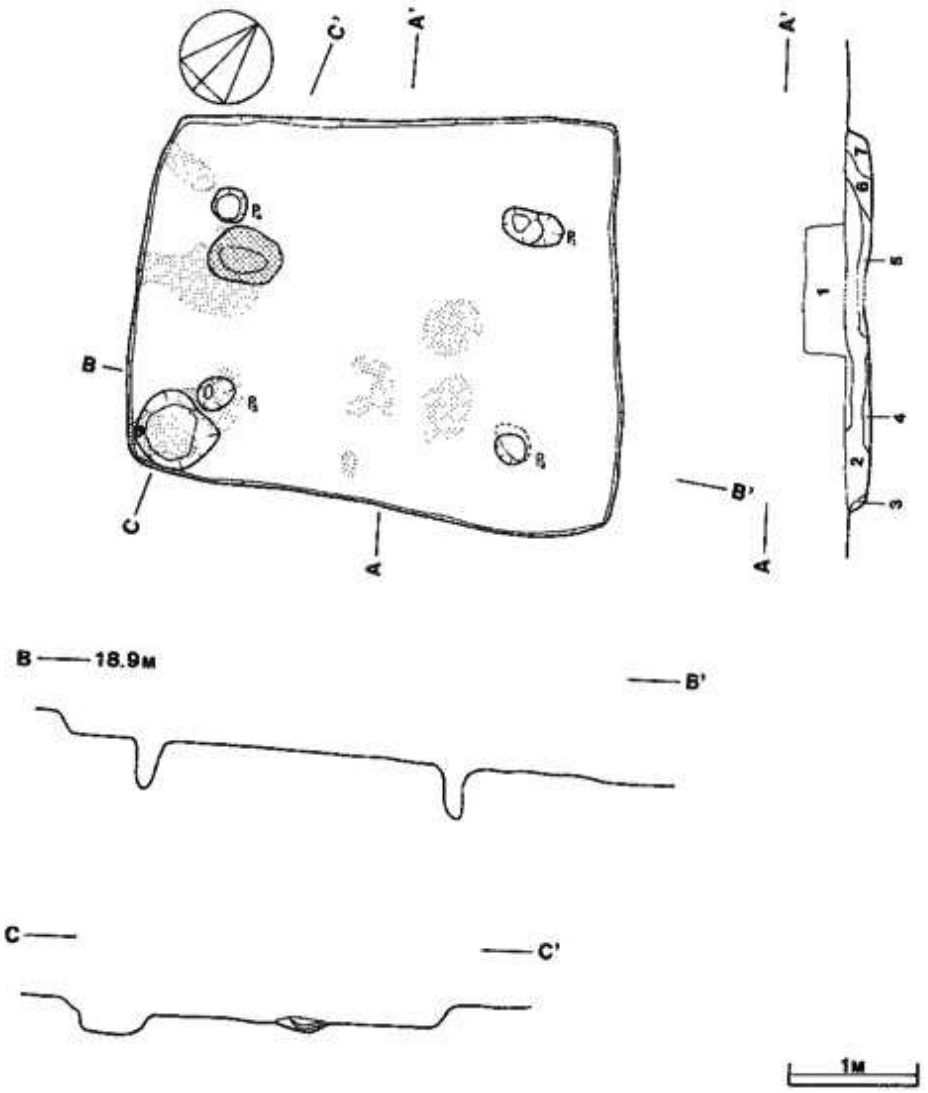
炉址は中央部より西側1.2mの位置にあり，長径60cm，短径40cmの円楕形状を呈しており，皿状に，10cm程度掘り込み，炉床は硬く焼けている。

床面上には，ピットが4個検出され，いずれも主柱穴で，20～40cmの深さを有している。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	49	26	38	主柱穴	P 3	31	25	37	主柱穴
P 2	27	23	40	主柱穴	P 4	30	28	24	主柱穴

貯蔵穴（第41図）は，第6号住居址・第7号住居址・第8号住居址と同じように，南西のコーナー部に有り，直径60cmの円形の平面形を呈し，深さは床面上より，20cmほど掘り込まれている。内部は焼土粒子，炭化粒子を含む暗褐色の土が堆積している。

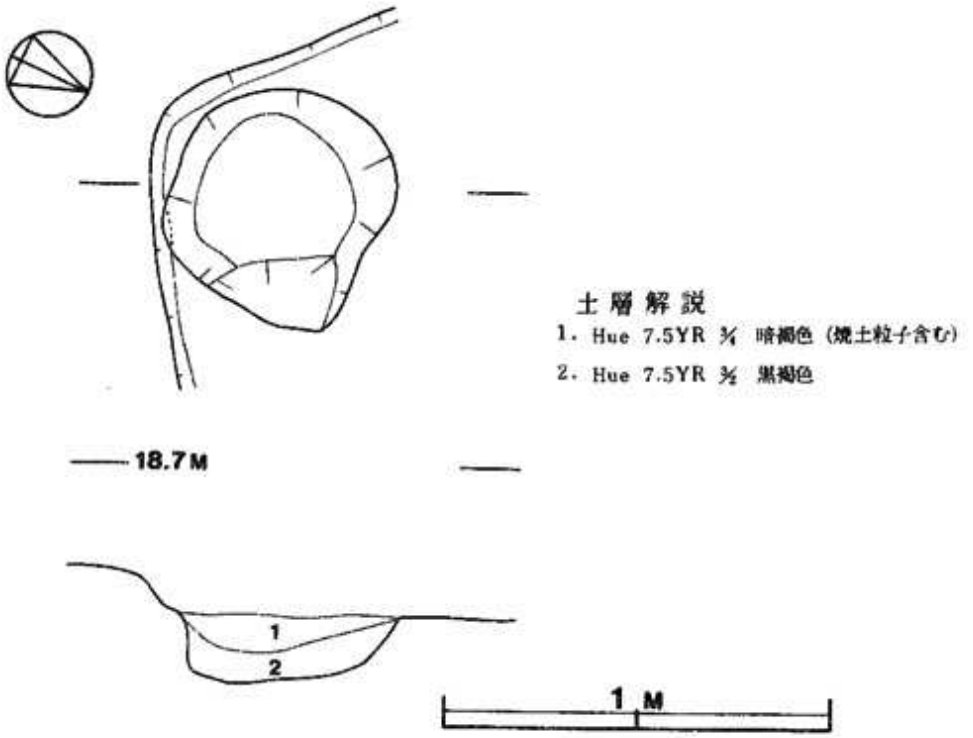
本住居址の覆土土層は，上層部に焼土粒子を多量に含む極暗褐色，暗褐色で，最下層は，褐色のロームが堆積し，堆積状態は，自然堆積を示している。



第9号　住居址土層解説

A—A'　1. Hue　7.5YR　2/3　極暗褐色（焼土多量含む）
2. Hue　7.5YR　3/3　暗褐色（焼土少量含む）
3. Hue　7.5YR　3/4　暗褐色
4. Hue　7.5YR　4/4　褐色
5. Hue　7.5YR　4/4　褐色
6. Hue　7.5YR　3/4　暗褐色
7. Hue　7.5YR　4/6　褐色

第40図　第　9　号　住　居　址　実　測　図



第41図　第９号住居址貯蔵穴

出土遺物は，覆土中より，縄文式土器片，床面付近からは，土師式土器片を少量検出した。

第10号住居址（第42図）

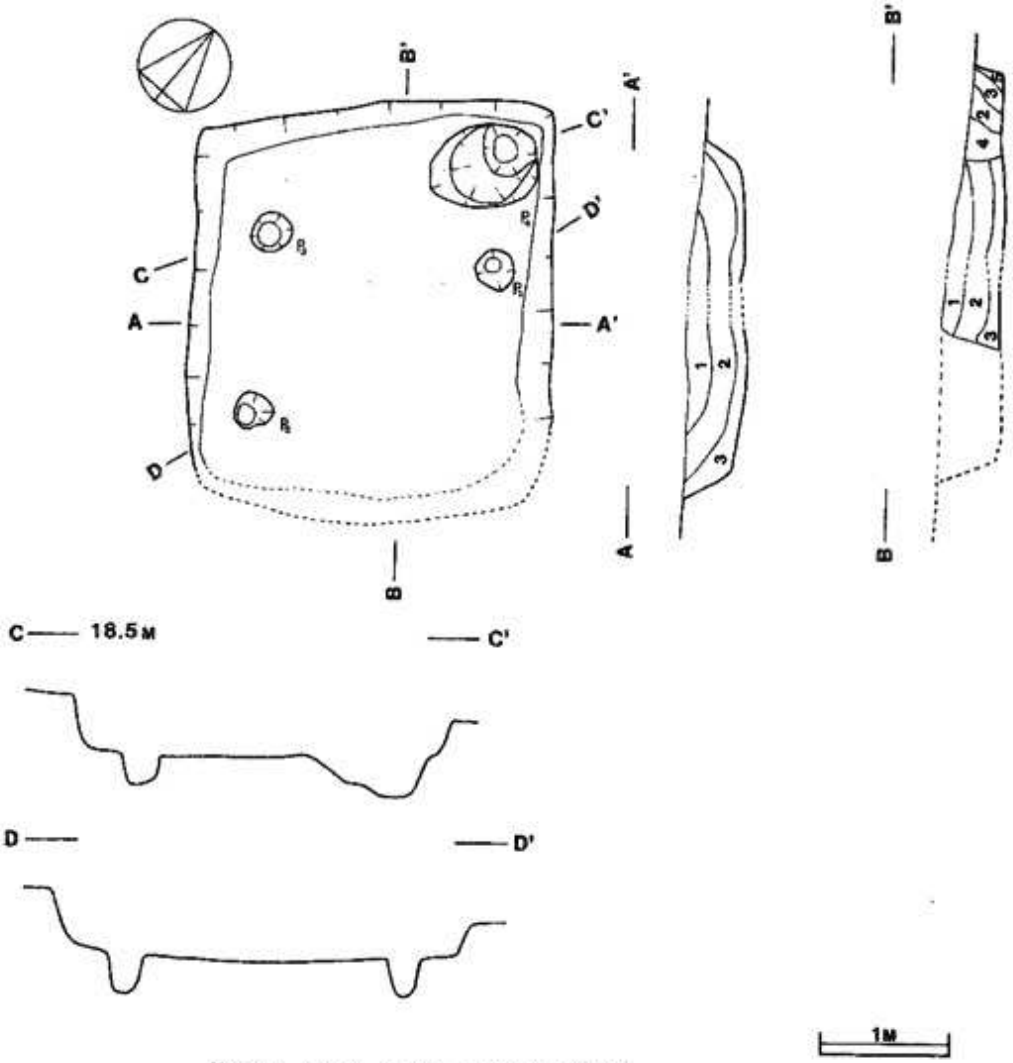
本住居址は，調査地区，Ｂ４ｊ３・Ｂ４ｊ４に確認され，第８号住居址より北西へ 8.5mのところに位置しており，南壁のところは新しい土壙と重複しており，南壁は不明である。

規模は，約長径3.1m，短径2.7mの隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向は，Ｎ－40°－Ｗである。

壁高は，北側に傾斜した場所に本住居址が構築されているため，遺構確認面より南側で，45cm北側で，25cmほどの深さで，外反しながら立ち上がっている。

床面は，ロームで平坦であり，全体的に柔かい。

本住居址には，炉址の施設がなく，また，床面上には，ピットが４個検出され，ピットの深さは，25～32cmを測り，いずれも上柱穴である。北東のコーナー部に有する土壙と，本住居址との関係は不明である。



第42図　第10号住居址実側図

第10号　住居址土層解説

1. Hue 7.5 YR 3/4 黒褐色
2. Hue 7.5 YR 3/3 極暗褐色
3. Hue 7.5 YR 4/4 褐　色
4. Hue 7.5 YR 3/4 極暗褐色
5. Hue 7.5 YR 3/4 暗褐色（ロームブロック多量含む，撹乱）

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	34	30	30	主柱穴	P 3	32	30	25	主柱穴
P 2	31	26	29	主柱穴	P 4	88	65	32	主柱穴

本住居址の覆土土層は，レンズ状の自然堆積の状態を示しており，第1層は，黒褐色で柔かく第2層は，極暗褐色の土が堆積している。

出土遺物は，覆土中より，土師式土器の細片が少量相検出された。

第12号住居址（第43図）

本住居址は，調査地区，Ｅ５ｈ８・Ｅ５ｈ９・Ｅ５ｉ８・Ｅ５ｉ９に確認され，第1号住居址の北西12.5mのところに位置している。

規模は，長径3.1m，短径2.71mの隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸方向は，Ｎ－38°－Ｅである。また，本住居址のほぼ中央部に長径50cm，短径30cmほどの不整楕円形の平面形を呈した焼土が検出されている。

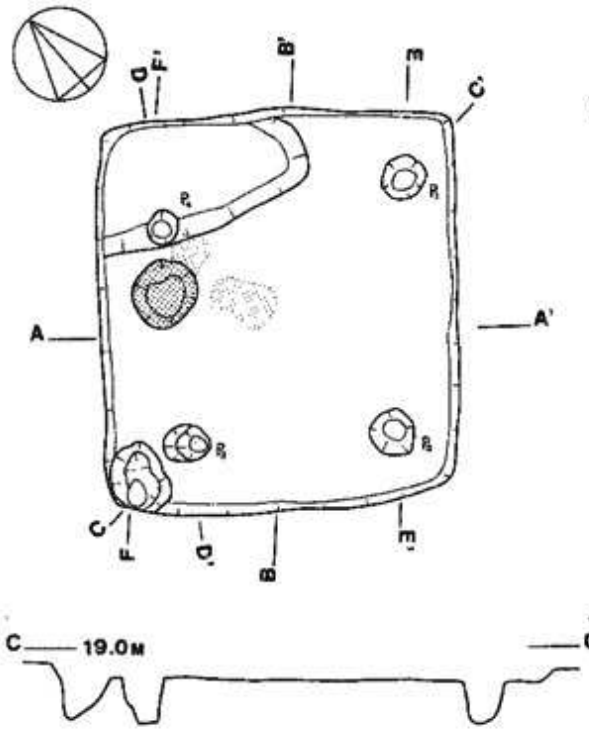
壁高は，５～10cm前後の深さで，外反しながらゆるやかに立ち上がっており，床面は，全体的に暗褐色の硬い土で覆われている。また，南西部のコーナーは，普通の場所より一段低くなっており，性格等については不明である。

炉址は，中央部より西側でピットに隣接した位置に有り，長径55cm，短径47cmの楕円形を呈しており，皿状に，10cmほど掘り込まれている。内部には，暗赤褐色のブロック状の土が土層に堆積しており，下層には，焼土粒子を含む褐色の土で覆われている。床面上には，深さ33～38cmほどのピットが4個検出され，いずれも本住居址の主柱穴である。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	35	34	35	主柱穴	P 3	37	29	38	主柱穴
P 2	37	35	35	主柱穴	P 4	28	24	34	主柱穴

貯蔵穴（第44図）は，第６・７・８・９号住居址と同じ方向のコーナー部に有り，規模は，長径55cm，短径45cmの楕円形状の平面形を呈しており，床面は平坦ではなく，コーナー部の直下の方が深く掘り込まれており，床面上までの高さは，33cmほどで，住居址内部の方へ外反しながら立ち上がり，中位に段を持ち，やや垂直ぎみに立ち上がる。内部は，焼土粒子を含む暗褐色，褐色の土が堆積している。

本住居址の覆土土層は，自然堆積を示しており，上層部で，黒褐色，極暗褐色，下層部は，焼土粒子を含む，暗褐色の土が堆積している。



第12号住居址土層解説

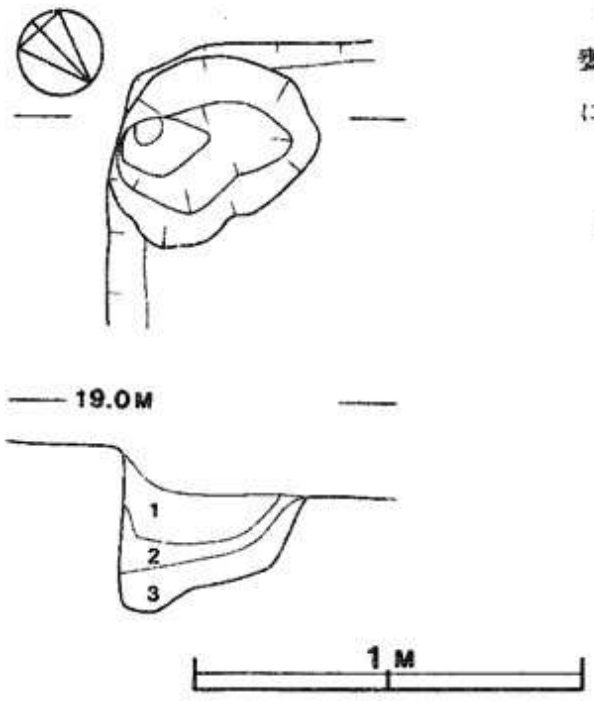
A—A′ 1. Hue7.5 YR 3/4 黒褐色
B—B′ 2. Hue7.5 YR 3/3 極暗褐色
3/4 (ローム粒子含む)
3. Hue7.5 YR 3/4 黒褐色
(ローム粒子・下層に含む)
4. Hue7.5 YR 3/4 暗褐色
(焼土粒子含む)

D—D′ 1. Hue2.5 YR 3/6 暗赤褐色
(堅いローム・ブロック状の焼土である。)
2. Hue7.5 YR 3/6 褐 色
(焼土粒子含む)
3. Hue7.5 YR 3/4 褐 色
(焼土粒子含む)

F—F′ 1. Hue7.5 YR 3/4 暗褐色
(焼土粒子中央部に有り)
2. Hue7.5 YR 3/4 褐 色
(ねばりがある)
3. Hue7.5 YR 3/6 褐 色
(ねばりが有り、焼土粒子含む)

1M

第43図 第 12 号 住 居 址 実 測 図



出土遺物は，北側の壁付近から，甕形土器，椀形土器，台付甕が多量に出土している。

土層解説

1. Hue 7.5YR 3/4 暗褐色（焼土粒子含む）
2. Hue 7.5YR 5/4 褐色（ねばりがある）
3. Hue 7.5YR 5/6 褐色（焼土粒子含む）

第44図　第12号住居址貯蔵穴

第13号住居址（第45図）

本住居址は，調査地区，E5d7・E5d8・E5e7・E5e8に確認され，第3号住居址の西側2.5mのところに位置している。

規模は，一辺5.15m，他の一辺は不明であり，ほぼ方形の平面形を呈しているものと思われる。主軸方向は，N−42.5°−Eである。

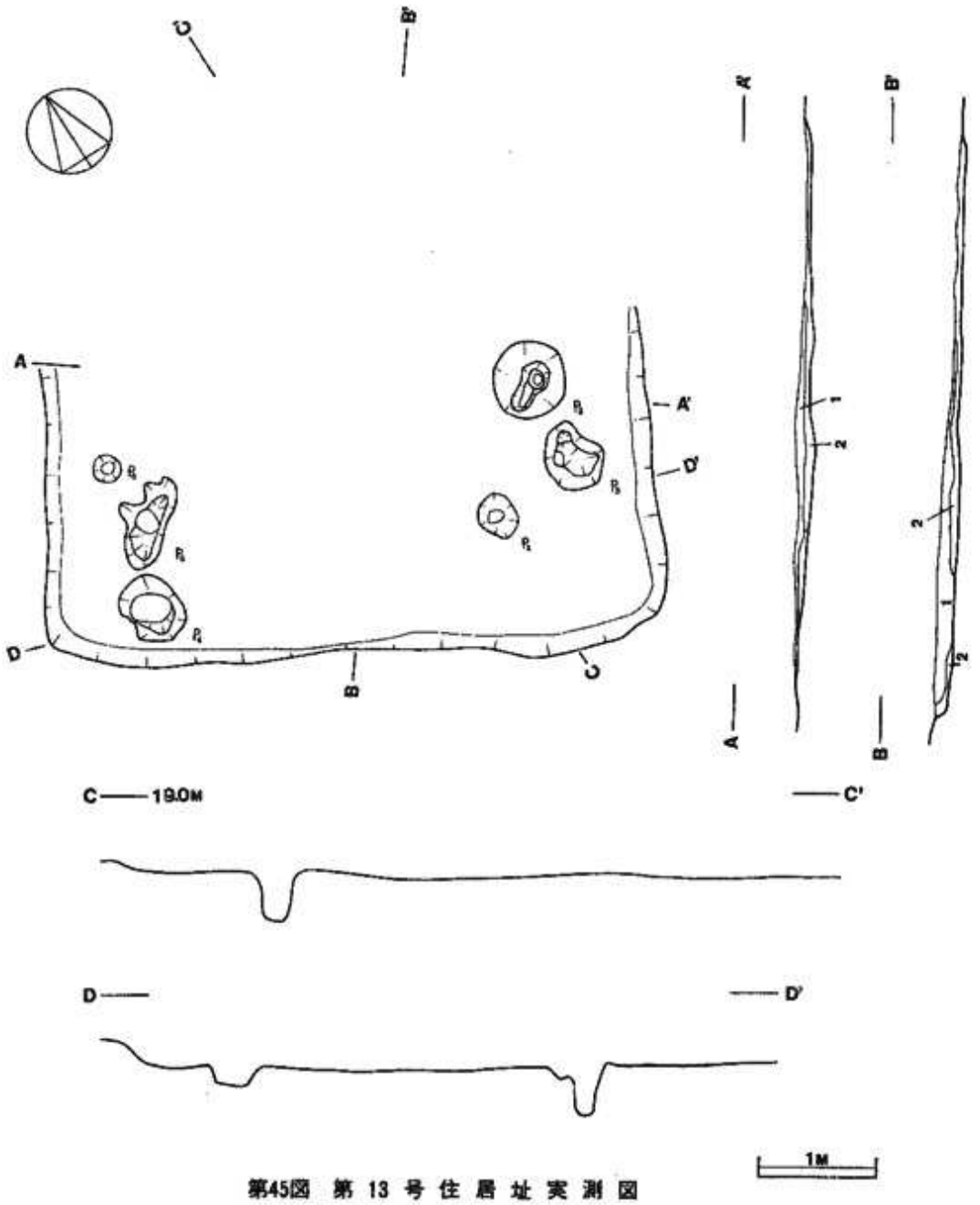
壁高は，南側で約15cmほどの深さで外反しながら立ち上がり，北側部は不明である。

床面は，ほぼ平坦で，褐色のロームに，暗褐色土が混じり合い柔かい土で覆われている。

炉址の施設はなく，床面上にピットが6個検出され，いずれも本住居址には関係のない，不明のピットであろうと思われる。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	40	30	41		P 4	60	46	19	
P 2	67	64	43		P 5	82	41	15	
P 3	60	50	24		P 6	25	23	15	

本住居址の覆土土層は，自然堆積の状態を呈しており，上層部には，少し柔かい極暗褐色，下



第45図　第 13 号 住 居 址 実 測 図

第13号　住居址土層解説

1. Hue 7.5YR　3/　極暗褐色（少し，やわらかい）

2. Hue 7.5YR　3/4　暗褐色

層部には，暗褐色土が堆積している。

出土遺物は，土師式土器片，陶器が，少量検出されている。

第14号住居址（第46図）

本住居址は，調査地区，Ｄ５ｃ２・Ｄ５ｃ３・Ｄ５ｄ２・Ｄ５ｄ３に確認され，第６号住居址第７号住居址の西側16ｍのところに位置している。

規模は，長径4.65ｍ，短径4.45ｍの隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸方向は，Ｎ－56.5°－Ｗである。

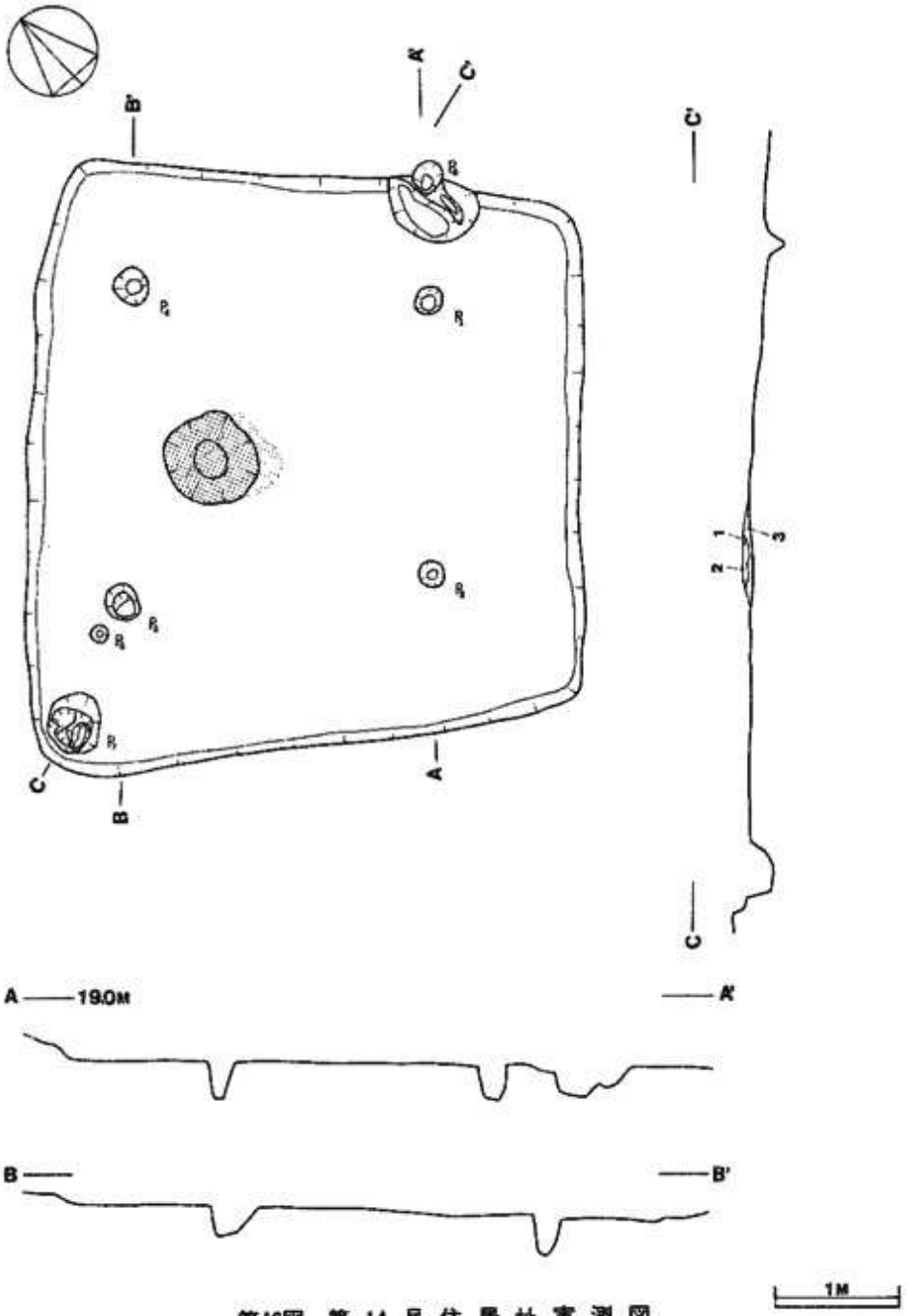
壁高は，15～20cm後前の深さで外反しながらゆるやかに立ち上がり，床面は平坦で柔かく，褐色のロームで覆われている。

炉址は，ほぼ中央部に位置しており，長径80cm，短径75cmの円形状の平面形を呈し，皿状に，6.5cmほど掘り込まれ，内部下層部には，焼土粒子を含む褐色の土で覆われ，炉床は，ロームの硬いブロック状の土である。

床面上には，ピットが７個検出され，Ｐ１～Ｐ４の深さは，25～35cmほどで，本住居址の主柱穴であろうと思われる。Ｐ６は，本住居址の壁と重複しており，本住居址と関係のない不明のピットであろうと思われる。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	24	22	30	主柱穴	Ｐ４	32	29	32	主柱穴
Ｐ２	23	22	35	主柱穴	Ｐ５	15	14	31	
Ｐ３	30	27	25	主柱穴	Ｐ６	28	22	20	

出土遺物は，土師式土器片が検出されている。



第46図　第 14 号 住 居 址 実 測 図

第14号　住居址炉址土層解説

1. Hue 5YR　½　赤褐色
2. Hue 7.5YR　½　褐色
3. Hue 7.5YR　⅝　褐色（焼土粒子を含む）

2 遺 物

(1) 住居址出土の遺物

第1号住居址

本址からの出土遺物は全体に散乱して検出され，出土量はあまり多くはなく，フレイク，縄文式土器，土師式土器の小型壺，高杯等が出土している。

土器（第49図－1～10）

1は床面直上より出土した甕形土器の口縁部の破片である。口縁部は頸部外面に直立した面をもち，直線的に外反して立ちあがり，口唇部は丸味をもっている。口径18cm，現高4.0cmである。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ，頸部の直下から縦位の刷毛目整形がなされている。器内面は口縁部で横位刷毛目整形後などが行われ，頸部に稜をもち，胴部はなで整形がなされている。

色調は外面が暗赤褐色，内面は明褐色を呈し，胎土中に石英，砂粒等を含み，焼成は普通である。

2は貯蔵穴西側床面から出土したほぼの椀形土器の破片である。口縁部は頸部外面に僅かな段をもち，緩やかに内湾して内傾する。口径14.8cm，現高5.1cmである。

器外面は横なで整形がなされ，器内面には僅かに輪積痕が見られ，整形は横なでである。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石，スコリア等を含み，焼成は良好である。

3は覆土中から出土した底部である。底径7.0cm，現高2.2cmであり，底部はほぼ平坦で，胴部は底部より大きくひろがる。

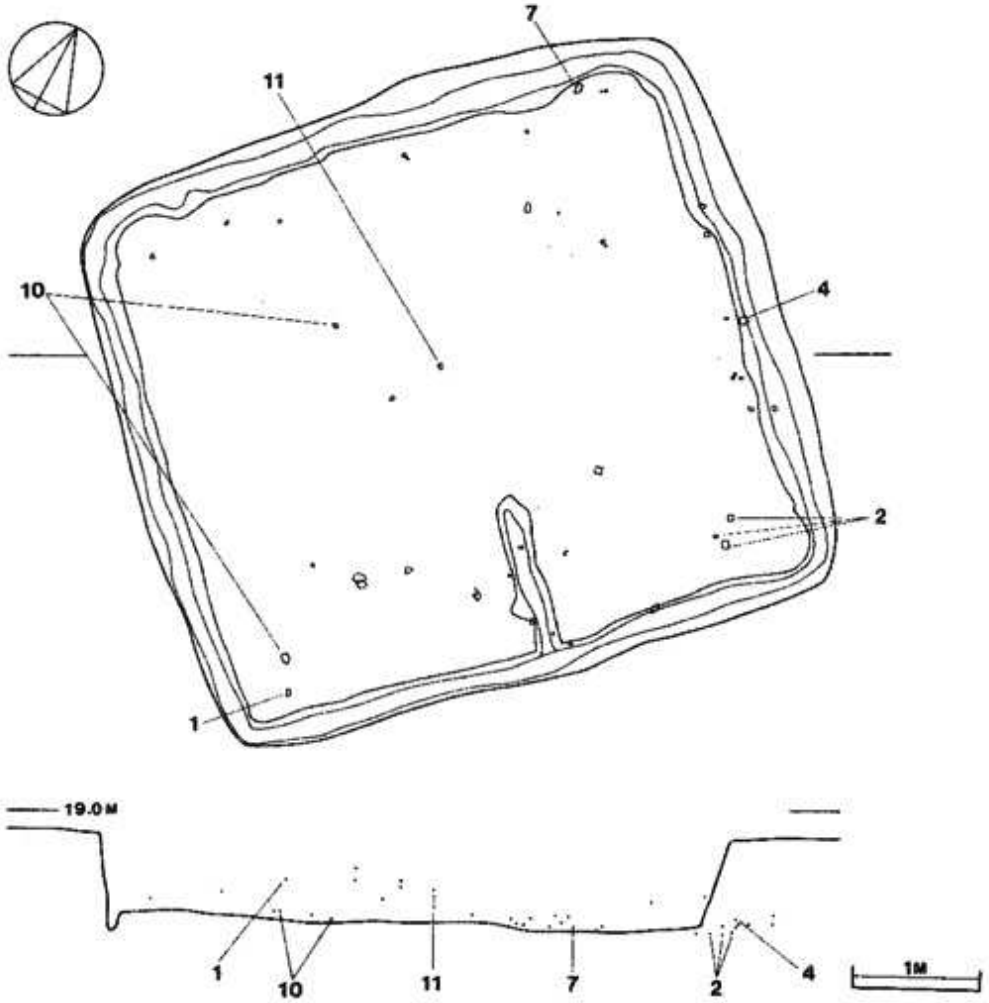
器外面は，胴部下端に僅かな斜位の刷毛目整形痕が認められ，器内面はなで整形が行われている。

色調は内部に黒斑部分が見られるが全体に明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は良好である。

4は3と同様に底部片で，北側の壁近くから出土し，底部に凹面を有し，胴部へ向って内彎ぎみに開く。底径4.8m，現高2.5cmを測る。

整形は器内外ともになで整形がなされ，色調は底部内外面とも黒色を呈し，その他はにぶい橙色である。胎土中に砂粒を微量含み，焼成は良好である。

5も3・4と同様に覆土中から出土した底部である。底面は平坦で，底部より大きく内彎ぎみに胴部へ立ちあがる。底径8.2cm，現高1.4cmを測る。



※3·5·6·8·9 は覆土中より出土する。

第47図　第１号住居址接合平面・垂直分布図

器外面は縦，斜位の刷毛目整形痕がみられ，内面はなでによる整形が行われている。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。

６は台付甕形土器の台部で，台部の底径は4.9cm，現高は2.1cmを測る。胴部は台部からやや内彎ぎみに立ちあがっているように思われる。

器外面は僅かに刷毛目整形痕がみられ，内面はなでによる整形が行われている。

色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。

７は高杯形土器の脚部と思われる土器片で，現高1.8cm，裾部径8.6cmを測る。脚部は内彎ぎみに大きく開き，端部で僅かに跳ねあがる。

脚部外面整形は縦位の篦研磨がなされ，内面は横なで整形がなされている。

色調は褐灰色を呈し，胎土中に砂粒，スコリア等を含み，焼成は良好である。

8は高杯形土器で，杯部の一部を欠損し，現存部は$\frac{1}{2}$ほどである。現高10.4cm，裾部径11.4cmで，杯部はやや内彎ぎみに口縁部に立ちあがり，脚部は大きく外反しながら裾部に至り，端部でやや跳ねあがる。また，脚部には直径0.85cmほどの孔が3ケ所にみられる。

器外面は杯部で刷毛目整形後なでによる整形が行われ，脚部では上→下へなで整形が認められる。器内面は脚部において刷毛目整形後，裾部がなでによる整形がなされている。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石，石英を含み，焼成は普通である。

9は高杯形土器の脚部で，僅かに外反しながら開き，少なくとも孔を1個以上有するもので，現高3.7cm，裾部径13.2cmを測る。

器内外ともになでによる整形が認められ，色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒を微量含み，焼成は良好である。

10は小型壺形土器で，口縁部は頸部で屈曲して直線的に立ちあがり，体部はやや大きく張り出し，中位上半に最大径を有する。口径11.6cm，器高7.4cm，底径4.0cm，胴部最大径10.4cmである。

器外面は口縁部から頸部にかけて刷毛目整形後，口辺部になでによる整形を加えている。胴部は全体に多方向からの箆状工具による整形がなされている。器内面には口縁部に横位の刷毛目整形痕が認められ，胴部はなでによる整形である。また，胴部から底部にかけて煤の付着が認められる。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石を微量含み，焼成は良好である。

覆土中からの縄文式土器（第65図－1～32）

土器分類はグリット出土遺物類に基づいて行う。

1は（第1群土器）の撚糸文系の土器である。

2・3は（第11群土器－1類）の結束1種の施文が配されている口縁部である。

4～7・9～12・15は（第11群土器－3類）の「S」字状結節回転文を有する口縁部である。

13は（第11群土器－4類－b）縦位結節回転文の間に無文帯を有している。

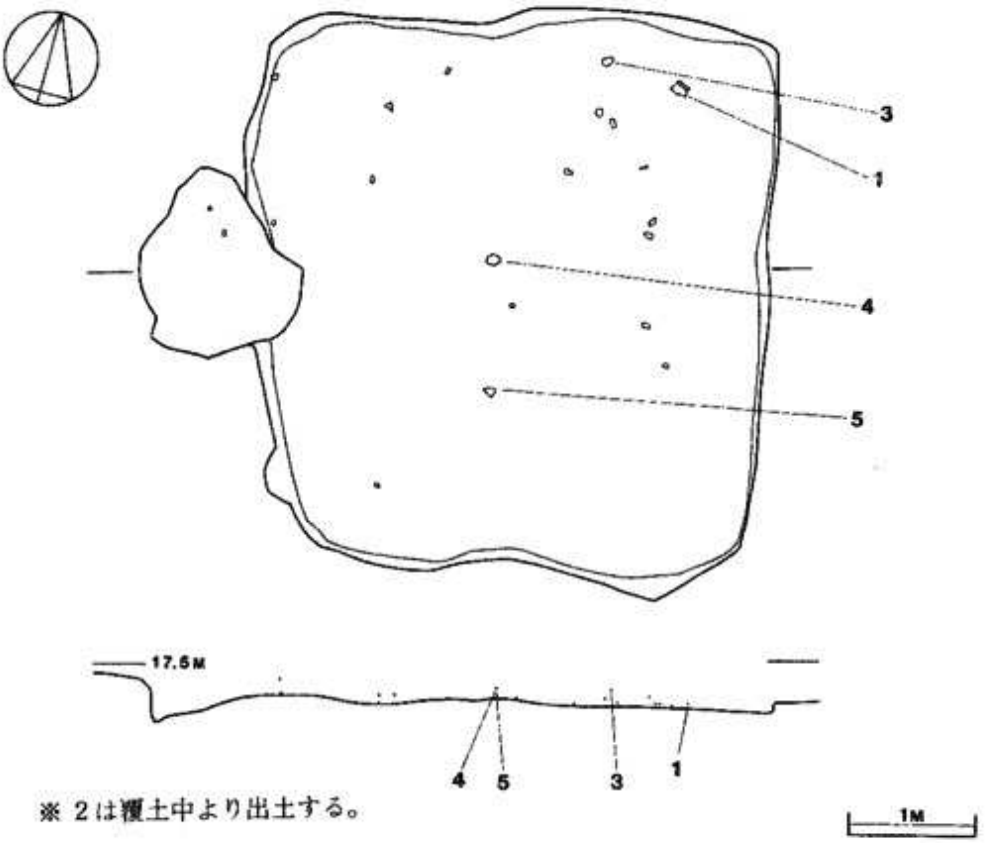
14・15・17～22は（第11群土器－2類）横位の結束1種を有している胴部片である。

16は（第11群土器－3類）附加状1種の縄文を地文にし，横位の「S」字状結節回転文が配されている。

27～32は縄文を有する土器であるが細片のため不明である。

石器（第49図）

1は本址覆土中から出土した剝片である。石質は黒曜石で，長さ3.1cm，最大幅1.5cmを測る。



※ 2は覆土中より出土する。

第48図　第2号住居址接合平面・垂直分布図

剝離は一定方向からなされ，部分的に使用痕らしき剝離がみられる。

第２号住居址

本址からの出土遺物は大部分が破片で，縄文式土器，土師式土器を北側から多く出土している。

土器（第49図）

１は甕形土器の口縁部である。口縁部は頸部で肥厚して外反した後，緩やかな外反を続け，口唇部に稜をもっている。胴部は頸部より緩やかに張り出している。

器外面は口辺部に刷毛目整形後，なでが行われ，斜位方向の未消失の刷目痕がみられる。口頸部下端には幅２cmほどの刷毛による縦，斜位方向の刷毛目が1.5cmほどみられ，胴部は刷毛目整形後なでが行われている。器内面は口辺部に横位の刷毛目整形痕が認められる。口径15cm，現高７cmを測る。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒を微量含み，焼成は良好である。

２は口縁部であり，頸部より外反ぎみに立ちあがり，上半で大きく外反する。口唇部には稜をもち，口径15cm，現高2.3cmを測る。

器外面には口辺部になでによる整形がみられ，頸部から胴部にかけて刷毛目整形痕が認められる。器内面には口縁部全体に横位の刷毛目整形が行われている。

色調はにぶい赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，スコリア等を含み，焼成は良好である。

３は高杯形土器の脚部で，裾部径14.4cm，現高4.1cmを測る。脚部は緩やかに外反し，端部でやや内彎し，底部は小さな面をもっている。

脚部外面は刷毛目整形後なでを行い，内面は横位の刷毛目整形痕が認められるが，裾部はなでによる整形である。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成は良好である。

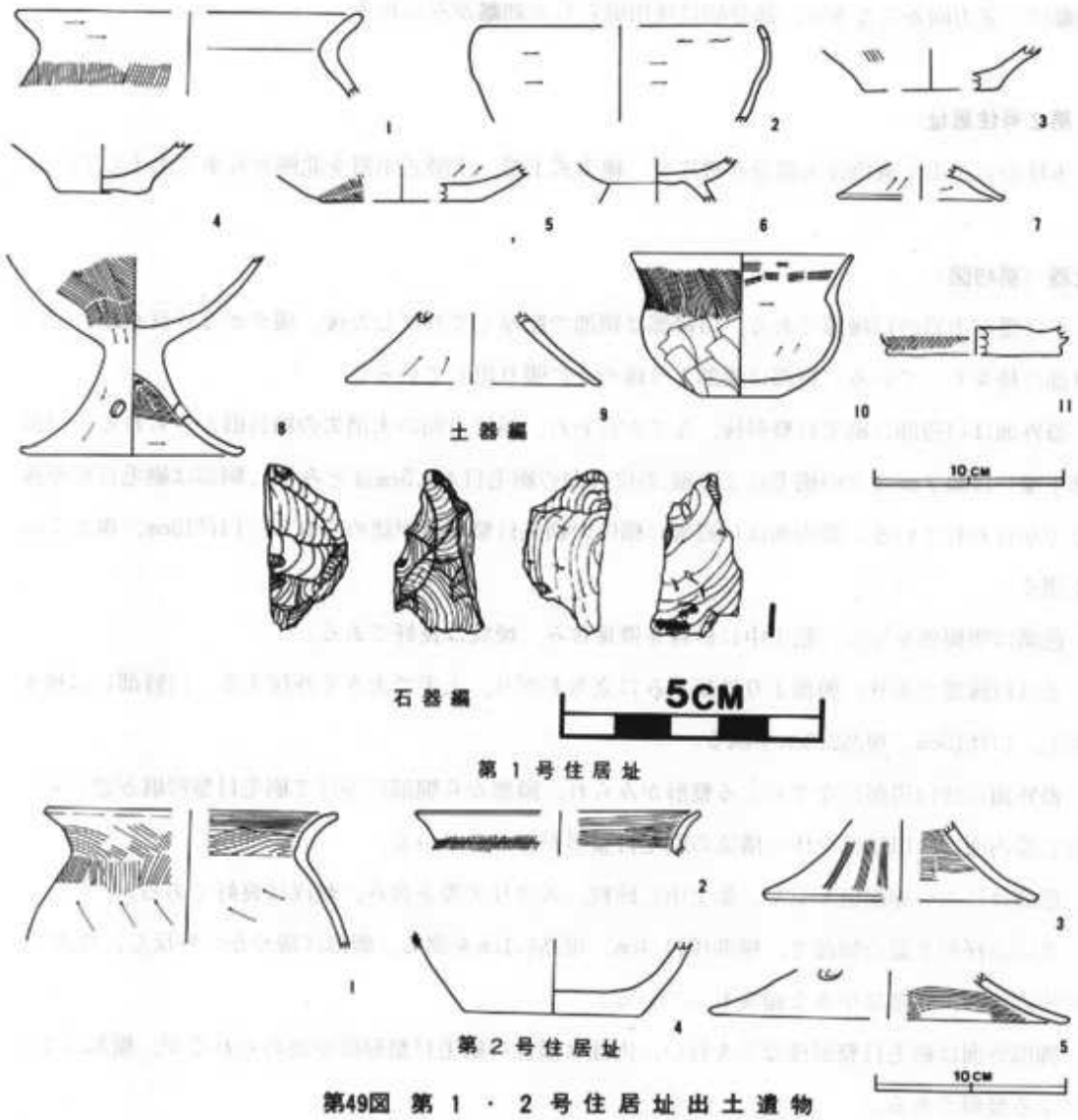
４は炉址の南側から出土した底部で，底径9.2cm，現高3.9cmを測る。底面は平坦で，胴下端は底部から内彎ぎみに外反してたちあがる。

器内外とも多方向からの篦なで整形がわれてい色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

５は３と同様な高杯形土器の脚部で，脚部は緩やかに外反し，裾部径18.8cm，現高 2.5cmを測る。また脚部には直径1.3cmほどの孔が少なくとも１個以上有している。

脚部外面は篦なで整形後，研磨が行われている。内面は横，斜位方向の刷毛目整形痕が認められる。

色調は外面が明赤褐色，内面はにぶい橙色を呈している胎土中には砂粒，石英を含み，焼成成



第49図　第1・2号住居址出土遺物

は良好である。

覆土中からの縄文式土器（第65図－33～42・第66図－1～15）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

33～35は（第9群土器－3類）沈線区画内に鋸歯状の沈線と刺突文を有する口縁部である。

36は（第16群土器－2類）微隆起線による区画を有する。

37は（第11群土器－1類）口縁部に結束1種による羽状縄文を有するもの。

39は（第14群土器）結節沈線文を有するもの。

40は（第13群土器）側面体圧痕文を有するもの。

41・42，第66図－1～18は（第11群土器－2類）結束1種と「S」字状回転結節文を有するもの。

第66図9は（第11群土器－3類）附加状1種を有するもの。

10は（第16群土器－2類）微隆起線による文様区画を有する。

14・15は（第9群土器－4類）粘土紐による貼り付け文を有する。

11～13は縄文を有する不明の土器である。

第3号住居址

本址からの出土遺物は，縄文式土器片，土師式土器片などが検出され，特に土師式土器には小型壺形土器，器台形土器など完形品が出土している。

土器（第51図）

1は覆土中から検出された壺形土器である。口縁部は頸部接合部からやや肥厚し，屈曲して外反し，次第に外反の度を強めて，外面に稜を持つ口唇部へ立ちあがる。口縁部中位外面に段を持つ，口唇部は丸味をおびている。胴部はやや強く張り出し，中位に最大径をもった後，安定性を欠く底部に至る。口径16cm，器高26.4cm，底径7.4cmを測る。

器外面は斜，横位方向の刷毛目整形がなされた後に口辺部と頸部下端に横なでがみられる。内面は口縁部に横位の刷毛目痕が認められ，胴部の肩部に指なで整形が行われている。

色調は部分的に黒斑をもち，全体は暗赤褐色を呈している。胎土中に砂粒・長石を含み，焼成は普通である。

2は底部から胴部にかけての破片で，現存部は$\frac{1}{3}$ほどである。胴部最大径は20cmを測りほぼ中位部に最大径をもっている。底部からやや直線的に内彎して立ちあがり，胴部に輪積痕がみられ底部は凹面を呈している。底径8cm，現高15.8cmを測る。

器外面は胴部下端部にかすかな斜位の刷毛目整形痕が認められ，内部は斜，横位の整形がなされており，胴部上位には横なで整形が行われている。

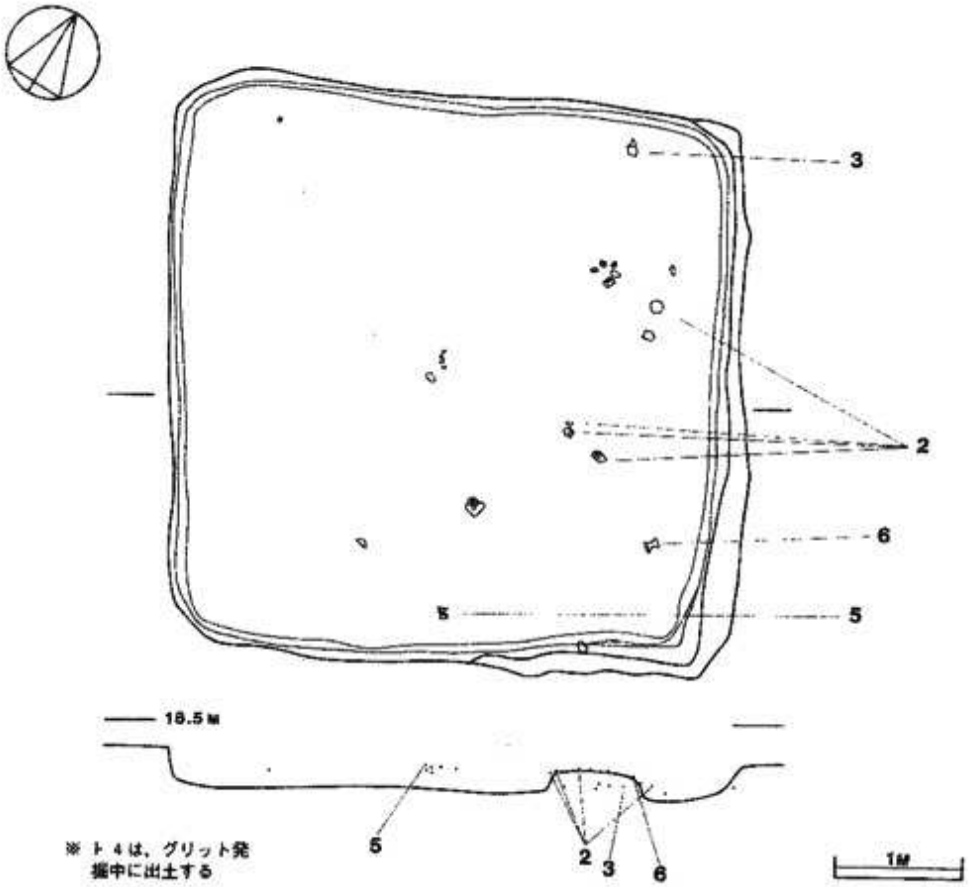
色調はにぶい褐色を呈し，胎土中に砂粒，スコリアを含み，焼成は普通である。

3は口縁部で，内彎ぎみに大きく外反し，口縁部は外面に影響をもたない折り返し口縁を呈しつている。口径24cm，現高6.2cmを測る。

器内外ともなで整形がなされており，焼成は良好で，胎土中に砂粒，長石等を含み，色調は橙色を呈している。

4は小型壺形土器の完形品である。口縁部は頸部から直線的に外反し，口唇部外面に稜を呈している。体部はわずかな肩を作り，中位よりやや下部に最大径をもった後，下半で強く内彎して底部に至っている。底部は平坦で，胴部のふくらみは左右対称でない。口径5.8cm，器高7.4cm，底径4.2cmを測る。

器外面は口縁部で横なで，胴部で刷毛目整形後，なでによる整形が行われている。内部はなで



第50図　第3号住居址接合平面・垂直分布

による整形である。

色調は胴部下位から底部にかけて黒色を呈し，その他は橙色をおび，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。

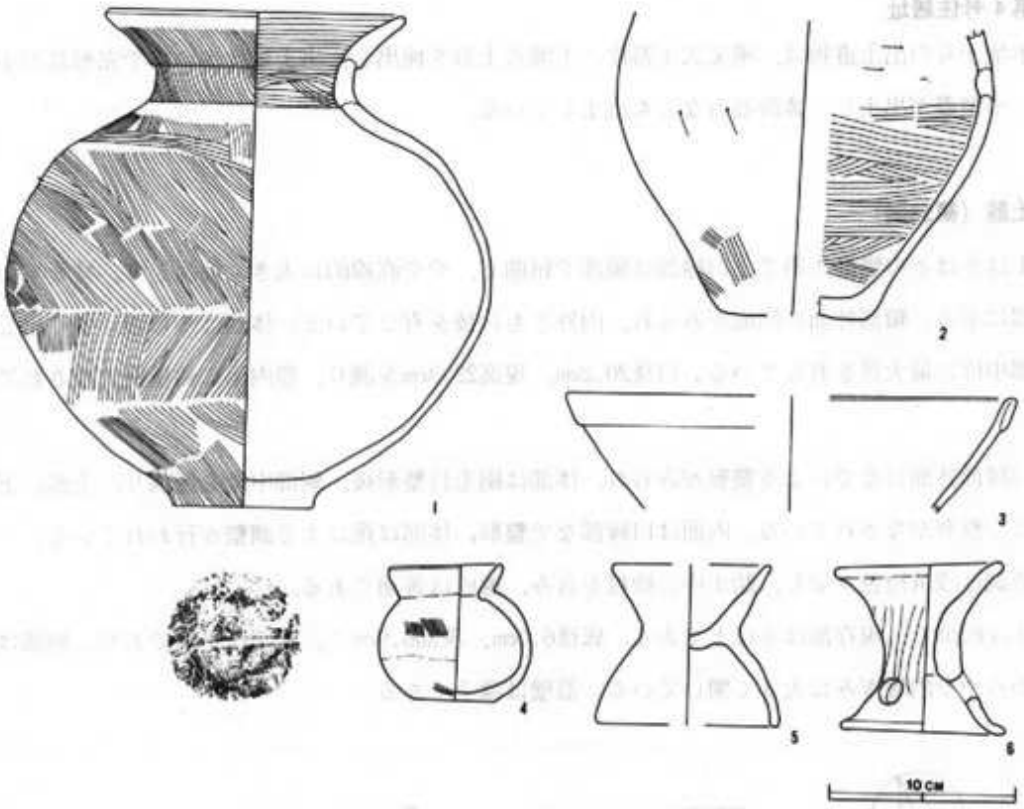
5は器台形土器で，器形は僅かな凹凸をもって頸部から直線的に外反し，口唇部に丸味がみられる。脚部は外へ張り出しながらやや内彎ぎみに開いている。口径8.4cm，器高8.6cm，脚部径9.5cmを測る。

器内外面とも粗雑な，なで整形を行い，特に接合部の内面には指頭痕が残されている。

色調は赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は普通である。

6は器台形土器の完形品で，器形は僅かな凹凸をもって緩やかに外反し，口唇部で大きく開く。脚部はやや内彎ぎみに開き，裾部で大きく開いている。口径8.7cm，器高9.2cm，脚部径8.5cmほどで，中央孔は直径1.2cmで貫通し，脚部には3孔を有し，直径1.2cmである。

器外面は口辺部に横なで整形がみられ，頸部から脚部にかけて縦位の丁寧磨きがなされている。



第51図　第 3 号住居址出土遺物

内面は横なで整形がみられ，脚部孔は外面から穿ったものである。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は良好である。

覆土中からの縄文式土器（第66図－16～32）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行なう。

16・18は（第 1 群土器）撚糸文系の土器である。

17・19・21は（第11群土器）に比定される土器と思われる。

20は細片のため不明である。

22は（第 4 群土器－ 3 類）繊維を含み縄文が施文されている。

第4号住居址

本址からの出土遺物は，縄文式土器片，土師式土器を検出し，出土量は多い方で完形品の小型甕，小型壺が出土し，装飾器台なども出土している。

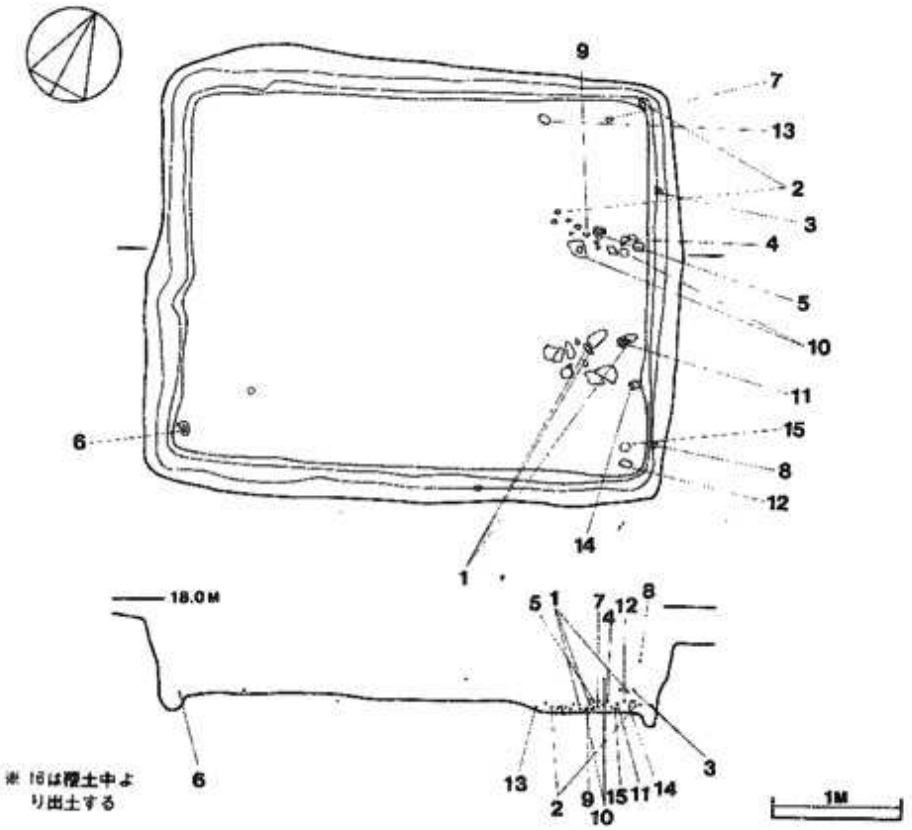
土器（第53図）

1は$\frac{2}{3}$ほどの甕形土器で，口縁部は頸部で屈曲し，やや直線的に大きく外反して，稜をもつ口唇部に至る。頸部外面に凹面がみられ，内外ともに稜を有している。体部はやや強く張り出し，胴部中位に最大径を有している。口径20.2cm，現高22.3cmを測り，器内面に輪積痕が残されている。

口縁部外面になでによる整形がみられ，体部は刷毛目整形後，胴部中位を箆削り，上部，下部になで整形がなされている。内面は口縁部なで整形，体部は箆による調整が行われている。

色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

2は底部で，現存部は$\frac{1}{6}$ほどである。底径6.0cm，現高6.9cmで，底部は平坦であり，胴部は底部からやや内彎ぎみに大きく開いている。器壁は薄手である。



第52図　第4号住居址接合平面・垂直分布

器外面には縦，斜位方向の刷毛目整形痕が部分的に認められ，胴部下端は縦位の刷毛目整形がなされている。器内面には篦調整がみられる。

色調はにぶい赤褐色を呈しており，焼成は普通で，胎土中に砂粒，長石を少量含んでいる。

3は2と同様な底部で，底部は中央部に凹面をもち，胴部は底部から内彎ぎみに大きく開いている。また，器外面に輪積痕が認められ，底径7.5cm，現高4.5cmを測る。

器外面には縦位の刷毛目整形がなされた後，篦による調整が実施され，部分的に未消失の刷毛目痕がある。器内部には胴部最下位に刷毛目整形が見られ，その他は篦による整形が行われている。

色調は器内面で，にぶい赤褐色，外面は赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成は普通である。

4は椀形土器片で，口縁部はやや内彎ぎみに立ちあがり，口唇部は丸味をおび，外面で稜を有している。口径13.7cm，現高5.5cmを測る。

器外面は口縁部は指による横なで整形がなされ，胴部は篦によるなで調整が行われている。

色調は外面で黒褐色を呈し，内面は橙色である。胎土中に砂粒等を含み，焼成は普通である。

5は椀形土器で，口径12cm，器高7.0cm，底径4cmを測り，現存部は$\frac{2}{3}$ほどである。口縁部は緩やかに内彎し，口唇部にてほぼ直立する。体部はやや薄手であり，僅かな内彎傾向をもって，直線的に厚部に至る。輪積痕が数ケ所に認められる。

器外面は口辺部において刷毛目整形後に，胴部と同じく篦による調整を行っている。器内面にも篦調整がみられる。

焼成は普通で，胎土中に砂粒，長石等を含むにぶい褐色を示している。

6は小型壺形土器で，口縁部は頸部からやや外反ぎみに開き，体部は頸部から僅かに張り出し，胴部上位に最大径をもち，内彎しながら平坦な底部に至っている。口径11.4cm，器高8.1cm，底径2.0cmを測る。

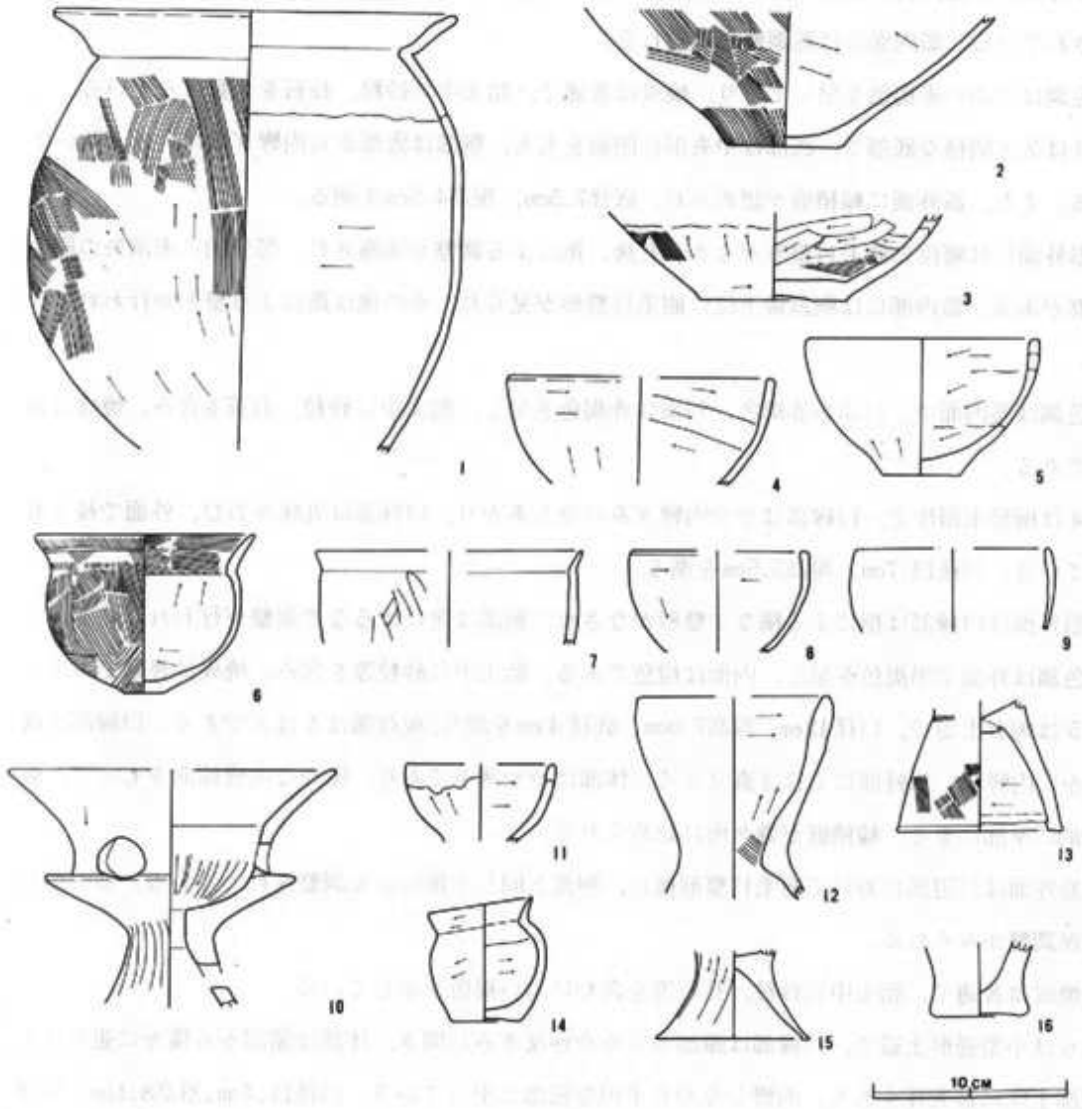
器外面は口辺部で斜位，頸部で縦位，体部で縦，斜位方向に刷毛目整形がなされており，器内面の口縁部には横位の刷毛目整形痕が認められ，体部は上位で指なで，中位から下位は篦なで整形がみられる。

色調は橙色を呈し，砂粒，長石，石英を微量含み，焼成は普通である。

7は小型鉢形土器の口縁部で，復口径13.6cm，現高4.8cmを測る。口縁部は頸部から短く直線的に外反し，体部はやや内彎ぎみに底部へ向っている。

器外面は口縁部で指によるなで整形を行い，体部は多方向からの篦削り調整を行っている。内面は指によるなで整形がみられる。

色調は赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英等を含み，焼成は普通である。



第53図　第４号住居址出土遺物

８は椀形土器で，口縁部に向って底部から内彎して立ちあがり，口唇部は平坦である。口径9.2cm，現高5.2cmを測り，全体に薄手の土器である。

器外面整形は口縁部指によるなで，胴部は篦によるなで整形が行われている。内面は横なで整形がみられる。

色調は外面が黒褐色を呈し，内面は橙色である。焼成は普通で，胎土中に砂粒，石英を含んでいる。

９は８と同様な椀形土器の口縁部で，やや薄手に作られ，口縁部はやや直立ぎみに内彎して立ちあがり，口唇部にて内傾する。口径10cm，現高4.2cmを測る。

器外面は全体に篦なで，内面は指によるなで整形が行われ，色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

10は装飾器台形土器で，現存部は$\frac{1}{2}$ほどである。杯部は受け部外面に装飾用の突帯をもち，杯部底面よりやや内彎ぎみに開いた後，幾分直立ぎみに立ちあがり，明瞭な稜をもった後，ふたたび外反しながら大きく開いている。脚部は接合部の突帯より頸部のところで大きく「く」字状に外反して裾部に至る。また，杯部と脚部にそれぞれ3つの孔を有し，いずれも一直線上に列んでいる。口径16.7cm，現高12cmを測る。

器外面は突帯部と，突帯より上部の杯部が指なで整形が行われ，その他は全面に篦研磨が行われている。器内面は杯部口縁部で刷毛目整形後，篦研磨がなされ，部分的に刷毛目痕が残されている。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

11は現存部$\frac{1}{2}$ほどの椀形土器で，口縁部は緩やかに内彎しながら外反し，口辺部からやや直立ぎみに立ちあがる。口唇部は丸味をおびている。体部は内彎し，底部附近はやや薄手になる。口径7.7cm，現高4.0cmを測る。

器外面は篦なで整形がみられ，器内面は横なで整形が行われている。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

12は口径10cm，現高10.4cmを測る坩形土器で，口縁部は頸部より直線的に外反しながら立ちあがり，やや直立ぎみに口唇部に至る。体部は頸部より薄くなり，大きく開く。

器内外面とも多方向からのなでによる整形が行われ，内部口辺部は横なでによる整形である。

胎土中に砂粒，石英等を含み，焼成普通でにぶい赤褐色を呈している。

13は台付甕の台部で，台は緩やかに内彎しながら端部に至り，端部は平坦である。現高6.9cm，台径8.5cmを測る。

整形は器外面で，刷毛目整形後篦なでが行われている。器内面は篦状工具による横なで整形がみられる。

色調は明赤褐色を呈し，焼成普通にして，胎土中に砂粒を含んでいる。

14は口径5.3cm，器高6.4cm，底径3.4cmを測る完形品の小型甕形土器である。器高の差が0.9cmほどあり,口縁部は頸部より1.3cmほど外反して開き，尖った口唇部に至る。体部は頸部もり大きく張り出し，胴部上位に最大径をもち，内彎しながら除々に厚くなり，凹面をもつ底部に至る。

整形は器内外ともに横なでによる整形が行われている。色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は良好である。

15は13と同様に台付甕形土器の台部で，現高4.5cm，台部径8.0cmを測る。台部はやや直線的に外反して開いている。

整形は器外面を箆削り，器内面を指なで整形を行なっている。色調は褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成は良好である。

覆土中からの縄文式土器（第66図－23～32）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

23・27・31は（第15群土器）加曽利E（新式）に比定されるもの。

24～26は（第11群土器）中期初頭の土器と思われるもの。

32は（第16群土器－2類）微隆起線による区画を有するもの。

30は細片のため不明である。

第5号住居址

本址からの出土遺物は，覆土中より縄文式土器，東側床面上より土師土式器が集中して検出されており，その他，石製品（石皿）土製品（土玉）等も出土している。

土器（第55図）

1は口径13.4cm，現高16.8cm，胴部最大径17cmを測る甕形土器である。口縁部は体部より肥厚し，頸部より直線的に外反し，口唇部で大きく開く。体部は頸部よりやや強く張り出し，胴部中位に最大径をもち，内彎しながら底部へ向う。

器外面は刷毛目整形後，箆研磨が行われ，部分的に刷毛目痕が残されている。口縁部は横なで整形である。器内面は口縁部に横位の刷毛整形痕がみられ，胴部は横なでが行われている。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

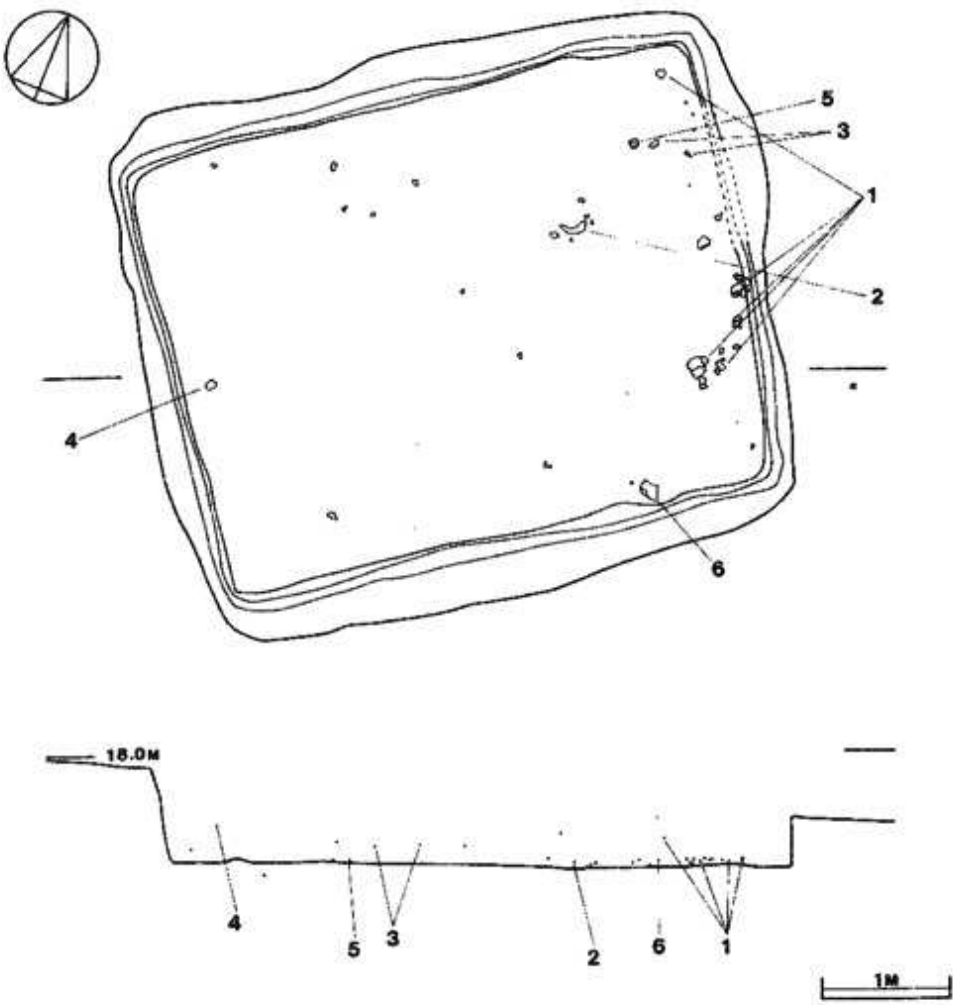
2は1と同様な甕形で，口縁部は頸部より器壁を肥厚し，やや外反ぎみに立ちあがり，口辺部から外反が大きくなり，器壁は薄くなる。口唇部でやや内傾をする。体部は頸部より大きく張り出している。この土器は胴部中位の最大径が人為的に加工が行われており，何か別な用途に使用されたものではないかと思われる。口径14.7cm，現高11.2cmを測る。

器内外ともに口縁部は横なで整形がなされ，体部は外面で箆研磨，内面で指によるなで整形が見られる。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

3は口径13.4cm，現高3.5cmを測る口縁部で，口縁部は頸部から緩やかに外反して立ちあがり，口辺部附近から外反が大きくなり，丸味をおびた口唇部に至る。

器内外ともなで整形が行われ，色調は黒褐色を呈し，焼成は普通で，胎土中に砂粒，スコリアを含んでいる。



第54図　第5号住居址接合平面・垂直分布図

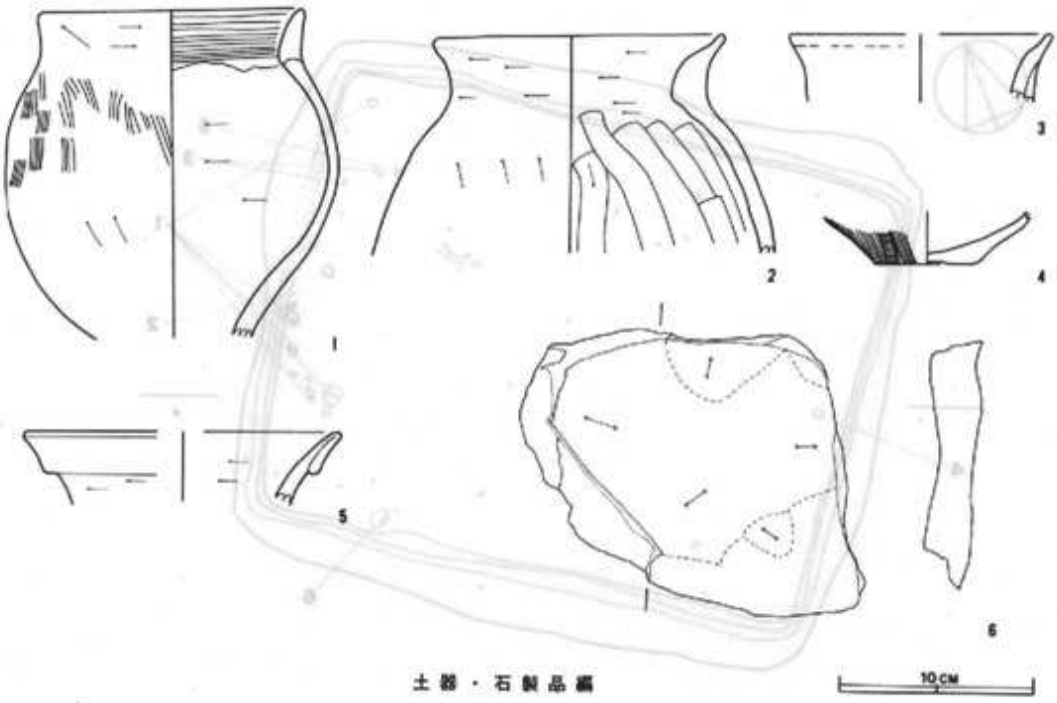
4は底径5.5cm，現高2.4cmを測る底部で，底面は中央部にやや凹みをもち，胴部は底部からやや直線的に大きく開いて立ちあがる。

器外面は全体に刷毛目整形痕が認められ，器内面にはなで整形が行われている。

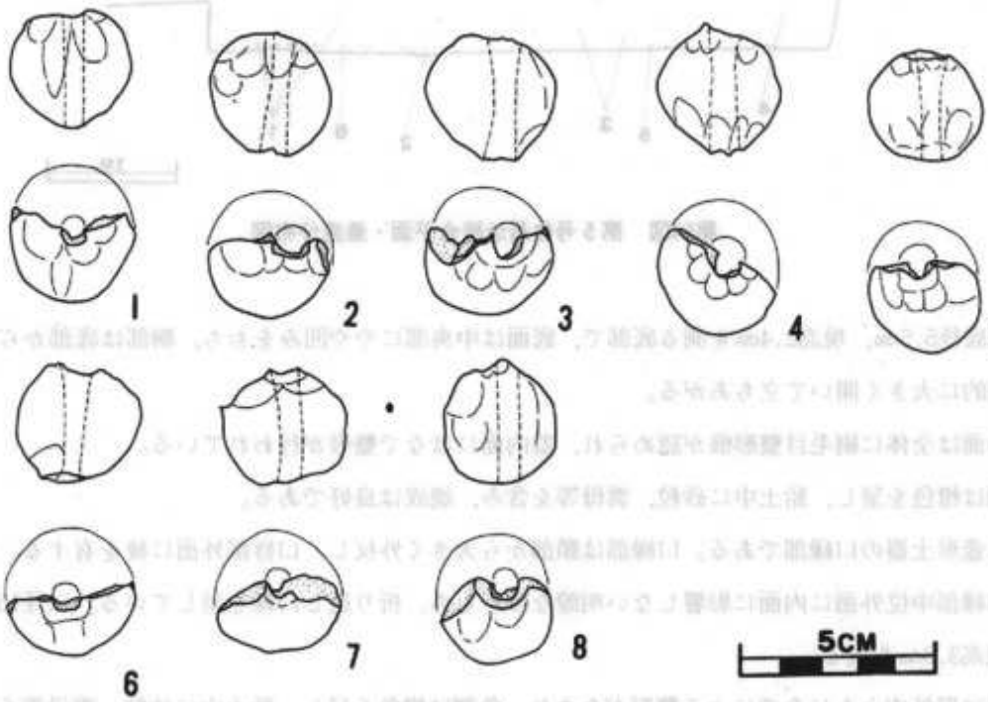
色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は良好である。

5は壺形土器の口縁部である。口縁部は頸部から大きく外反し，口脚部外面に稜を有する。また，口縁部中位外面に内面に影響しない明瞭な段をもち，折り返し口縁を呈している。口径16.2cm，現高3.8cmを測る。

整形は器外内ともになでによる整形がなされ，色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は普通である。



土器・石製品編



土玉編

第55図　第５号住居址出土遺物

覆土中からの縄文式土器（第67図－1～39）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

1は（第4群土器－4類）胎土に繊維を含み，正反の合を有するもの。

2・3は（第11群土器－1類）口辺部に結束1種と刺突文を有するもので，同一個体と思われる。

4～23は（第10群土器）縄文を地文とし，半截竹管による平行沈線文が配されており，同一個体と思われる。

24～30は（第11群土器－2類）横位の「S」字状回転結節文と結束第1種の羽状縄文が見られる。

35は（第1群土器）撚糸文系の土器である。

31～34・36～39は縄文の文様を有しているものの細片のため不明である。

石製品（第55図－6）

本址の西壁附近から出土した石皿である。石質は砂岩で，表面は全体に使用され側縁から中央部へ除々に凹みが大きくなる。裏面には2ケ所ほど凹みが認められるが，その他は平坦である。最大厚が2.5cm，最小厚1.8cmを測る。

土製品（第55図－1～8）

本址からは土玉を8個検出したがいずれも破損品である。1・3・4・6は東壁のやや北側床面上より少し浮いた状態で出土し，長さは3.0cm，径3.1cm，重さは14～19gを測る。中央孔は直径0.5～0.7cmほどで指による整形が行われている。3・8は貯蔵穴表面から出土し，長さ3.0cm，径3.2cmほどで，重さは14gである。2・5は炉址の上から検出され，長さ2.7～3.0cm，径2.9～3.2cmほどで中央孔は直径0.7cmほどである。

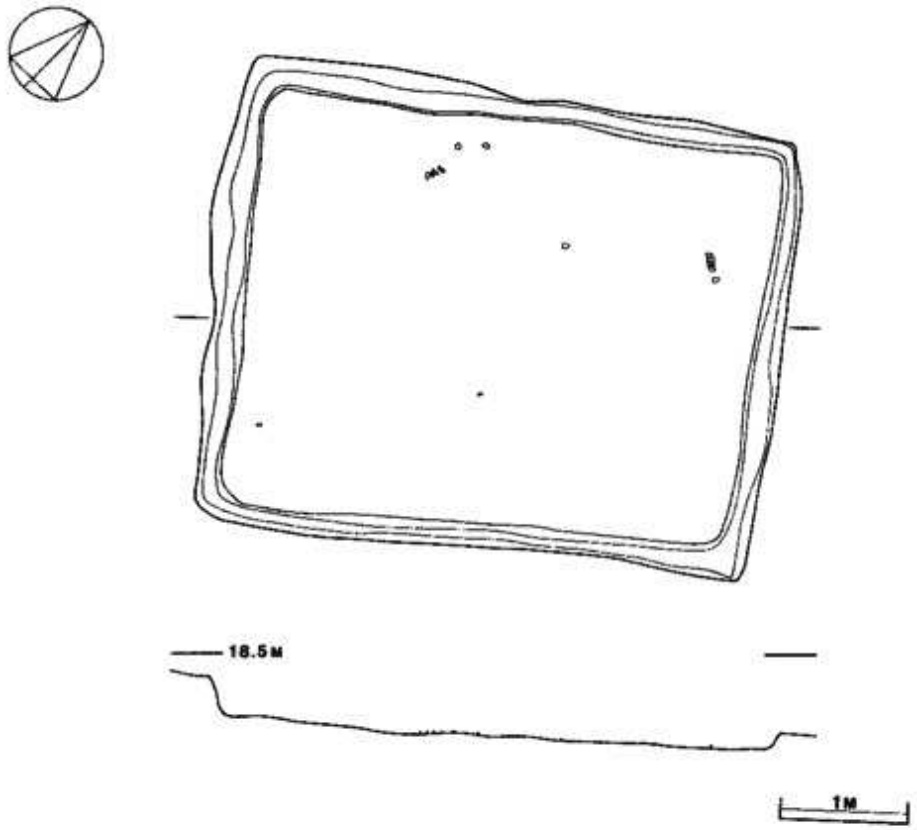
色調は全体ににぶい橙色，たぶい褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英，スコリア等を含み，焼成は普通である。

第6号住居址

本址からの出土遺物は，縄文式土器と土師式土器が微量出土している。土師式土器は炉址の北側から多くは出土し，大部分が細片のため実測不可能であった。

土師式土器の中に甕形土器と思われる口縁部が1片出土し，頸部から胴部上半にかけて刷毛目整形が行われている。その他の土師式土器は全部胴部破片であり，刷毛目整形痕がみられるもの5片，箆状工具によるなで整形がなされているもの3片であった。

色調は大部分が暗赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石等を含み，焼成は普通である。



第56図　第6号住居址接合平面・垂直分布

覆土中からの縄文式土器（第68図－1～3）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

1・2は（第16群土器－1類）広義の磨消縄文を有するもの。

3は縄文の文様が見られるが不明の土器である。

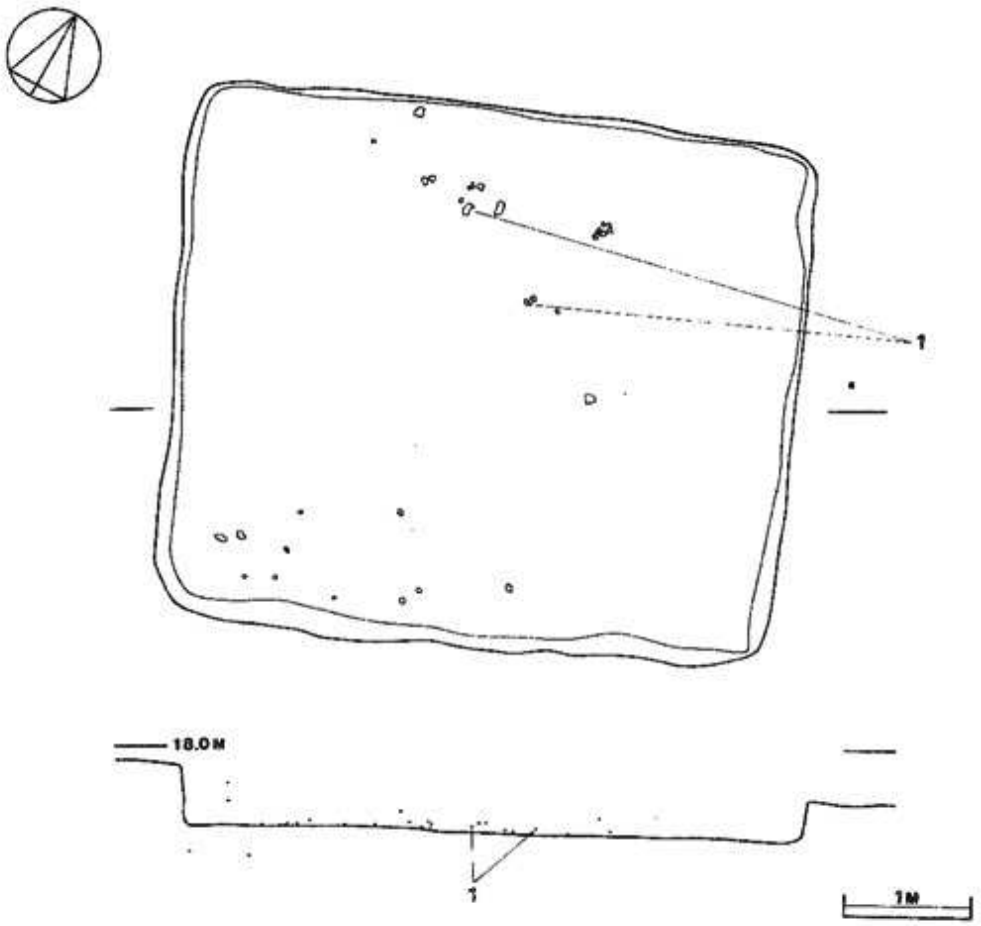
第7号住居址

本址からは縄文式土器，土師式土器がごく少量検出されている。また，2個の土製品が完形品のまま出土した。

土器（第58図）

1は高杯形土器の脚部で，裾部は僅かな膨らみをもつ柱部からゆるやかに大きく外反し，端部は水平である。脚部径12cm，現高9.5cmを測る。

器外面は篦研磨がなされ，器内面は刷毛目整形後，なでによる整形が行われている。部分的に刷毛目整形痕が残されている。



第57図　第7号住居址接合平面・垂直分布

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は普通である。

覆土中からの縄文式土器（第68図－4）

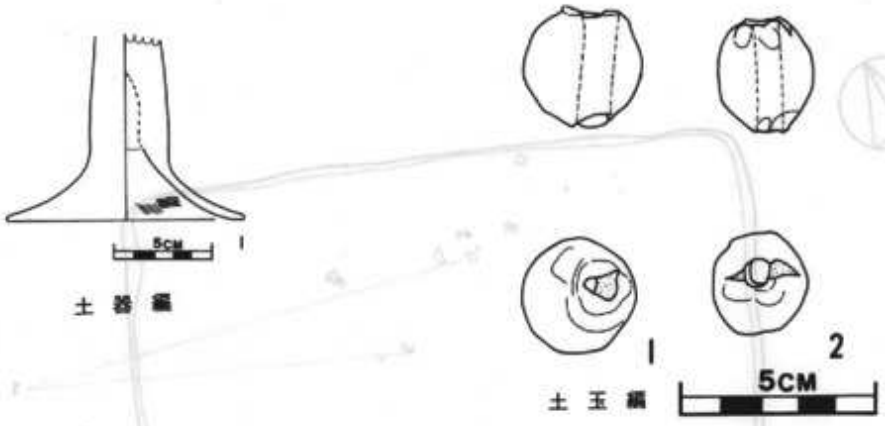
分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

4は（第4群土器－5類）胎土中に繊維を含む。

土製品（第58図）

本址から出土した土玉は2個で，いずれも完形品である。1は中央部覆土中から検出されたもので，長さ2.9cm，径3cm，重さは21gで，中央孔は不整円形を呈し，指によるなで整形がなされ，部分的に指頭痕がみられる。2は貯蔵穴のやや東側床面上より出土し，長さ2.9cm，径2.5cm，重さ16gである。中央孔は0.7cmを測り，整形はなでによって行われている。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，スユリア等を含み，焼成は普通である。



第58図　第７号住居址出土遺物

第８号住居址

本址からの遺物の出土状態は，北側の壁附近に集中してみられ，遺物は覆土中より縄文式土器片の出土量が多くみられ，床面上よりは土師式土器片が多く検出されている。また，土製品も出土した。

土器（第60図）

１は北側壁直下から一括して検出された甕形土器で，口径18.9cm，器高27.3cm，底径 5.2cmを測り，やや不安定である。口縁部は頸部で急に肥厚した後，やや直線的に外反して立ちあがり，口唇部でやや大きくなる。体部は頸部より薄くなり，やや強く張り出し，胴部中位に最大径をもった後，平坦な底部へ内彎しながら至る。また，器内面に多数の輪積痕が認められる。

器外面は口縁部で斜位の刷毛目整形がなされ，体部上位は刷毛目整形が行われ，部分的に刷毛目痕が認められる。下端は篦削りがみられる。器内面は口縁部から頸部にかけて横，斜位の刷毛目整形が行われ，体部は篦削りである。

色調はにぶい褐色を呈し，胎土中に砂粒を多量含み，焼成は普通である。

２は胴部から底部にかけての甕形土器片で，底径5.9cm，現高15.9cm，胴部最大径20cmを測る。体部は頸部からやや強く張り出し，中位上半に最大径をもち，平坦な底部へ内彎しながら至る。

器外面は刷毛目整形後，なで整形が行われている。内面は全体になでによる整形である。

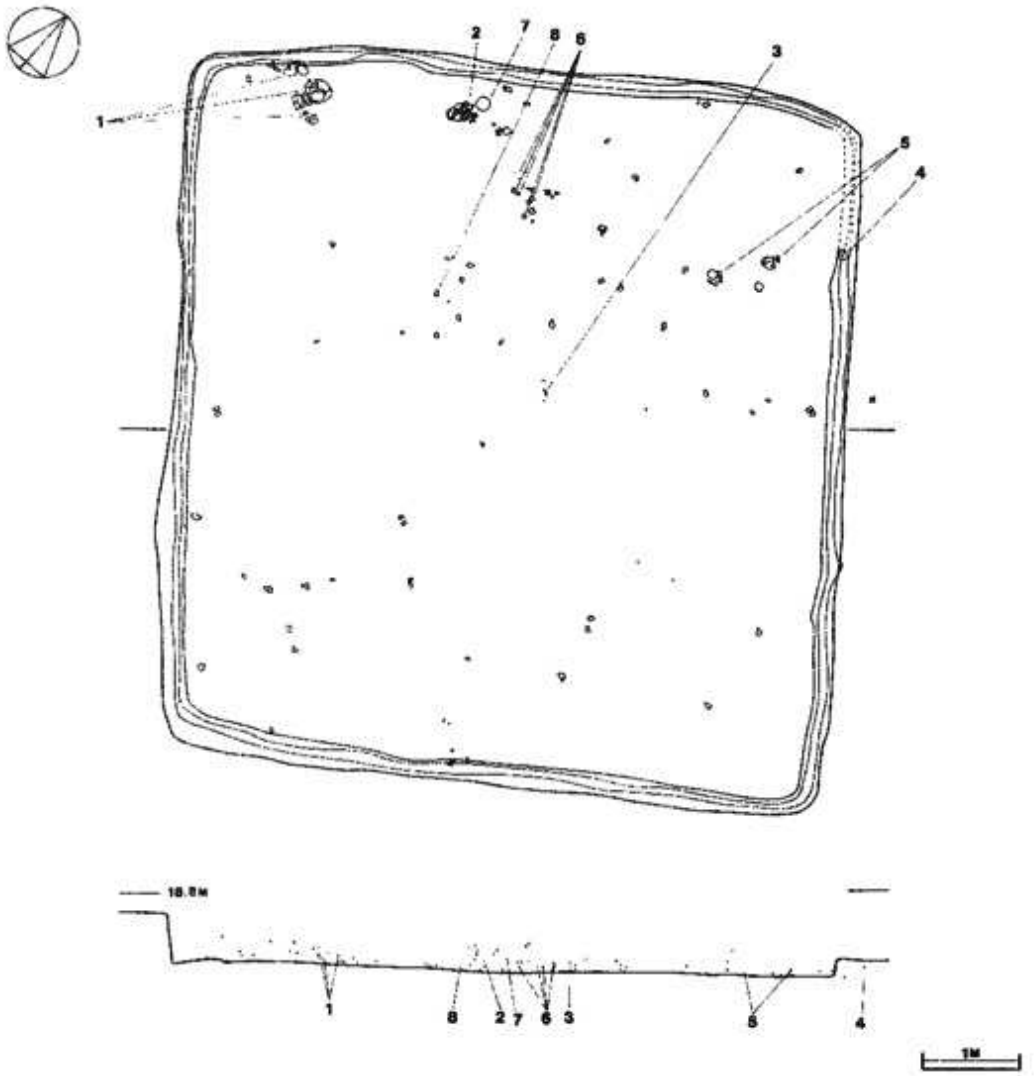
色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成はやや不良である。

３は底径6.4cm，現高2.5cmを測る底部で，底部は中央部でやや凹みを有し，胴部は底部より器壁を薄くして，やや外反ぎみに大きく開いて立ちあがる。

器外面はなでによる整形，内面は篦によるなでが行われている。

色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は普通である。

４は小型壺形土器の底部で，底径3.4cm，現高4.3cmを測る。底部は平担で，胴部は底部より直



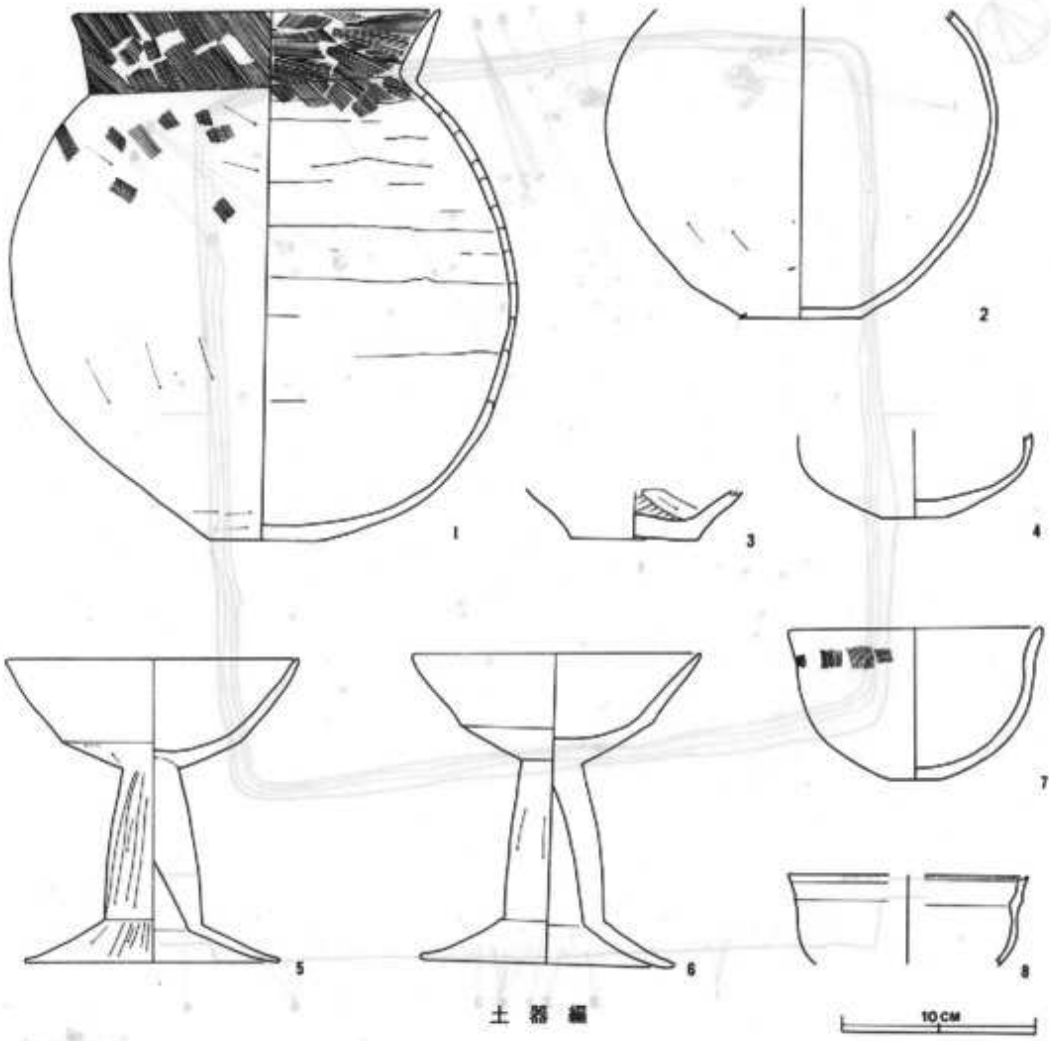
第59図　第8号住居址複合平面・垂直分布図

線的にやや内彎しながら大きく開き，胴部中位に最大径を有する。

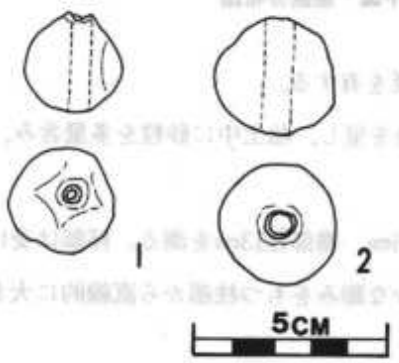
器内外ともなでによる整形がみられ，色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒を多量含み，焼成は良好である。

5はほぼ完形の高杯形土器で，口径15.1cm，器高15.6cm，裾部径13cmを測る。杯部は受け部外面に稜をもち，やや内彎ぎみに立ちあがる。裾部は僅かな膨みをもつ柱部から直線的に大きく外反する。

器外面は杯部でなでの後，研磨，下部はコテ研磨，箆削りによる整形が行われている。柱部から裾部にかけて下方向へ箆削りがみられ，裾部は横なで整形である。器内面は杯部でなでの後，研磨が行われている。



土 器 編



土 玉 編

第60図 第 8 号 住 居 址 出 土 遺 物

色調はにぶい橙色，胎土中に砂粒，スコリアを含み，焼成は良好である。

6は5とほぼ同型の高杯形土器で，口径14.9cm，器高16.2cm，裾部径13.1cmを測る。杯部は受け部外面に稜をもち，緩やかに内彎して開く，裾部は僅かな膨みをもつ柱部から外反ぎみに大きく開いている。また，柱部と裾部の接合部に凹面がみられる。

整形は杯部でなでの後，研磨。脚部，裾部は箆削りの後，研磨がなされている。内面は杯部でなでの後，研磨。裾部はなでによる整形がなされている。

色調はにぶい橙色を呈し，焼成は良好であり，胎土中に砂粒，雲母を含んでいる。

7は完形品の鉢形土器で，口径13.3cm，器高7.8cm，底径2.4cmを測る。口縁部は頸部で緩やかに外反して開き，体部は頸部より少し垂下した後，平坦な底部へ内彎しながら至る。

整形は器外面で，刷毛目整形後，全体になで整形がなされ，頸部に一部整形痕が認められる。内面は全体になでによる整形がなされている。

色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母を含み，焼成は普通である。

8は口径16.2cm，現高4.6cmの鉢形土器の口縁部で，胴部最大径よりやや垂直ぎみに立ちあがり，頸部でややくびれた後，外面に稜を有して，小さく外反して開く，口脣部は内面で一段底くなる。

器外面は箆なで整形が行われ，内面は研磨がなされている。色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は良好である。

覆土中からの縄文式土器（第68図－5～10・第69図－1～18）

土器分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

8は（第6群土器－1類）口辺部に縦位の半截竹管による平行沈線がみられ，さらに下部には粘土帯を附加し，箆状工具による押圧がみられる。

5・7・9・10，第69図－1～8は（第5群土器）数条の直線的な櫛目状文を横，縦位あるいは格子状に施文した土器で，5・10は波状口縁を呈している。

第69図－9～12は（第6群土器－2類）貝殻腹縁文を有するもので，9は波状腹縁文に有節貝殻条線文を有している。10～12には有節貝殻腹縁文がみられる。

13は（第6群土器－3類）充填貝殻腹縁文を有する。

14は（第11群土器－1類）「S」字状回転結節文を有している。

16は（第16群土器－1類）磨消縄文がみられる。

17は（第16群土器－2類）微隆起線による区画がなされている。

15・18は縄文の文様を有しているが不明の口縁部である。

土製品（第60図）

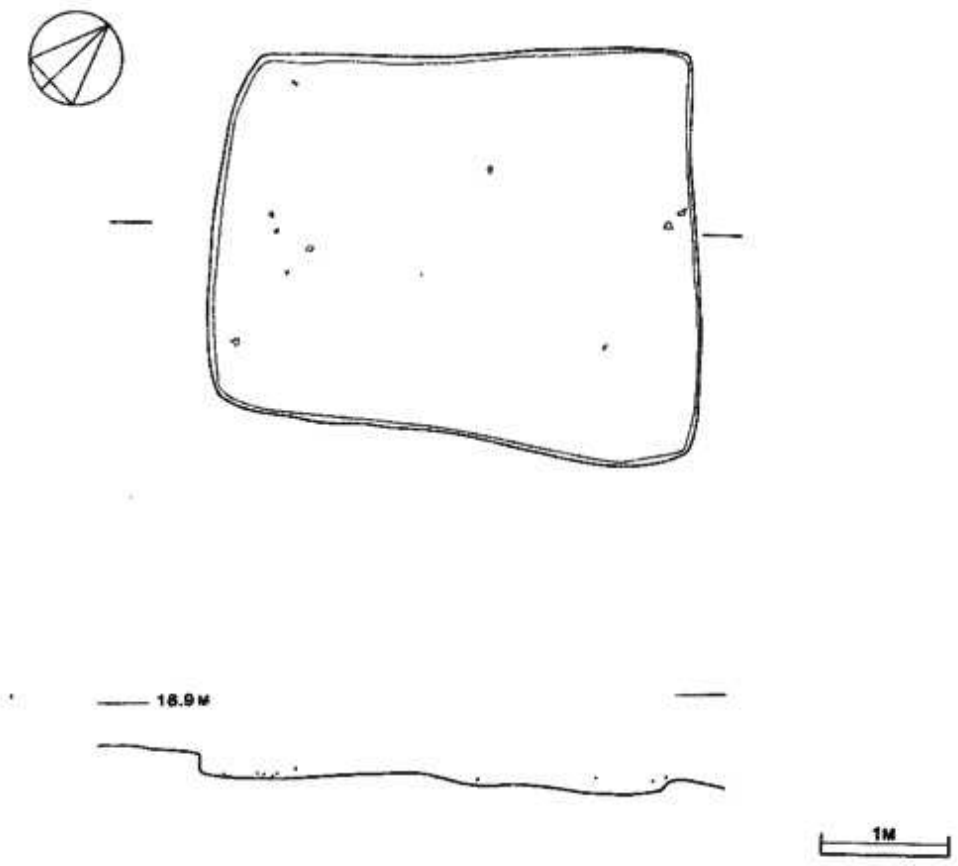
本址から出土した土玉はいずれも完形品で，南壁中央部より検出されている。1は長さ2.6cm，径2.7cm，重さ16gで，2は長さ2.9cm，径3.1cm，重さは23gである。整形は指による整形がなされ，中央孔は直径0.4cm，0.7cmを測る。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

第9号住居址

本址からの出土遺物は，覆土中より縄文式土器が出土し，その他土師式土器は覆土中と，床面直上より細片が出土した。いずれも量は微量である。

土師式土器では甕形土器と思われる口縁部が1片出土し，器内外面ともに刷毛目整形がなされている。その他口縁部の細片が7片出土しているが，整形はなでによる整形が見られる。また，高杯形土器の脚部と思われるものが1片出土し，器内外ともになで整形がみられる。



第61図　第9号住居址平面・垂直分布

覆土中からの縄文式土器（第69図－19～27）

分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

19～21は（第５群土器）数条の直線的な縦，横位の沈線文を有している。

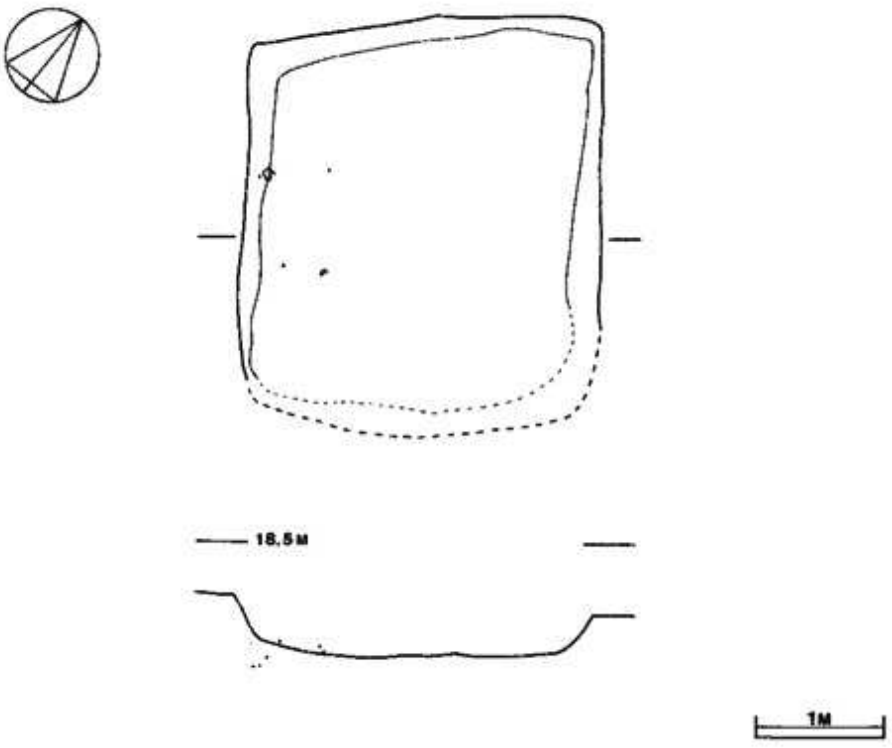
23は（第６群土器－２類）貝殻腹縁による有節貝殻文を有している。

第10号住居址

本址からの出土遺物は，極めて微量で，覆土中より縄文式土器が出土し，土師式土器の細片が床面よりやや浮いた状態で検出されている。

土師式土部では甕形土器の胴部片と思われる土器を西壁より出土し，器外面に刷毛目整形痕を一部残している。色調は暗赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含んでいる。

その他刷毛目整形痕が残されている土師式土器の細片が17片ほど出土した。



第62図　第10号住居址平面・垂直分布図

覆土中からの縄文式土器（第69図－28～33）

分類はグリット出土遺物分類に基づいて行う。

28～30は（第5群土器）数条の縦，横位の沈線文を有している。

31は（第6群土器－3類）沈線内に貝殻腹縁文が充填されている。

32・33は縄文の文様を有しているが不明な土器である。

第12号住居址

本址からの出土遺物はすべて土師式土器であり，細片の土器を含めて 420片ほど検出されている。

土器（第64図）

1は現存部ほぼ全てを有する甕形土器である。口径18cm，器高23.3cm，底部 6.5cmを測り，口縁部は頸部より大きく直線的に開き，口唇部外面に稜を有している。体部は頸部より強く張り出し胴部中位に最大径をもち，中央部に凹面を有する底部に至る。器壁は全体に薄手である。

器外面は口辺部を除く，全体に斜位方向の刷毛目整形がなされている。器内面は横なで整形が行われている。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，雲母を含み，焼成は良好である。

2は口径15.4cm，現高18.9cmを測る甕形土器である。口縁部は頸部より外反しながら大きく開き，口唇部に稜をもって緩やかに立ちあがる。体部は頸部より強く張り出し，胴部最大径を中位にもって球状に内彎する。また口辺部外面と，体部の屑に数ケ所輪積痕を認めることができる。

器外面は口縁部で縦位の刷毛目，体部を横位の刷毛目整形を行った後，なでによる整形がなされている。

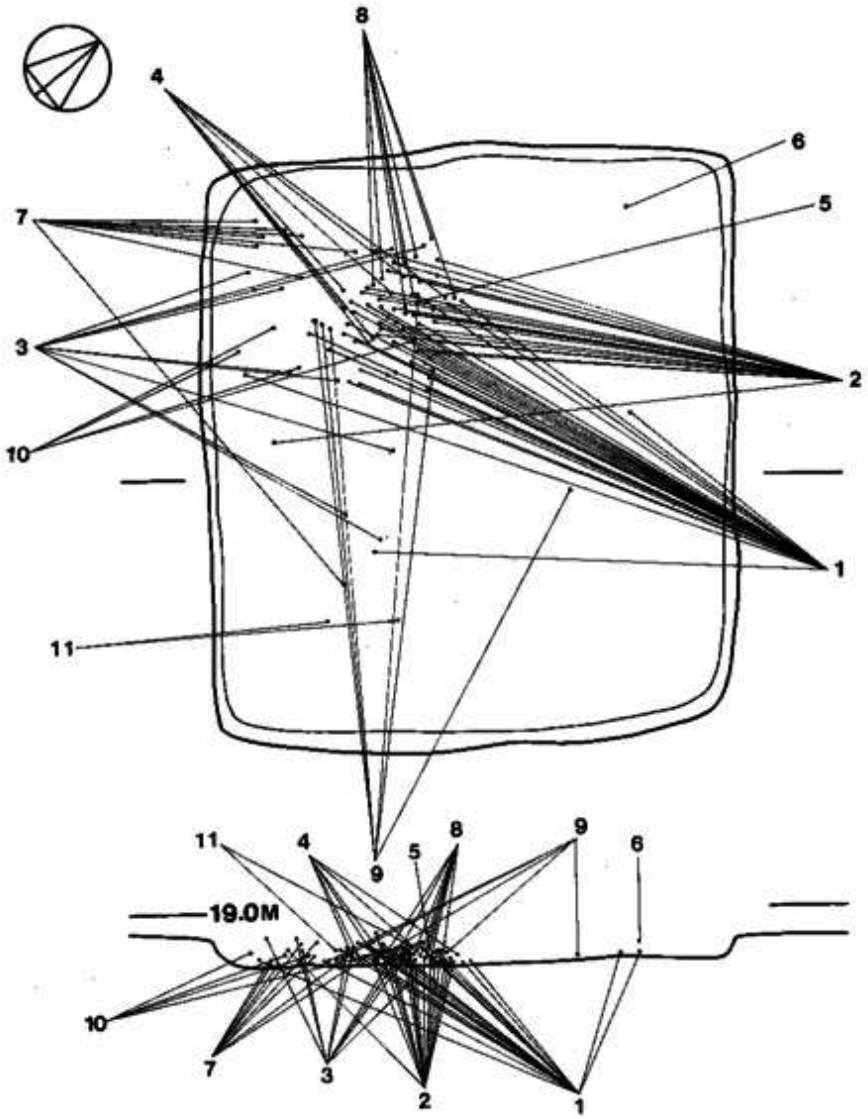
色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

3は甕形土器で，口径14.0cm，底径5.5cmを測る。口縁部は頸部より屈曲気味に外反して立ちあがる。体部は頸部より緩やかに張り出し，胴部最大径を中位よりやや上部に有し，ゆるやかに内彎しながら，中央部に凹面をもつ底部に至る。また，肩部に輪積痕が残されている。

器外面は胴部に刷毛目整形を行い，口縁部はなでによる整形がなされている。また，内面は篦なで整形を行っている。

色調は全体に灰褐色を呈しているが，底部附近は明赤褐色である。胎土中に砂粒を含み，焼成は不良である。

4は3と同様な甕形土器で，口縁部は頸部から大きく外反して立ちあがり，口径15.8cm，現高13.2cmを測る。体部は頸部より強く張り出し，胴部中位に最大径をもち，球状を呈している。内



第63図　第12号住居址接合平面・垂直分布図

部に３ケ所ほど輪積痕を見ることができ，頸部内外に稜を有している。

器外面は口縁部に刷毛目整形がなされ，胴部は縦位のなで整形が行われている。器内面は口縁部で横，斜位の刷毛目整形，胴部は横なで整形である。

色調はにぶい黄褐色を呈し，胎土中に砂粒，スコリア等を含み，焼成は普通である。

５は３・４と同様な甕形土器で現存部は$\frac{1}{10}$ほどである。口縁部は頸部より「く」字状に屈折し直線的に大きく外反する。体部は頸部より緩やかに張り出し，胴部上位に最大径をもつ。口径18.2cm，現高９cmを測る。

整形は器外面で口縁部～胴部にかけて刷毛目整形がなされ，内面は口縁部で横位の刷毛目がみられ，体部はなでによる整形である。

色調は橙色を呈し，部分的に黒褐色を示すところも見られる。焼成は普通で胎土中に砂粒，石英を含んでいゆる。

６は口径18.8cm，現高4.0cm，現存部$\frac{2}{10}$ほどの口縁部である。口縁部は頸部で屈曲し緩やかに外反している。器外面に口縁部の中位と，口脛部に明瞭な稜をもっている。体部は頸部より強く張り出す。

整形は口縁部で横なで，胴部で刷毛目整形が見られる。器内面は全体になでによる整形がなされている。

色調はにぶい褐色を呈し，胎土中に砂粒，スコリア等を含み，焼成は普通である。

７は現存部$\frac{1}{8}$ほどの台付甕形土器である。口縁部は頸部より凹凸な面を有して，大きくやや直線的に外反する。体部は頸部より緩やかに張り出し，胴部最大径は中位よりやや上位にあり，やや内彎ぎみに底部へ向う。口径20.2cm，現高28.5cmを測る。

器外面は頸部より下部に縦，横，斜位の刷毛目整形がなされ，後なでによる整形を行っている。器内面は口縁部に横位の刷毛目整形痕がみられ，体部は刷毛目整形後，なでを行っている。

色調はにぶい褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成は不良である。

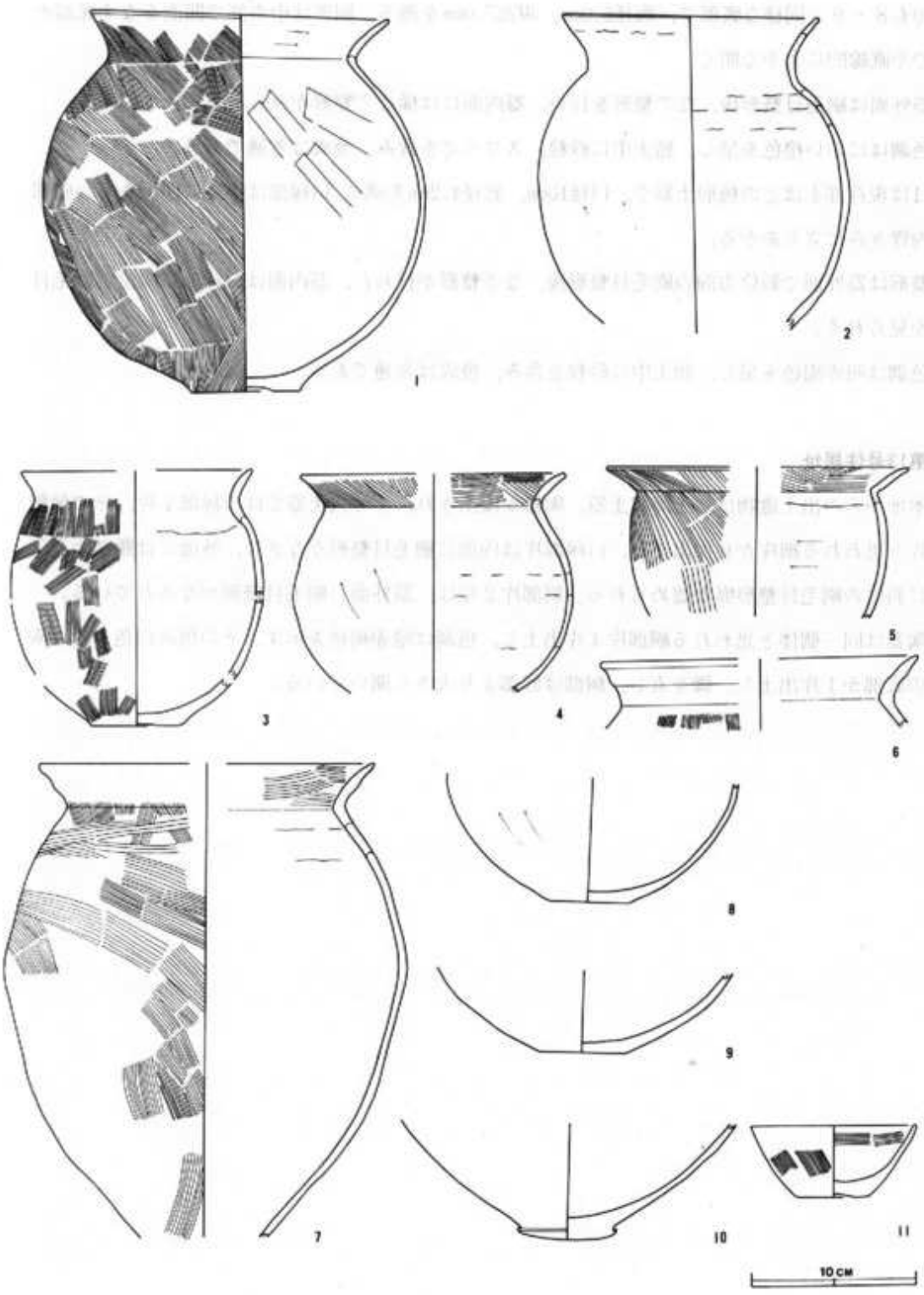
８は底径4.6cm，現高7.5cm，現存部$\frac{1}{8}$ほどの底部である。胴部は平坦な底部より内彎ぎみに大きく立ちあがる。

整形は器外面で篦削りの後，研磨による整形がみられ，器内面は篦なでの後，研磨が行われている。

色調は部分的に黒色を呈する部もあるが，全体に橙色を示している。胎土中に砂粒，長石を含み，焼成は普通である。

９は８と同様な底部で，底径5.2cm，現高5.0cmを測り，現存部$\frac{1}{6}$ほどである。胴部は平坦な底部よりやや内彎ぎみに大きく開いている。

整形は器内外ともなでによる整形が行われている。



第64図　第　12　号　住　居　址　出　土　遺　物

色調はにぶい褐色を示し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成はやや不良である。

10も８・９と同様な底部で，底径6.0cm，現高7.0cmを測る。胴部は中央部で凹面をなす底部からやや直線的に大きく開く。

器外面は刷毛目整形後，なで整形を行い，器内面には横なで整形がみられる。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，スコリアを含み，焼成は普通である。

11は現存部½ほどの椀形土器で，口径10cm，底径4.2cmを測る。口縁部は中央に凹面をもつ底部より内彎ぎみに立ちあがる。

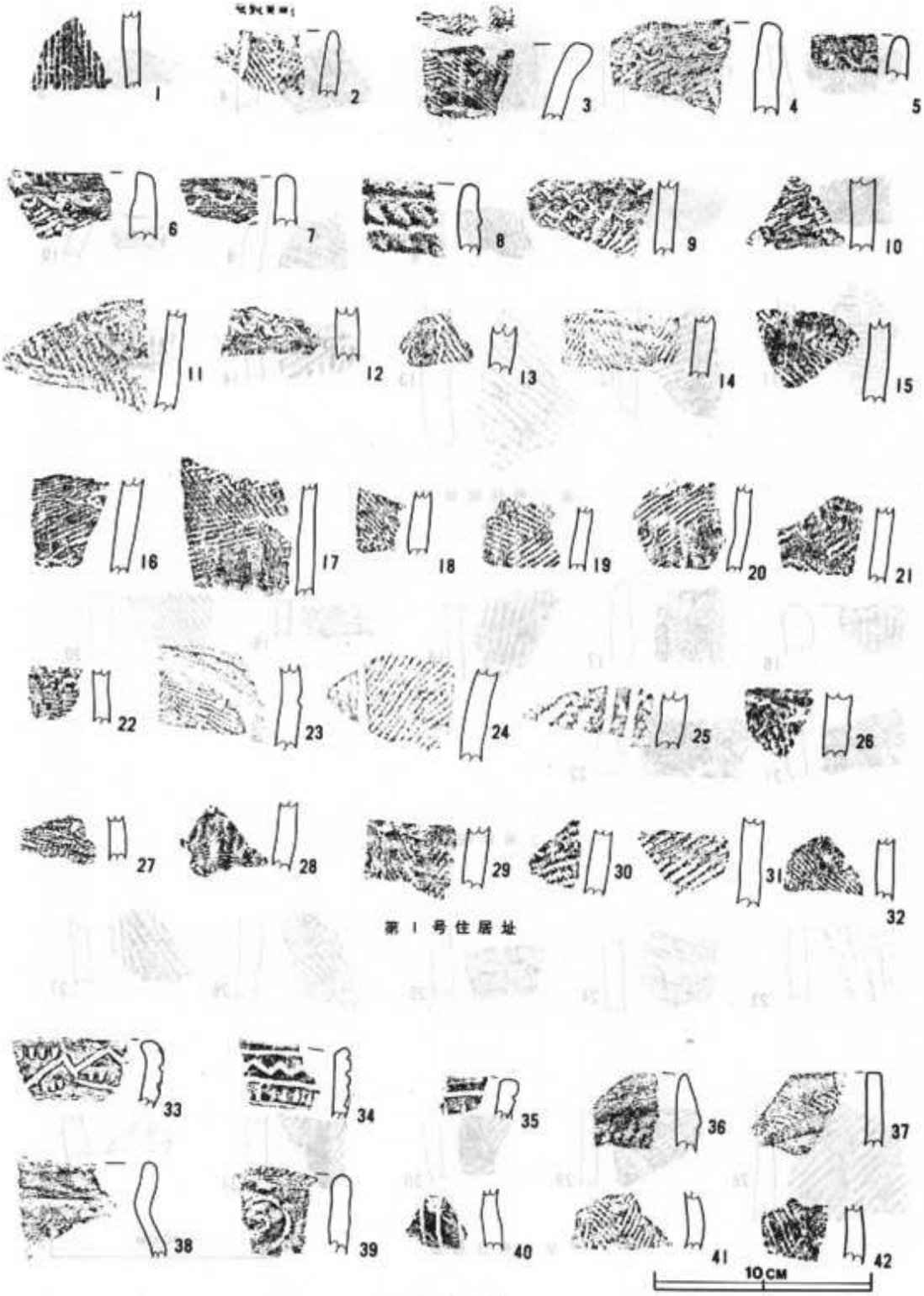
整形は器外面で斜位方向の刷毛目整形後，なで整形が行われ，器内面は口縁部に横位の刷毛目痕が見られる。

色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

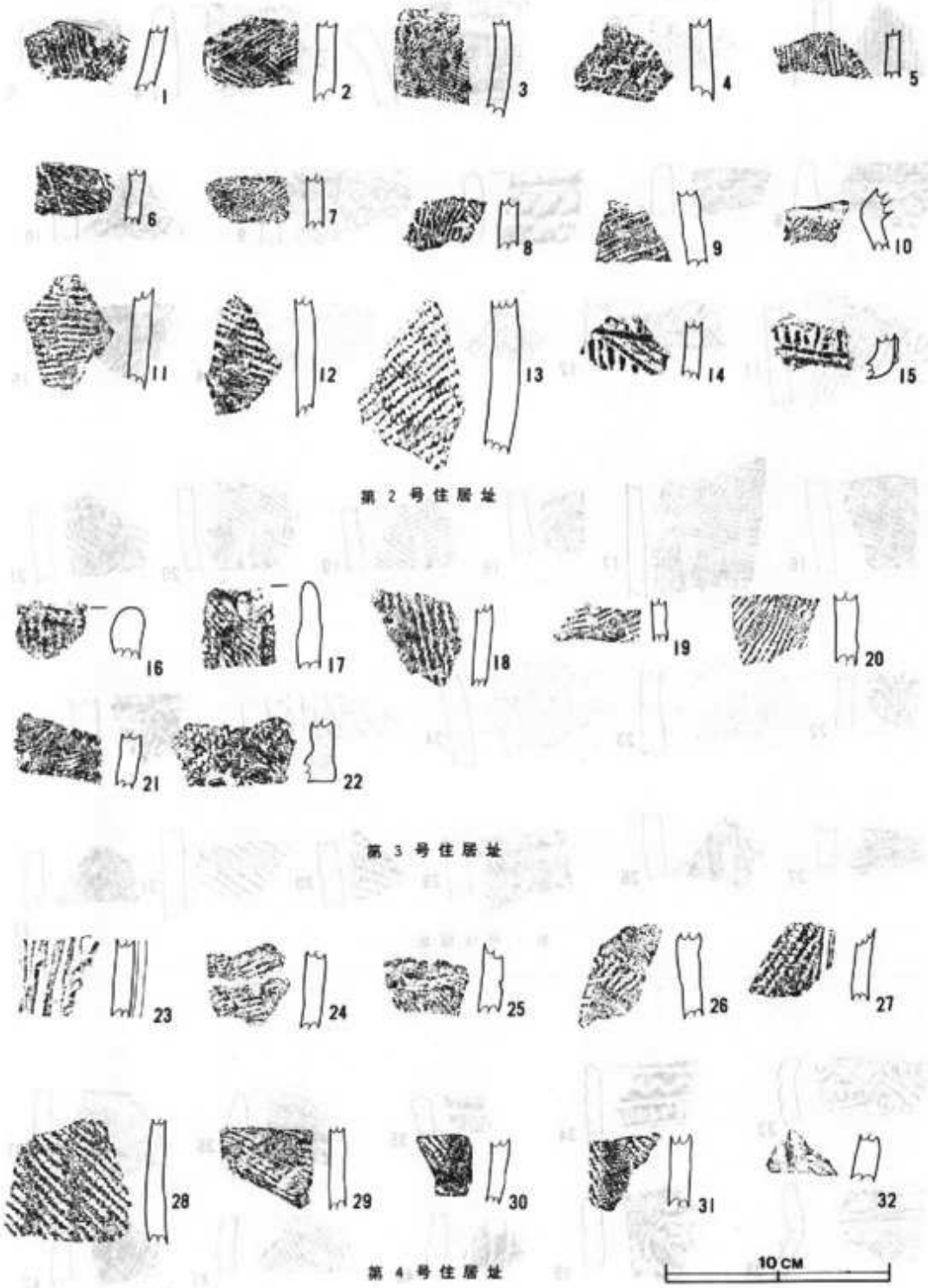
第13号住居址

本址からの出土遺物は，土師式土器，陶器が検出され，土師式土器では口縁部１片，その他胴部片と思われる細片が６片出土し，口縁部片は内面に刷毛目整形がなされ，外面には頸部より下部に斜位の刷毛目整形痕が認められる。胴部片２片は，器外面に刷毛目整形がなされている。

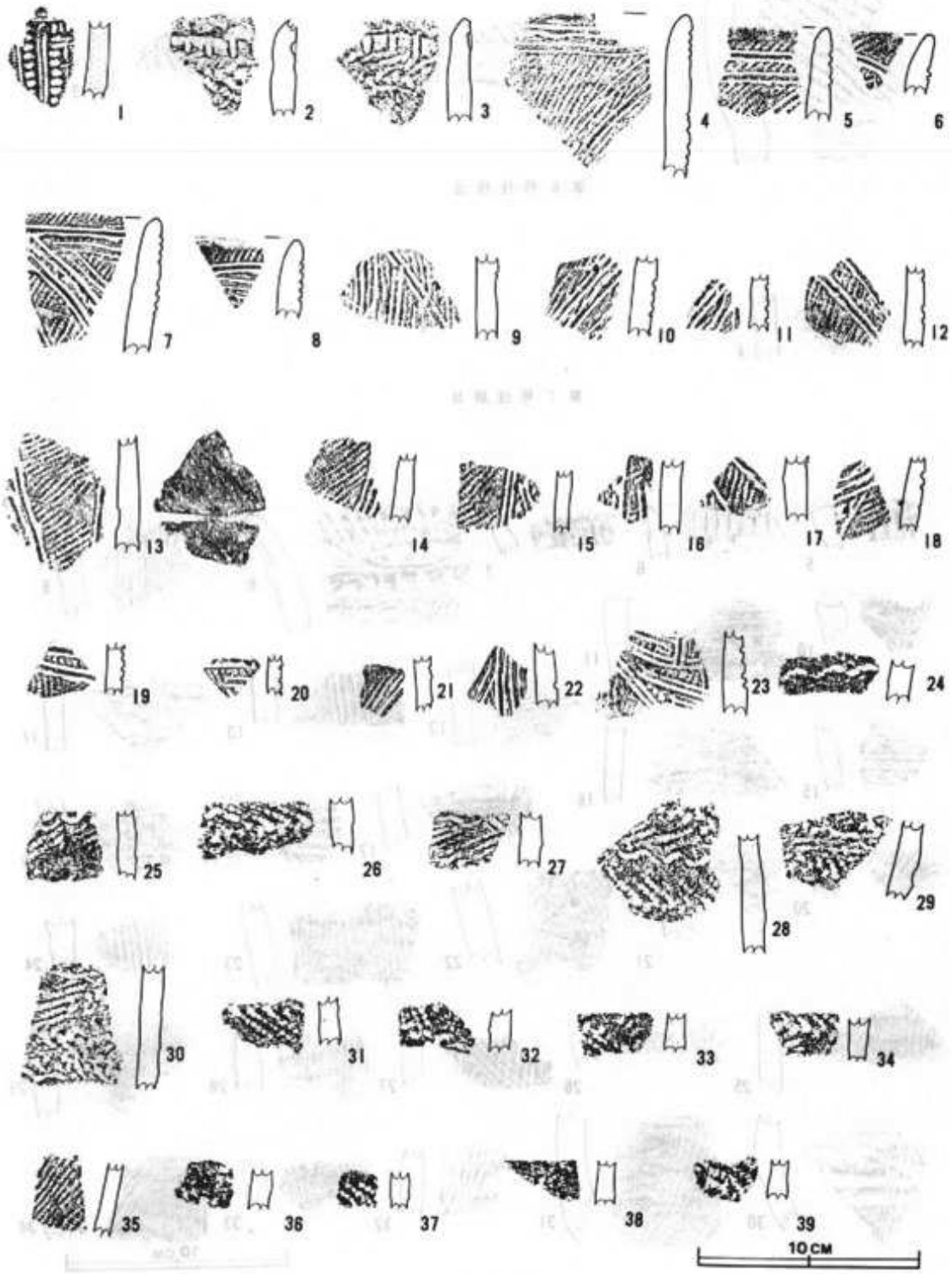
陶器は同一個体と思われる胴部片４片出土し，色調は暗赤褐色を示す。その他灰白色を示す陶器の底部が１片出土し，脚を有し，胴部は底部より大きく開いている。



第65図　第１・２号住居址覆土出土遺物



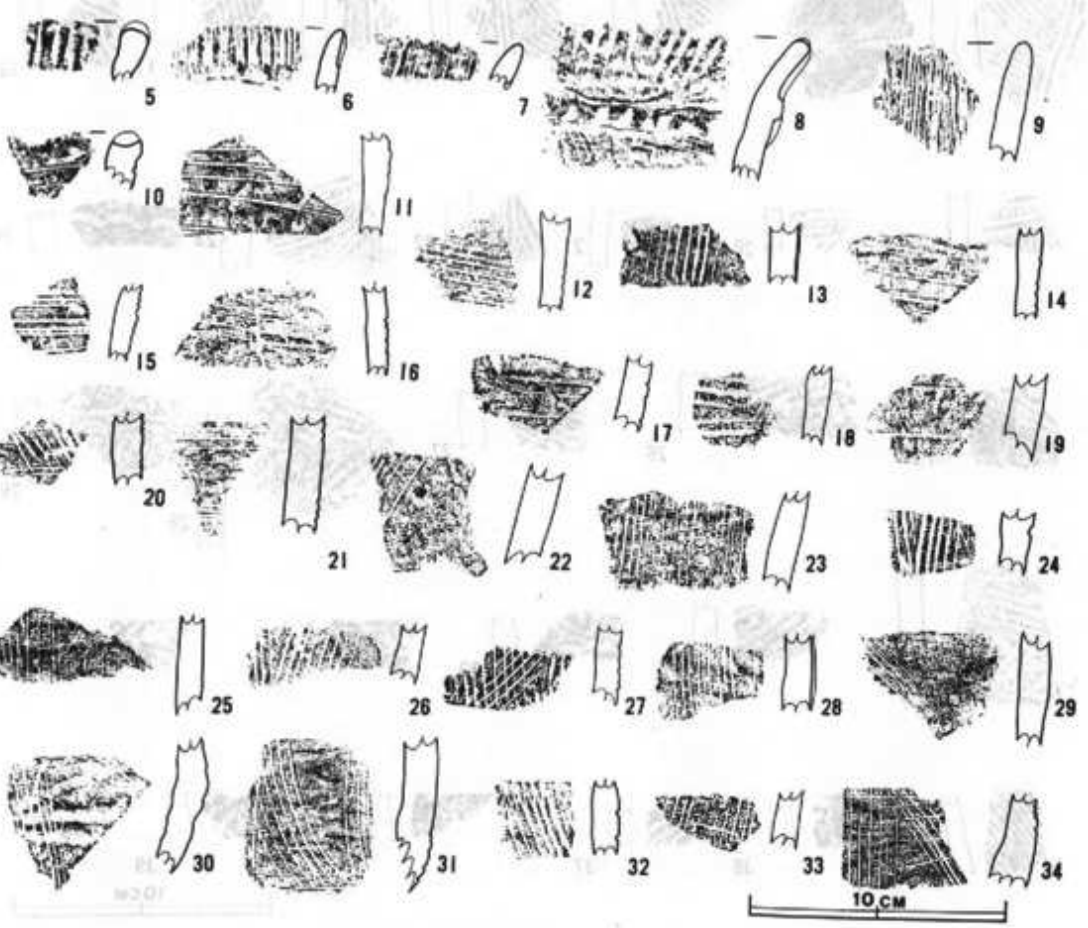
第66図　第２・３・４号住居址覆土出土遺物



第67図　第５号住居址覆土出土遺物

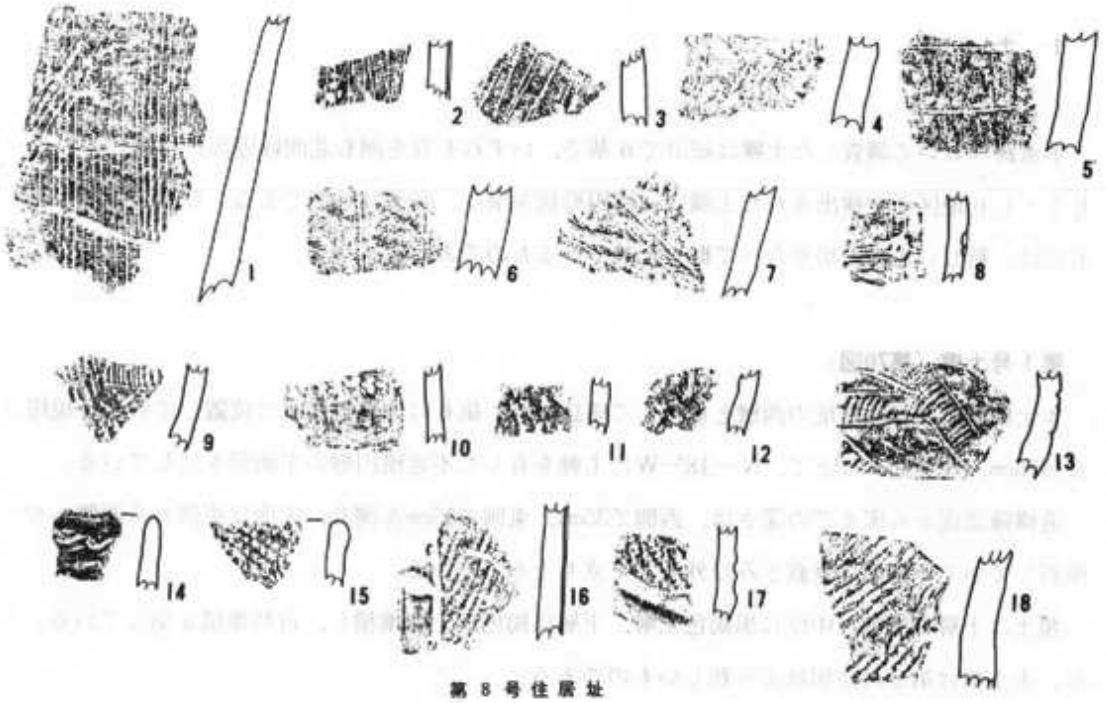
第６号住居址

第７号住居址

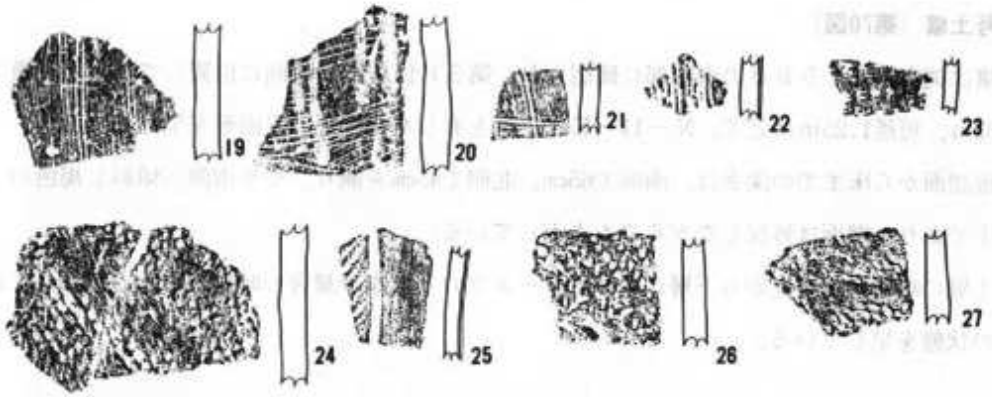


第８号住居址

第68図　第６・７・８号住居址覆土出土遺物



第８号住居址



第９号住居址

第10号住居址

第69図　第８・９・10号住居址覆土出土遺物

第4節　その他の遺構

1　土　壙

本遺跡において調査した土壙は総計で6基で，いずれも谷を囲む北側縁辺部に位置している。E5・E6地区から検出された土壙は，楕円形状を呈し，底面は平坦である。C4に確認されたものは，新しい土壙が切り合って群をなしているものである。

第1号土壙（第70図）

本土壙は第2号住居址の西壁と重複して確認され，第6号土壙の南東に位置している。規模は長径75cm，短径65cmほどで，N－18°－Wに主軸を有した不定楕円形の平面形を呈している。

遺構確認面から床までの深さは，西側で35cm，東側で15cmを測り，床面は東側から西側へやや傾斜している。壁面は垂直ぎみに外反して立ち上がっている。

覆土は上層に褐色，中位に黒褐色土層，下層は褐色の土が堆積し，自然堆積を呈している。なお，本土壙は第2号住居址より新しいものである。

第2号土壙（第70図）

本土壙は調査地区E5b0の南西部に確認され，第5号住居址の西側に位置している。規模は長径1.83m，短径1.25mほどで，N－11°－Eに主軸を有した楕円形の平面形を呈している。

遺構確認面から床までの深さは，南側で65cm，北側で45cmを測り，やや南側へ傾斜し褐色の柔らかい土であり，壁面は外反しながら立ちあがっている。

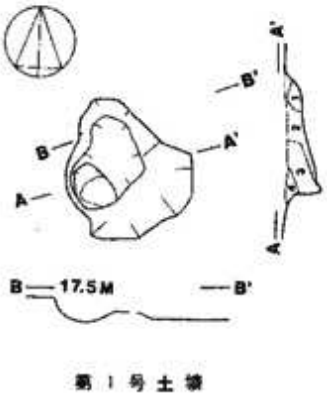
覆土上層に暗褐色，中位から下層にかけてロームブロックを少量含む暗褐色の土が堆積し，自然堆積の状態を呈している。

第3号土壙（第70図）

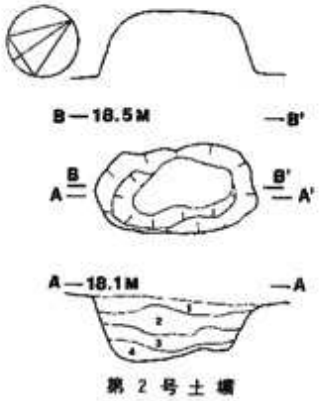
本土壙は調査地区E5a9・E5b9にわたって確認され，第5号住居址の西側，第2号土壙の北側に位置している。規模は長径1.37m，短径1.17mの不整円形状の平面形を呈し，N－18.5°－Eの主軸方向を有している。

床面は遺構確認面から47～65cmほど測り，南側の壁に少しくぼみが見られ，褐色のやや柔らかい土である。壁面は若干外反して立ちあがっている。

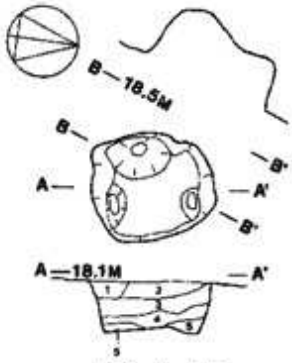
覆土は上層部から中位層まで小ブロックを多量に含む暗褐色，黒褐色の攪乱土であり，下層は褐色の土が堆積し，人為的に埋められた状態を呈してきいる。



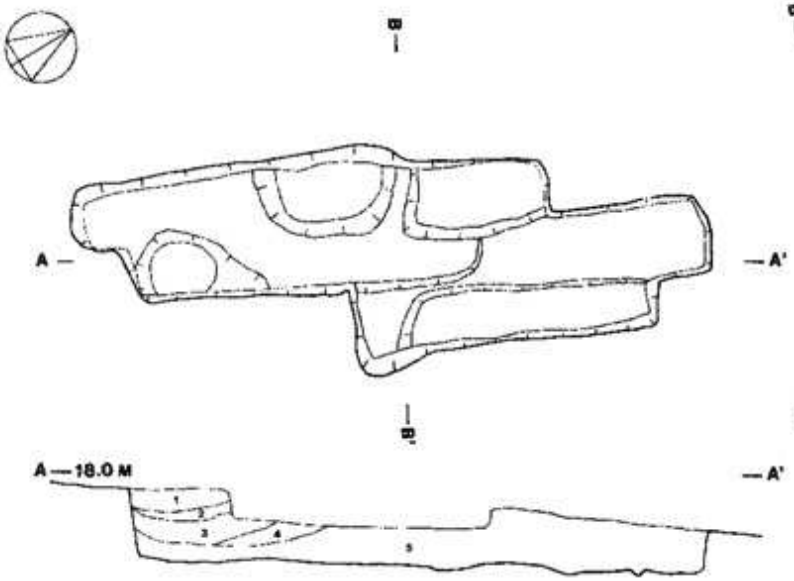
第１号土壙



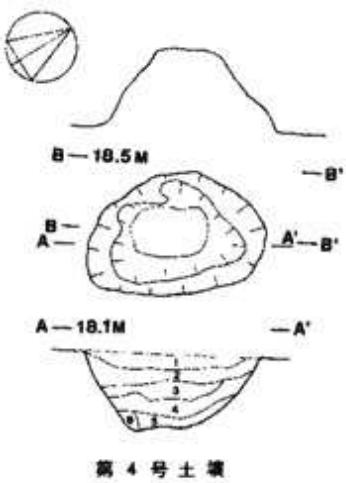
第２号土壙



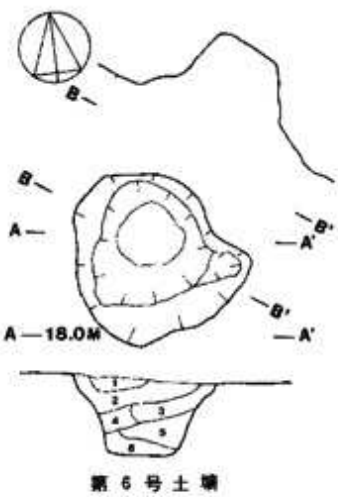
第３号土壙



第５号土壙



第４号土壙



第６号土壙

土層解説

第１号土壙
1. Hue7.5YR 5/6橙色
2. Hue7.5YR 5/3黒褐色
3. Hue7.5YR 5/3黒褐色
4. Hue7.5YR 5/4褐色

第２号土壙
1. Hue7.5YR 5/4暗褐色
2. Hue7.5YR 5/4暗褐色
3. Hue7.5YR 5/4極暗褐色
4. Hue7.5YR 5/4暗褐色

第３号土壙
1. Hue7.5YR 5/4暗褐色
2. Hue7.5YR 5/4極暗褐色
3. Hue7.5YR 5/3黒褐色
4. Hue7.5YR 5/4褐色
5. Hue7.5YR 5/4褐色

第４号土壙
1. Hue7.5YR 5/4暗褐色
2. Hue7.5YR 5/4暗褐色
3. Hue7.5YR 5/4褐色
4. Hue7.5YR 5/4褐色
5. Hue7.5YR 5/4暗褐色
6. Hue7.5YR 5/4暗褐色

第５号土壙
1. Hue7.5YR 5/4黒褐色
2. Hue7.5YR 5/4暗褐色
3. Hue7.5YR 5/4暗褐色
4. Hue7.5YR 5/4褐色
5. Hue7.5YR 5/4暗褐色

第６号土壙
1. Hue7.5YR 5/4暗褐色
2. Hue7.5YR 5/4暗褐色
3. Hue7.5YR 5/4極暗褐色
4. Hue7.5YR 5/4褐色
5. Hue7.5YR 5/4暗褐色
6. Hue7.5YR 5/4暗褐色

1M

第70図　土　壙　実　測　図

第4号土壙

本土壙は調査地区Ｅ５ａ９に確認され，第５号住居址の西側，第２号土壙，第３号土壙の北側に位置している。規模は長径1.83m，短径1.25mの楕円形の平面形を呈し，Ｎ－18.5°－Ｅの主軸方向を有している。遺構確認面から床までの深さは，南側で80cm，北側で70cmを測り，床面は褐色のロームでやや柔かく，すり鉢状を呈している。

覆土は，全土層にロームブロックを多量に含み，上層は暗褐色，中位に褐色土層，下層に暗褐色の土が堆積し，人為的に埋められた状態を示している。

第５号土壙（第70図）

本土壙は調査地区Ｂ４ｉ３・Ｂ４ｉ４・Ｂ４ｊ３にわたって確認され，第10号住居址の西側に位置している。規模は長径３ｍ，短径1.1ｍの不整方形の平面形を呈している。主軸方向はＮ－27°－Ｅである。

本土壙は５～６基の土壙が重複した土壙群である。

遺構確認面から床までの深さは南側で70cm，北側で40cmほどの深さで，床面は重複した土壙群のため，壁附近平坦でない浅い落ち込みが数ケ所見られる。褐色の柔らかい土である。

覆土は全土層にロームブロックを少量含み上層は黒褐色，中位は褐色土層，下層は暗褐色，褐色が堆積し，人為的に埋められた状態を示している。また，この土壙は農産物を貯蔵した土壙ではなかろうかと思われる。

第６号土壙（第70図）

本土壙は調査地区Ｅ６ａ１・Ｅ６ａ２に確認され，第５号住居址の東側に位置している。規模は長径1.8m，短径1.75ｍの不整円形状の平面形を呈し，Ｎ－82°－Ｗを主軸方向に有している。

遺構確認面より床面までの深さは西側で90cm，東側で75cmを測り，床面は平坦で，褐色の柔らかいロームの土である。壁面は外反して立ちあがっている。

覆土はロームブロックを多量に含む攪乱土層であり，人為的に埋められた状態を示している。

2．溝

溝は本遺跡の東側，Ｅ５地区の緩斜面に１条確認され，規模は全長約48mで，ほぼ中央部で屈折している小規模な溝である。

第１号溝（第71図）

本溝は大調査地区Ｅ５・Ｄ５区に確認され，規模は小規模な溝で，全長48mで，Ｅ５ｂ２でやや丸味をもって，ほぼ90°屈折し，緩斜面に沿って北東方向へ約23m，南東方向へ約25m伸びていずれも消滅している。

北側の溝の始まり部の主軸方向はＮ－46°－Ｅで，Ｅ５ｂ２で主軸方向をＮ－44°－Ｗに変化してほぼ南東方向へ一直線にのびている。溝の上幅は北東方向への溝の部分がやや広く，1.2～0.9mを測り，南東方向の溝部は約0.5mほどである。遺構確認より底までの深さは，20～50cmほどで，皿状にやや外反ぎみに立ちあがっている。底は褐色を呈す柔らかいロームで，ほぼ平坦である。

覆土は上層部が暗褐色を基層とする層が堆積し，下層は柔らかい褐色土である。堆積状態は自然堆積を示している。

溝からの出土遺物は，縄文式土器と陶器が出土している。

3．遺　物

土壙出土遺物

本遺跡の土壙からの遺物は，第１号土壙と第５号土壙から土器を数片づつ出土しただけである。第１号土壙からは縄文式土器２片，土師式土器３片をいずれも覆土中より検出した。縄文式土器は２片とも胴部片で縄目の文様を有した細片である。土師式土器３片は頸部片１片，胴部片２片で刷毛目整形となで整形がなされている。

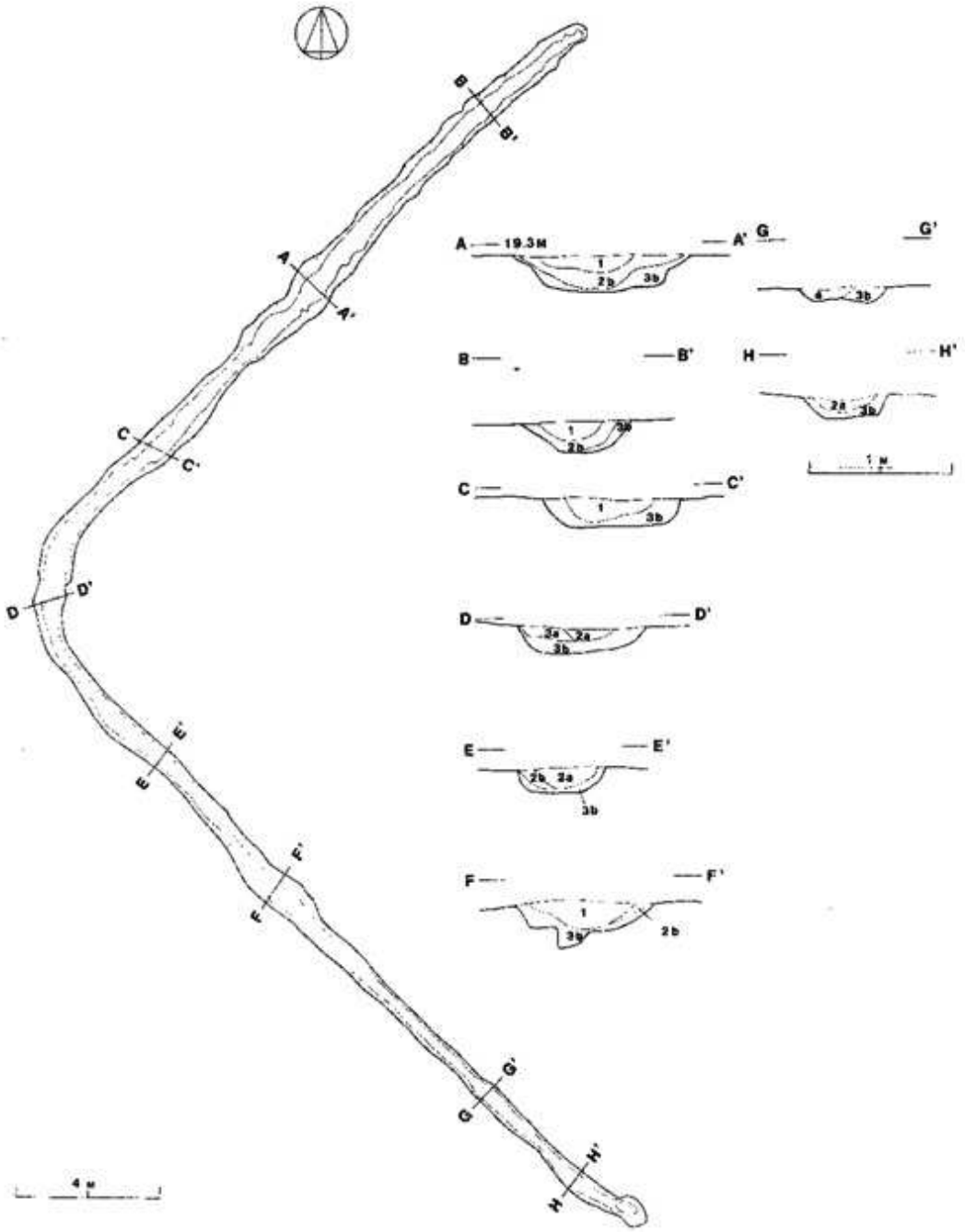
第５号土壙からは縄文式土器３片を覆土中より出土し，いずれも胴部片で，縄文の文様と無文の土器である。

溝出土遺物（第87図－１）

溝からは縄文式土器２片，陶器１片を覆土中より出土している。縄文式土器２片のうち１片は胎土中に繊維を含み縄目の文様を有し，その他の１片は無文でいずれも細片である。

陶器の甕の口縁部（第87図－１）で，口縁部は内傾しながら立ちあがり，中位より大きく外反して水平になる。口唇部は直立ぎみに立ちあがり，口辺部内面より１段高くなる。

色調は褐灰色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。



第71図　第 1 号溝実測図

溝土層解説

A～H共	1	Hue7.5YR 3/1極暗褐色
	2—a	Hue7.5YR 3/1暗褐色
	—b	〃 3/1暗褐色
	3—a	Hue7.5YR 3/1褐色
	—b	〃 3/1褐色
	4	Hue7.5YR 3/1黒褐色

第4章　グリット出土遺物

本遺跡のグリット内出土遺物は，縄文時代の遺物，縄文式土器，土製品，石器を出土し，古墳時代の遺物は，土師式土器，土製品などを検出した。土器の出土量は，土師式土器に比較して，縄文式土器は，約3倍の量を出土した。

第1節　縄文時代の遺物

1　土　器

本遺跡から出土した縄文式土器は，天箱にして約32箱を得た。遺物は主に，本遺跡の北～東側の緩やかな傾斜地に多く出土した。縄文式土器は，文様等から，時期ごとに，下記の通りに大別した。

縄文式土器分類

縄文式土器
- 第1群…撚糸文系のもの
- 第2群…沈線文を有するもの
- 第3群…貝殻条痕文を有するもの
- 第4群…繊維を含むもの
- 第5群…数条の直線的な櫛目状文を，縦・横・格子状に施文したもの
- 第6群…貝殻文を有するもの
- 第7群…三角文を有するもの
- 第8群…平行沈線と刺突文を有するもの
- 第9群…沈線による区画と短沈線区画内充填を持つもの
- 第10群…半截竹管による平行沈線文を有するもの
- 第11群…結束第一種，綾絡文を有するもの
- 第12群…半截竹管による平行沈線，刺突文
- 第13群…側面体毛痕文を有するもの
- 第14群…結節沈線文を有するもの
- 第15群…口辺部文様に，隆帯区画をもつもの
- 第16群…磨消縄文，微隆起線を有するもの

一部の群では，文様により，「類」として細分されているものもある。以下，順を追って述べていくことにする。

第1群土器（第72図－1～42）

撚糸文系の土器を本群とする。

縄文早期前葉に比定される土器で，口縁部は，比較的丸味を帯びた円頭棒状を呈し，若干外反するものが多く，口唇部で，5・7・11・15はやや肥厚しているが，他は殆んど肥厚していない。また，12は外反が大きい。3・4は同一個体と思われ，R$\frac{1}{1}$による斜行回転の縄文が施されている。16～42は，撚糸文の胴部片である。

色調は，にぶい褐色，にぶい黄橙色，にぶい黄褐色を呈し，胎土中に，砂粒や石英等を微量含み，焼成は普通である。

第2群土器（第72図－43～47）

沈線文系の土器を本群とする。

縄文早期中葉の田戸下層式に比定される土器で，43は，口縁部が若干外反し，口唇部は平坦である。沈線は先端の丸い棒状工具によって口縁に平行する3本の太い沈線が施文され，沈線と沈線の間隔もやや広いものである。

44～47は，胴部の破片で，施文は前述と同様の工具によって口縁部に平行，斜位方向の沈線文で，沈線と沈線の間に押し引いた刺突文が見られる。

色調は明褐色を呈するものが多く，胎土中に砂粒，雲母，長石等を微量含み，焼成は良好である。

第3群土器（第72図－48）

縄文早期後葉の広義の茅山式に比定される土器である。表裏に横位の貝殻条痕文が施文されている。

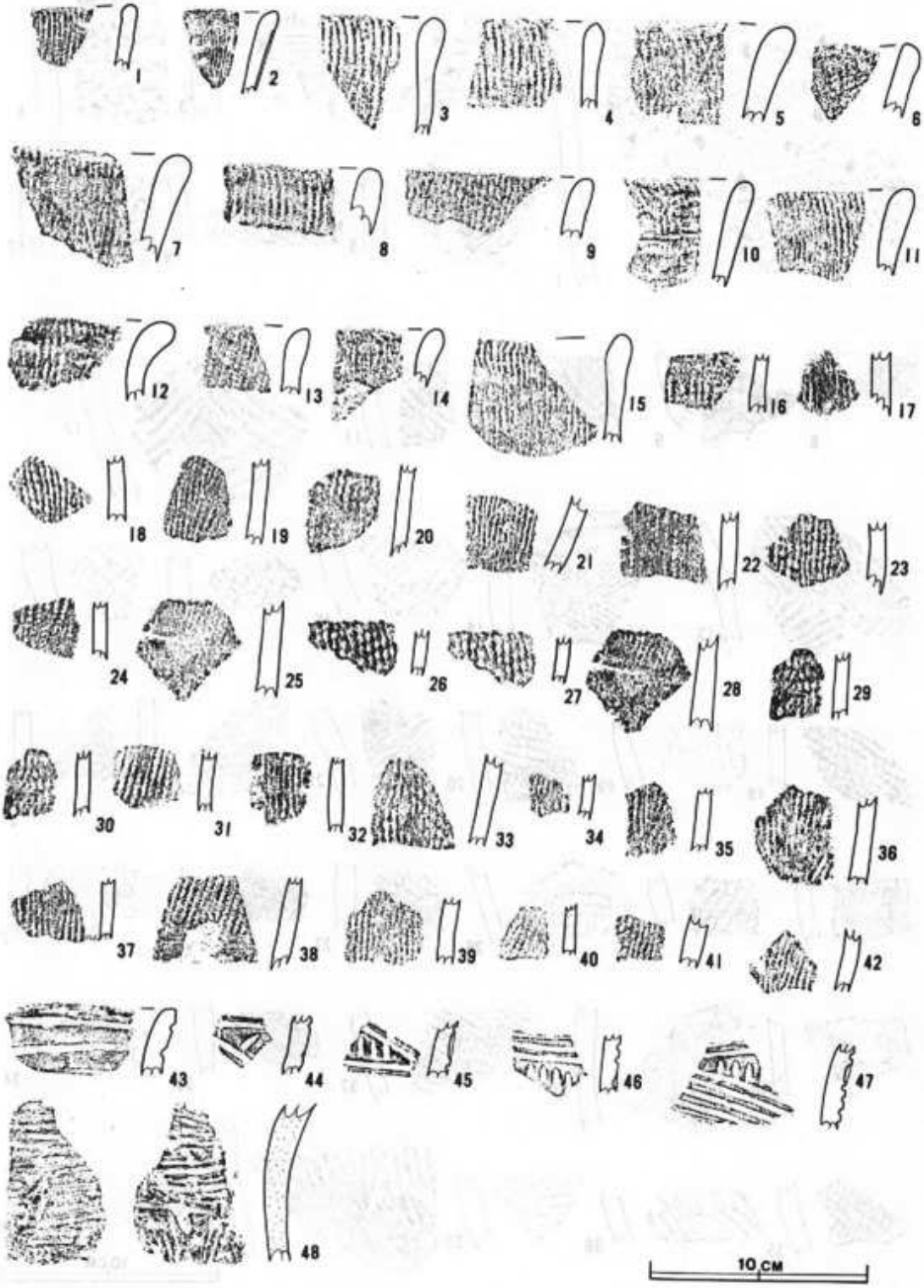
色調は，にぶい黄褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英，繊維を含み，焼成は良好である。本遺跡からの出土量は極めて微量である。

第4群土器（第73図－1～39）

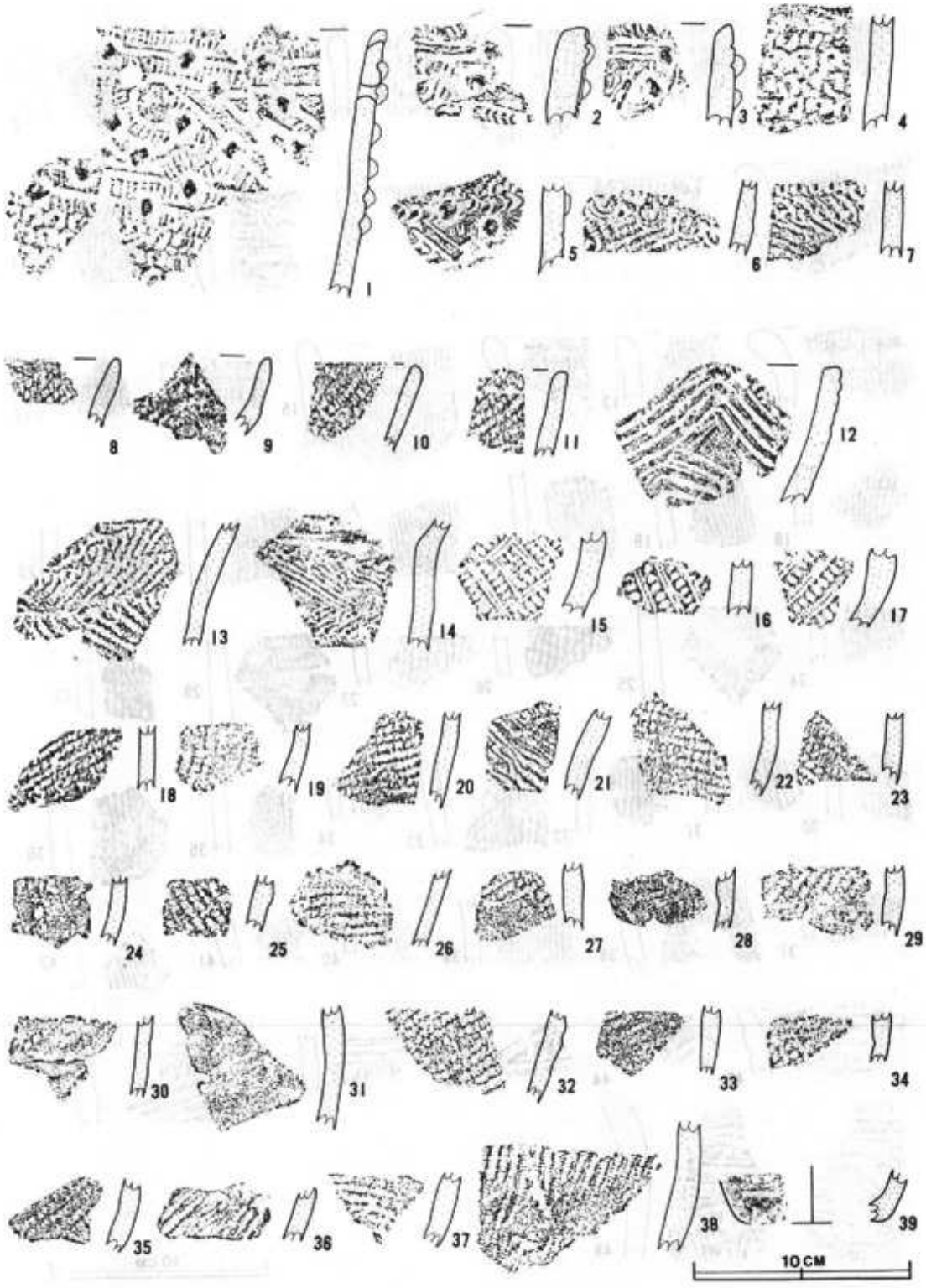
繊維を含む土器を本群とする。

1類（第73図－1～7）

縄文前期前葉の関山式に比定される土器で，1・2・3は，口縁部が外反ぎみに立ちあがり，



第72図　グリット出土遺物(1)



第73図 グリット出土遺物(2)

器壁はあまり厚くはない。1は口縁部上部において，半截竹管による刺突文，沈線区画文，瘤状貼り付け文，下部には縄文原体の末端部を利用したループ文を有している。また，口辺部に1個の補修孔と思われる貫通孔が見られる。2の口縁部は1より厚く，口唇部は平坦である。施文は半截竹管による連続爪形文，沈線区画文，半截竹管文，瘤状貼り付け文がある。3は，半截竹管刺突文，沈線区画文，瘤状貼り付け文を有している。

4～7は，胴部の土器で，4は，縄文原体の端部を利用したループ文を有し，5は，半截竹管刺突文，半截竹管による連続爪形文，瘤状貼り付け文がある。6には，縄文とコンパス文の文様が見られ，7は，縄文原体の同じ縄を結束した回転文とループ文を有している。

色調は，にぶい黄橙色が多く，その他は明黄褐色，灰褐色である。胎土中に砂粒，雲母，繊維等を含み，焼成は全体的に普通である。

2類（第73図—12）

縄文前期に比定される土器の口縁部で，波状口縁を呈し，幾分外反しながら立ち上がっている。口唇部は平坦で，器壁はそれほど厚くない。施文は口縁部に平行な半截竹管による平行沈線文を有している。

色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，雲母，繊維を含み，焼成は普通である。

3類（第73図—13～14）

縄文前期に比定される土器の胴部で，13は表面に煤が付着し，施文は縄文単節RL，LRの結束第1種羽状縄文である。14は，縄文無節R$\{^{L}_{L}$，L$\{^{R}_{R}$と思われる結束第1種羽状縄文を呈し，13より口辺部が大きく外反している。

色調は，橙色，にぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母，繊維を含み，焼成は普通である。

4類（第73図 —15～37）

縄文前期黒浜式に比定される正反の合の施文を持つ胴部で，15はL$\{^{R}_{R}$の縄文を回転方向を変えて施文し，16はR$\{^{L}_{L}$、17はL$\{^{R}_{R}$を回転して作られた正反の合の文様である。18～37は前述の正反の合をもう一段撚ったものL$\{^{R}_{R}\,^{L}_{L}$か，R$\{^{L}_{L}\,^{R}_{R}$を回転して構成した文様である。

色調は全体に明赤褐色，にぶい黄褐色が多く，胎土中に砂粒，雲母，繊維を含み，焼成は一部不良の土器もあるが，全体的に良好である。

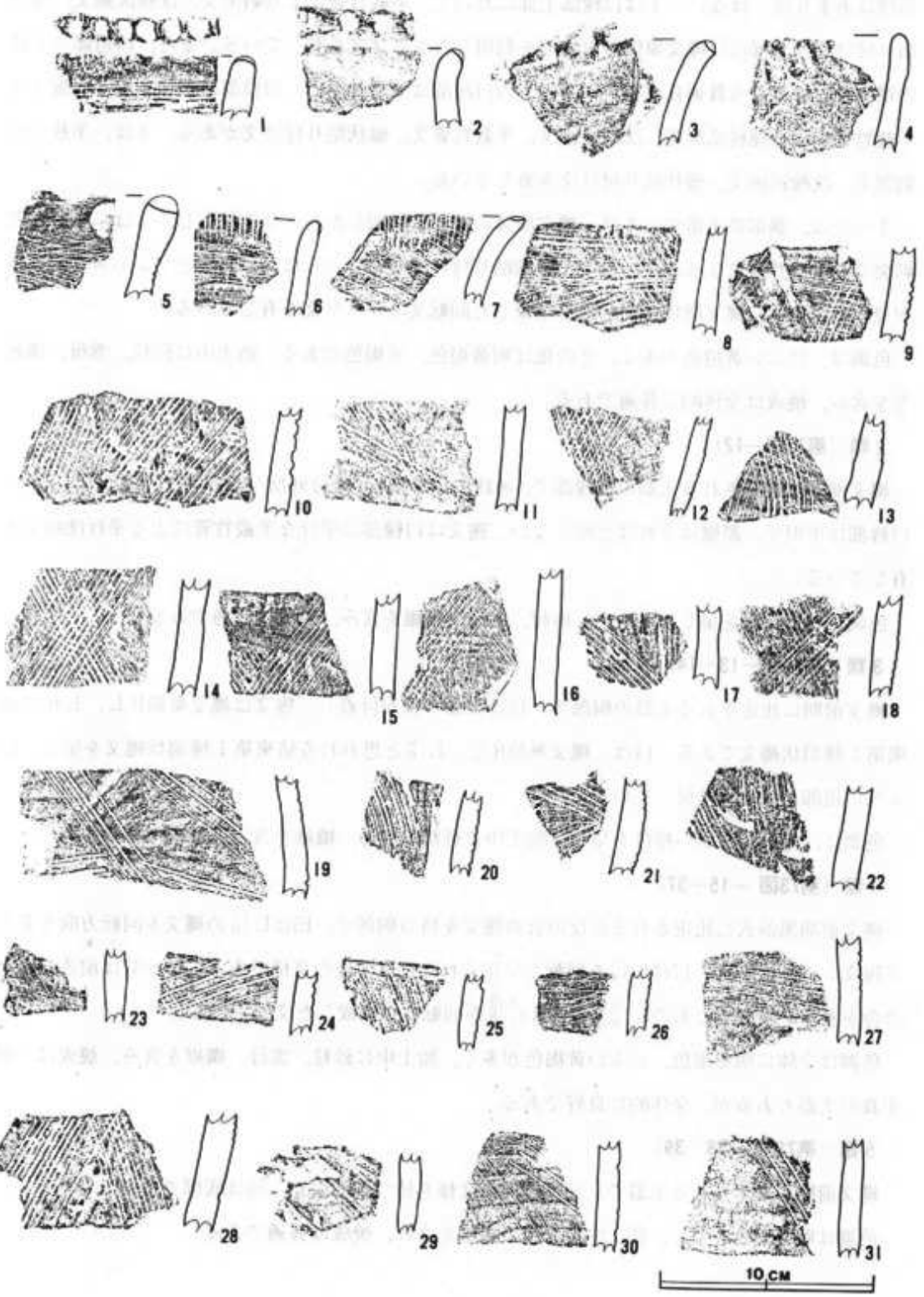
5類（第73図 — 38・39）

縄文前期に編年される土器で，38は縄文の文様を持つ胴部片で，39は底部である。

色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，繊維を含み，焼成は普通である。

第5群土器（第74図 —1 ～31）

数条の直線的な櫛目状文を縦，横位あるいは格子状に施文した土器を本群とする。



第74図　グリット出土遺物(3)

縄文前期後葉の浮島式に比定されると思われる土器で，1～7は口縁部が若干外反し，1～5は口唇部に篦状工具によるスリットを有し，3は波状口縁を呈している。6・7は口辺部に半截竹管による縦位の沈線文が見られ，その下部には半截竹管による縦，横，斜位の平行沈線文が施されている。

8～31は胴部で，器壁はやや肥厚である。施文は半截竹管か，櫛目状工具による横，縦，斜位の沈線文がある。10・12～14・16・18・28には格子状文様が見られる。

色調は，にぶい橙色，にぶい黄橙色が多く，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は全体的に良好である。

第6群土器（第75図－1～41・第77図－1～24）

縄文前期後葉の浮島式に比定される，貝殻文を有する土器群を主体とする。本群には時期的な差もあり，細分は可能である。

1類（1～4）

1～4は，いずれも口縁部で，幾分か外反し，口唇部にスリットを有するものと，平縁のものがあり，口辺部に縦位の短い半截竹管による平行沈線文が見られる。さらに下部には粘土帯を附加し，篦状工具によって押圧している。尚，1と3は同一個体と思われる。

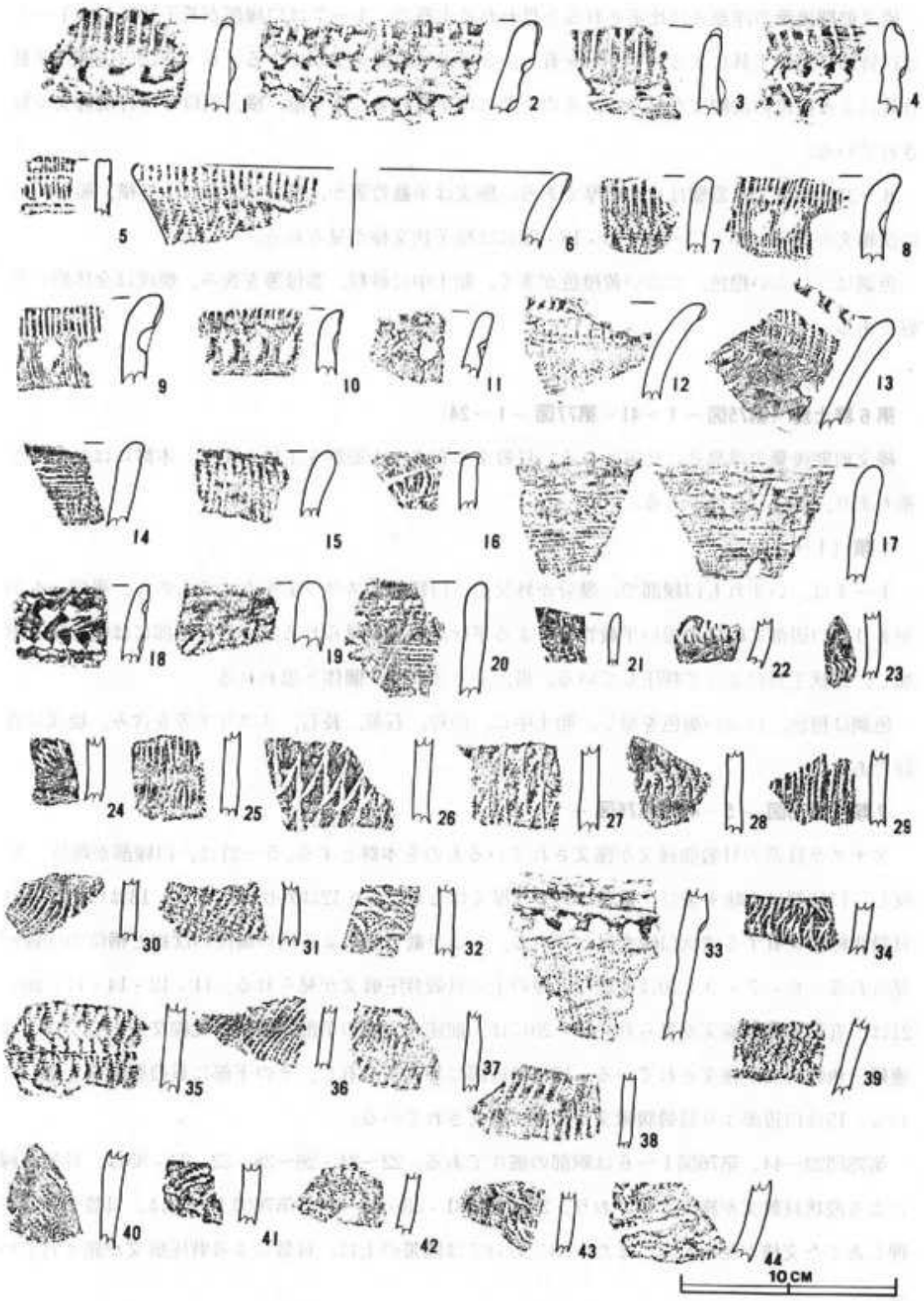
色調は橙色，にぶい褐色を呈し，胎土中に，砂粒，石英，長石，スコリア等を含み，焼成は良好である。

2類（第75図－5～44・第76図－1～6）

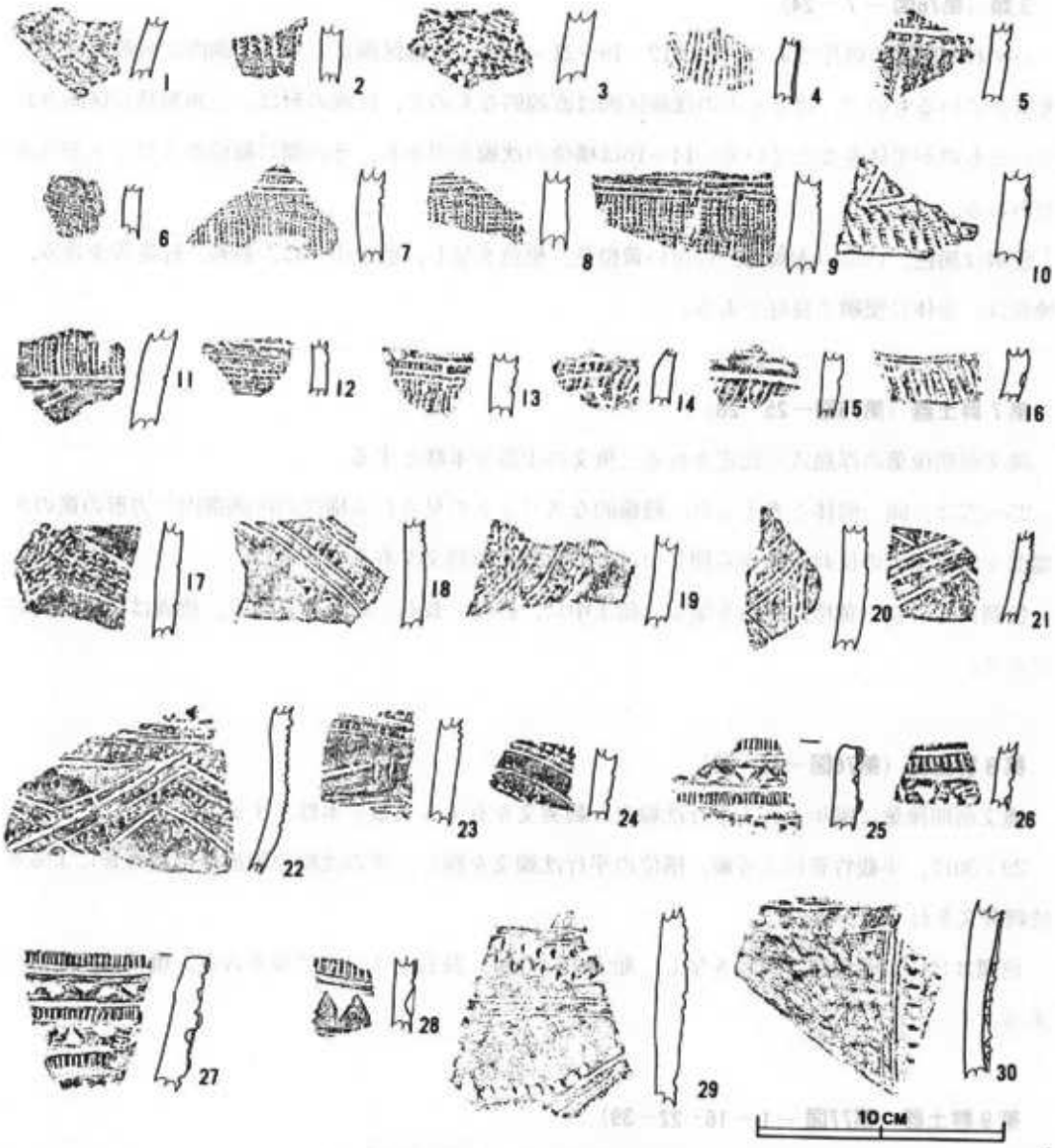
アナダラ貝系の貝殻腹縁文が施文されているものを本群とする。5～21は，口縁部が幾分，外反し，口唇部は丸味を帯び，器壁はあまり厚くはない。6・12は外反が大きく，13は口辺部より貝殻腹縁文を有する波状口縁を呈している。5は半截竹管による短い縦位の沈線と横位の沈線が見られる。6・7・9・10は前述の文様の上に貝殻背圧痕文が見られる。11・12・14・17・20・21は，有節貝殻条線文が見られ，17・20には，前述の文様の下部に横位の沈線文がある。18には連続三角刺突文が施文されている。19は口辺部に無文帯を有し，その下部に貝殻腹縁文を有している。15は口辺部より貝殻腹縁文が全体に施文されている。

第75図22～44，第76図1～6は胴部の破片である。22～24・26～28・32・34・35は，貝殻腹縁による波状貝殻文が施文されており，25・29～31・33・36～44，第76図1～6は，貝殻の腹縁を押しあてた文様が見られる。また，33においては隆帯の上に，貝殻による背圧痕文が施されている。

色調はにぶい黄褐色，にぶい橙色，にぶい褐色，明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，スコリア，石英，長石等を含み，焼成は全体的に良好である。



第75図 グリット出土遺物(4)



第76図　グリット出土遺物(5)

3類（第76図－7～24）

いずれも胴部の破片であり，10～12・19～21・24は，沈線区画により，区画内に貝殻腹縁文を充填しているもので，ほとんどの沈線区画は直線的なもので，区画の形は，三角形状に区画されているものが主体をなしている。14～16は横位の沈線が引かれ，その間に縦位のスリットがうかがわれる。

色調は褐色，にぶい赤褐色，にぶい黄橙色，橙色を呈し，胎土中には，砂粒，石英等を含み，焼成は，全体に堅緻で良好である。

第7群土器（第76図－25～28）

縄文前期後葉の浮島式に比定される三角文の土器を本群とする。

25～27は，同一個体と考えられ，紐線的なスリットの見られる横位の区画帯内に方形の竹の先端部を斜日上下の反対方向から押しつけた三角形の彫刻文を有している。

色調は，にぶい黄橙，橙色を呈し，胎土中に，砂粒，長石，石英等を含み，焼成は全体に良好である。

第8群土器（第76図－29・30）

縄文前期後葉に編年される平行沈線文と刺突文を有する土器を本群とする。

29・30は，半截竹管による縦，横位の平行沈線文を施し，その沈線の側面に半截竹管による連続刺突文を行っている。

色調はにぶい黄橙色，橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石，スコリア等を含み，焼成は，良好である。

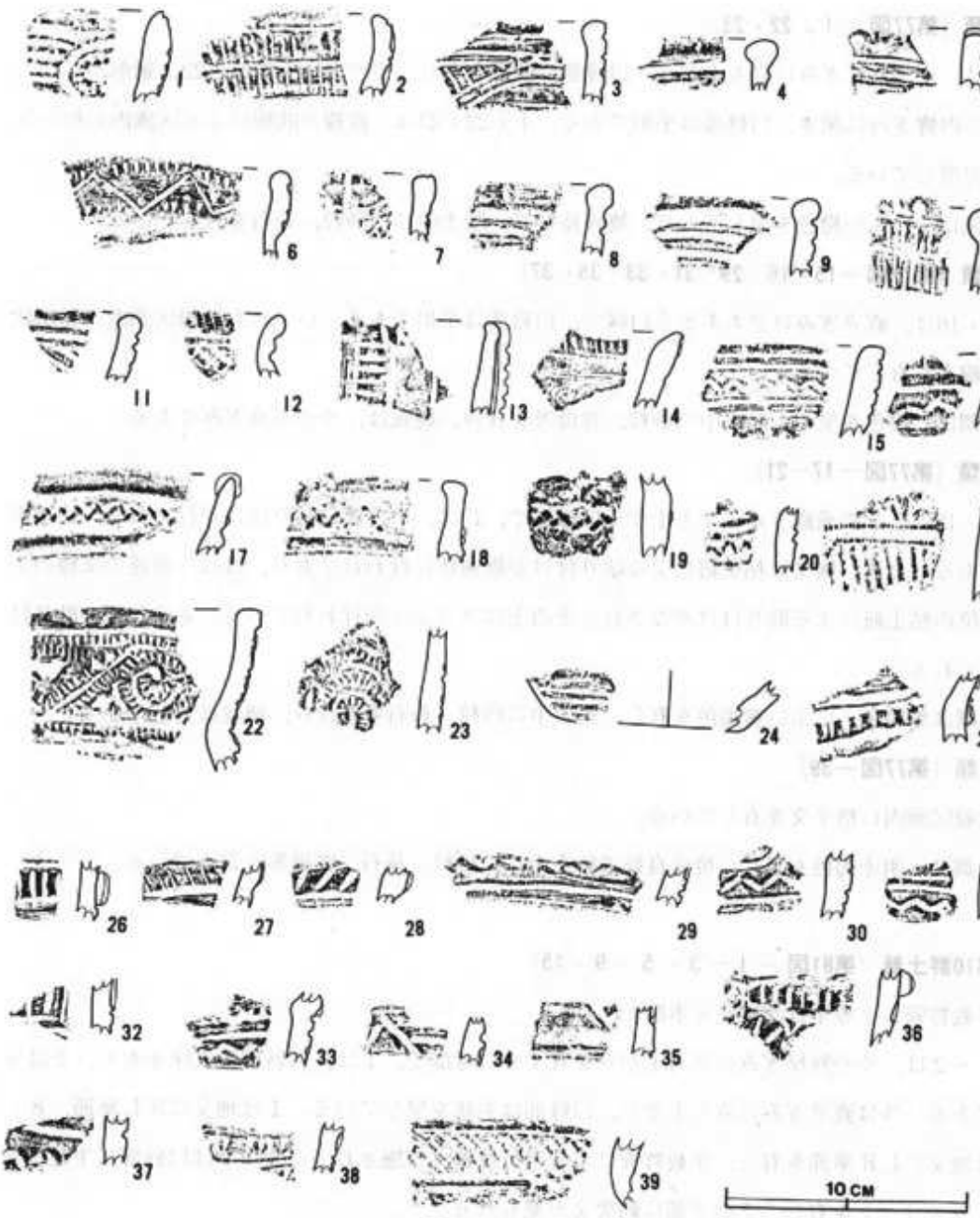
第9群土器（第77図－1～16・22～39）

沈線による区画と短沈線による区画内充填を持つ土器を本群とする。

1類（第77図－2～16・25～28・32・34・38）

2・3・10～13は，沈線区画が一直線的な口縁部の破片で，3～11・13・14は，直立ぎみに立ち上がり，口唇部附近で内傾している。2は内彎して立ち上がる。12は外反して立ち上がり，口唇部で大きく開いている。また，2・3・6・7・10・12～14・25～28・32・38は，沈線区画内にスリットによる縦，横位の施文がなされている。4・5・8・9・11は，横位の沈線による文様を有している。6は，山状の通続沈線文が施されている。

色調は，明赤褐色，にぶい赤褐色等を呈し，焼成良好で，胎土中に砂粒，スコリア等を含んでいる。



第77図　グリット出土遺物(6)

2類（第77図－1，22・23）

1は，やや外反ぎみに立ち上がり，口唇部に凹面を有し，やや丸味を帯び，22は頸部から「く」字状に内彎ぎみに開き，口唇部は平坦である。1・22・23は，直線と曲線による区画内に短い沈線を充填している。

色調は，にぶい橙色を呈しており，焼成良好で，胎土中に，砂粒，長石を含んでいる。

3類（第77図－15・'16・29～31・33・35・37）

15・16は，直立ぎみに立ちあがる口縁で，口唇部は平坦である。いずれも沈線区画内に鋸歯状の沈線文を有している。

色調は，橙色を呈し，胎土中に砂粒，雲母等を含み，焼成は，やや不良ぎみである。

4類（第77図－17～21）

17・18は，やや垂直ぎみに立ち上がる口縁部で，17は，口唇部に貼り付けが行われて，18は平坦である。全体に施文は粘土紐による貼り付けが鋸歯状に行われており，21は，前述の文様の下に横位の粘土紐による貼り付けがなされ，その上にスリットが行われている。さらに縦の貼り付が見られる。

色調は黒褐色，にぶい黄褐色を有し，胎土中に砂粒，長石等を含み，焼成は良好である。

5類（第77図－39）

沈線区画内に格子文を有している。

色調は，明赤褐色を呈し，焼成良好で胎土中に，砂粒，長石，雲母等を含んでいる。

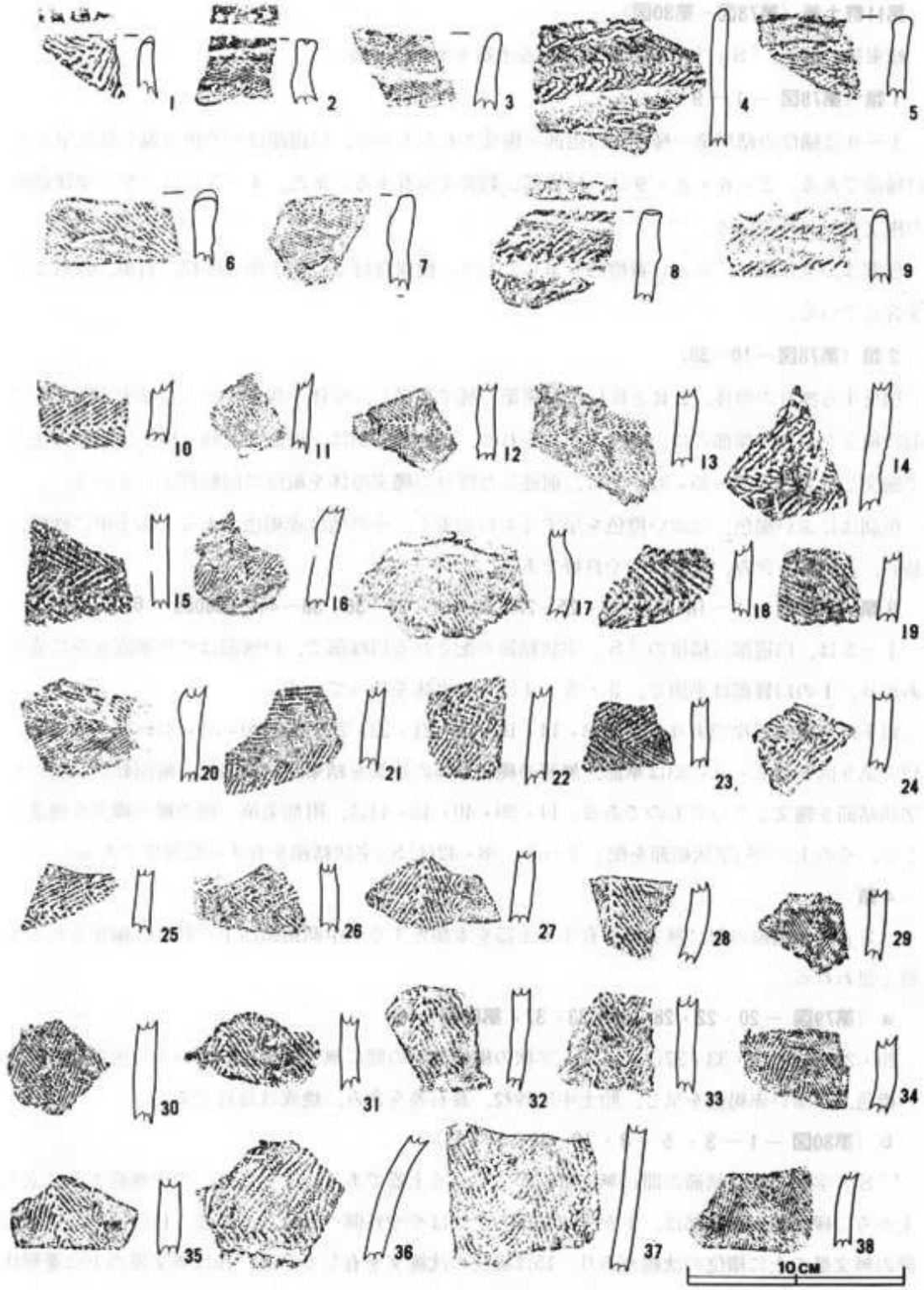
第10群土器（第81図－1～3・5～9・15）

半截竹管による平行沈線文を本群とする。

1・2は，やや外反ぎみに立ち上がりを有する口縁部で，1は，口唇部に丸味をもち，2は平坦である。3は直立ぎみに立ち上がり，口唇部は尖状を呈している。1は地文にＲＬ単節，8・9は地文にＬＲ単節を有し，半截竹管による平行沈線文が施されている。3は口唇部に半截竹管によるスリットを有し，その下部に刺突文が見られる。

2・5・6・7は，撚りのやわらかい縄文を地文とし，半截竹管による沈線が配されている。15は，地文に無節の縄文を配し，曲線的な沈線の上に爪形文が施文されている。尚，15は縄文前期後葉の諸磯式に比定されるものと思われる。その他は不明である。

色調は，にぶい橙色，にぶい褐色等を呈し，胎土中に，砂粒，雲母，石英，長石などを含み，焼成は全体的にやや良好である。



第78図　グリット出土遺物(7)

第11群土器（第78図～第80図）

結束第一種と，「S」字状結節が見られる土器を本群とする。

1類（第78図－1～9）

1～9は横位の結束第一種が，口辺部に施文されたもので，口辺部はやや折り返し状を呈する口縁部である。2・6・8・9は，口唇部に刺突文を有する。また，4・5には「S」字状結節の施文が行われている。

色調は，全体的に，にぶい黄橙色を呈しており，焼成良好で，胎土中に砂粒，石英，長石などを含んでいる。

2類（第78図－10～38）

相反する撚りの原体，LRとRLを結束第一種で連結し，原体の端部をさらに結束するもので，羽状縄文を呈し，端部には，綾絡文が見られる。10～26・36は，前述した組を横位に回転押圧して施文したもの，27～35・37・38は，前述した撚りの縄文原体を縦位に回転押圧している。

色調はにぶい褐色，にぶい橙色を呈するものが多く，その他は赤褐色である。胎土中に砂粒，長石，石英等を含み，焼成はやや良好である。

3類（第79図－1～18・21・23・25～27・30・31・34～36・38～44・第80図－6・7・9）

1～5は，口辺部に横位の「S」字状結節が配される口縁部で，口縁部はやや垂直ぎみに立ちあがり，1の口唇部は平坦で，2・3・4はやや丸味を持っている。

以下は全部胴部片であり，6～13・14・16～18・21・23・25～27・30・31・34～36・38・40・42・第9図6・7・9・33は単節，無節の縄文原体の端部を結束し，横回転，縦回転によって「S」字状結節を施文しているものである。14・39・40・43・44は，附加条第一種の縄の縄文を地文にして，その上に「S」字状結節を配している。38・42は「S」字状結節を有する底部片である。

4類

「S」字状結節の間に無文部を有する土器を本類とする。中期初頭の下小野式に編年される土器と思われる。

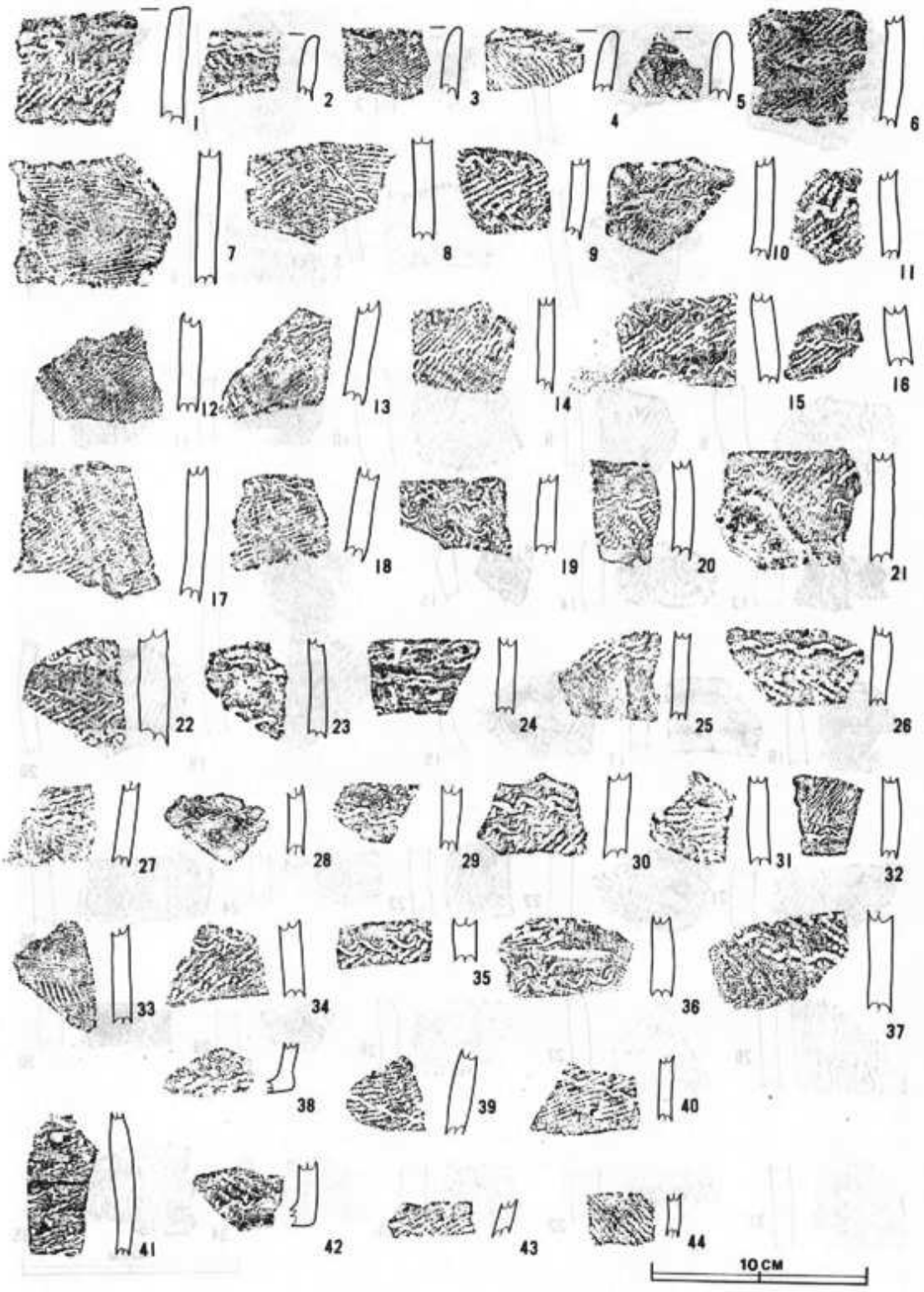
a（第79図－20・22・28・29・33・37・第80図－4）

20・22・28・29・33・37は，「S」字状の横位結節の間に無文帯を作っている。色調は，にぶい橙色，にぶい赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石等を含み，焼成は良好である。

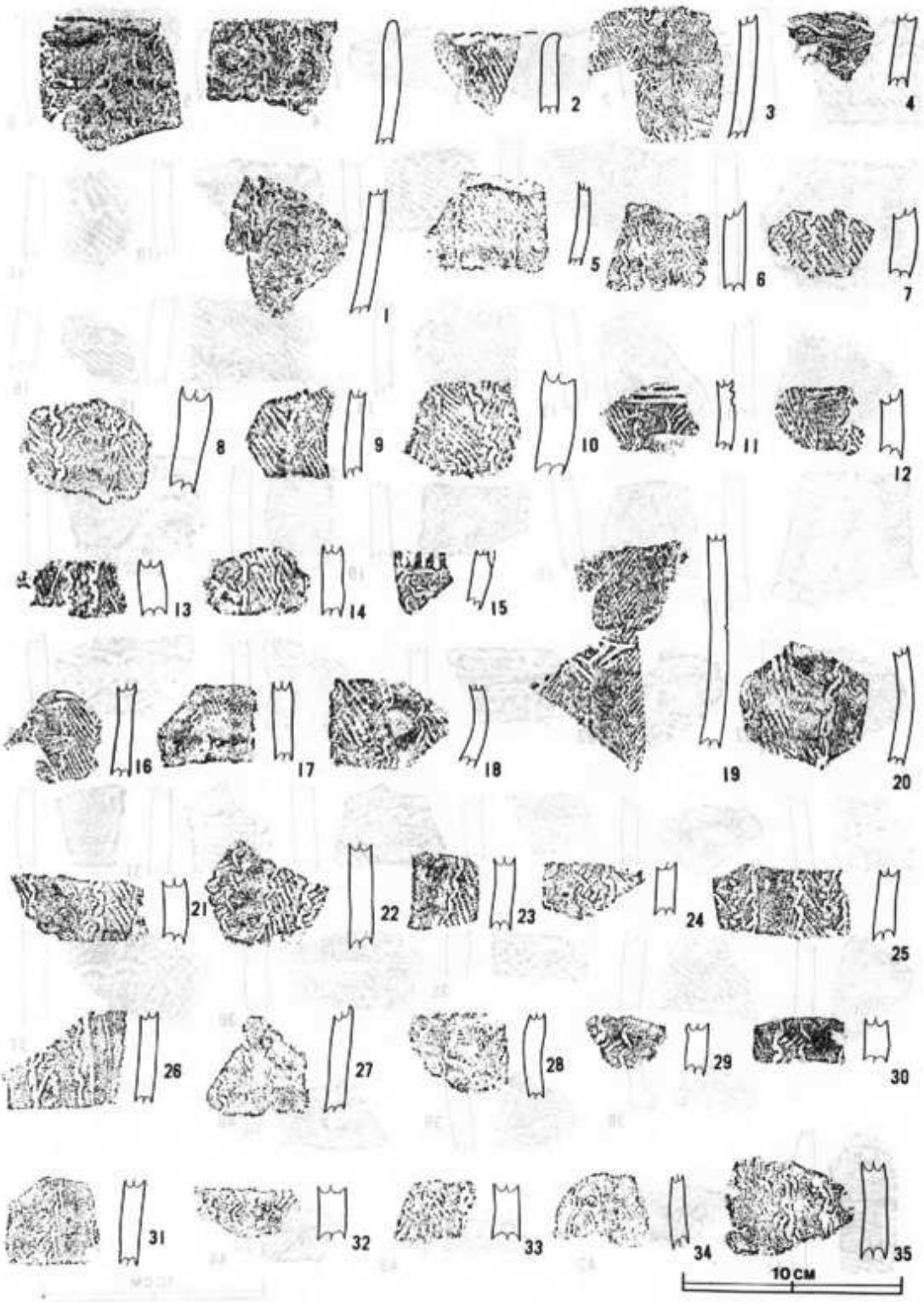
b（第80図－1～3・5・8・10～32・34・35）

「S」字状の縦位結節の間に無文帯を作っている土器である。1・2は，やや垂直ぎみに立ち上がる口縁部で，口唇部は，1が丸味を持ち，2はやや外側へ外反している。11は「S」字状結節の無文帯の上に横位の沈線があり，15は縦位の沈線文を有している。19は無文帯の上に菱形状沈線文が配されている。8・9の器壁は肥厚している。

色調は，にぶい褐色，にぶい黄褐色を呈しており，胎土中に砂粒，石英，長石等を含み，焼成は，やや良好である。



第79図　グリット出土遺物(8)



第80図　グリット出土遺物(9)

第12群土器（第81図 － 4・10～14）

口縁部に三段ほどの半截竹管による平行沈線が見られ，沈線沿に刺突文が施されている。地文はL $\frac{R}{R}$が横位に回転押圧され，「S」字状結節が見られる。口縁部は直線的に外反し，口唇部は薄くなり，丸味を呈している。10～14は，同一個体と思われる。

「S」字状結節の存在から中期初頭の下小野式に類似が認められるが，類例が県内にはみられない。時間的には，大差ないものであろう。

色調は，赤褐色，にぶい褐色を呈し，胎土中に，砂粒，スコリア，長石等を含み，焼成は良好である。

第13群土器（第82図 － 1 ～40）

縄文中期中葉の大木７ｂ式に相当するだろうと思われる土器で，側面体圧痕文を有する土器を本群とする。

1 ～26は，いずれも口辺部に口唇部とやや平行する側面体圧痕文を有する口縁部である。16～19・21・25～27は横位の側面体圧痕文だけを配する。1・3・13・14・23は，前述した文様に曲線的な圧痕文を加えている。2・4～9・12・15・20・22～24は，横位の側面体圧痕文に，縦，斜位の圧痕文を配している。10・11は斜位の側面体圧痕文と横位の沈線文によって文様が構成され，同一個体と考えられる。2・13には，口唇部にも圧痕文が配されている。8・13・22～24は波状口縁を呈している。

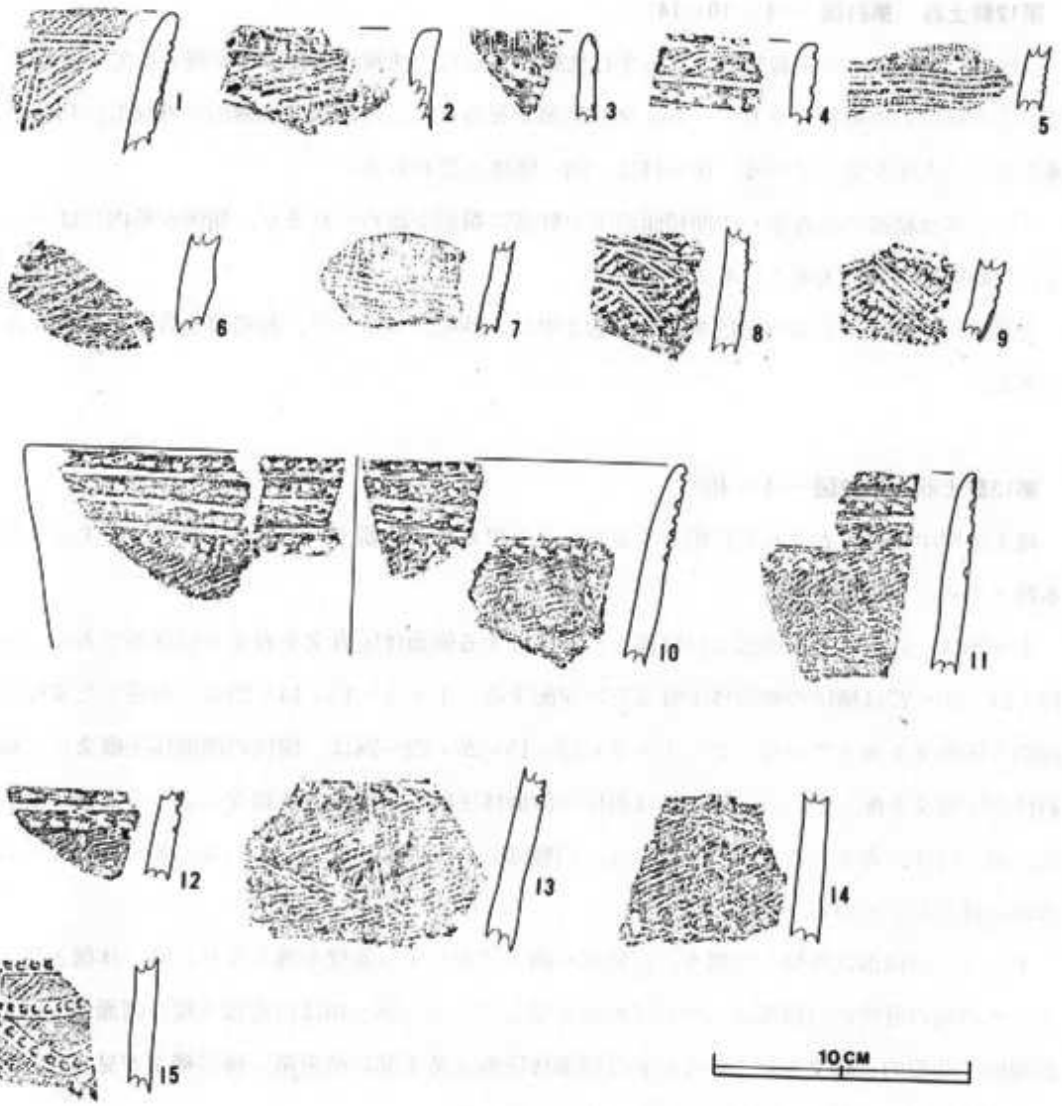
1・3の口縁部は外反して開き，口唇部へ向って少しずつ器壁が薄くなり，同一体個と思われる。その他の遺物の口唇部は，やや半斑状を呈している。28～40は口辺部下端に側面体圧痕文を直線的，曲線的に施文されている。40は側面体圧痕文帯下部に結束第一種の縄文が見られ，前述の第11群土器の一部と，同器形の各部とも考えられる。

色調は橙色，明赤褐色，にぶい橙色などを呈しており，焼成良好で，胎土中に砂粒，長石，石英等を含んでいる。

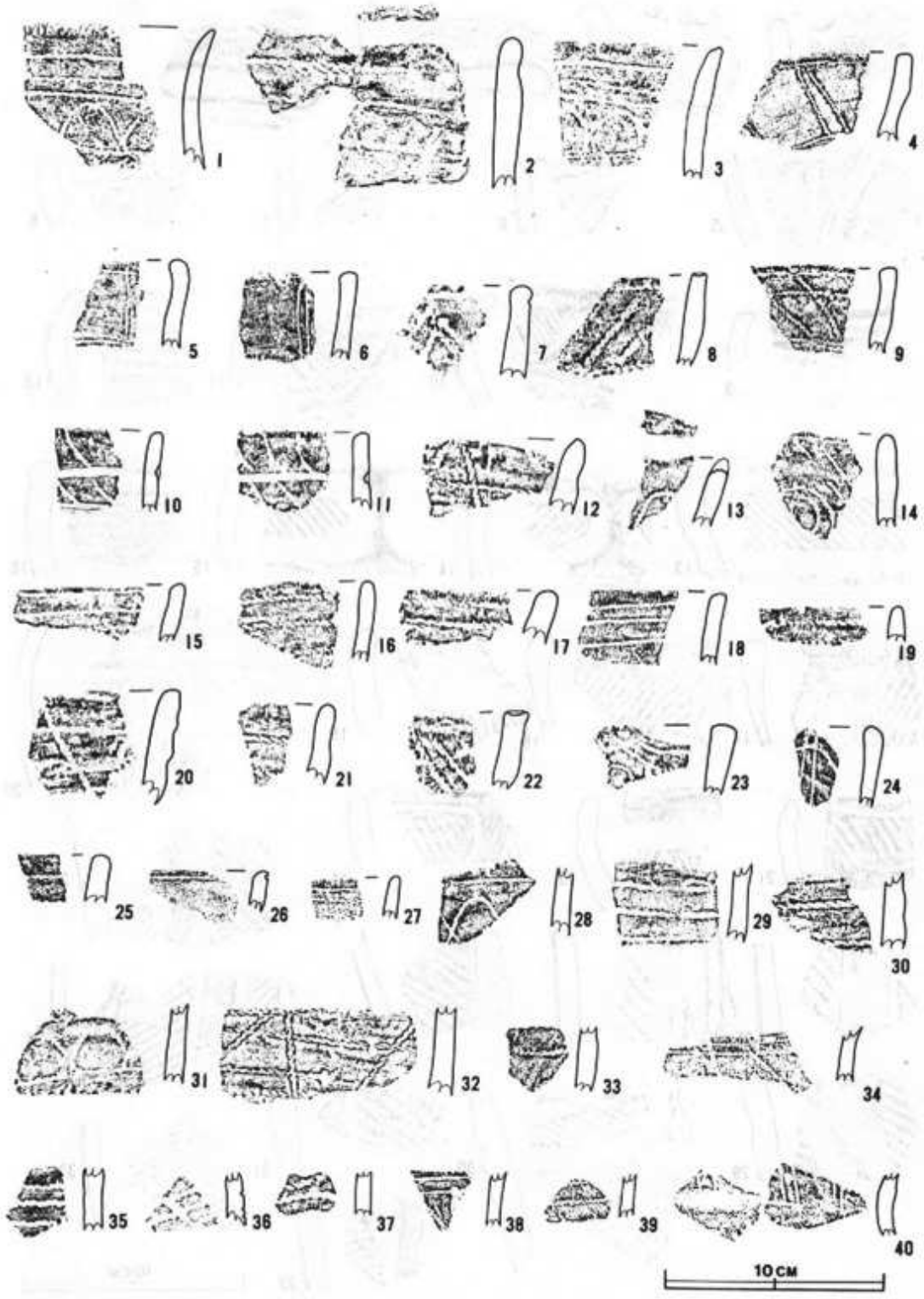
第14群土器　（第83図 －1 ～8）

縄文中期中葉の阿玉台に比定される結節沈線文等に代表される土器群を本群とする。

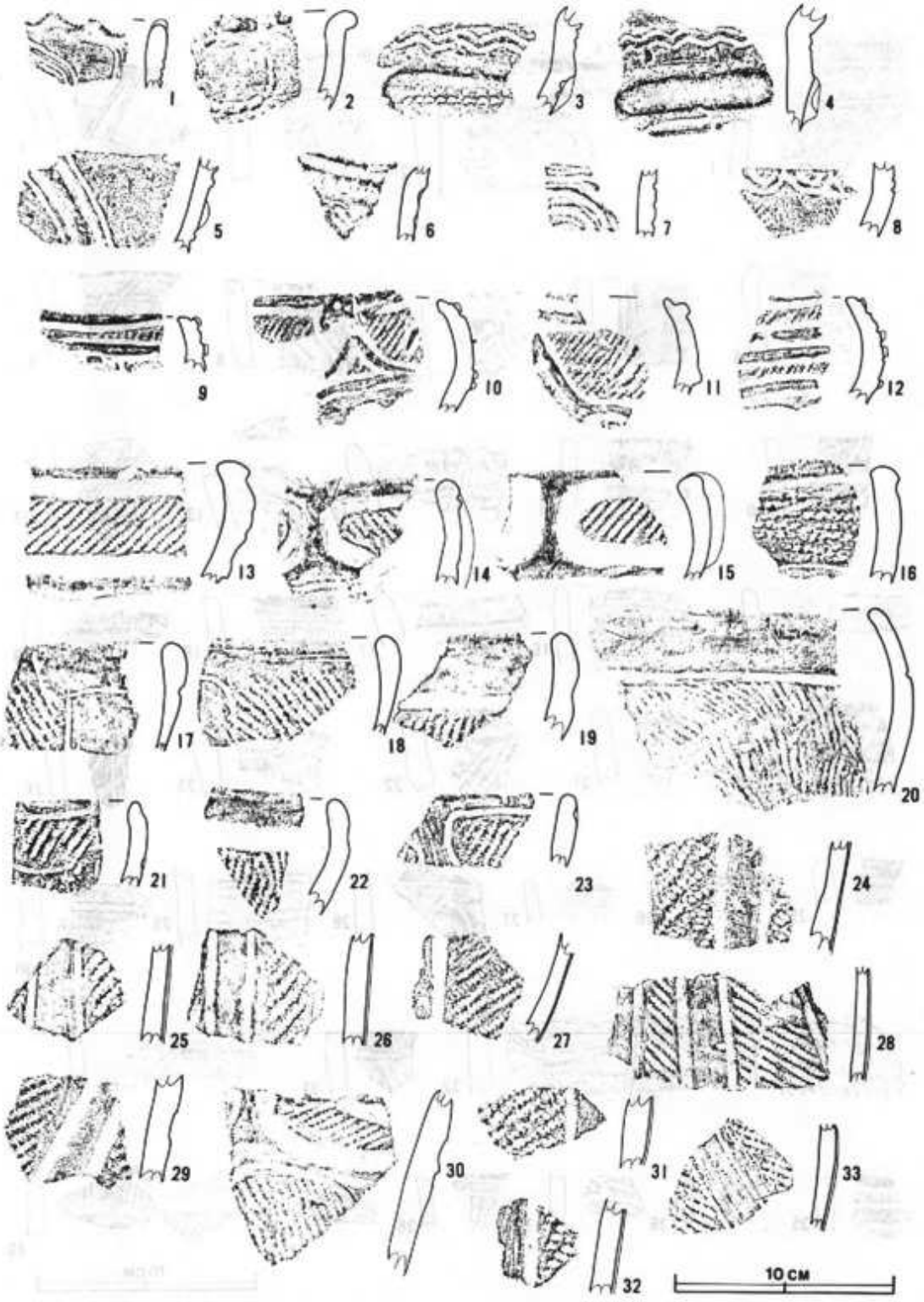
1は，半截竹管による曲線的な文様をもち，波状口縁を呈している。2はやや内彎ぎみに立ち上がり，口辺部附近から大きく外反して開き，文様は円形状の結節沈線文が配されている。3・4は半截竹管による波状の沈線文が配され，3はさらに貼付隆帯文の上に結節沈線文が見られる。尚，3・4は同一個体と思われる。5は貼付隆帯文が見られ，6は半截竹管による刺突文が配されている。7は半截竹管による直線的，曲線的な平行沈線文が配され，8は半截竹管による弧状



第81図　グリット出土遺物(1)



第82図　グリット出土遺物(1)



第83図　グリット出土遺物(2)

の沈線文が見られる。

色調は，にぶい赤褐色，明褐色を呈するものが多く，胎土中に，砂粒，石英を含み，焼成は普通である。

第15群土器（第83図－9～12）

縄文中期中葉の加曽利E（古式）に比定され，口辺部文様帯に，隆帯区画を施すものを本群とする。

9～12は大きく内傾して立ち上がる口縁部である。縄文を地文として，貼付隆帯文を作り，その端部をなぞっているものである。2は隆帯のところに三角形状の沈線文が配されている。器形は，キャリパー状の深鉢形を呈するものと思われる。

色調は，黒褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英を含み，焼成は良好である。

第16群土器（第83図－13～32・第84図－1～21）

縄文中期後葉の加曽利E（新式）に比定され，磨消縄文，微隆起線を有する土器を本群とする。

1類（第83図－13～33）

磨消縄文を有する土器を本類とし，13～23はやや内彎しながら立ち上がり，口唇部は全体に丸味を帯びた口縁部である。地文に縄文を配し，その後，縄文の文様を磨消して，文様を構成しているものである。13～15・22は地文の縄文と磨消した区画を明確にするため，なぞりを行っている。14・15は楕円形状の区画を有し，16～18・20・21・23は沈線によって区画を作り，17・18は懸垂文が見られる。さらに，19・20は口辺部に無文帯を有し，胴部文様区を横位沈線で区画し，胴部は縄文のみを施すものである。24～33は前述の文様帯を有する胴部片である。

色調は，にぶい褐色，にぶい橙色，明赤褐色を呈するものが多く，胎土中に，砂粒，石英等を含み，焼成は良好である。

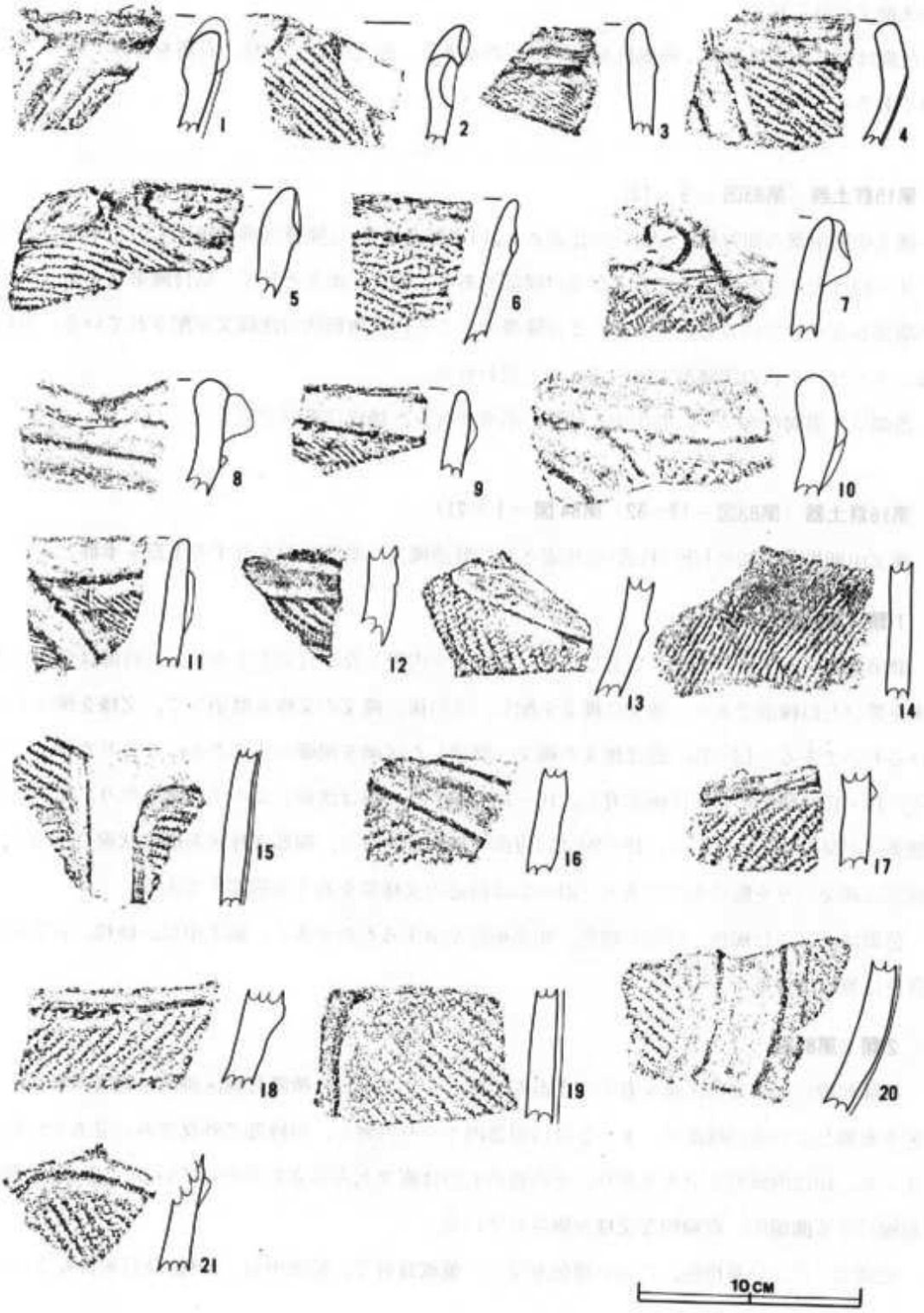
2類（第84図－1～21）

微隆起線による文様区画を有する土器を本群とし，1～11は微隆起線区画内に縄文の単節，無節を充填している口縁部で，1・2は口辺部内でやや内彎し，口唇部で外反ぎみに立ち上がる。4・8・10は内傾的に立ち上がり，その他のものは直立ぎみに立ち上がっている。12～21は微隆起線による曲線的，直線的な文様が施されている。

色調は，にぶい黄橙色，にぶい橙色を呈し，焼成良好で，胎土中に，砂粒，長石を含んでいる。

縄文土器底部（第87図－2・3）

2・3は加曽利E式の深鉢形土器の底部片で，底面の中央部がやや凹面を呈している。胴部は底部より大きく直線的に立ち上がる。

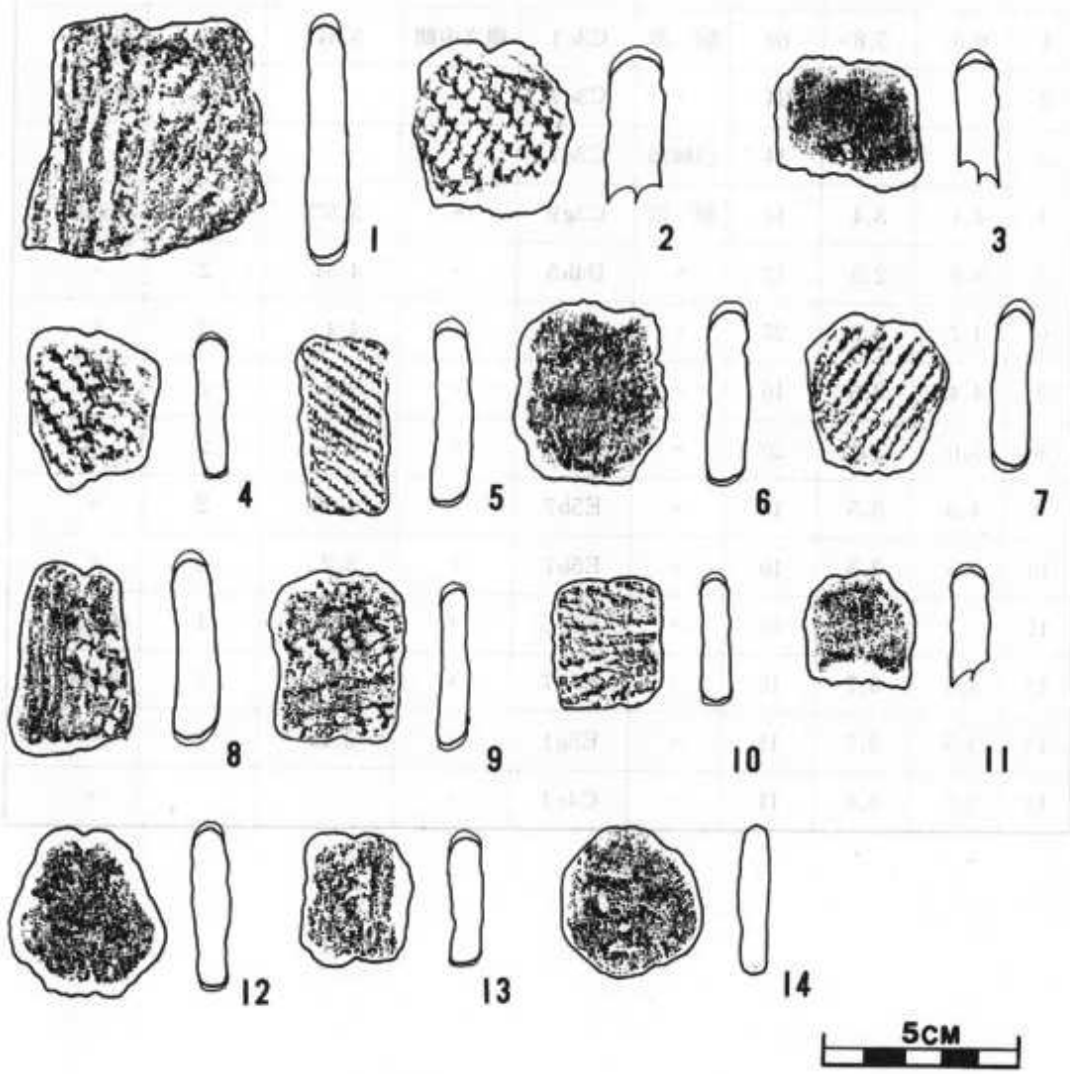


第84図　グリット出土遺物(3)

2 土 製 品

土器片錘（第85図－1～13）

土器の破片を利用して楕円形，長方形に整形し，その両端に糸掛けを施したものである。本遺跡から出土した土器片錘は極めて少数で，総数で13個出土している。そのうち10個は完造品である。1・4・5・7～10・12・13は，ノッチを2ケ所有し，いずれも糸ずれ痕がみられる。6はノッチが3ケ所確認されており，おそらく，ノッチを4ケ所有していた土器片錘であろうと思われる。また，大部分の土器片錘は，側縁が丸味を帯びており，使用中に磨れたものと考えられる。長軸を4.5cm前後を有する土器片錘が，60%を占め，重量は10～20gのものが，全体の60%で，21～30gのものが20%，その他は30g以上の土器片錘である。素材にした土器は，縄文中期に編年さ



第85図 土 製 品 実 測 図

れる加曽利E式の土器片を利用し，3は口縁部を縦に利用して製作されたものである。その他はいずれも胴部片である。

土製円盤（第85図－14）

土器の破片を利用して円形に加工したものである。本遺跡から1個だけ出土し，無孔のものである。そして，側縁研磨がなされ，直径3.7cmの円形で，重量な11gの完造品である。

土製品一覧表

番号	長軸cm	横幅cm	質量g	部位	出土位置	時期	ノッチの長さ	ノッチの数	備考
1	6.3	5.8	60	胴部	C3c1	縄文中期	5.84	2	完造品
2		4.0	34	〃	C3e7	〃		1	破造品
3		3.7	14	口縁部	C3e7	〃		1	〃
4	4.1	3.4	14	胴部	C3g9	〃	3.575	2	完造品
5	4.9	2.3	12	〃	D4b5	〃	4.34	2	〃
6	4.7	3.8	27	〃	E5a7	〃	4.4	3	〃
7	4.45	3.6	16	〃	E5a7	〃	3.8	2	〃
8	5.0	3.2	20	〃	E5b5	〃	4.5	2	〃
9	4.3	3.5	15	〃	E5b7	〃	4.05	2	〃
10	3.5	3.3	10	〃	E5b7	〃	3.2	2	〃
11		2.7	10	〃	E5c6	〃		1	破造品
12	4.3	3.7	15	〃	E5e7	〃	3.75	2	完造品
13	3.5	2.7	11	〃	E5g1	〃	3.19	2	〃
14	3.7	3.6	11	〃	C4c1	〃			〃

3 石 器

石鏃（第86図 －1 ～4）

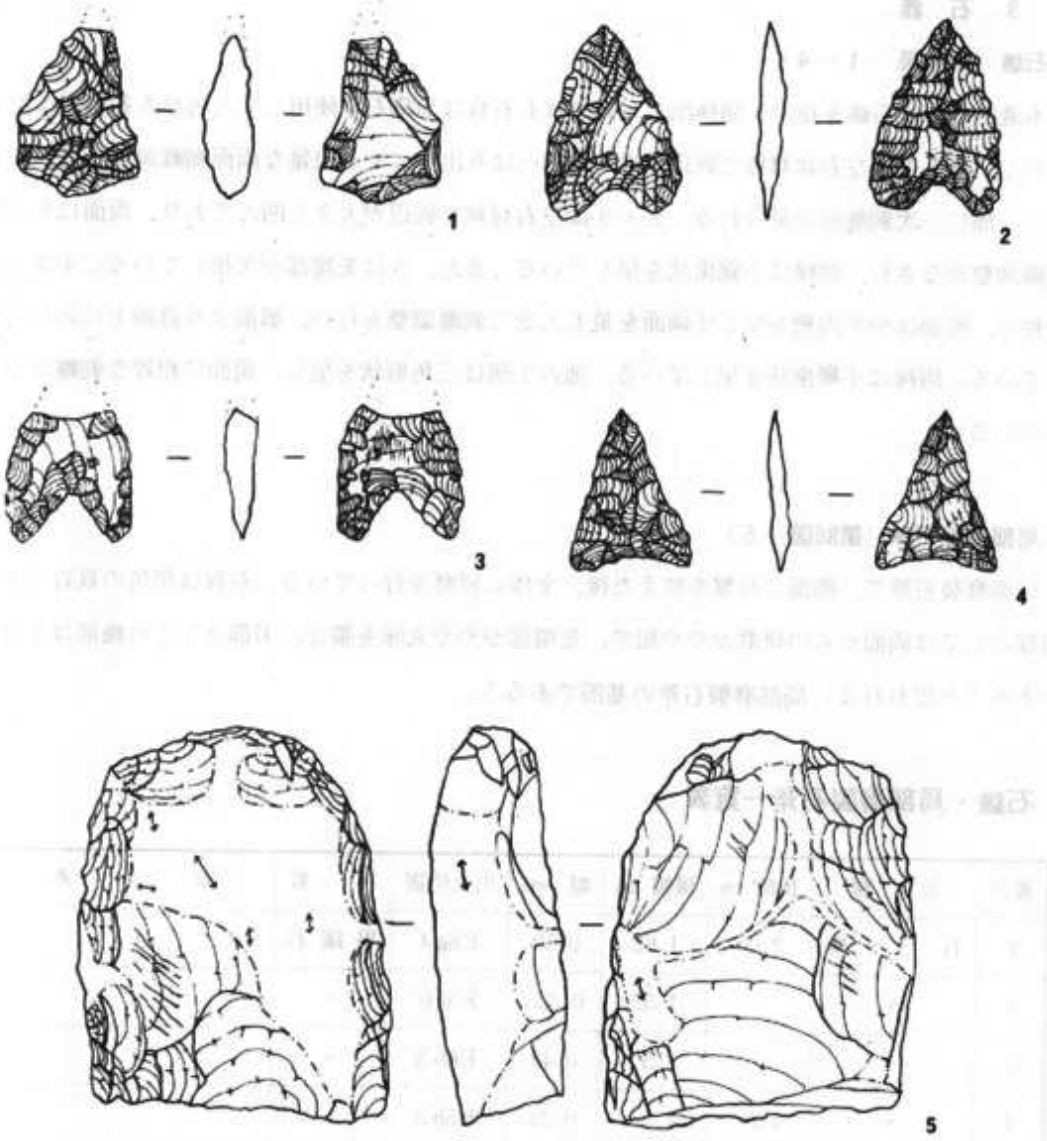
本遺跡からは石鏃を総計5個検出し，いずれも石質は黒曜石を使用して三角形を基本形に製作されている。1は左右非対称で底辺をやや外側へはり出し，やや粗雑な両面剝離調整を行っている。一部に一次剝離痕が見られる。2・3は左右対称で底辺が大きく凹んでおり，両面に入念な剝離調整がなされ，側縁は小鋸歯状を呈している。また，3は先端部が欠損している。4は左右対称で，底面はやや内彎を呈して両面を最も入念に剝離調整を行い，脚部より直線上にのび，尖っている。側縁は小鋸歯状を呈している。他の1個は三角形状を呈し，両面に粗雑な剝離がなされている。

局部磨製石斧（第86図 －5）

局部磨製石斧で，側面に打撃を加えた後，全体に研磨を行っている。石質は黒色の頁岩である。刃部にしては両面からの研磨がやや粗で，先端部がやや丸味を帯び，刃部としての機能は不可能であろうと思われる。局部磨製石斧の基部であろう。

石鏃・局部磨製石斧一覧表

番号	器種	長軸 cm	横幅 cm	幅 cm	出土位置	石質	備考
1	石鏃	2.05	1.62	0.59	E6g4	黒曜石	
2	〃		1.52	0.325	E5f0	〃	
3	〃		1.5	0.42	E6h3	〃	
4	〃	1.8	1.5	0.23	E5h3	〃	
5	局部磨製石斧	3.75	4.93	4.93	E5e9	硬質頁岩	
6	石鏃	1.96	1.62	0.24	D5e5	黒曜石	



第86図　グリット出土石器実測図

第2節　古墳時代以降の遺物（第87図－4～21）

4はD5e8の2層より出土した甕形土器の口縁部である。口縁部は頸部で強く屈曲して除々に薄くなりながら外反する。口唇部はやや丸味をもっている。体部は頸部から緩やかに張り，胴部中位に最大径をもつものと思われる。口径20.2cm，現高11.4cm，胴部最大径20cmを測る。

器外面では口縁部から胴部上位にかけて，縦位，中位は斜位，横位の刷毛目整形痕が見られる。器内面は口縁部に横位の刷毛目整形，体部はなでによる整形を行い，輪積痕が数ケ所見られる。

器外面全体に煤が附着し，色調は明褐色を呈している。また，胎土中に砂粒，石英等を含み，焼成は不良である。

5はE5d0の2層より検出した鉢形土器の口縁部である。口縁部は頸部より強く屈曲し，口唇部附近でやや立ち上がる。体部は頸部よりやや内傾ぎみに底部へ向う。口径14.4cm，現高8.5cmを測る。

器外面は刷毛目整形後，丁寧なで整形が行われ，未消失の刷毛目痕が見られる。内部は丁寧なで整形である。

色調は橙色を呈し，焼成普通で，胎土中に砂粒等を含んでいる。

6はE5f1の2層より検出された甕形土器の口縁部で，口径12.4cm，現高4.8cmを測る。口縁部は頸部からやや直立ぎみに外反して立ち上がる。体部は頸部より強く張り出すものと思われる。

整形は器内外共なで整形が行われ，また，器内外面に輪積痕が見られる。

色調は赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英等を含み，焼成は普通である。

7はE6f3の2層より検出した鉢形土器と思われる口縁部で，口縁部は直線的に外反して立ち上がり，口唇部で内面へやや屈曲して立ち上がる。口唇部はやや尖状を呈す。口径19.2cm，現高6cmを測る。

器内外共に，なで整形で，両面に輪積痕が見られる。

色調は橙色を呈し，表面に一部煤が附着している。胎土中に砂粒等を含み，焼成は普通である。

8はD5h6より出土した甕形土器の口縁部で，口径12.1cm，現高3.8cmを測る。口縁部は頸部よりやや器壁へ薄くなりながら外反して立ち上がる。胴部は頸部より緩やかに張り出す。

整形は口縁部外面は縦位の刷毛目整形痕が見られ，内面は，斜位，横位の刷毛目整形である。

色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英等を含み，焼成は普通である。

9は底径6.4cm，現高3cmを測る底部で，体部は凹面を呈している底面より大きく外反して開き整形は器外面で刷毛目整形がなされ，部分的に残っている。器内面は，なで整形が行われている。

器表面に煤が付着し，橙色を呈す。焼成普通で，胎土中に砂粒，石英等を含む。

10はD5c3の2層より検出された甕形土器の口縁部である。口径16cm，現高3.3cmを測り，口

縁部はやや内彎ぎみに頸部より立ち上がり，口唇部は尖状を呈す。頸部内面に稜をもつ。

器外面は横なで整形を行い，器内面口縁部に横位の刷毛目整形が見られ，体部は，なでによる整形がうかがわれる。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒等を含み，焼成は不良である。

11はＥ６ｆ２の２層より出土した底部片で，底部は厚く，中央部にやや凹面をもち，体部は底部より大きく開いている。底径6.4cm，現高2.5cmを測る。

整形は器外面においては刷毛目整形後，篦なでを行い，底部側面に未消失の刷毛目が見られる。内面は篦なで整形を行う。

色調は，明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒，長石，石英等を含み，焼成は良好である。

12はＤ５ｃ３の２層より出土した底部である。底径（復）6.6cm，現高7.8cmを測り，体部は底部よりやや内彎ぎみに立ち上がる。

整形は器内外共に刷毛目整形で，外面は縦，斜位，内面は横位の整形である。

色調は明赤褐色を呈し，焼成不良で，胎土中に砂粒，スコリア等を含んでいる。

13はＤ５ｇ１の２層より検出された底部で，体部は平坦な底面よりやや内彎ぎみに立ち上がる。底径6.4cm，現高5.7cmを測る。

整形は内外共になで整形がなされ，色調は明褐色を呈している。焼成は普通で，胎土中に砂粒，スコリア等を含んでいる。

14はＥ６ｅ２の２層より出土した小型製形土器と思われる底部である。底径2.4cm，現高3.7cmを測る。体部は平坦な底部より内彎しながら立ち上がる。

整形は器外面で刷毛目整形が，縦，横位の整形が見られ，器内面は篦なでが見られる。

色調はにぶい橙色を呈し，胎土中に，砂粒，長石，石英等を含んでおり，焼成は普通である。

15はＥ５ｉ７の２層より出土した器台の脚部である。脚部は緩やかに大きく外反し，中央孔は直径1.6cm，脚部の孔は３孔で直径1.1cmほどである。

器外面は篦状工具によるなでが行われ，内部は横位の刷毛目整形痕が見られる。

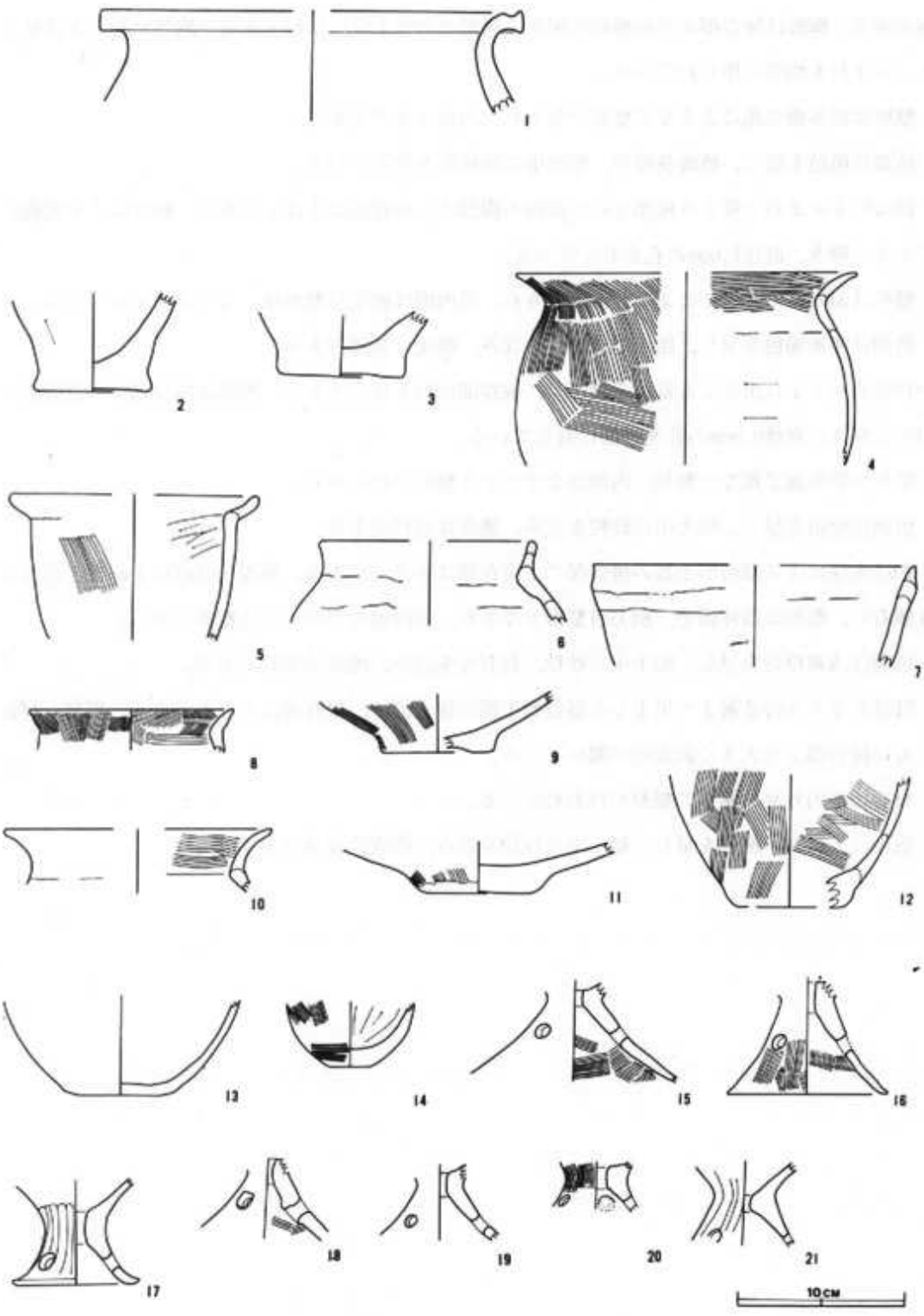
色調は明褐色を呈し，胎土中に砂粒，石英，長石等を微量含み，焼成は良好である。

16はＥ６ｇ１の２層より出土した器台の脚部で，現存部は約$\frac{1}{3}$ほどである。現高6.7cm，脚部径9.6cmを測る。脚部は接合部よりやや緩やかに外反しながら開く，中央孔直径1.6cm，脚部に直径1.0cmほどの孔を３個有している。

器外面は裾部上位に縦位の刷毛目痕が見られ，脚部上位はなでによる整形が見られる。内部には刷毛目整形痕が見られ，裾部になでが行われている。

色調は，にぶい赤褐色を呈し，胎土中に砂粒等を含み，焼成は普通である。

17はＥ５ｆ０の２層より出土した器台の脚部である。現存部$\frac{1}{2}$ほどで，裾部径は6.6cm，現高5.9



第87図　グリット出土遺物

cmを測る。脚部は接合部より直線的に開き，裾部でやや上位にはね上がる。裾部に孔が3個見られ，いずれも均等に作られている。

整形は器外面で篦によるなで整形がなされ，内面はなでである。

色調は橙色を呈し，焼成良好で，胎土中に砂粒等を含んでいる。

18はC4a2の2層より検出された器台の脚部で，現存部は$\frac{1}{3}$ほどである。脚部はやや直線的に大きく開き，直径1.0cmの孔を有している。

整形は器外面で，なでによる整形がなされ，器内面は刷毛目整形後，なでが行われている。

色調は明赤褐色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

19はE6i1に出土した器台の脚部で，現存部は約$\frac{1}{2}$ほどである。脚部は接合部より直線的に大きく開き，直径0.9cmの孔を脚部に有している。

整形は器外面で篦なで整形，内面はなでによる整形が見られる。

色調は橙色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。

20は表採による器台形土器の接合部で，現存部は$\frac{1}{3}$ほどである。脚部には直径1cmほどの孔が3個有り，整形は器外面で，刷毛目整形がなされ，器内面はなでによる整形である。

色調は浅黄橙色を呈し，胎土中に砂粒，長石等を含み，焼成は不良である。

21はE6f3の2層より出土した器台形土器の接合部で，現存部は$\frac{1}{2}$ほどである。脚部，杯部ともに接合部より大きく直線的に開いている。

整形は器内外共に篦なで整形が行われている。

色調は，にぶい橙色を呈し，胎土中に砂粒を含み，焼成は普通である。

第5章　ま　と　め

沖餅遺跡を約10ケ月発掘調査を実施した結果，確認された遺構，遺物は，前述したように，住居址14軒，土壙6基，溝1条で，遺物は先土器時代の石器類，縄文式土器，土師式土器である。すなわち，当遺跡は，先土器時代，縄文時代，古墳時代の重複遺跡と考えられる。

調査の概要と各遺構，遺物等については前述してあるので，ここでは調査によって明らかになった事実と問題点について遺構ごとに，まとめたい。

第1節　先土器時代の遺物

茨城県内における先土器時代の遺跡は現在までに90数ケ所が確認されており，特に県北地方に多数確認されている。最近になって茨城県内でも先土器時代の遺跡の発掘調査が本格的に実施されるようになり，県内における先土器時代の歴史が少しずつ解明しつつある。

最近茨城県内で発掘調査が実施された遺跡は，勝田市後野遺跡（註1），那珂町額田大宮遺跡（註2），鹿島郡鹿島町伏見遺跡（註3）である。各遺跡の概要は次の通りである。（報告書より抜粋する。）

(1)　後野遺跡

A地区

遺物包含層は黄褐色パミス層に集中し，若干軟質ローム層上面に及んでいる。出土遺物は石刃，彫器，削器，掻器，尖頭器，石斧，剥片が検出され，また，無文の土器を37点出土した。

B地区

遺物包含層は黄褐色パミス層から褐色軟質ローム層中に多く出土し，さらに褐色硬質ローム層上面にまで及んでいる。出土遺物は細石刃核，細石刃，彫器，彫器削片，削器，礫器，尖頭器，剥片などを出土している。

(2)　額田大宮遺跡

遺物包含層は褐色軟質ローム層中から大部分の石器が検出され，一部褐色硬質ローム層上面にまで及んでいる。出土遺物は，細石刃核，細石刃，掻器，削器，円盤形石器，砧石器が検出され，石器の素材は頁岩のものと，安山岩，砂岩系の石質に分類され，前者は細石刃，後者は大型石刃石器を作出している。

(3) 伏見遺跡

遺物包含層は黄褐色ローム（ソフトローム）から検出され，出土遺物はナイフ形石器，尖頭器，掻器，石核，剥片などである。

また，当教育財団が昭和52年に発掘調査を実施した竜ケ崎市若柴町松葉遺跡(R 21)（註４）からは先土器時代の遺物と思われるブレイド，剥片等の３点が出土し，茨城県南部の筑波稲敷台地では確認されていなかった先土器時代の遺跡として把握されるようになった。県南地方の先土器時代解明の第１歩が開始された訳である。沖餅遺跡は松葉遺跡と同一台地上に有り，松葉遺跡より北東約500mに位置している。さらに当遺跡より北西亜支谷を隔てた約600mのところに位置する赤松遺跡からはメノウを石質とする完形のグレーバー１点，ブレイド１点が検出されている。層位的な裏付けはないが，この様に同一台地上に先土器時代の遺物と看取される石器が確認されているので，先土器時代の文化がこの台地上に存在したと考えられる。

当遺跡から検出された遺物は，舟底形石器６点，石核１点，掻器17点，削器20点，Uフレイク15点，尖頭器２点，敲石２点，凹石２点，その他剥片140点，チップ59点，礫120点を出土している。

石器等の石質を観察すると，頁岩，黒曜石を素材にしたものが多く，特に石器に関しては頁岩を素材にして作られたものが圧倒的に多く検出されている。また，平面分布を見ると，頁岩，黒曜石の分布位置が異なり，黒曜石の出土した同一層中には縄文式土器が包含されており，石質の異なった二つの文化層が存在していたと思われる。

石器の中には先端部，基部が破損しているものが当遺跡から10点検出されており，主に掻器に多い。破損した石器は頁岩のもの８点，安山岩のもの２点で，使用中に破損したものか，切断して石器を製作したものか，明確に区別する事はできないが，使用中に破損した可能性が大であろうと思われる。県内には同類の破損した石器類を10点以上検出した遺跡はなく，今後の類例の増加を待ち，検討課題にしたい。

当遺跡から舟底形石器６点が検出し，多くは同地区（ユニットＡ群）からの出土で，石質は頁岩，泥質砂岩である。当初細石刃核と考えられたが，当遺跡から細石刃は１点も検出されていず，また，剥離された剥片を細石刃として使用する事は不可能であろうと考えられる。舟底形石器に類似している石器類が出土している遺跡は，茨城県内では勝田市後野遺跡（註１）に細石刃を製作した舟形細石刃核が４点検出されており，何らかの文化的な関係を有していたと思われる。

編年的位置については，細石刃使用年代より新しい編年と考えられるが，詳細な分析まで行われず，また，舟底形石器の類例が少ないため，今後の検討課題としたい。

註1　後野遺跡調査団「後野遺跡」茨城県勝田市教育委員会　昭和51年12月
註2　川崎純徳・渡辺　明・星山芳樹「額田大宮遺跡」那珂町史編纂委員会　昭和53年3月
註3　伏見遺跡調査団「常陸伏見」伏見遺跡調査会　昭和54年11月
註4　財団法人　茨城県教育財団「竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告Ⅰ・松葉遺跡」昭和54年3月

茨城県下先土器時代主要遺跡一覧表（常陸伏見遺跡より）

事項 遺跡名	所在地	立地	標高(m)	土層	遺物の種類	総点数	備考
赤塚	水戸市河和田町赤塚西団地内	桜川（那珂川支流）左岸台地上	33	ソフトローム	大型石槍4（砂，頁），掻器2（黒），石核3（頁，瑪，流），刃器及び剥片利用石器3，石片多数	55	○土器は出土していないが，すでに出現している時期のもの。 ○昭和46年発掘
鹿野場	日立市宮田町字頭ケ作鹿野場	数沢川（宮田川支流）両脇の上位段丘上		軟色ローム（Ⅱ）暗褐色軟質ローム（Ⅲ）	スクレーパー，ハンマー，礫器，ナイフ形石器，石核楔形石器，二次加工の剥片等		○石材は石英が第一他に瑪瑙，頁岩，チャート，下杈岩。 ○土壙13。昭和51年発掘。
六ツケ塚	日立市大みか町三丁目（旧水木町字六ツケ塚）	泉川左岸の海岸段丘上	20	暗褐色硬質ローム（Ⅳ）と暗褐色硬質ローム（Ⅴ）	ナイフ形石器（黒），掻器（黒，瑪），石核（石，黒），ハンマー（砂），炭化物	U 1-67 U 2-207 U 3-不明	○土壙12。 ○炭化物のC14年代25600±400 ○昭和51年発掘。
原山	勝田市長砂字原山	新川支流の谷に面した台地上		硬質ローム上部	石核1，剥片約20	約20	○昭和52年発掘。
後野	勝田市中根字後野	本郷川（那珂川支流）に突出する台地上	30	A．黄褐色スコリア（Ⅲ） B．褐色軟質ローム（Ⅳ）	（A地区）打製石斧1（頁）掻器2（頁），削器2（頁），槍先形尖頭器1（流），彫器兼掻器2（頁），彫器1，石刃及び剥片利用の石器4（黒，凝），無文土器37 （B地区）細石刃核4（頁）彫器7（頁），削器3（頁），尖頭器1（頁），彫器削片18（頁），礫器2（閃），細石刃167（頁），剥片多数（閃，黒頁，凝）	A．87 B．748	○台地中央部をA地区，縁辺部をB地区としている。 ○昭和50年発掘
赤浜	高萩市赤浜字高戸	太平洋と関根川に狭また海岸段丘上	40	ソフトローム（Ⅱ）。その下のパーミス（Ⅲ及びハードローム（Ⅳ）には遺物なし	ナイフ形石器，彫器，削器掻器（計6），剥片192，砕片281，石核6（材質は頁，瑪，チ，黒）	485	○礫群存在 ○昭和45年発掘
額田大宮	那珂郡那珂町額田大宮	久慈川の東側の台地上	30	軟質ローム（Ⅳ）その下の硬質ローム（Ⅴ）には遺物なし	細石片204（頁），細石刃核1（頁），閃鑿形石器5（硬，安）砧形石器3，掻器18（安），片刃様打割器1（安），彫器（頁），尖頭器様石器2，刃器及び剥片利用の石器10（安，頁），削器4（安），石核2		○頁岩製石器群と安山岩製石器群から成る。瑪瑙も若干使用。 ○後野Bと後野Aの間に編年。 ○昭和52年発達
梶巾	那珂郡大宮町小祝字梶巾	南へのびる舌状の中位段丘上	64	褐色ローム層（Ⅱ）。（上部が削平されているがこのⅡ層はソフトローム）	石核22（安，珪），ナイフ形石器，石刃尖頭器，柳葉形尖頭器，木葉形尖頭器（珪，安），剥片多数（玄，他）	2027	○二つのユニットの中一つは作業場らしい。 ○昭和50年発掘
山方	那珂郡山方町山方字駒形平	山方小学校の台地上北隣	73.8	褐色ローム層（Ⅳ，ハードローム）	石核2（珪），礫器1（フ），石核石器2（珪），刃器1（珪）剥片17（珪，瑪，玄），削器1（瑪），円礫（花）	23	○岩宿Ⅰ以前と考えられる。 ○昭和50年発掘
伏見	鹿島郡鹿島町宮中字伏見	鹿島神宮と谷一つ隔てた台地上	35	黄褐色ローム層（Ⅳ，ソフトローム）	ナイフ形石器10（珪，安，黒チ），槍先形尖頭器2（頁，安），削器1（頁），掻器1（玉），石核2（安，玉），敲石1（閃），剥片6（安，玉）	123	○木葉形の槍先形尖頭器出土，但しナイフが主体。 ○昭和51年発掘。
沖餅	竜ケ崎市若柴町字沖餅1773番地の6他	稲敷台地の南端部	約20	褐色ローム層の上面（ソフトローム）	舟底形石器6（頁，泥），コア1（チ），スクレパー17（頁黒，安，チ，メ，泥），削器20（頁，安，泥），Uフレイク15（頁，黒，安），フレイク140（頁，黒，安，花，砂，チ，メ，凝木，泥，ヘ，軽），尖頭器2（安），敲石2（安，砂），凹石1（雲），礫120（頁，安，花，砂，チ，泥，石）	383	○頁岩を主体にした舟底形石器，掻器

第88図　茨城県内先土器時代主要遺跡分布図(伏見遺跡より)

第2節　住居址について

本遺跡より認確された住居址は，谷を囲む北側から東側のやや緩やかな傾斜面の標高18～19mを帯状に南東へ140mほど延び，特に本遺跡の東側台地縁辺部に集中して遺構が確認されている。尚，本遺跡から検出された住居址は縄文時代と古墳時代の遺構である。

第11号住居址は縄文時代の住居址で東側台地縁辺部に確認されており，炉址をほぼ中央部に有し，規模は長径3.7m，短径2.8mほどの不整方形を呈している。出土遺物は撚糸文系の土器と，無節の「S」字状結節回転文を有する土器が，炉址の北側床面上より検出されており，本遺跡の中では縄文前期後葉の唯一の遺構である。

その他，第13号住居址を除く住居址は，遺物等から検討した結果，多少の時間差はあるものの古墳時代のほぼ同時期の遺構として把握することができる。第13号住居址は不明の点が多く，住居址として捉えることは差し控えたい。

個々の住居址を群として捉えていくと，第1～7・11・12・14号住居址が東側台地縁辺部の緩斜面に集中して確認され，いずれも長径，短径とも4～5mを測る隅丸長方形を呈している。また，主軸方向が同一である住居址は，第1・4～6・12号住居址である。第8・9・10号住居址は北側にやや傾斜面を有する地区に構築されており，主軸方向はほぼ同一方向を呈している。

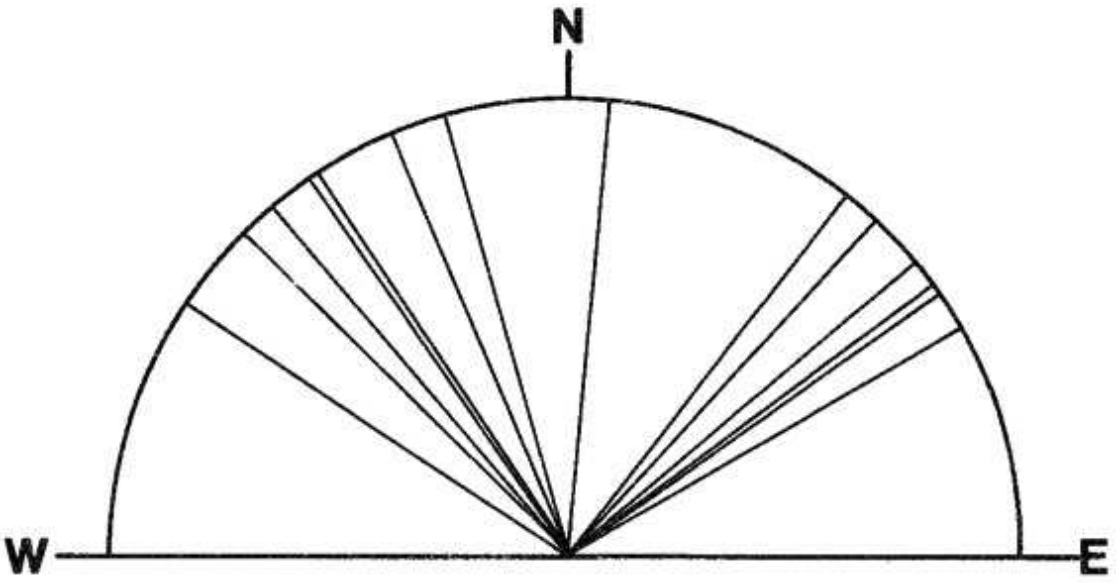
平面規模が最大なものは第8号住居址で，長径7.4m，短径6.95mを測り，隅丸方形を呈し，最小のものは第10・12号住居址の長径3.1m，短径2.71mである。

住居址の構造，形状を見ると，遺構確認面より床面までの深さが，60～70cmを呈する住居址群は，第1・4・5号住居址で，20～30cmを測る住居址群は，第2・3・6～10・12・14号住居址である。以上の様に深さで大別すると2群に分類される。尚，貯蔵穴，炉址の位置などにも共通点を有し，前群は南東のコーナー部に貯蔵穴を有し，床面は火を帯びているせいか非常に軽く，炉址は中央部よりやや北東側に有している。後群は前群とは異なり，貯蔵穴は南西のコーナー部，炉址は中央部よりやや西側に作られ，床面は一部を除いて柔かい。しかし，両群の住居址が構築された時期はあまり時間的な差は認められない。

第1・3～6・8号住居址の壁下には，ほぼ全周する溝が確認され，また，第3・6・8号住居址には壁柱穴と思われる小ピットが検出された。

これらの住居址のうち火災に遭遇した状態を示す焼土，木炭等が検出された住居址は第1・3・4～6・9号住居址の6軒で，いずれも壁附近に分布し，特に4・5号住居址からは多量の焼土が検出されている。

出土遺物は，第11・13号住居址を除いた全住居址から土師式土器が出土し，古墳時代前期の五領期中期に比定されるものである。特に多量に出土した住居址はないが，本遺跡の中では，第4



第89図　住　居　址　主　軸　方　向

・8・12号住居址から多く出土した。検出された土器の主な器種は，甕形土器が多く，その他は椀形土器，壺形土器，高杯形土器，器台形土器，鉢形土器などがあげられる。以上のような土器は各住居址から検出されたが，第4号住居址の床面から出土した装飾器台形土器は，本遺跡の中では類似品が見られない土器である。この手の装飾器台形土器の類例は少なく，東京都江戸川区北小岩，上小岩遺跡（註1），千葉県柏市，戸張遺跡（註1），埼玉県岩槻市慈恩寺，諏訪山遺跡などに類例が見られ，茨城県勝田市，高井遺跡（註1）からは，類似した高杯形土器が出土している。

以上のような調査結果から，沖餅遺跡は縄文時代前期後葉の住居址と，古墳時代前期の五領期中頃に比定される住居址が確認された。古墳時代の住居址群は，長い期間居住したとは考えられず，自然的条件，社会的条件などによって，集落が崩壊し，他地域などへ移住したものと考えられる。

註1　熊野正也　　史館第3・8号　　市川ジャーナル

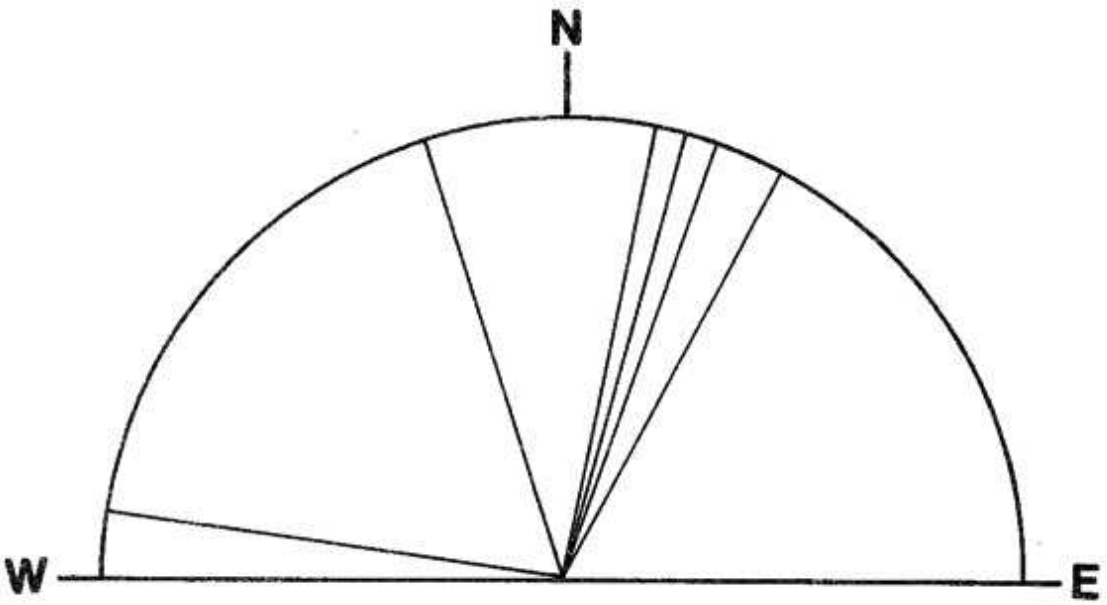
第3節　土壙について

本遺跡で調査した土壙は全体で6基であり，東側の緩やかな傾斜面から集中して5基が検出されている。他の1基は第10号住居址と隣接した位置に有し，平面形は不整長方形を呈し，底面は平坦で5～6基の長方形の土壙が重複した土壙群である。この土壙の確認された場所は最近まで農地として耕作しており，農作物を貯蔵したものであろうと思われる。

東側緩斜面から検出した土壙は，形状，掘り方などから2種類に分類することができる。第2～4・6号土壙は65～90cmの深さを有し，覆土土層は攪乱土であり，側面や底面は整然と掘り込まれており，何か目的を持って掘られた土壙であろうと思われる。第1号土壙は30cm前後と浅く底面も平坦ではなく，不明の土壙である。

土壙内の覆土からの遺物は第1・5号土壙の上層部より，縄文式土器，土師式土器を微量出土しただけであり，時期決定の資料にはならない。

以上，土壙については述べてきたが，第5号土壙を除く他の土壙の性格，時期等を明確にすることはできなかった。



第90図　土壙主軸方向表

第4節　溝について

溝は，遺跡の東側に1条確認され，小調査区Ｅ５ｂ２から緩斜面に沿って北東方向と南東方向へ，ほぼ直角に屈折して伸び，中途で消滅している溝である。底面のレベルの差は約50cmほどで，出土遺物は縄文式土器，陶器の口縁部（第88図－1）を出土し，いずれも覆土中からのもので，時期決定を行う遺物ではない。

溝の性格を考えると，区画溝，根切溝，排水溝的な機能を有した溝が多いが，本遺跡の場合，緩斜面に作られ，地表面の高低差と，溝底面の高低差がほぼ同一であるため，排水溝としての溝ではないと考えられる。

本遺跡の溝は，ほぼ中央部で直角に屈折し，また調査は実施しなかったが，東側端部に南北，東西に走る巾30～40cmほどの表土層下に，道路状遺構が確認されており，溝と何らかの関係を有していたのではないかと考えられる。

以上のような点から溝のもつ性格は，区画的な機能を有したと考えるのが妥当かと思われる。

参考 引用文献

• 茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会 「茨城県史料 考古資料編，先土器・縄文時代」茨城県，昭和54年3月

• 茨城県史編さん原始古代史部会「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」 茨城県，昭和49年2月

• 財団法人 茨城県教育財団 「竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 松葉遺跡」昭和54年3月

• 後野遺跡調査団 「後野遺跡」 茨城県勝田市教育委員会 昭和51年12月

• 川崎純徳，渡辺明，皐山芳樹 「額田大宮遺跡」 那珂町史編纂委員会 昭和53年3月

• 伏見遺跡調査団 「常陸伏見」 伏見遺跡調査会 昭和54年11月

• 財団法人 茨城県教育財団「竜ケ崎ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅱ 外八代遺跡，沖餅遺跡，赤松遺跡」昭和54年3月

• 横内遺跡発掘調査団 「日立市小木津町横内遺跡発掘調査報告書」日立市教育委員会 昭和54年3月

• 中津由紀子，千浦美智子，小田静夫，J・E・キダー「新橋遺跡」1977

• J・E・キダー，小田静夫「中山谷遺跡」1975

• 小田静夫，伊藤富治夫，C・T・キーリー「前原遺跡」 1976

• 常総台地研究会，川崎純徳，金子進，鴨志田篤二，三好清隆 「赤浜遺跡発掘調査報告書」茨城県高萩市教育委員会 1972

• 下津谷達男，金剛伸弄，西川博孝 「中野木新山遺跡」中野木新山遺跡調査団 昭和52年5月

• 瓦吹 堅 「石畑遺跡」猿島郡五霞村教育委員会 昭和52年3月

• 財団法人 千葉県文化財センター 「研究紀要Ⅰ」千葉県教育委員会 昭和51年3月

• 駿台史学会 駿台史学 第47号 昭和54年9月

• 青森県立郷土館 「大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 昭和54年3月

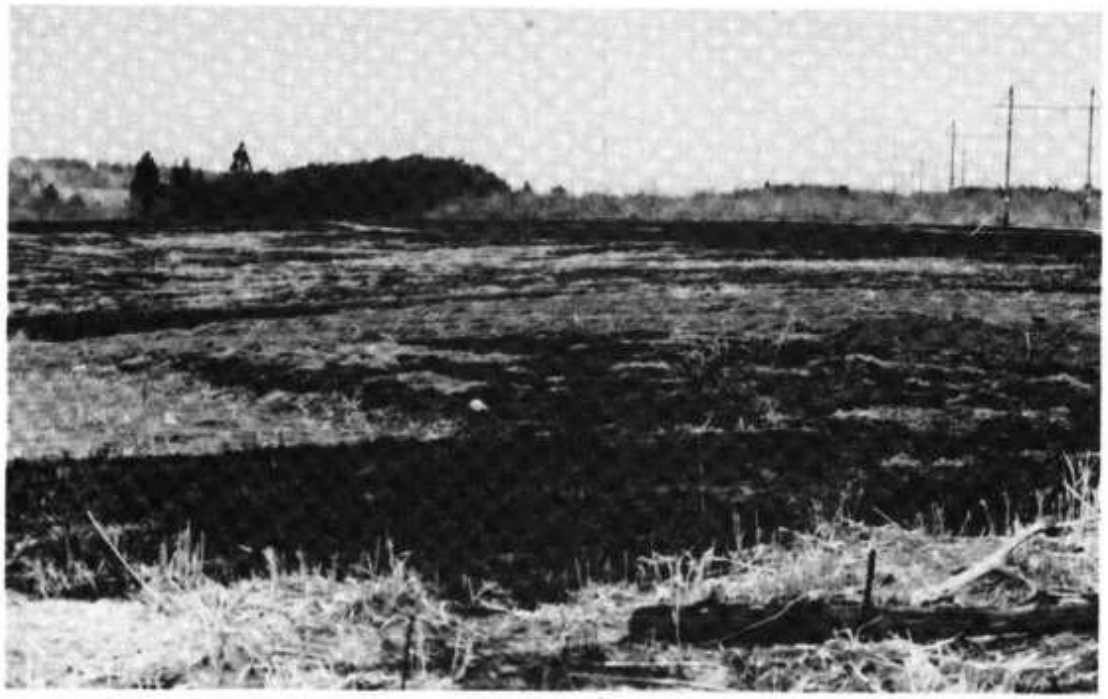
• 日本文化財研究所 「木滝台遺跡，桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書」鹿島町木滝台遺跡調査会 昭和53年3月

• 鈴木遺跡調査団 「鈴木遺跡Ⅰ」鈴木遺跡刊行会 昭和53年3月

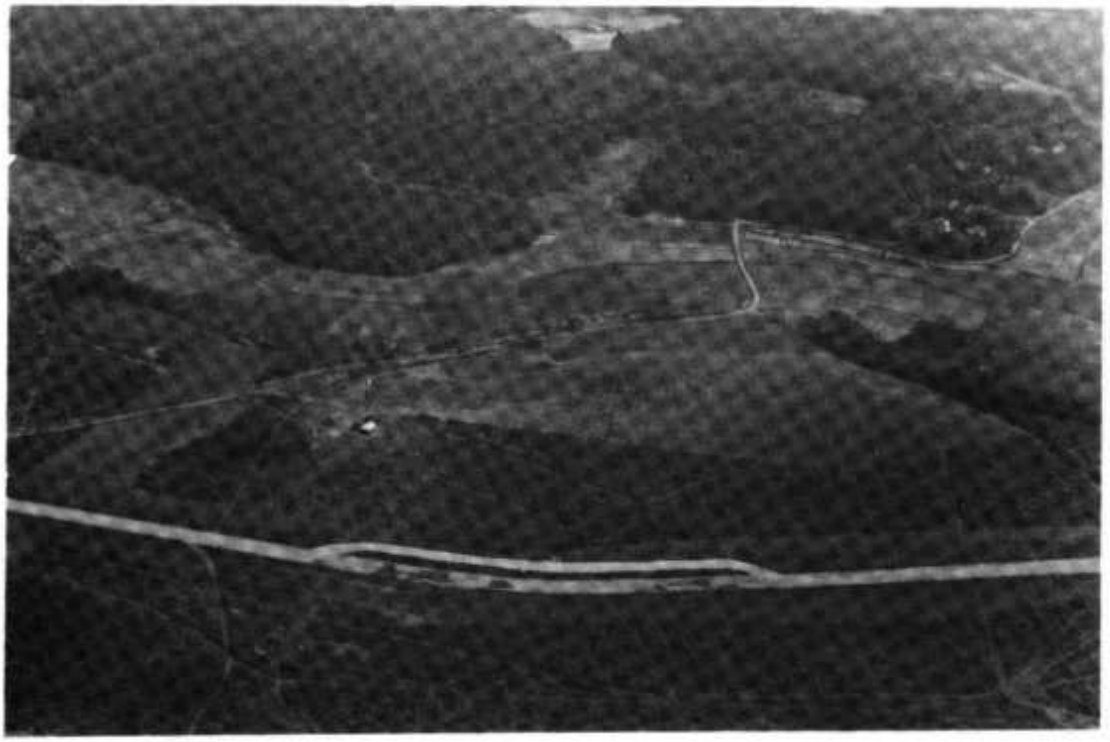
• 麻生優，加藤晋平，藤本強 「日本の旧石器文化 遺跡と遺物上」 雄山閣 昭和50年5月

• 熊野正也 史館第三・八号 市川ジャーナル

図　　版

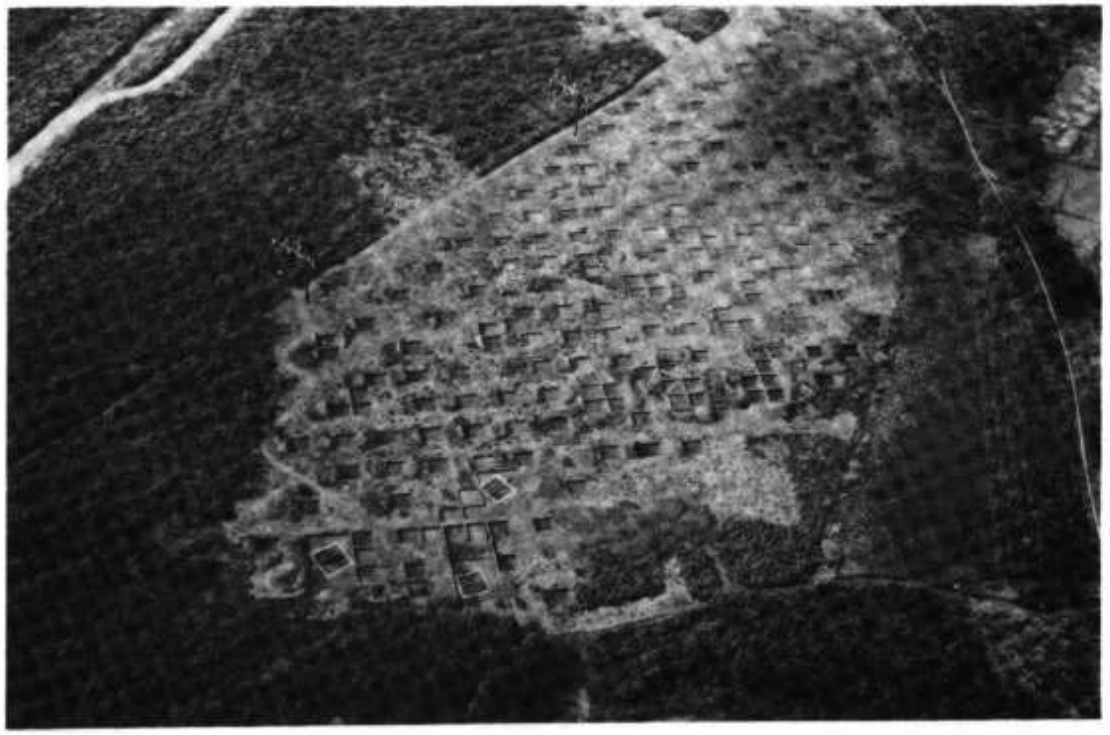


PL 1　沖　餅　遺　跡　全　景



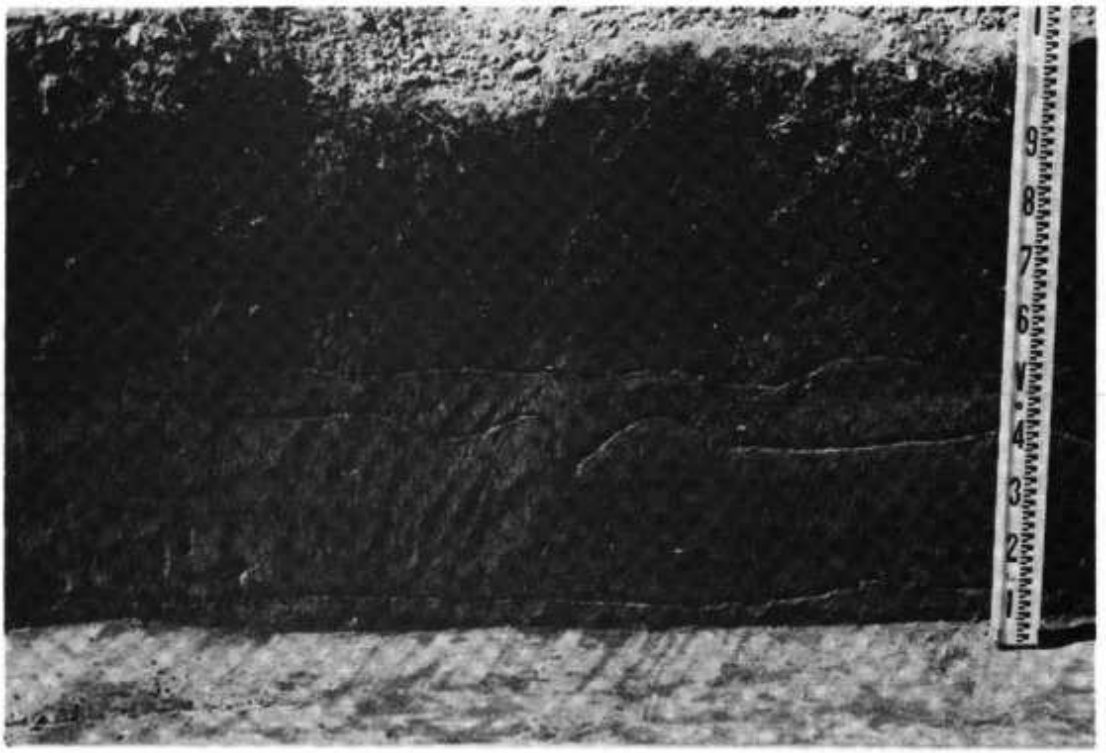
PL 2　沖　餅　遺　跡　遠　景

PL 3　沖　餅　遺　跡　全　景



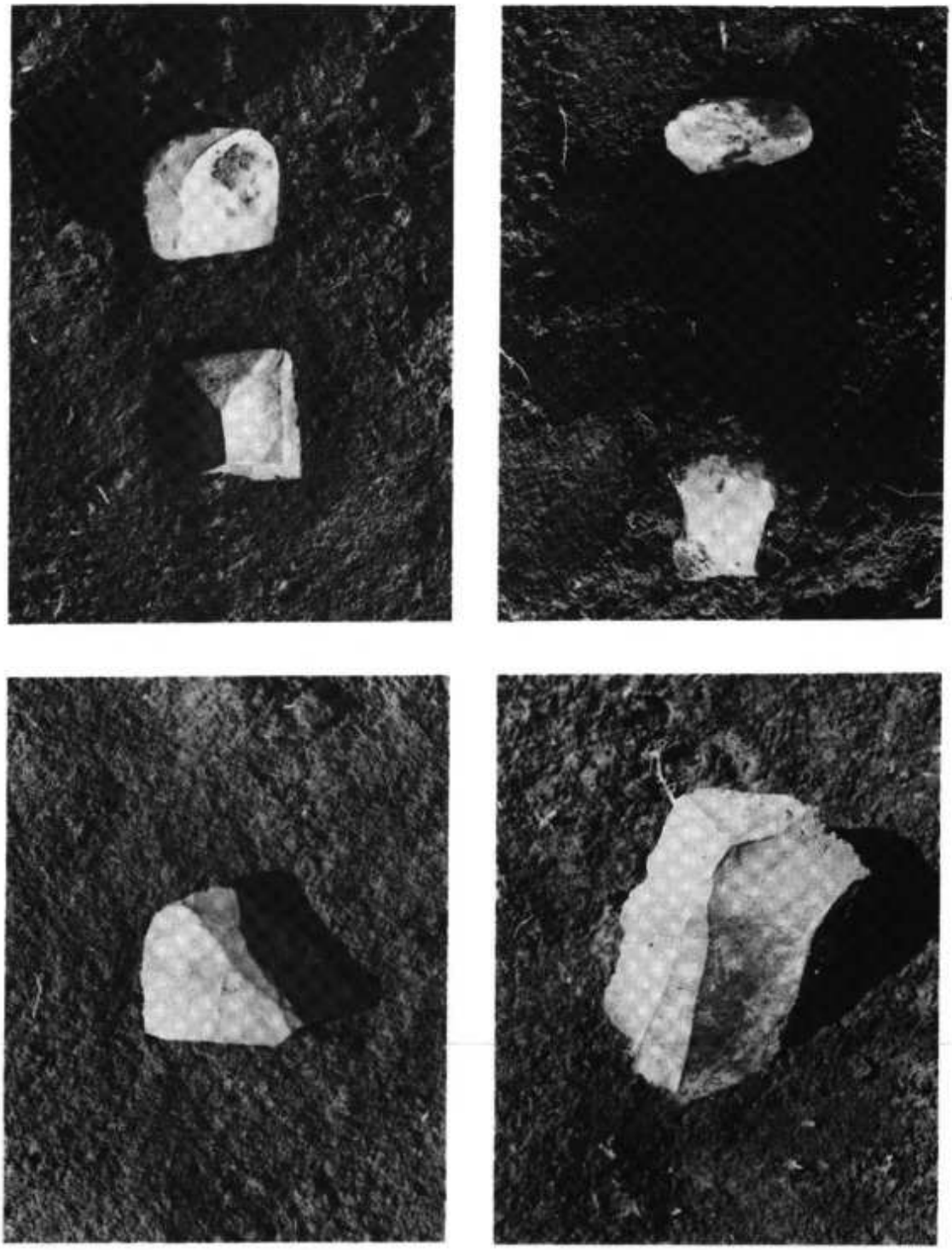
PL 4　沖　餅　遺　跡　遠　景

PL 5　沖　餅　遺　跡　遠　景



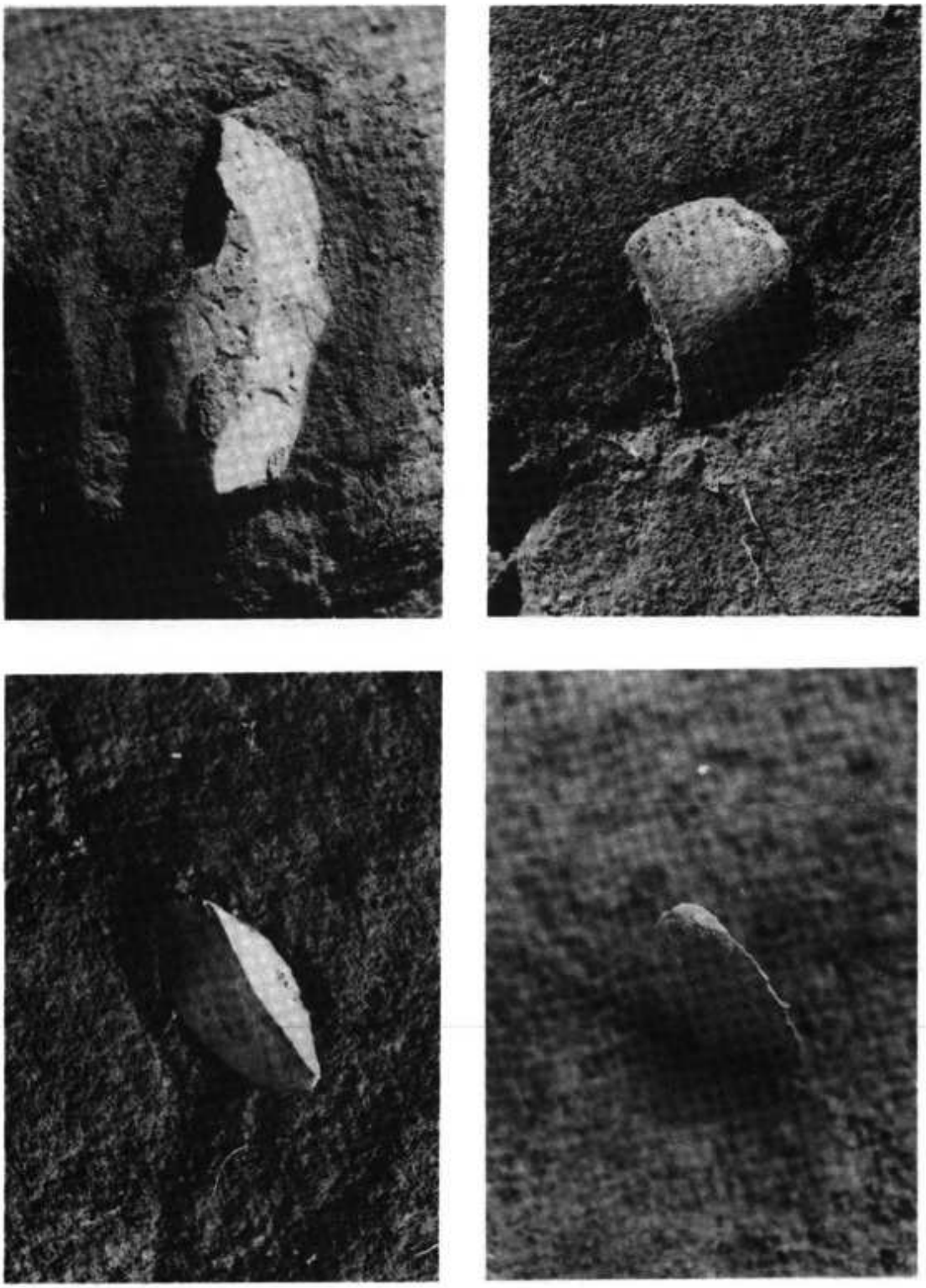
PL 6　　E 5 i 1 北壁土層セクション

PL 7　先土器遺物出土状況(1)

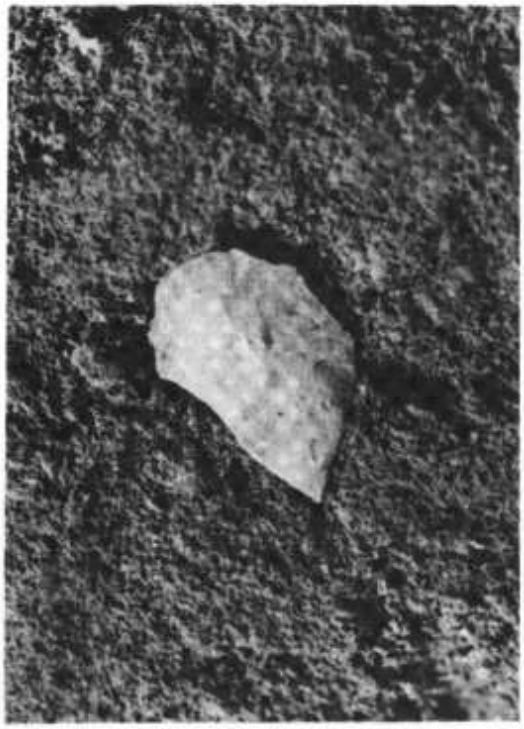


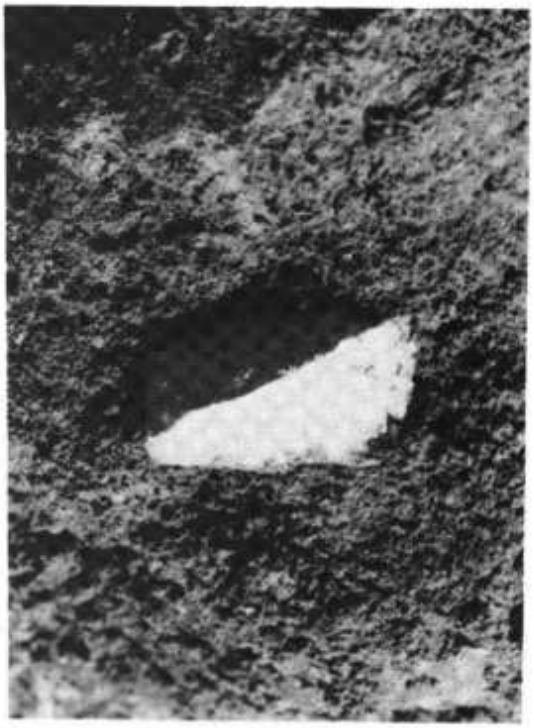
PL 8　先土器遺物出土状況(2)

PL 9　先土器遺物出土状況(3)



PL 10　先土器遺物出土状況(4)

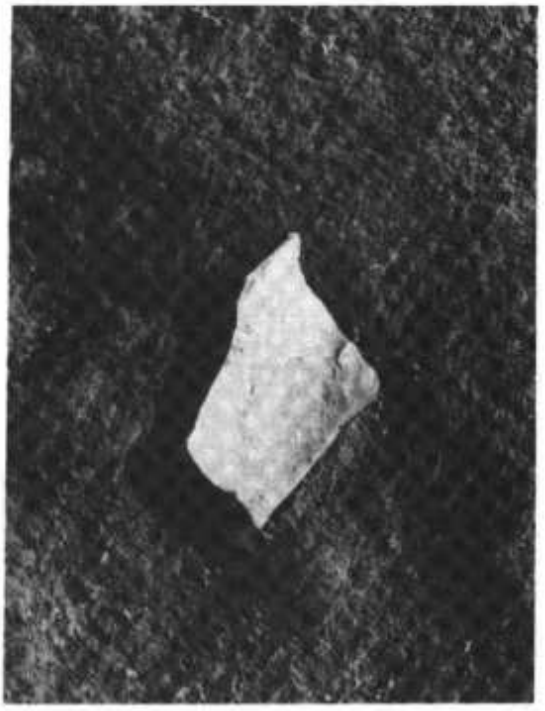




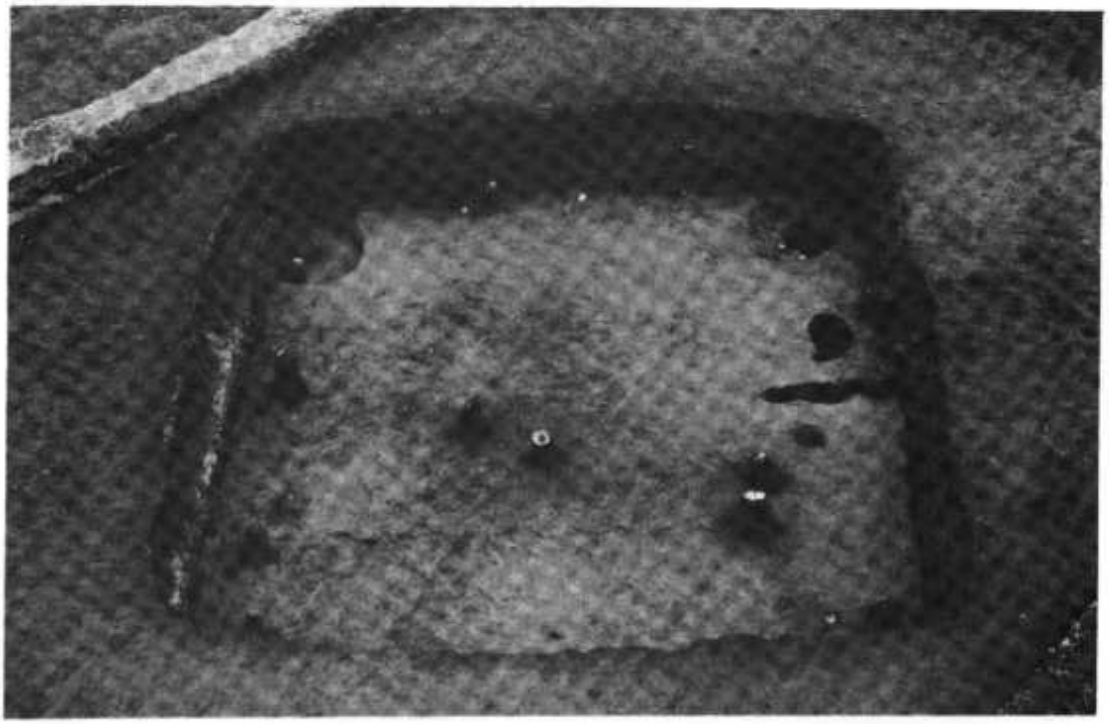
PL 11　先土器遺物出土状況 (5)

PL 12　先土器遺物出土状況 (6)

PL 13　先土器遺物出土状況(7)



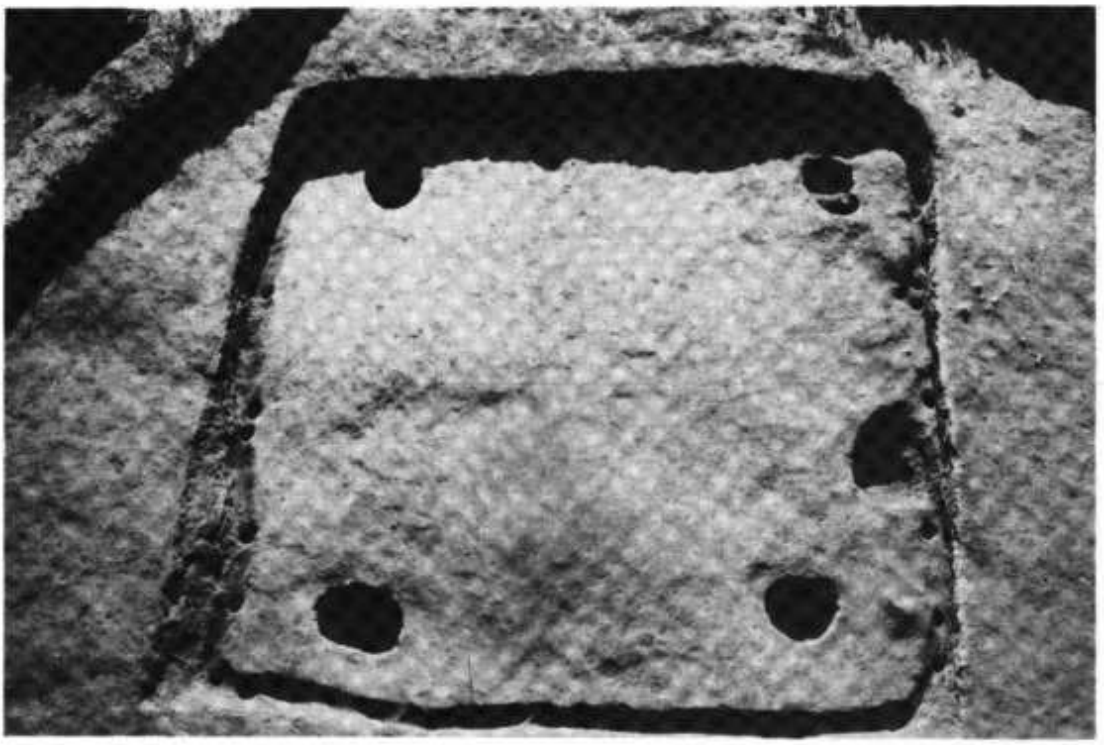
PL 14　先土器遺物出土状況 (8)



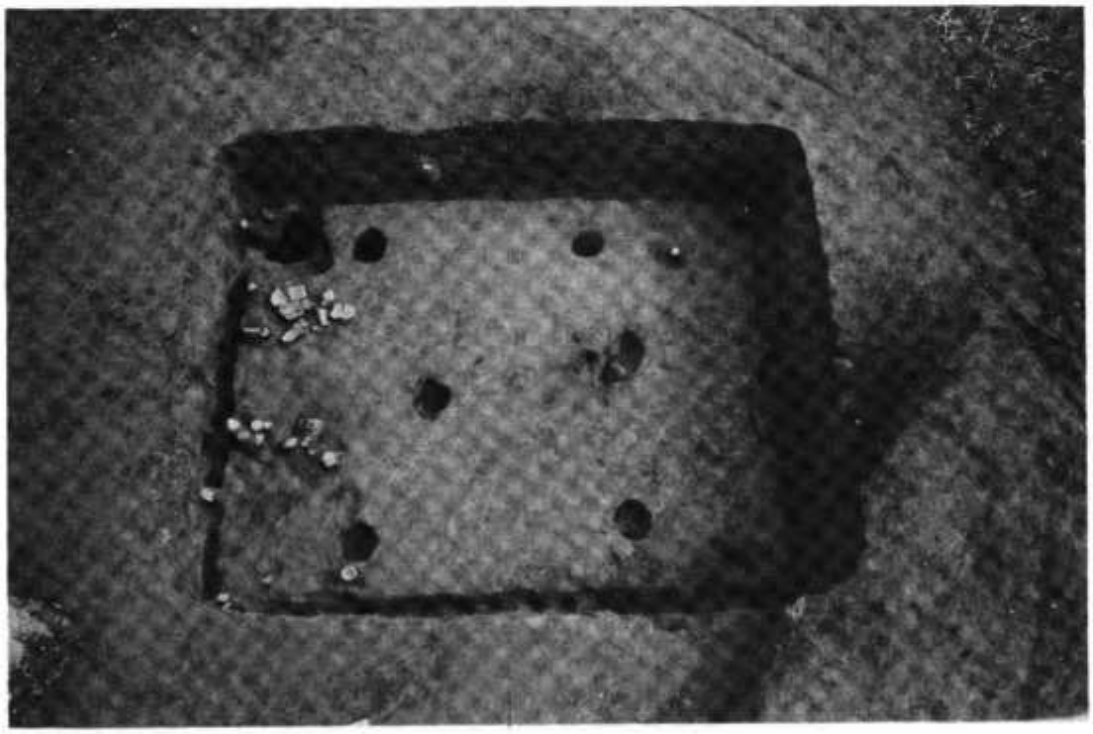
PL15　第1号住居址遺物出土状況

PL16　第　1　号　住　居　址

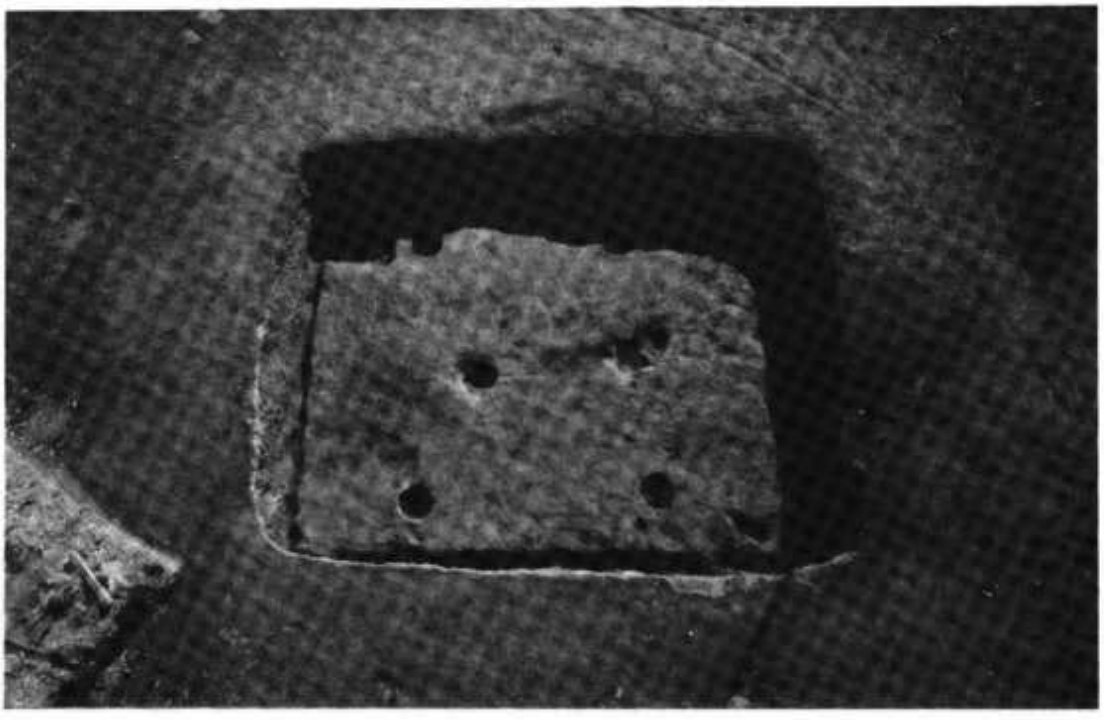
PL17　第　2　号　住　居　址



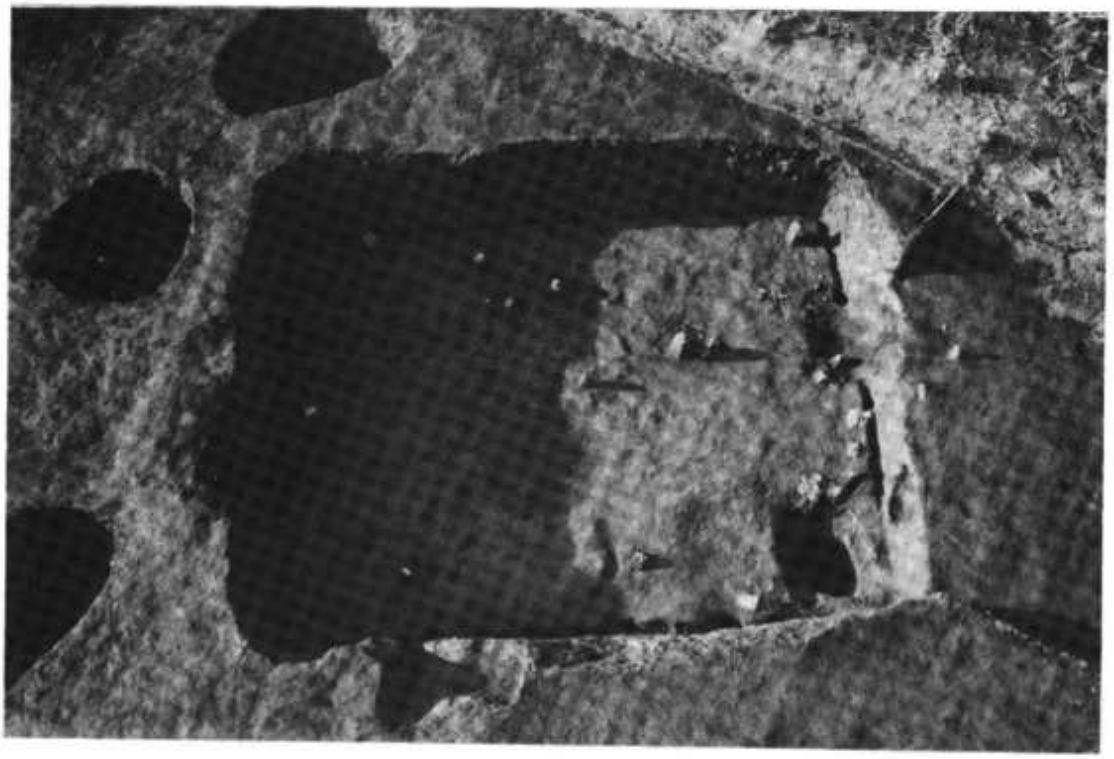
PL18　第　3　号　住　居　址



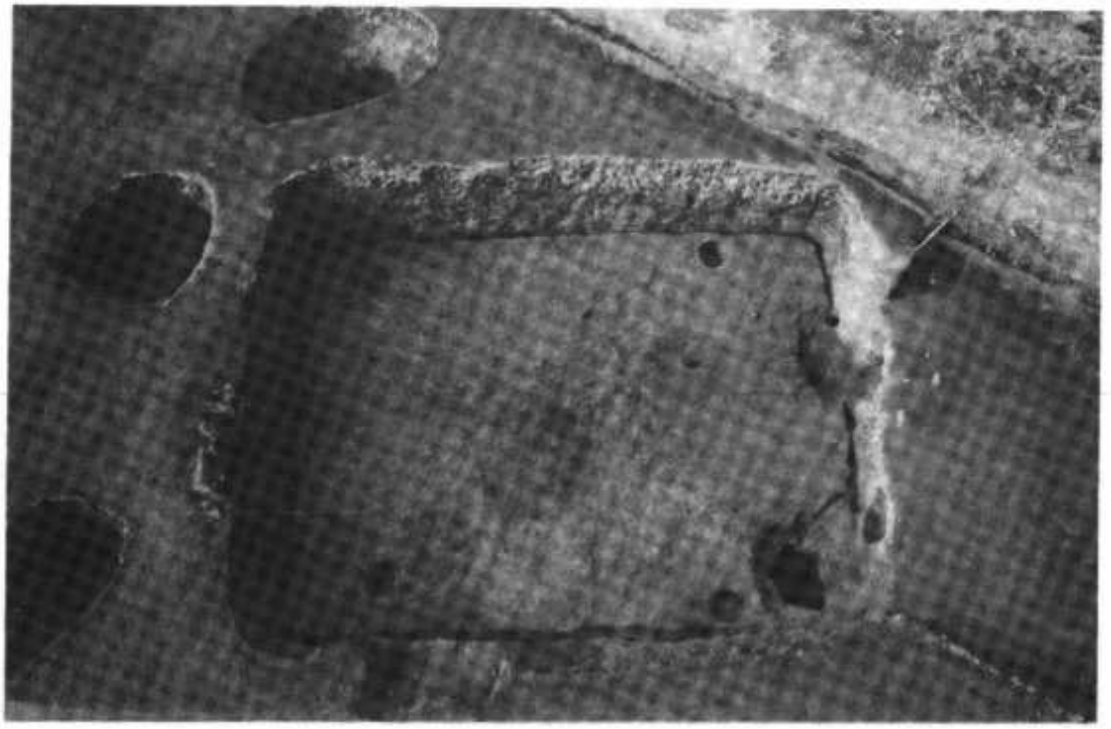
PL 19　第 4 号住居址遺物出土状況



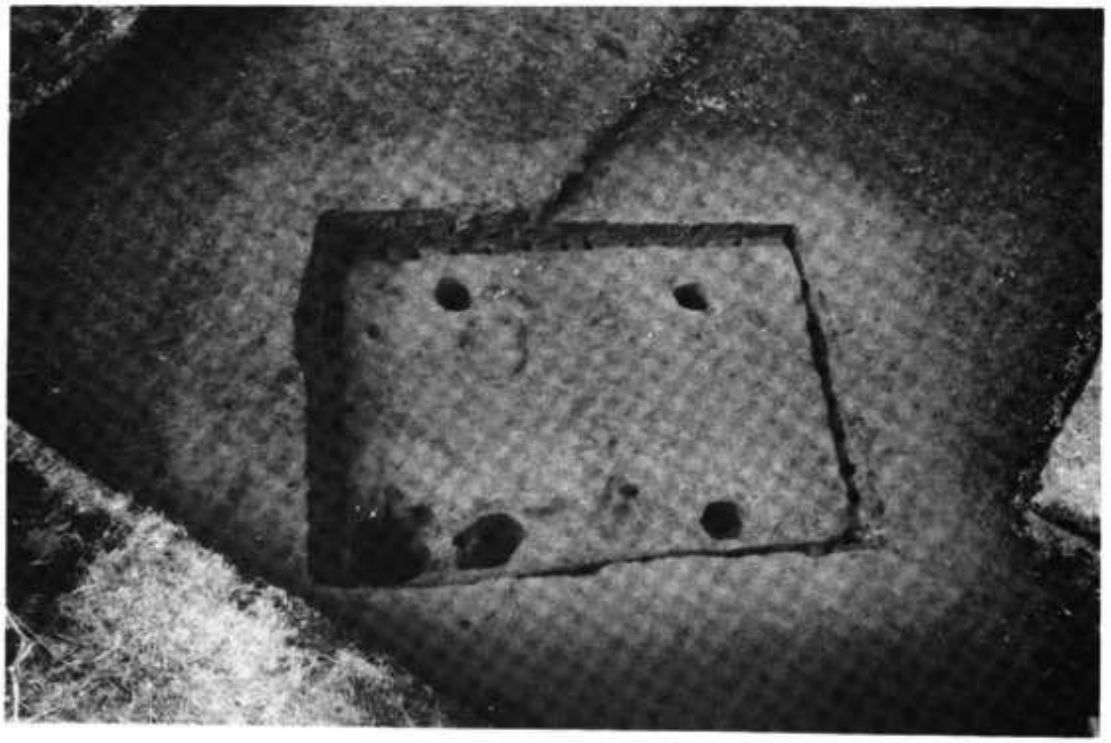
PL 20　第　4　号　住　居　址



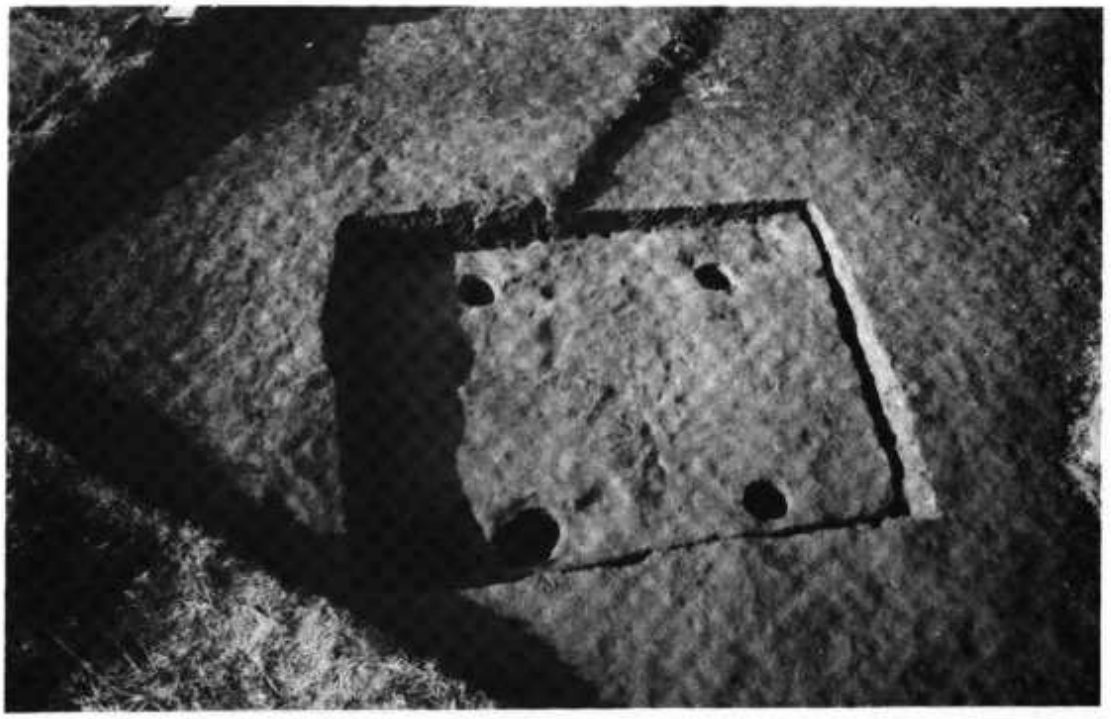
PL 21　第 5 号住居址遺物出土状況



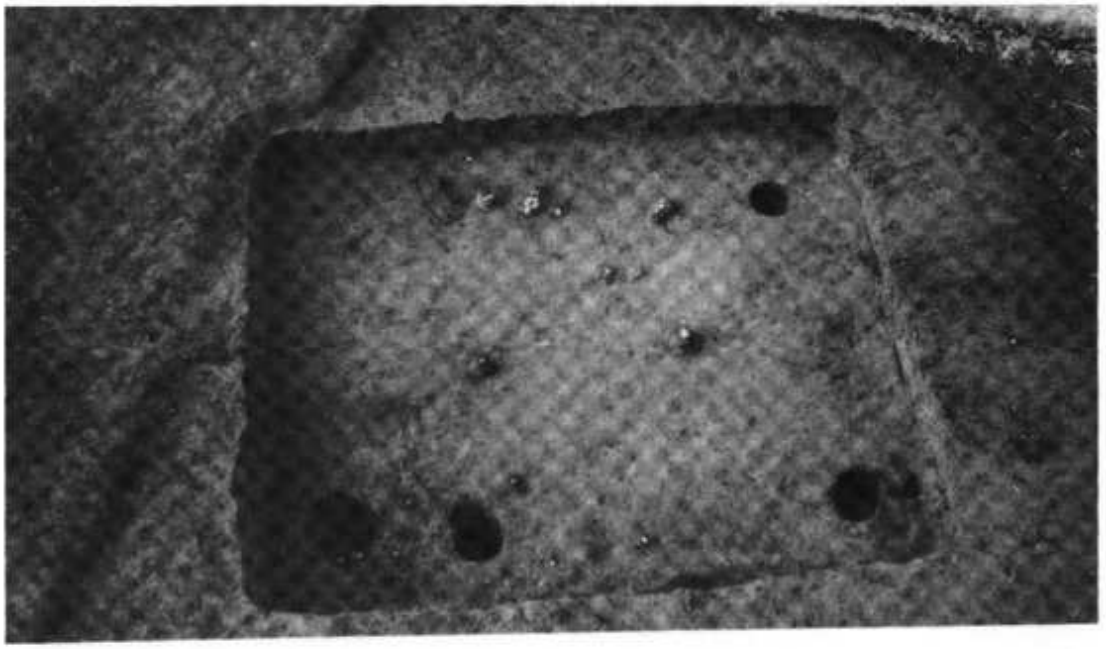
PL 22　第　5　号　住　居　址



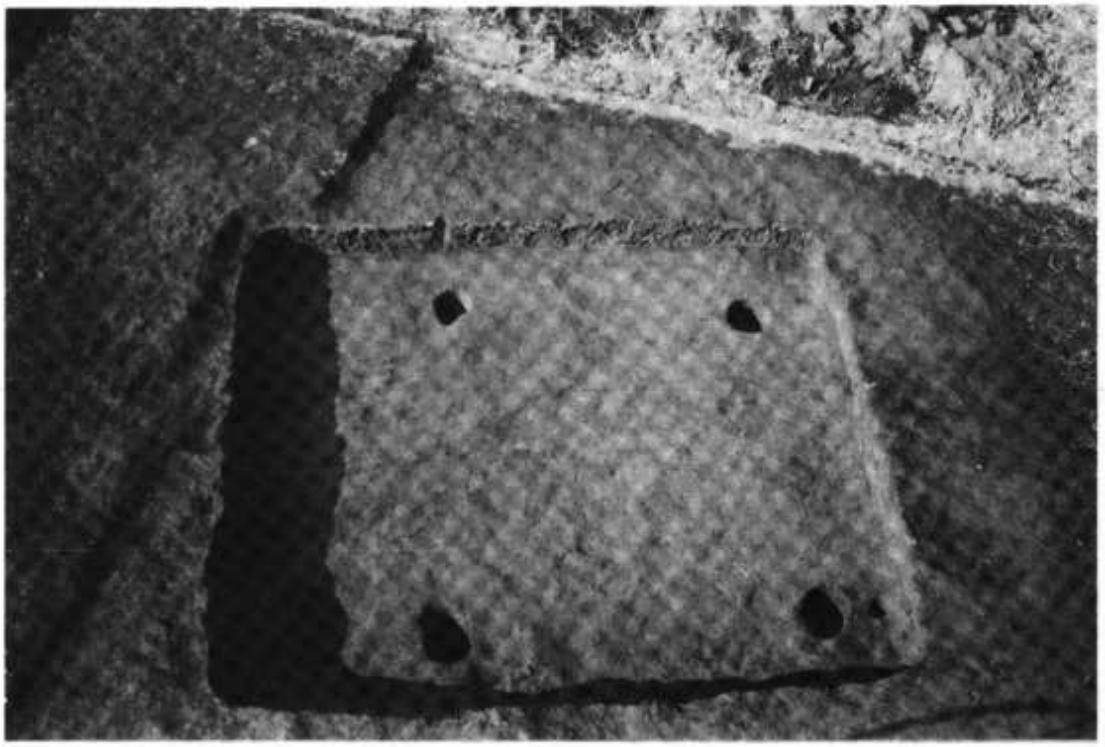
PL 23　第 6 号住居址遺物出土状況



PL 24　第　6　号　住　居　址



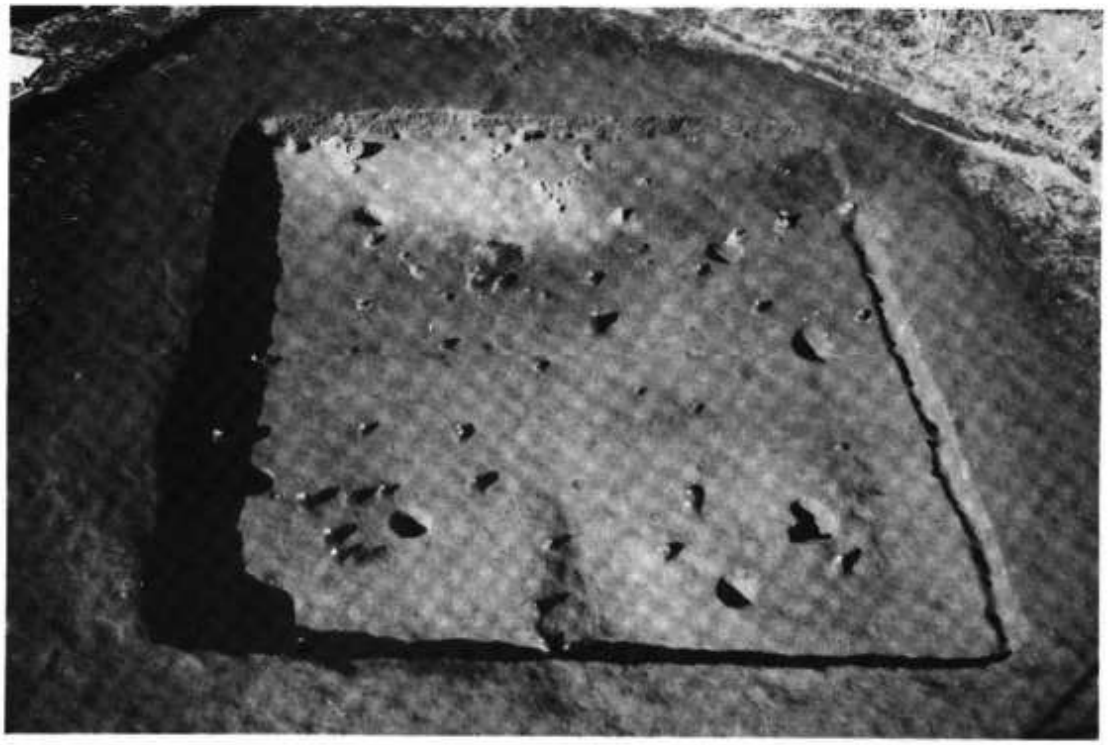
PL 25　第 7 号住居址遺物出土状況



PL 26　第　7　号　住　居　址

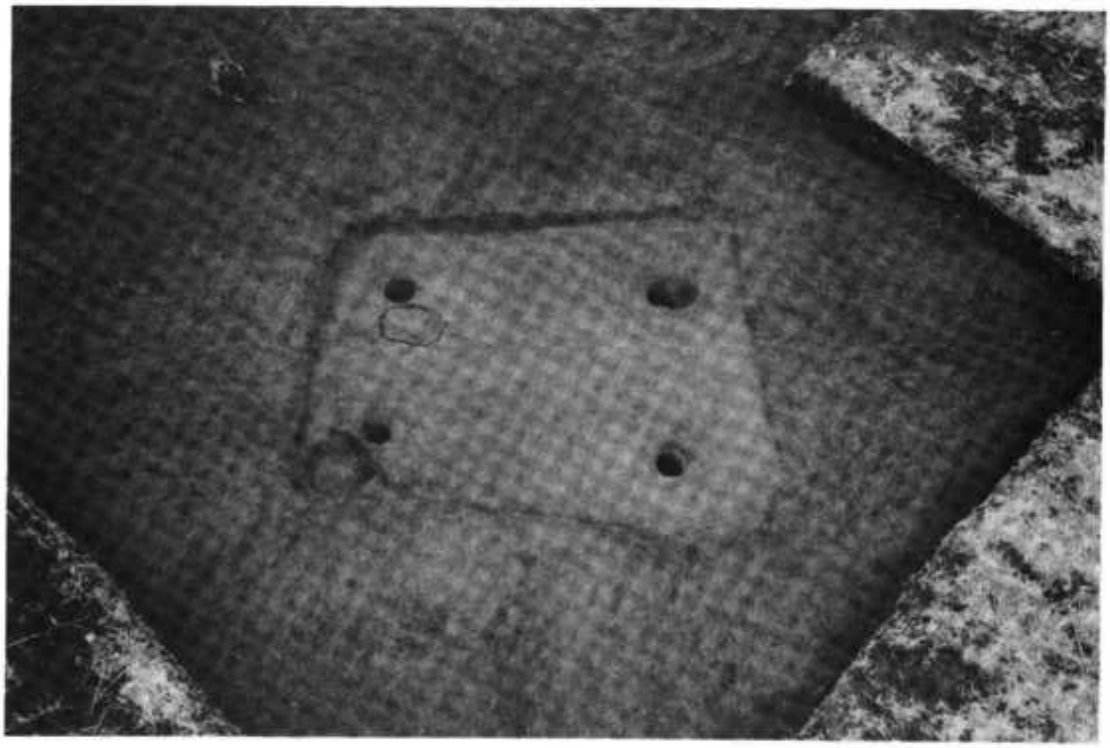
PL 27　第 8 号住居址遺物出土状況

PL 28　第 8 号住居址遺物出土状況

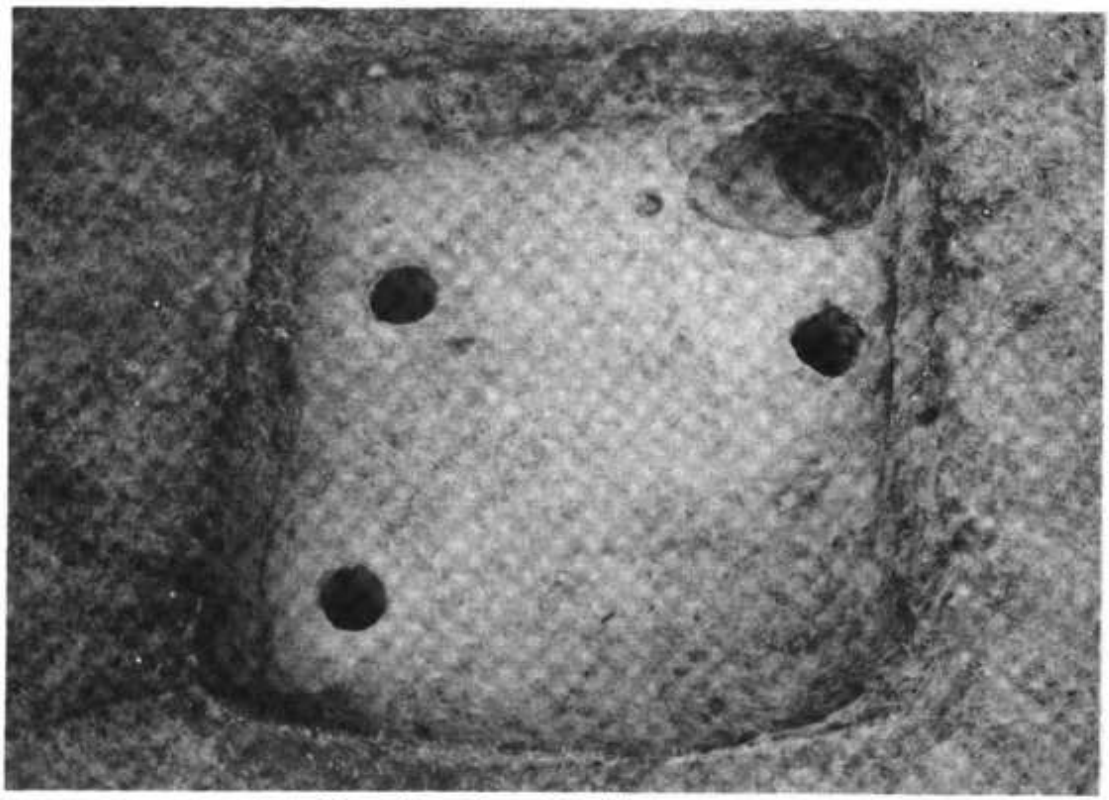


PL 29　第 8 号住居址遺物出土状況

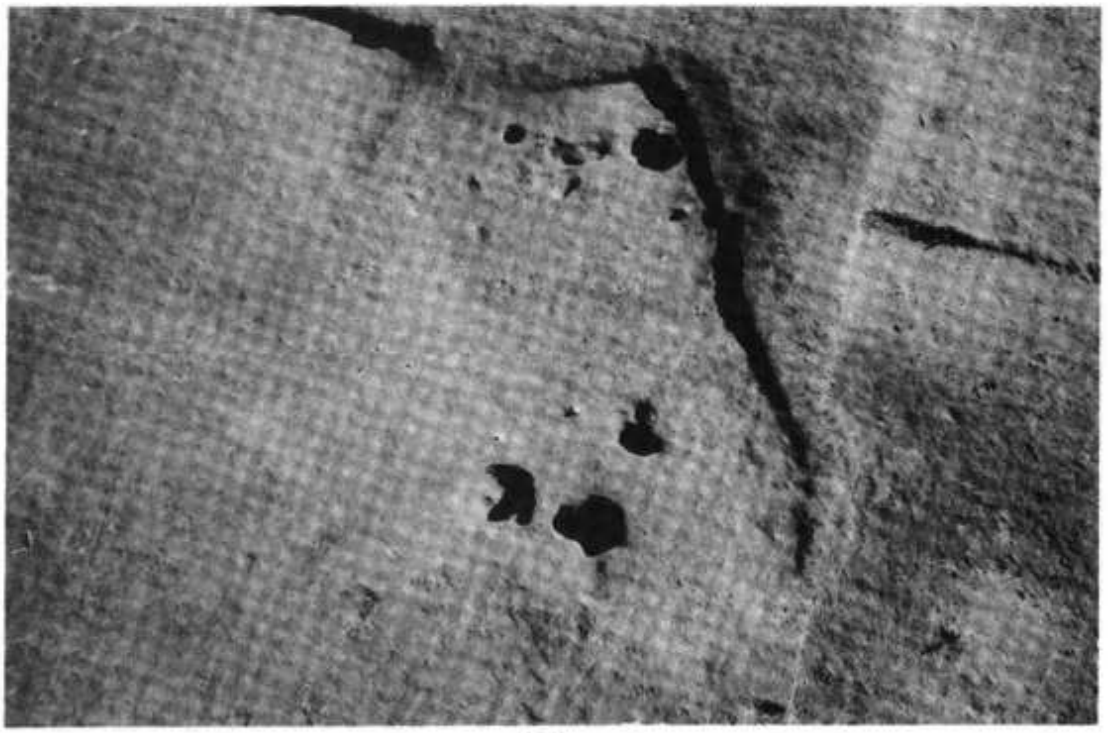
PL 30　第　8　号　住　居　址



PL31　第　9　号　住　居　址

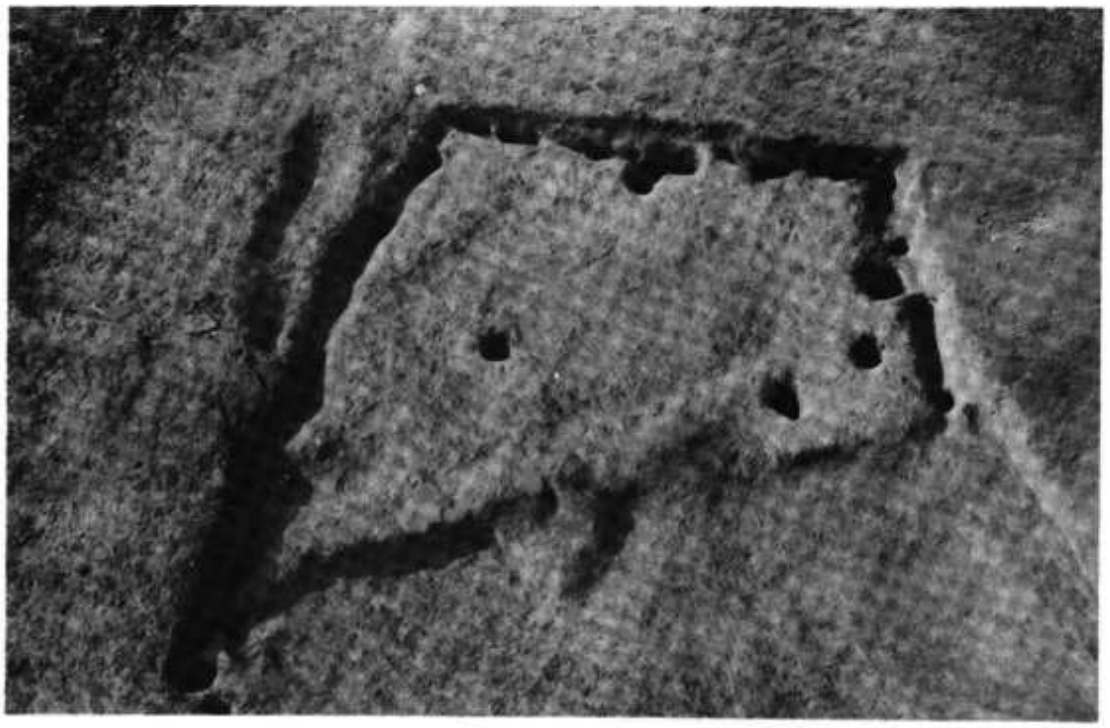


PL32　第　10　号　住　居　址

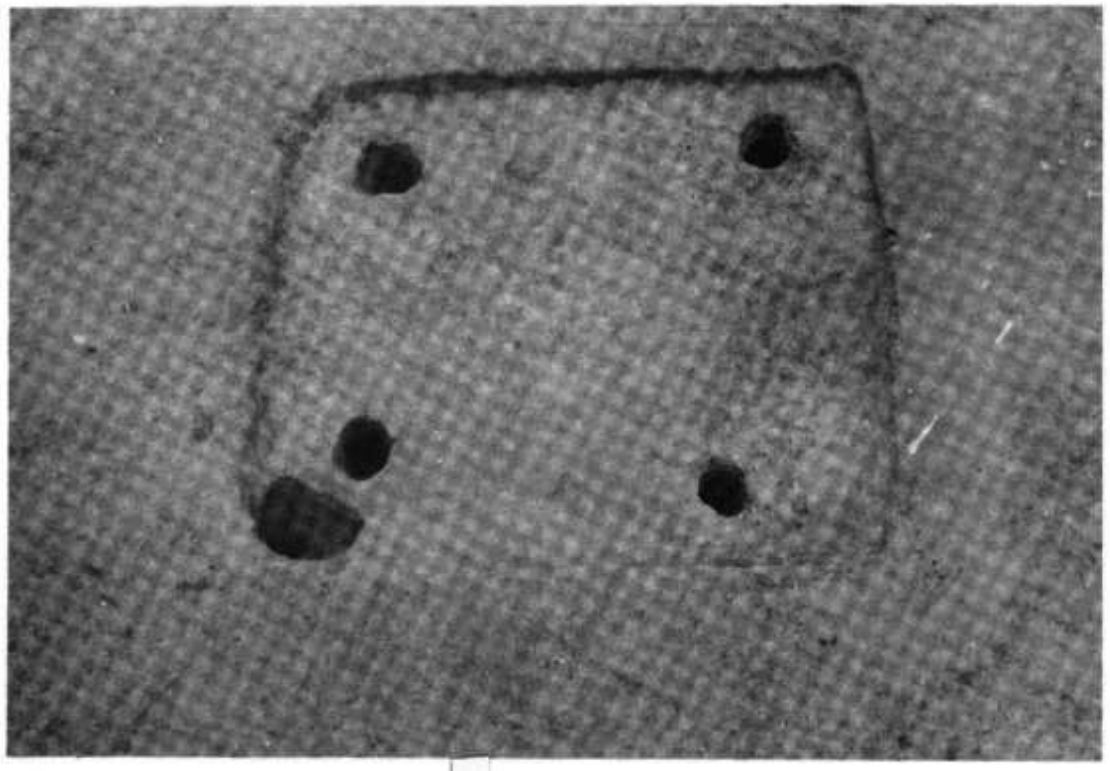


PL 33　第 13 号 住 居 址

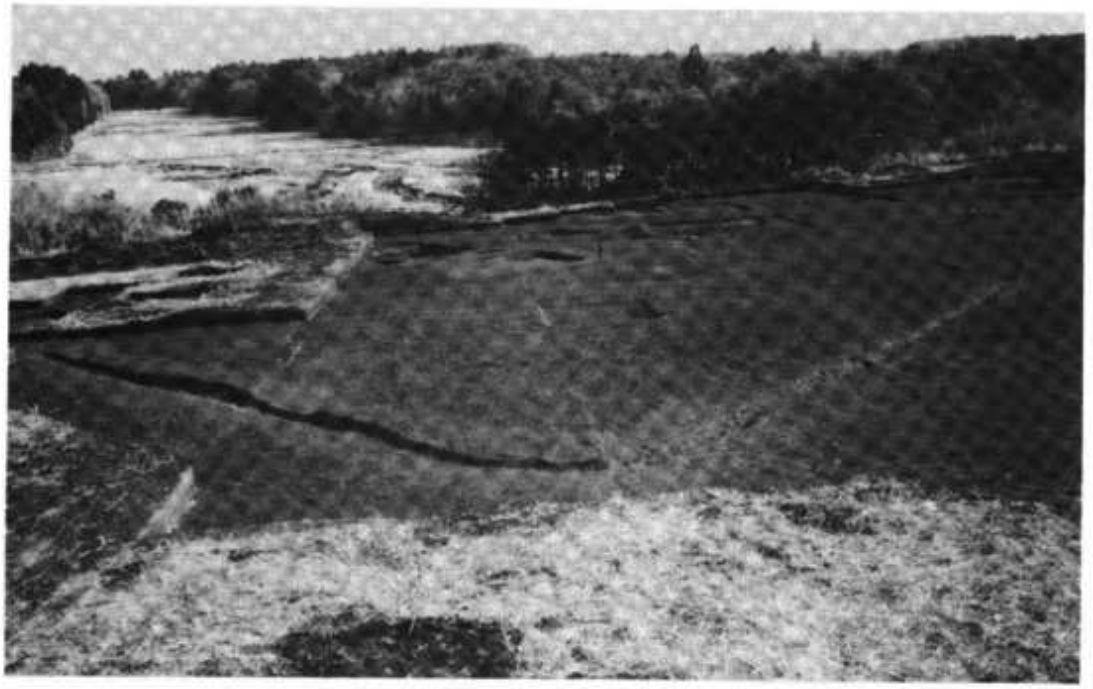
PL 34　第 14 号 住 居 址



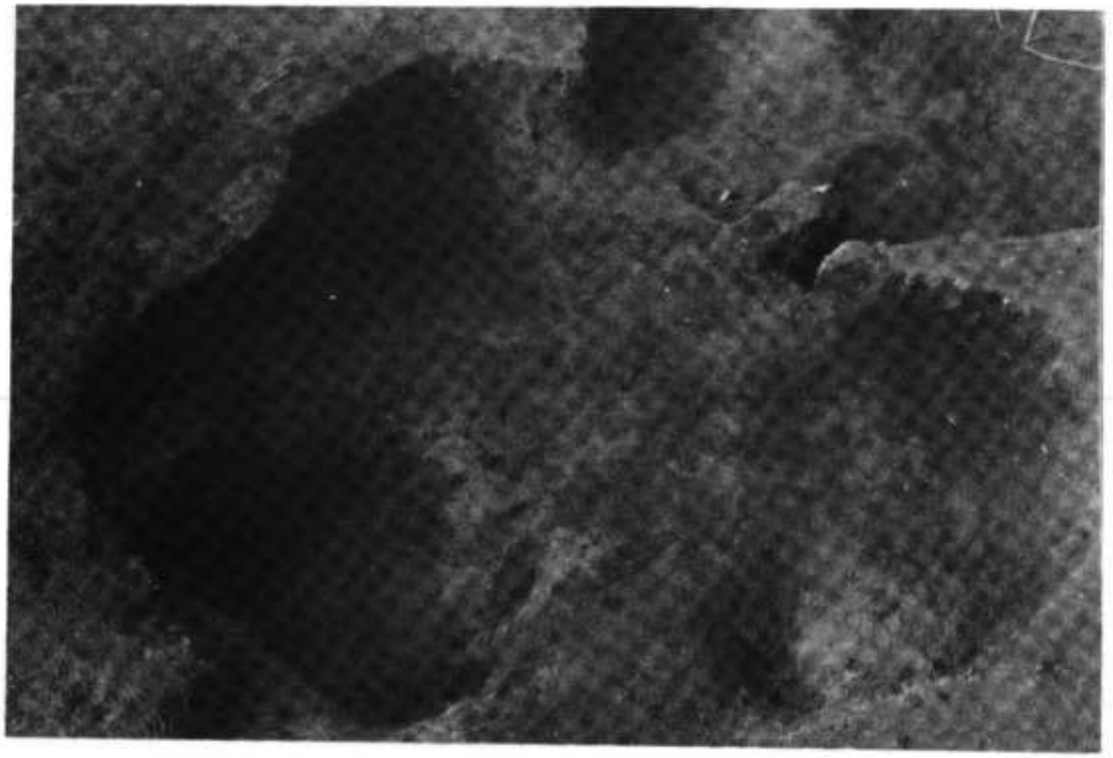
PL 35　第 11 号 住 居 址



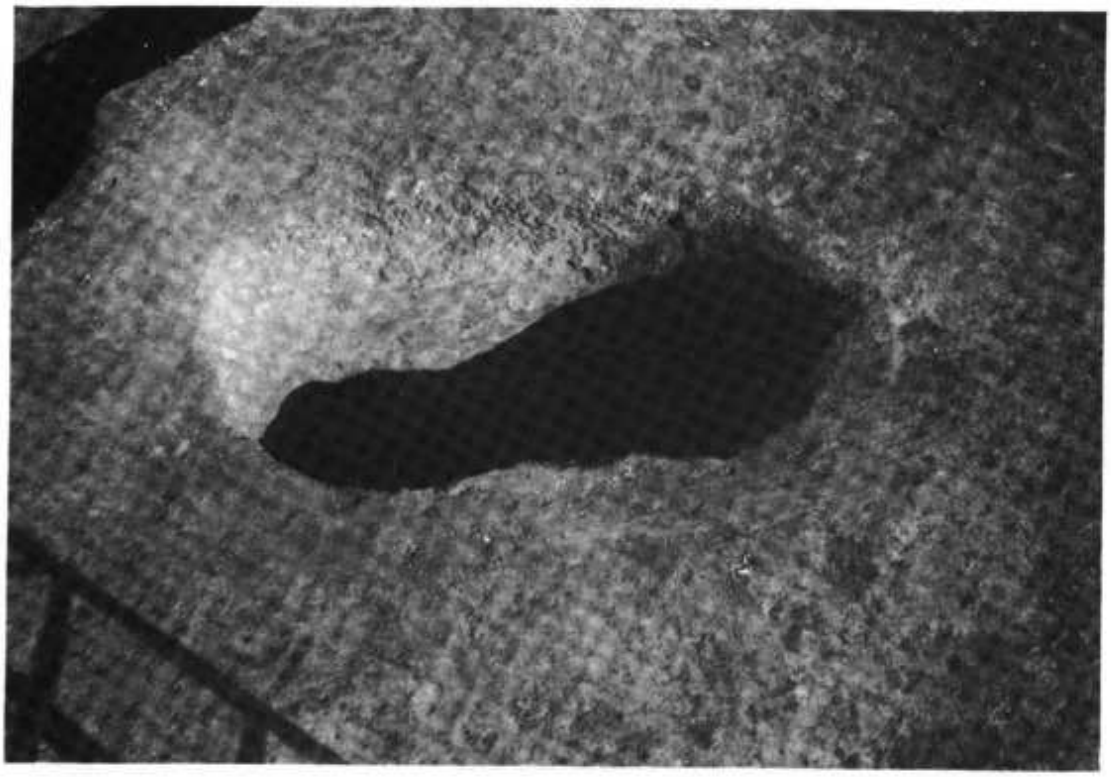
PL 36　第 12 号 住 居 址



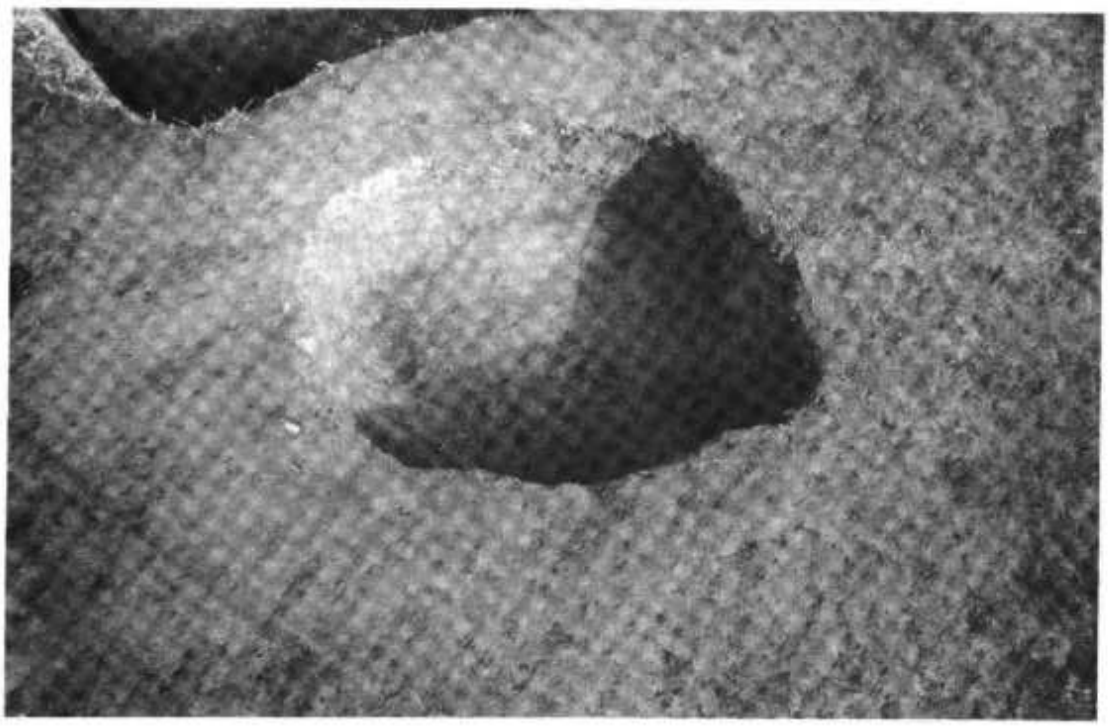
PL 37　第　1　号　溝



PL 38　第　1　号　土　壙

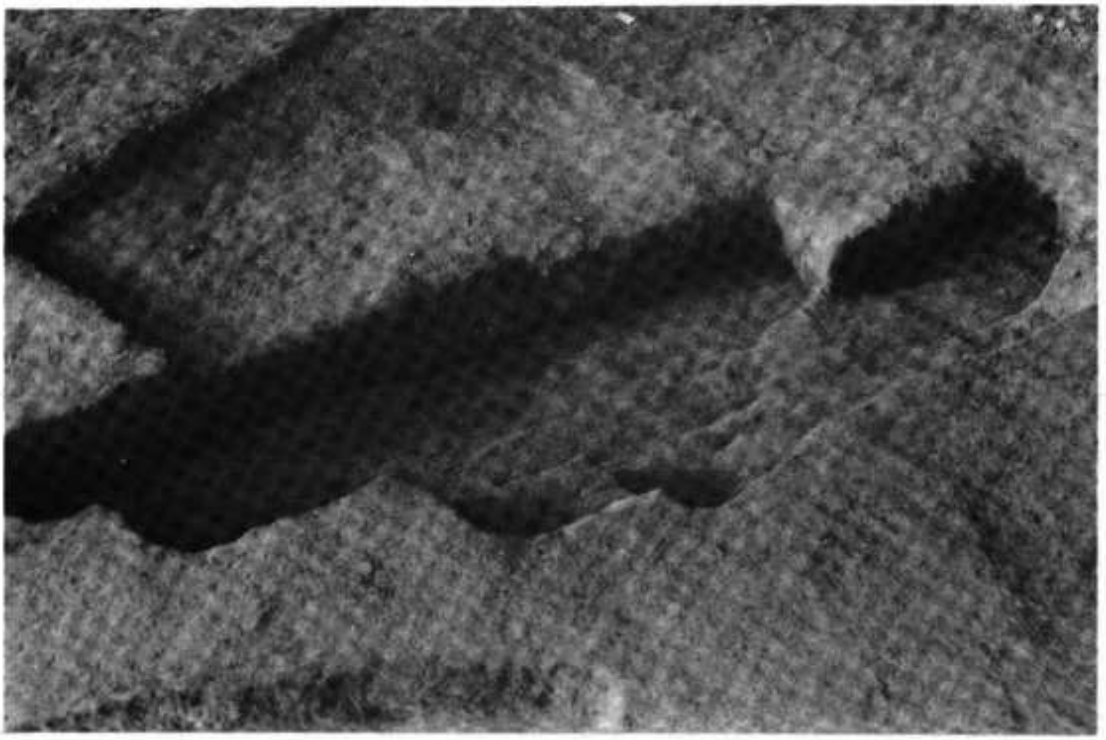


PL 39　第　2　号　土　壙

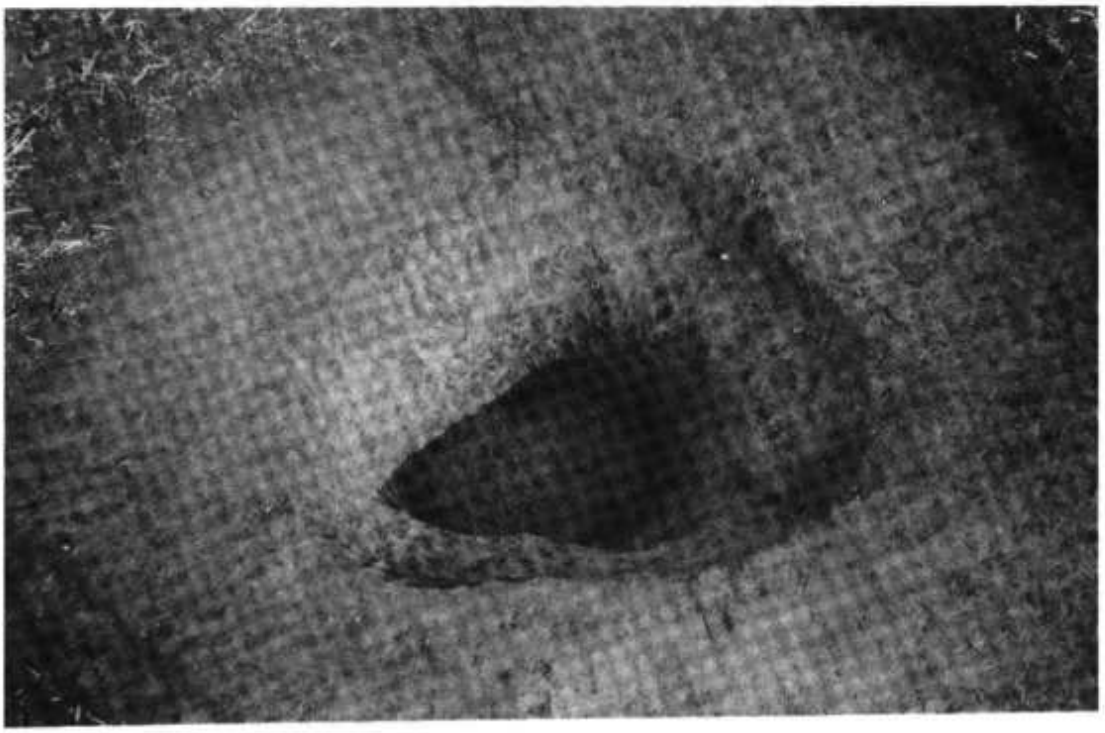


PL 40　第　3　号　土　壙

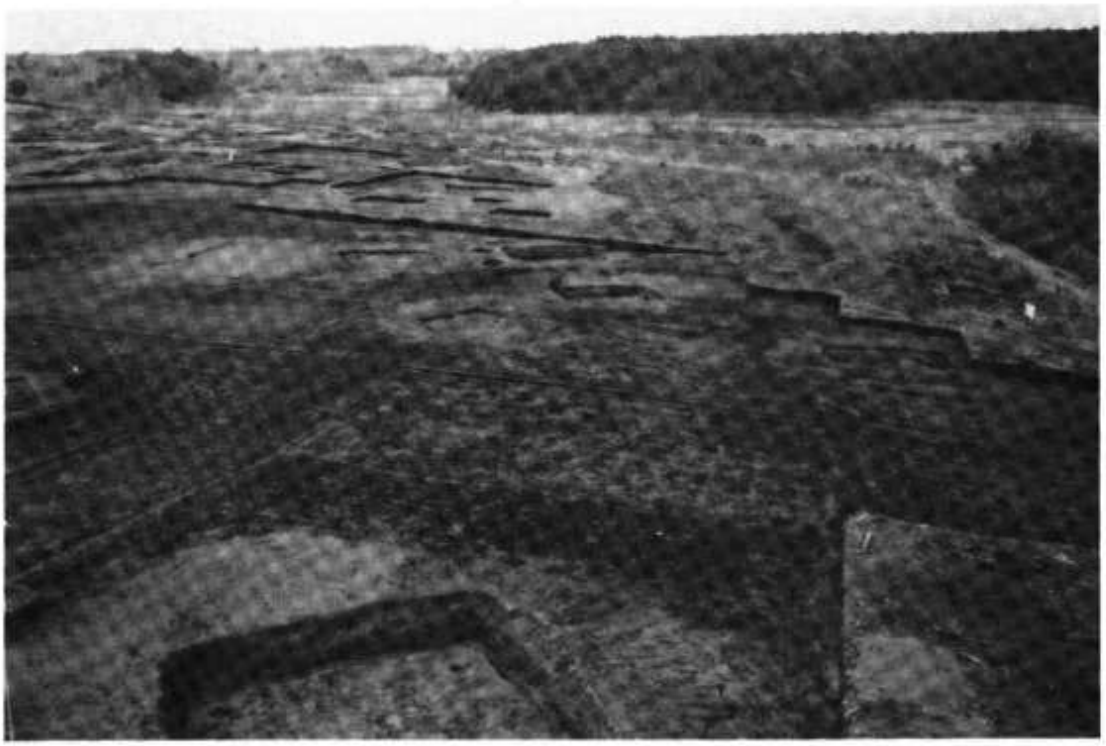
PL41　第　4　号　土　壙



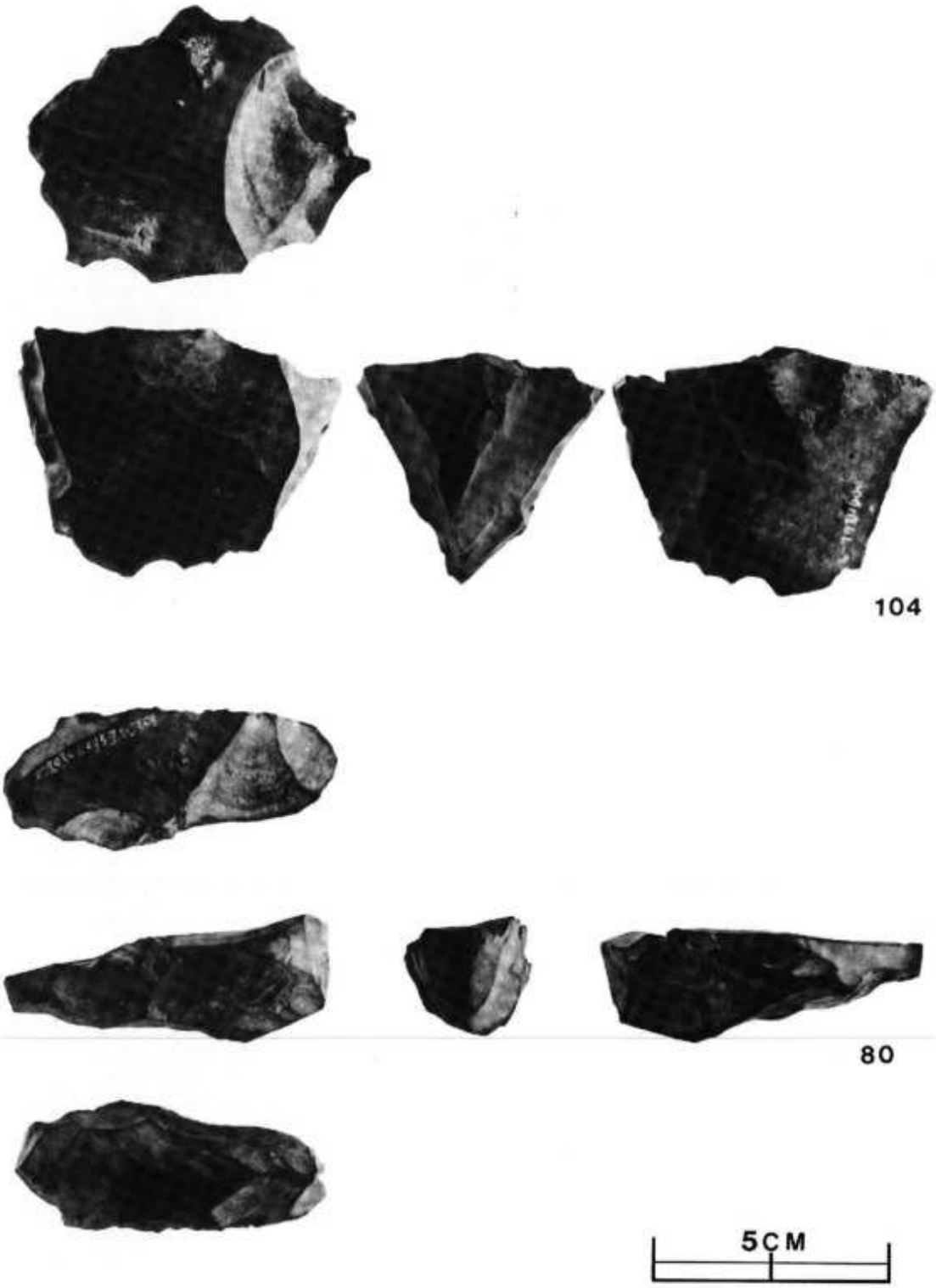
PL42　第　5　号　土　壙



PL 43　第　6　号　土　壙

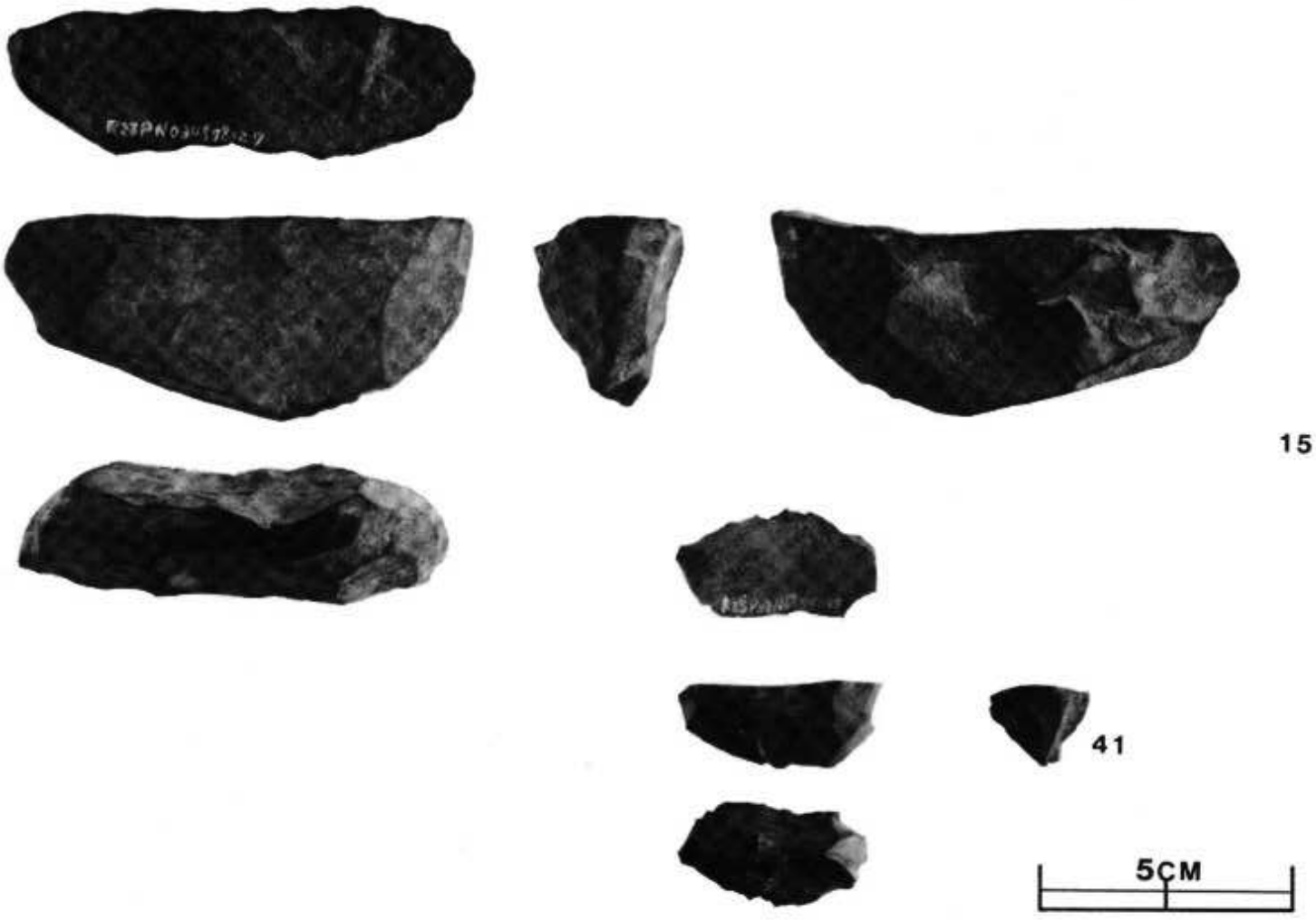


PL 44　沖　餅　遺　跡　全　景

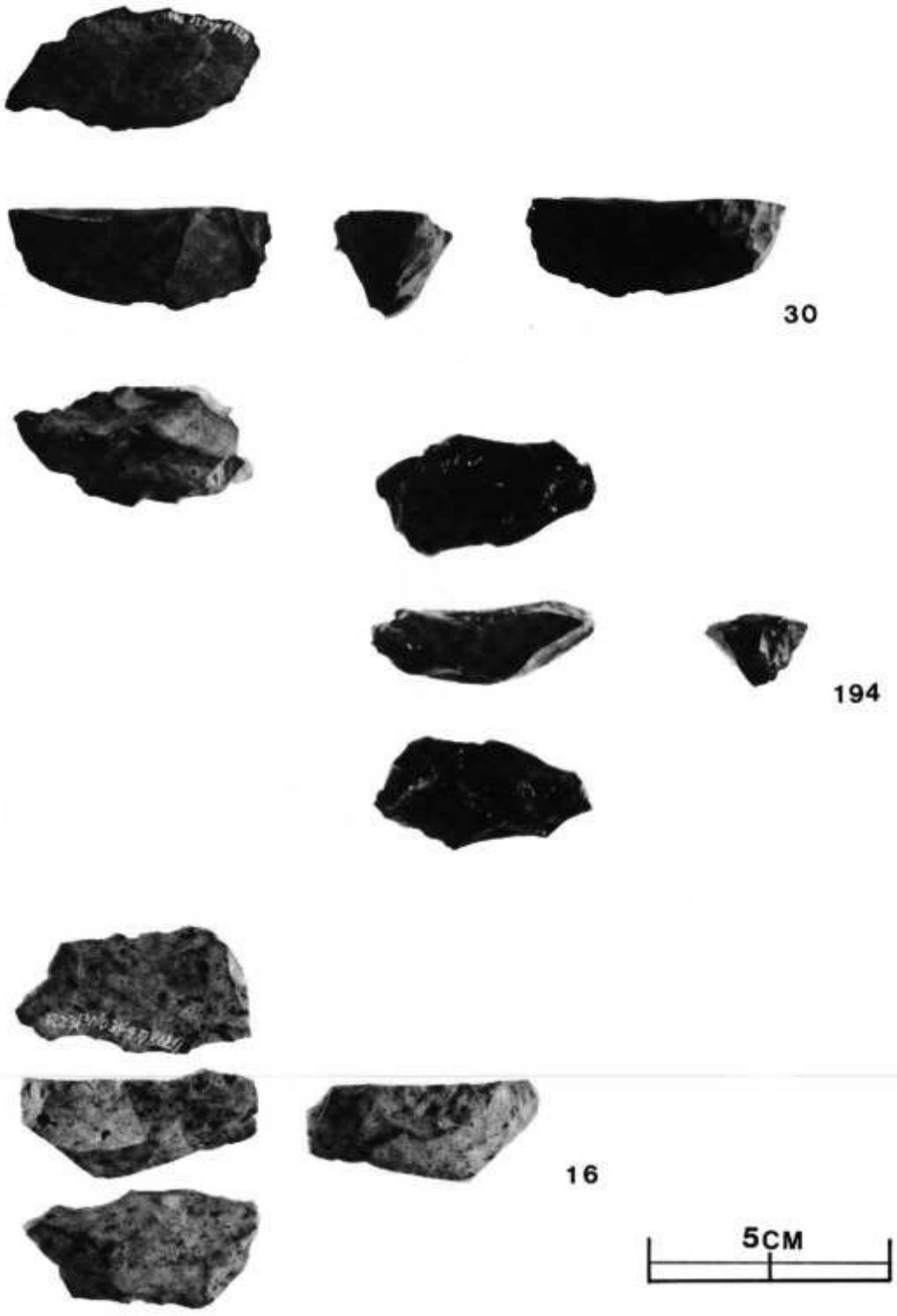


（遺物番号は実測図番号に同じ）

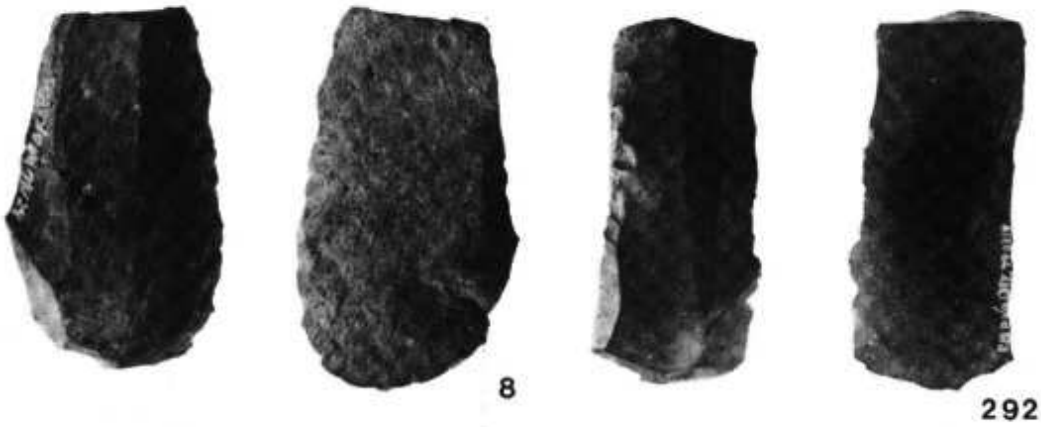
PL 45　出土遺物　石核・舟底形石器

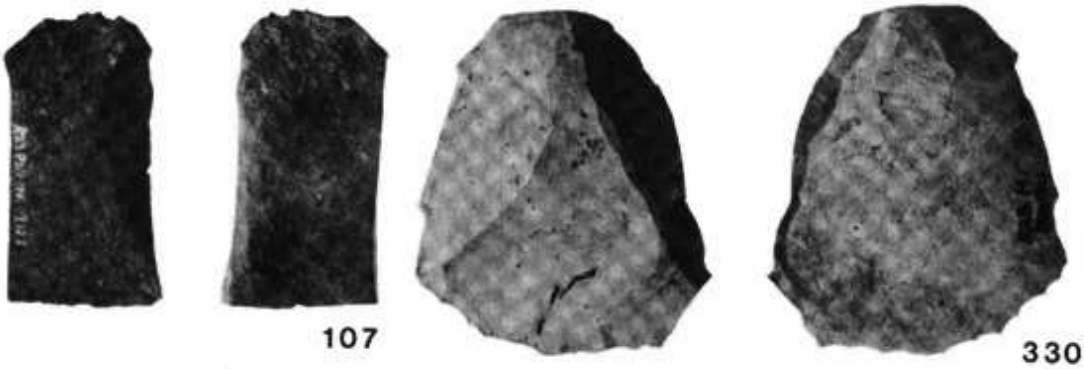


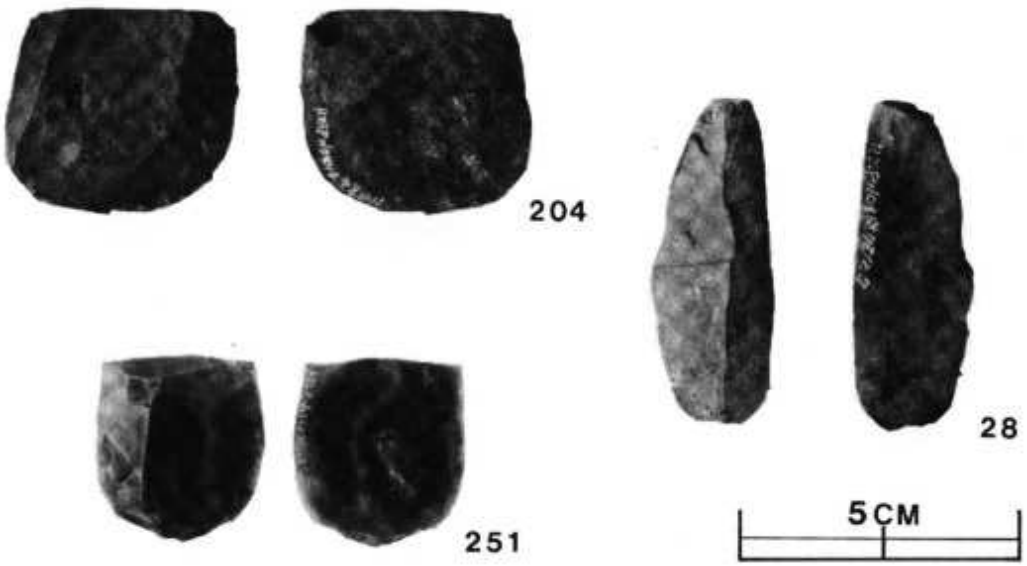
PL 46　出土遺物　舟底形石器



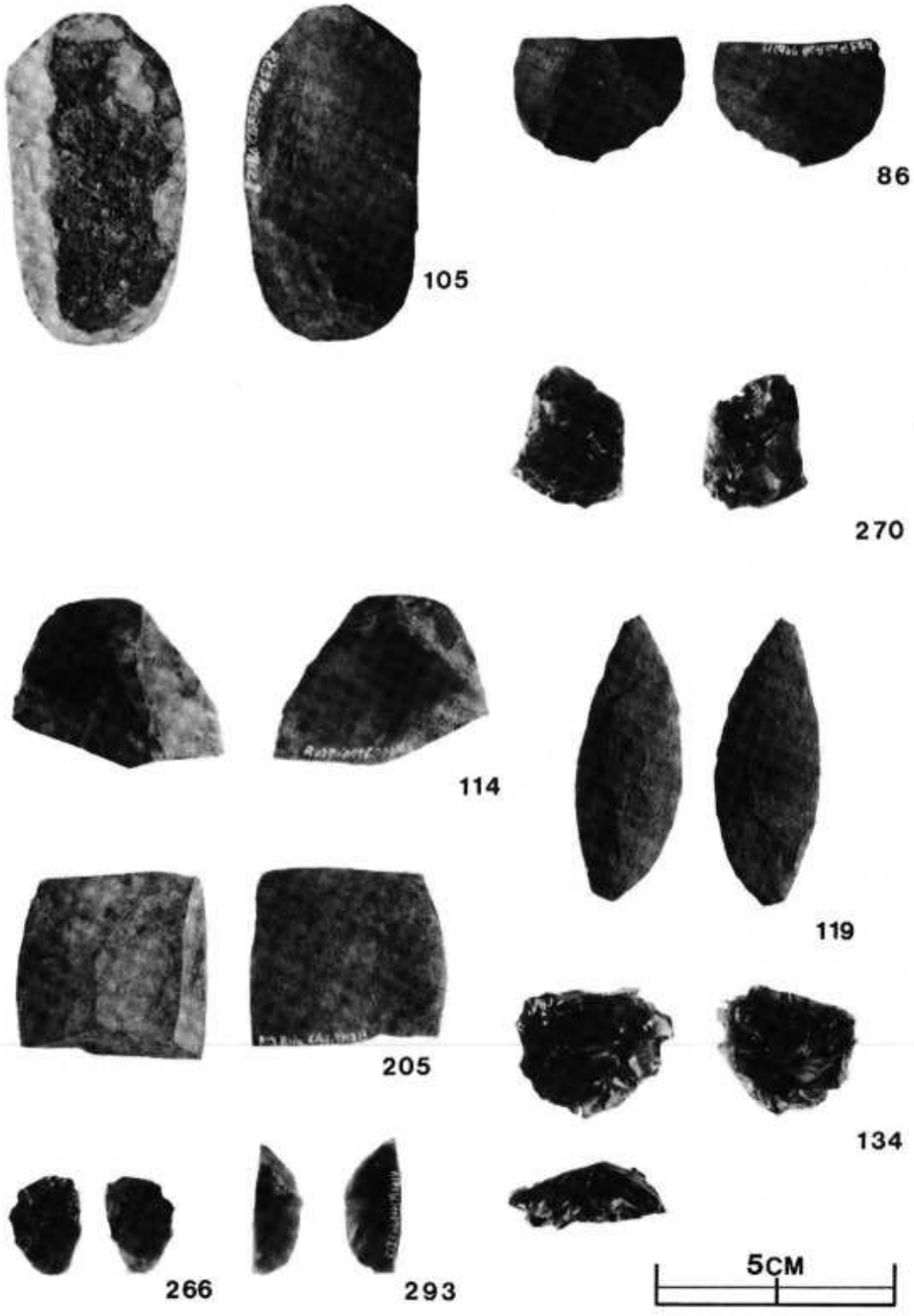
PL 47　出土遺物　舟底形石器



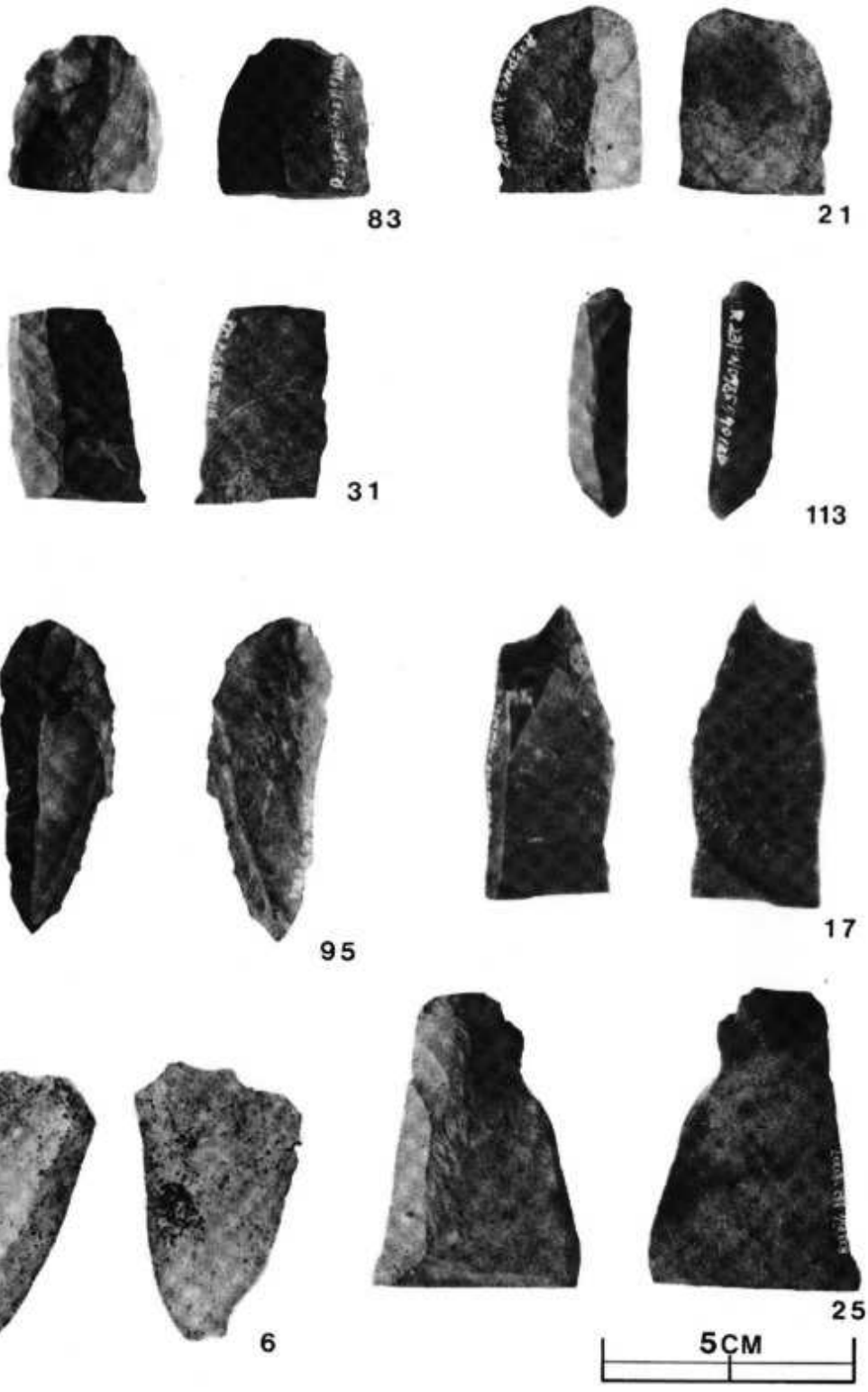




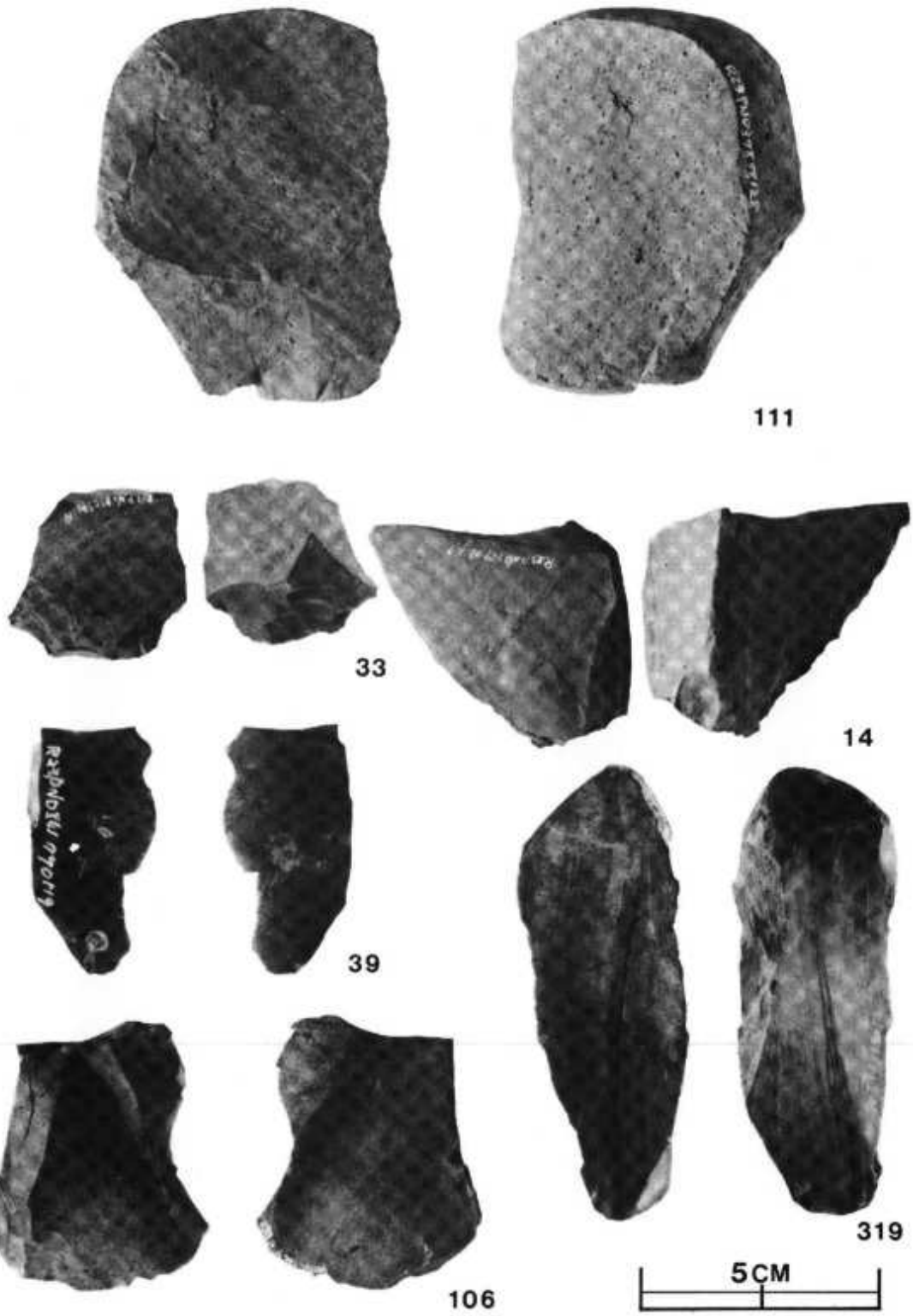
PL48　出土遺物　　撮器



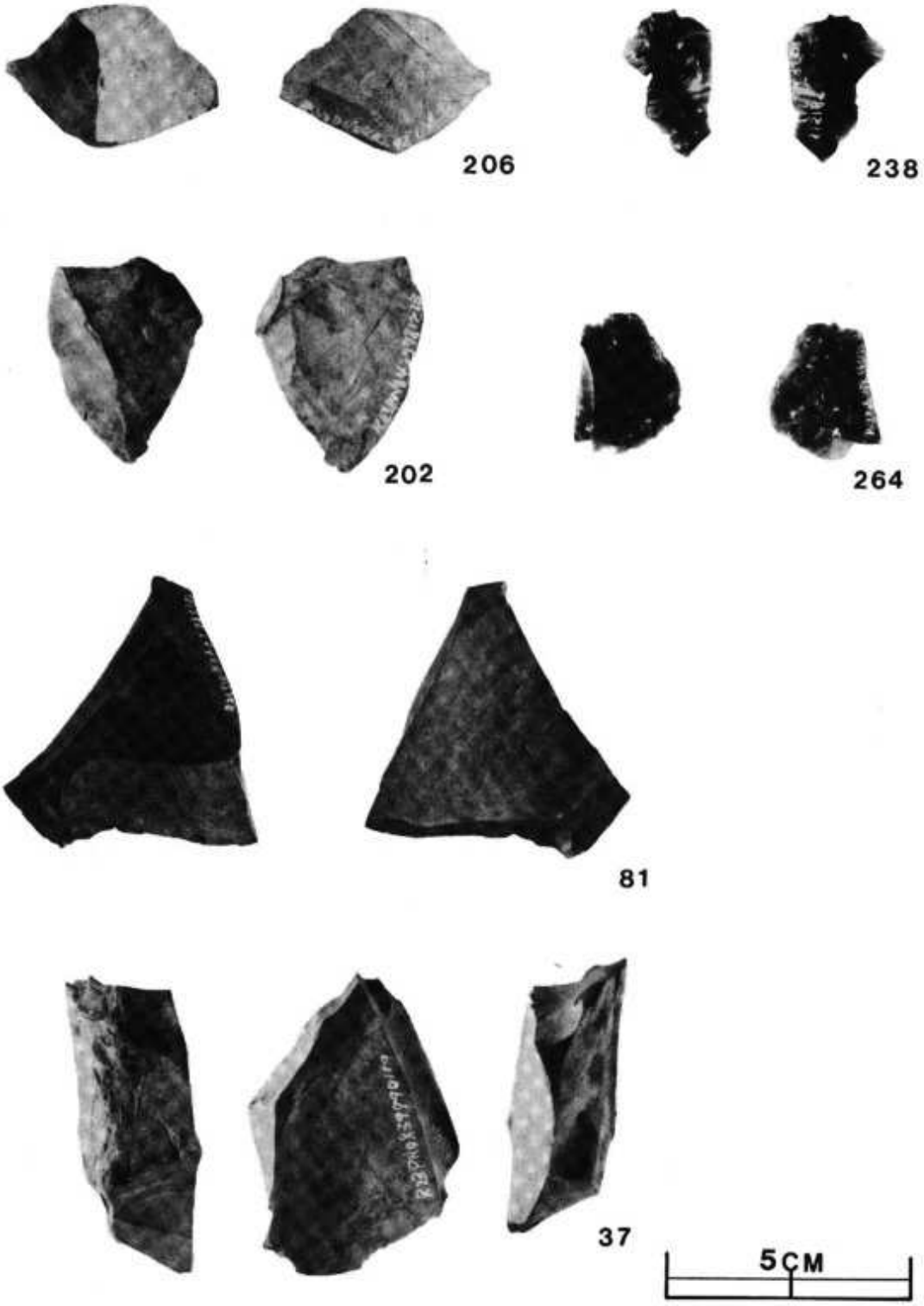
PL 49　出土遺物　掻器・尖頭器・Uフレーク・削器



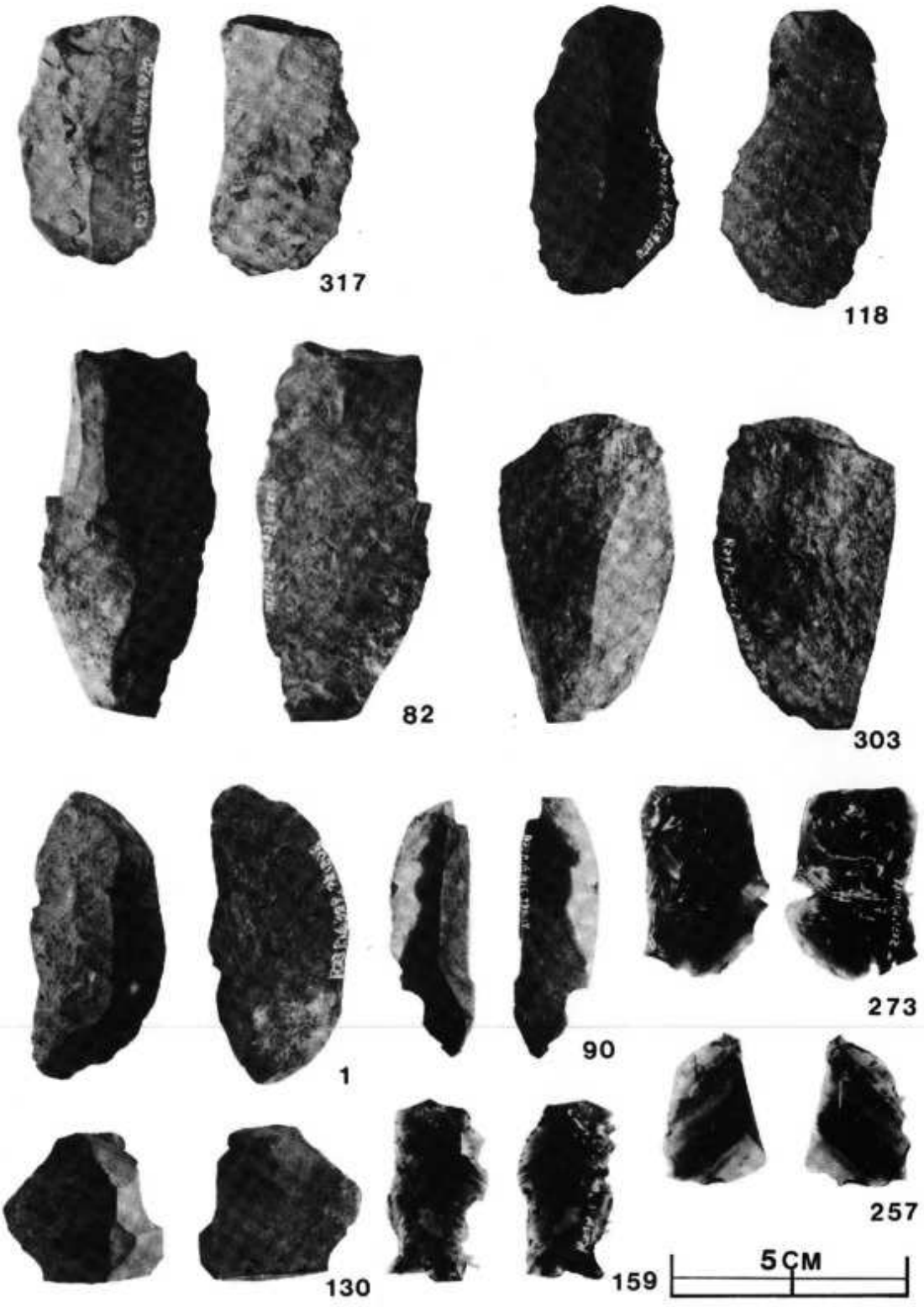
PL 50　出土遺物　削器



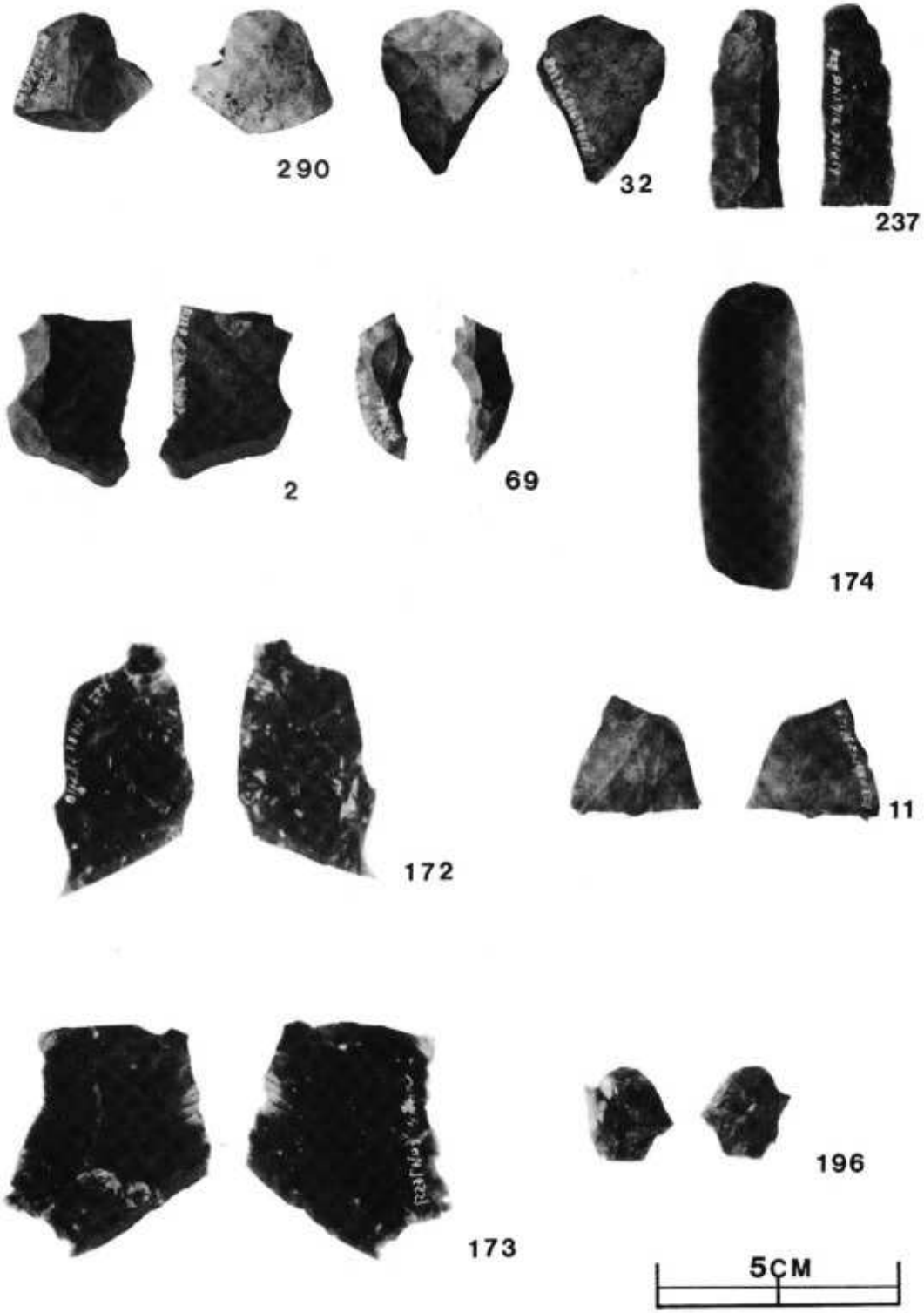
PL 51　出土遺物　削器



PL 52　出土遺物　削器・石核調整剝片

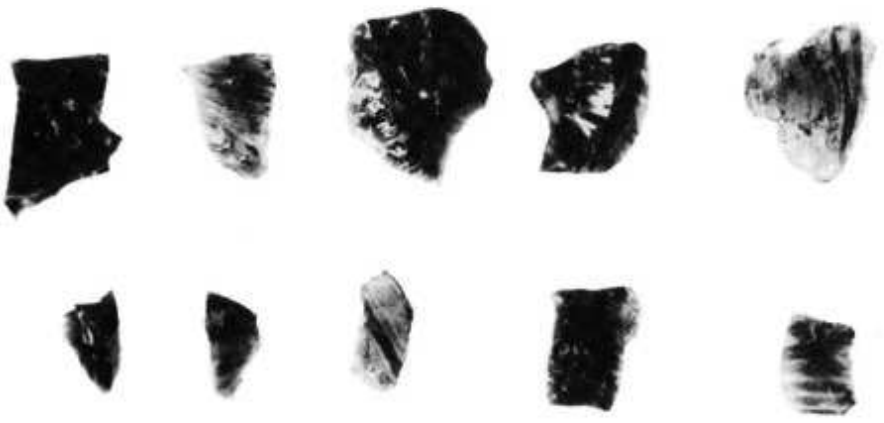


PL 53　出　土　遺　物　　剥　片

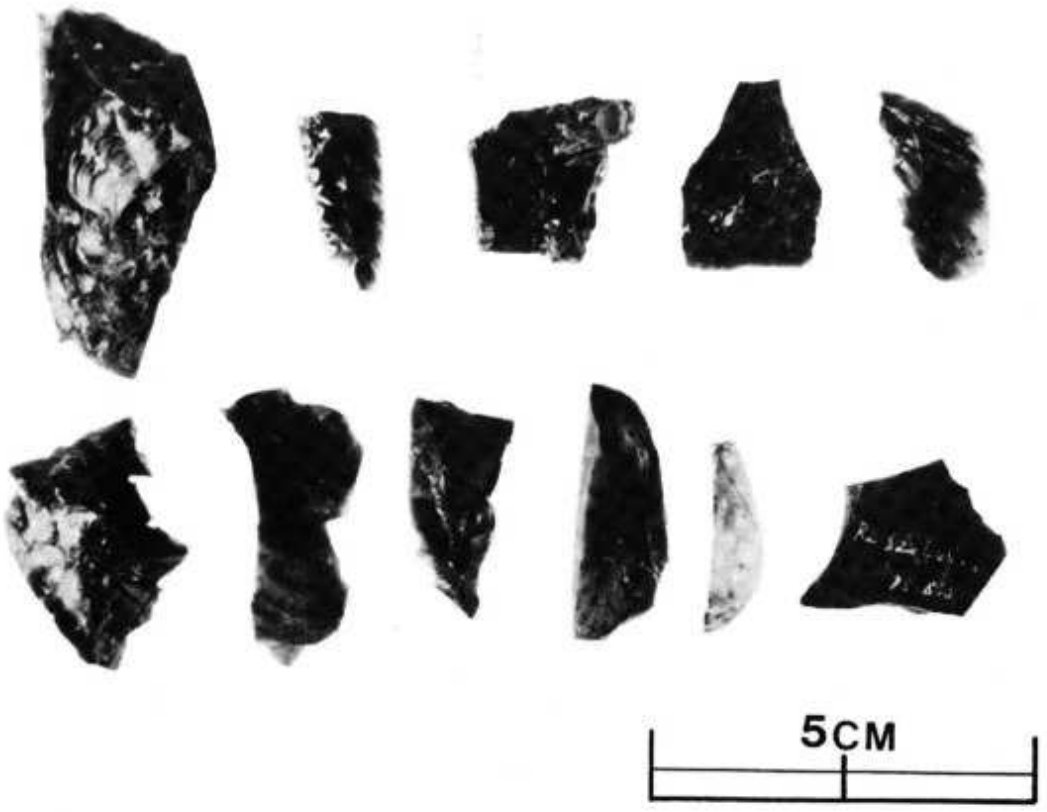


PL 54　出土遺物　掻器・剝片・敲石

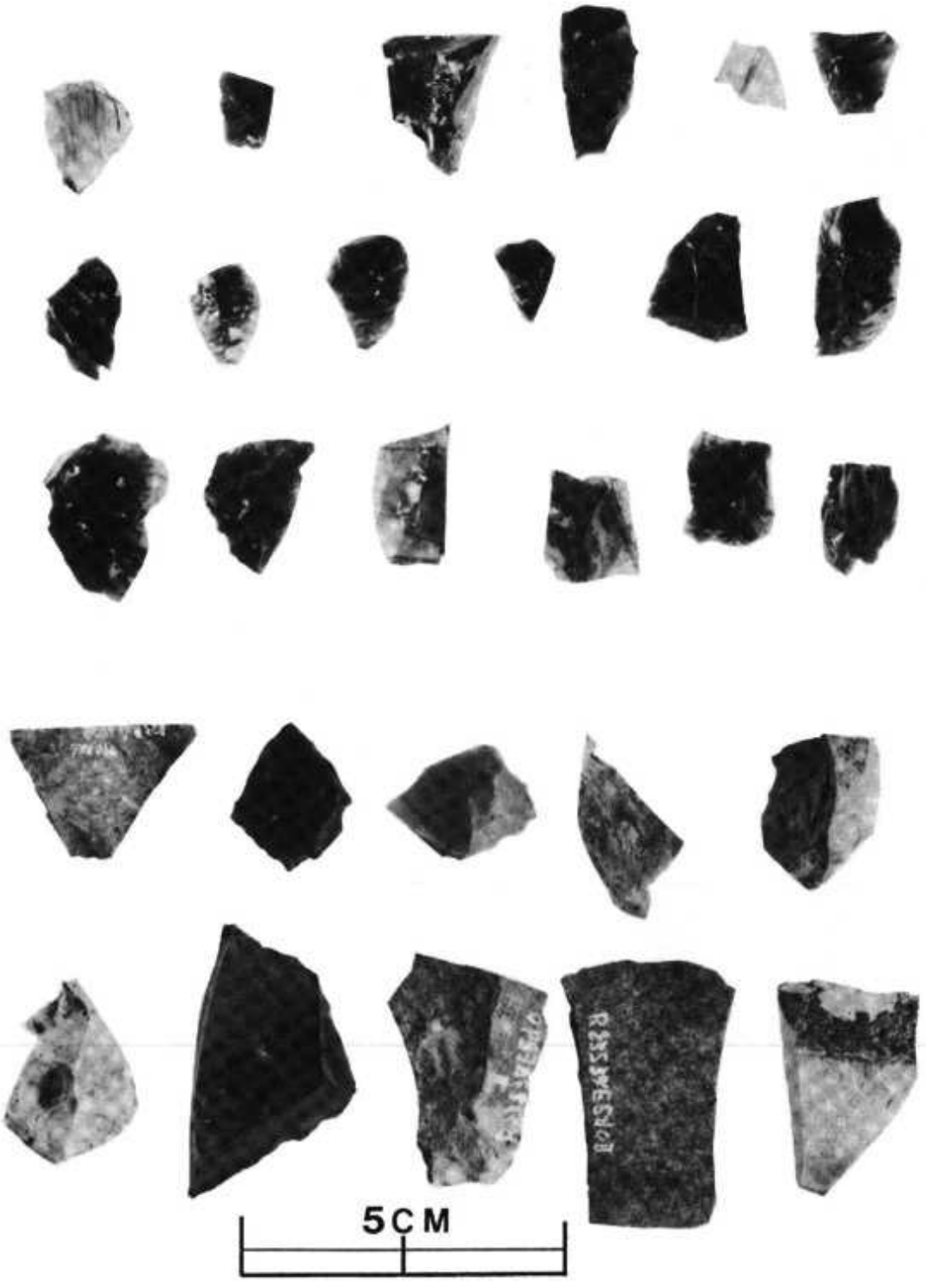
PL 55　出土遺物　A群出土剥片



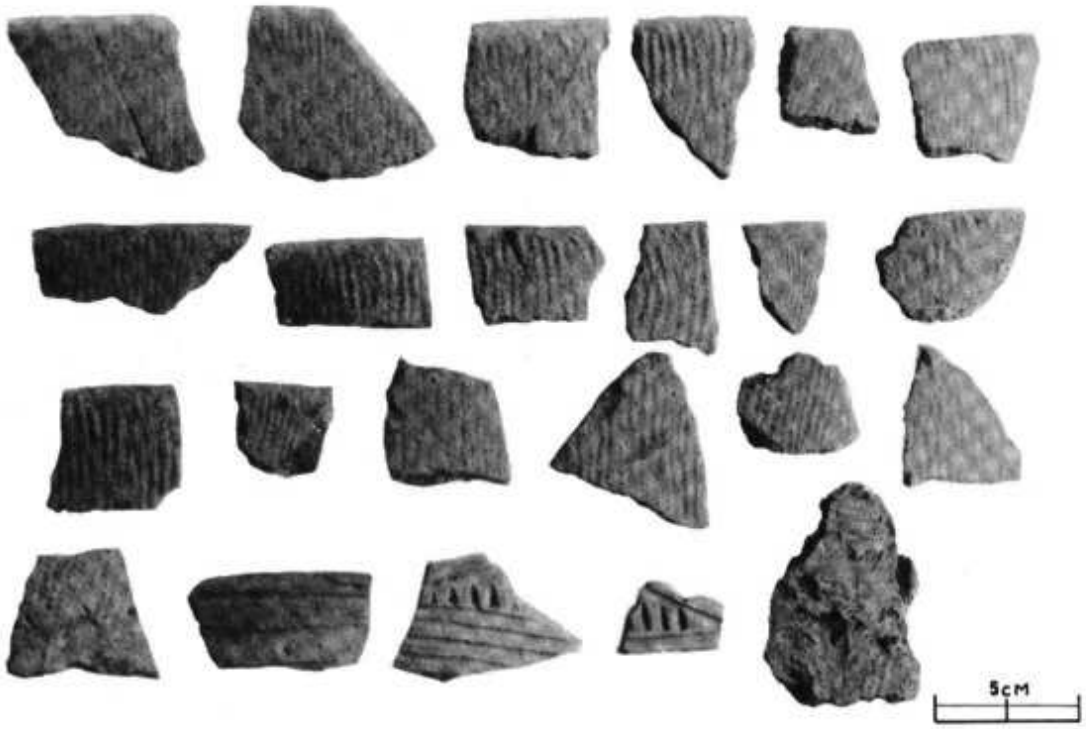
PL 56　出土遺物　D群出土剥片



PL 57　出土遺物　その他出土剥片

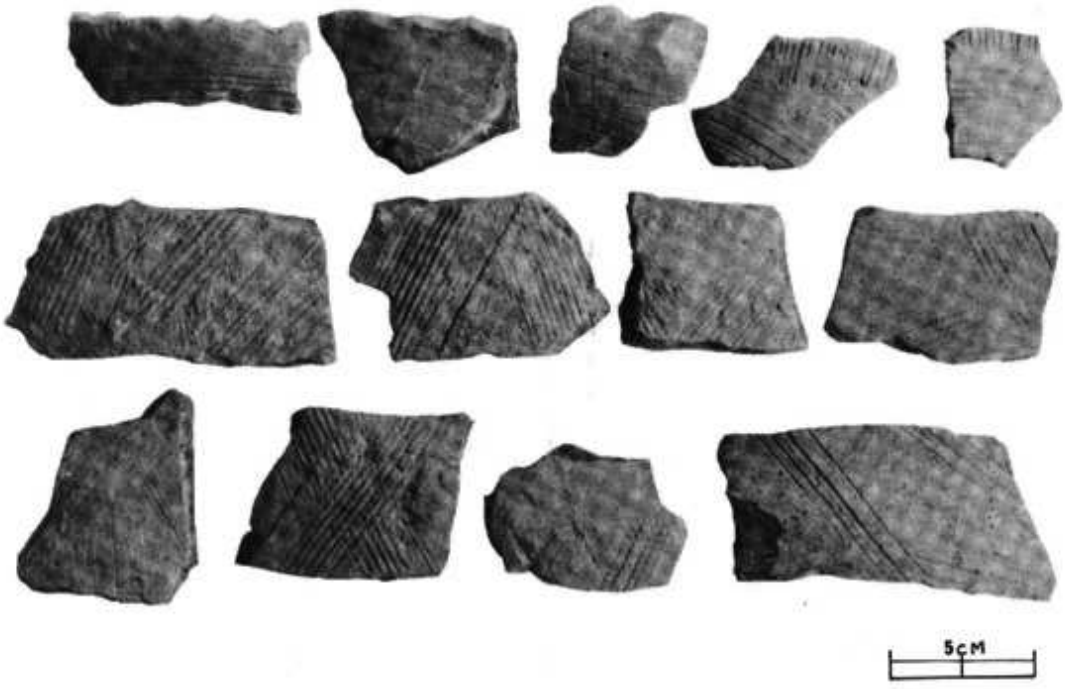


PL 58　出土遺物　その他出土剥片



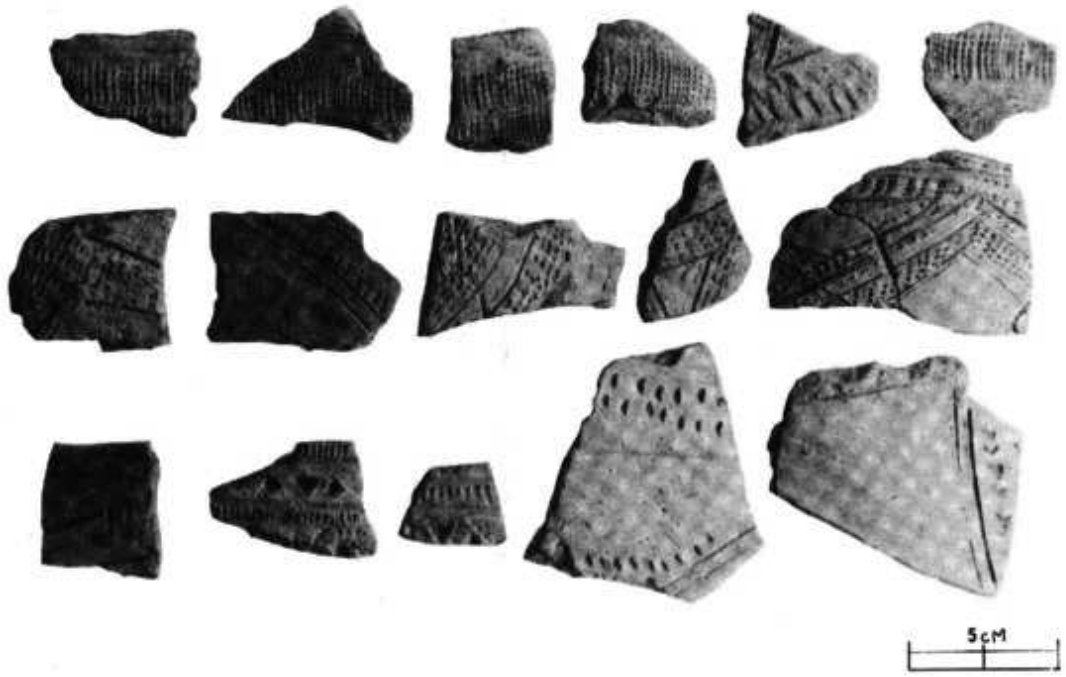
PL 59　グリット出土遺物　縄文式土器(1)

PL 60　グリット出土遺物　縄文式土器(2)



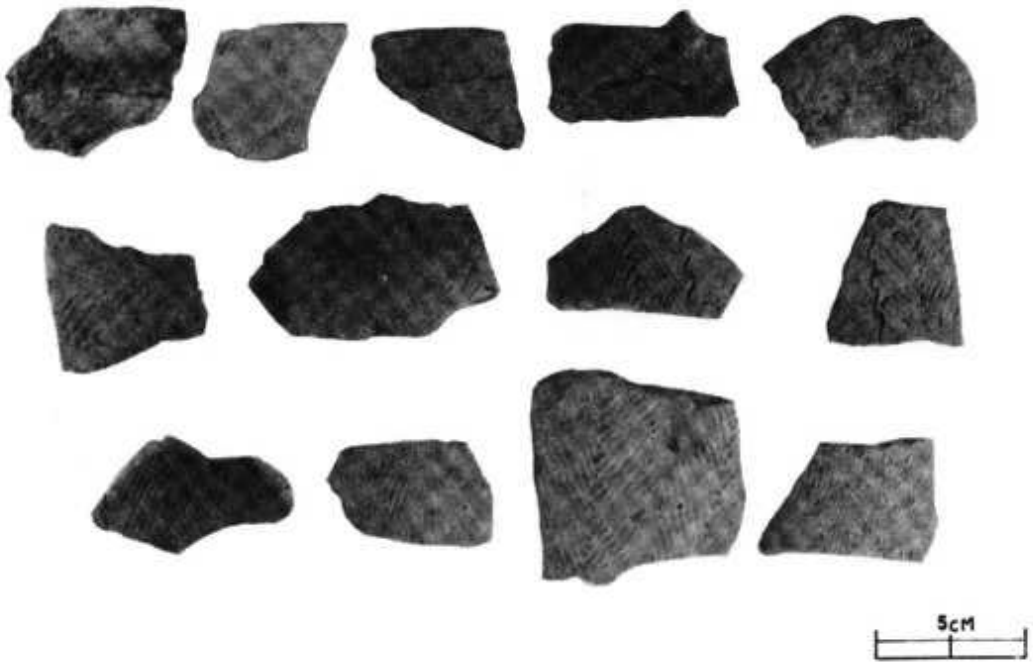
PL 61　グリット出土遺物　縄文式土器(3)

PL 62　グリット出土遺物　縄文式土器(4)

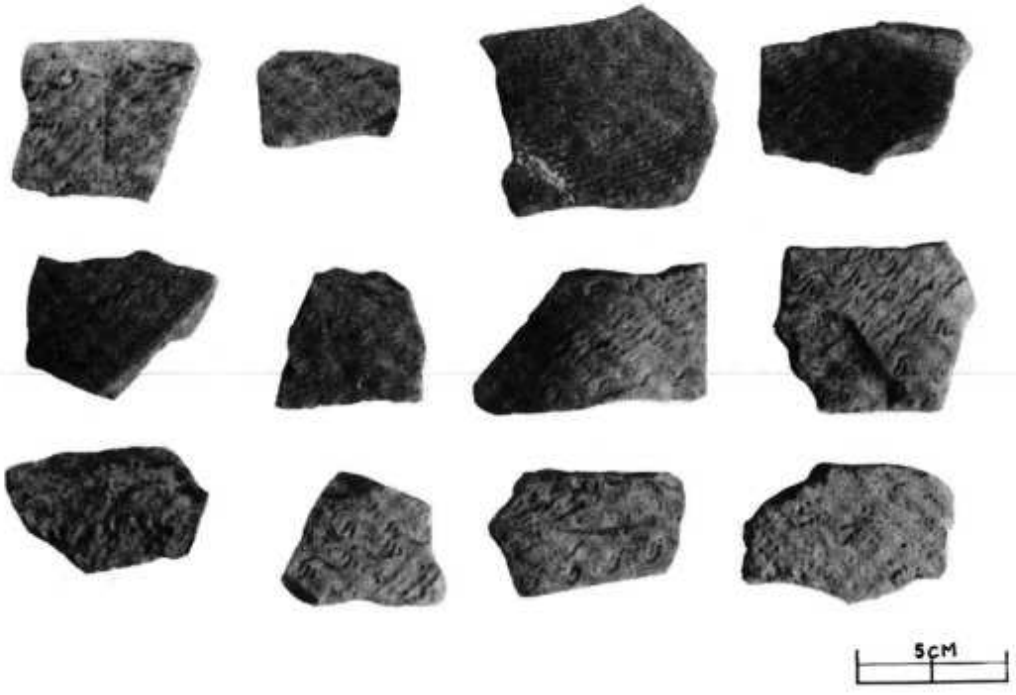


PL 63　グリット出土遺物　縄文式土器(5)

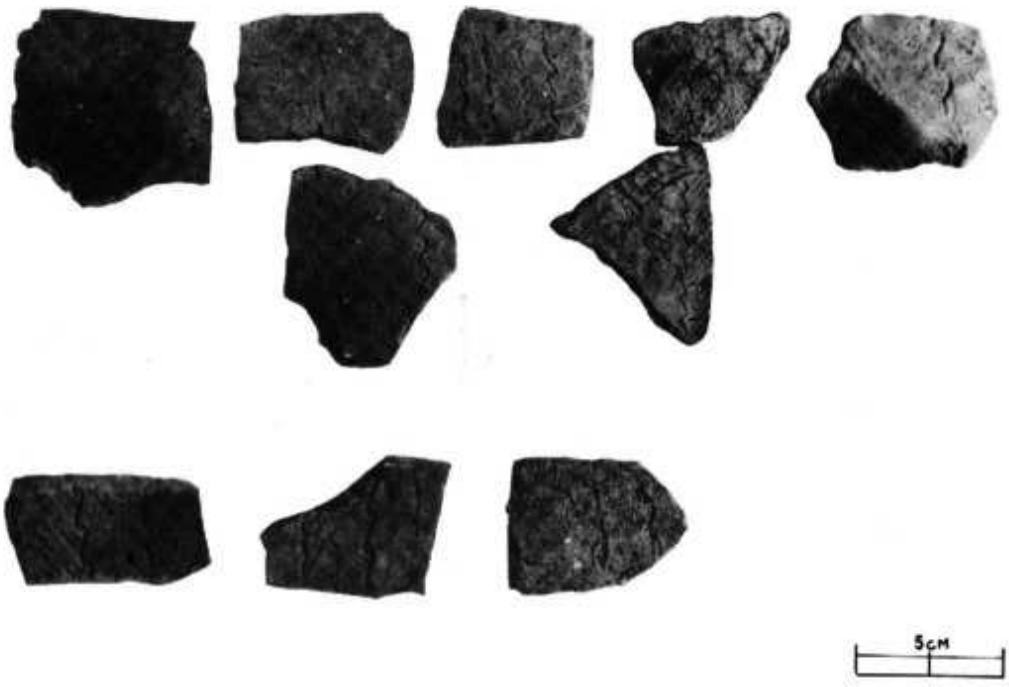
PL 64　グリット出土遺物　縄文式土器(6)



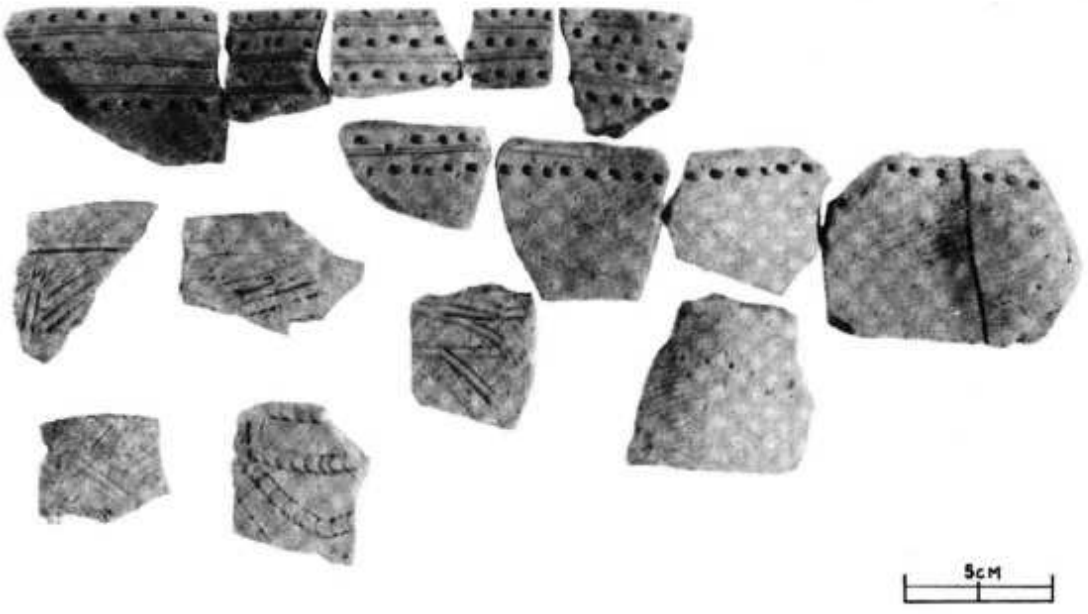
PL 65　グリット出土遺物　縄文式土器(7)



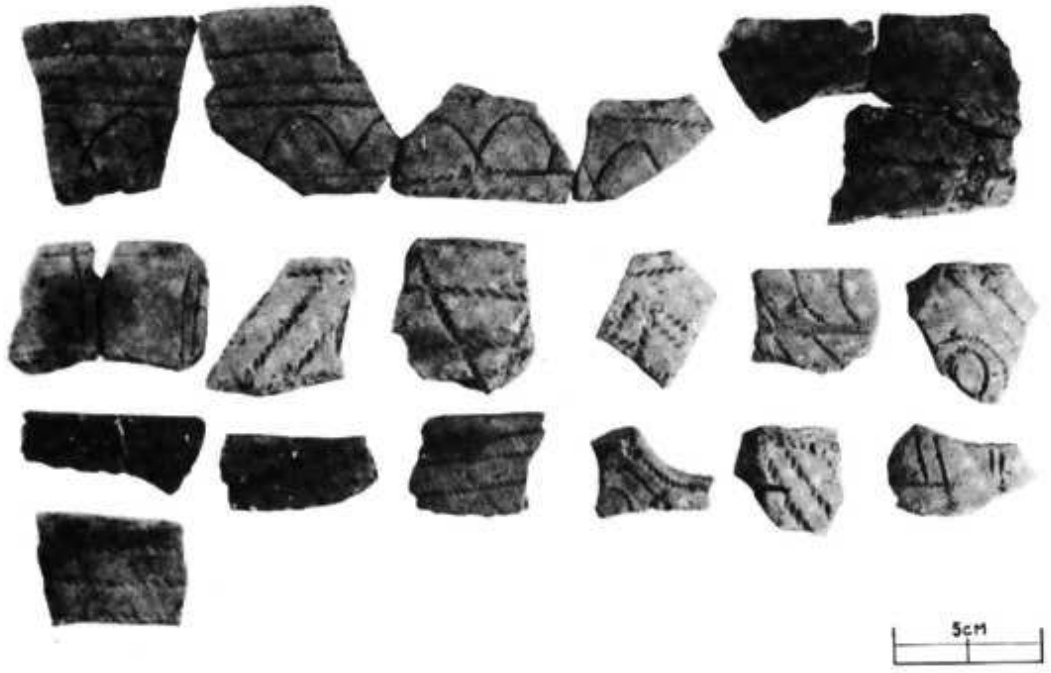
PL 66　グリット出土遺物　縄文式土器(8)



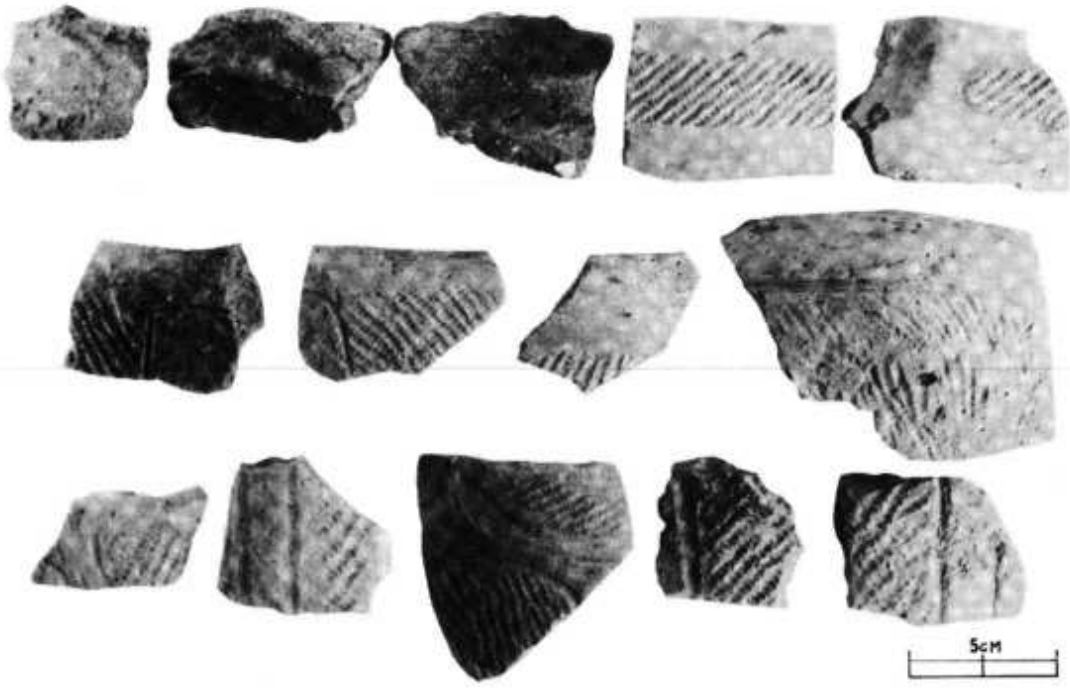
PL 67　グリット出土遺物　縄文式土器(9)



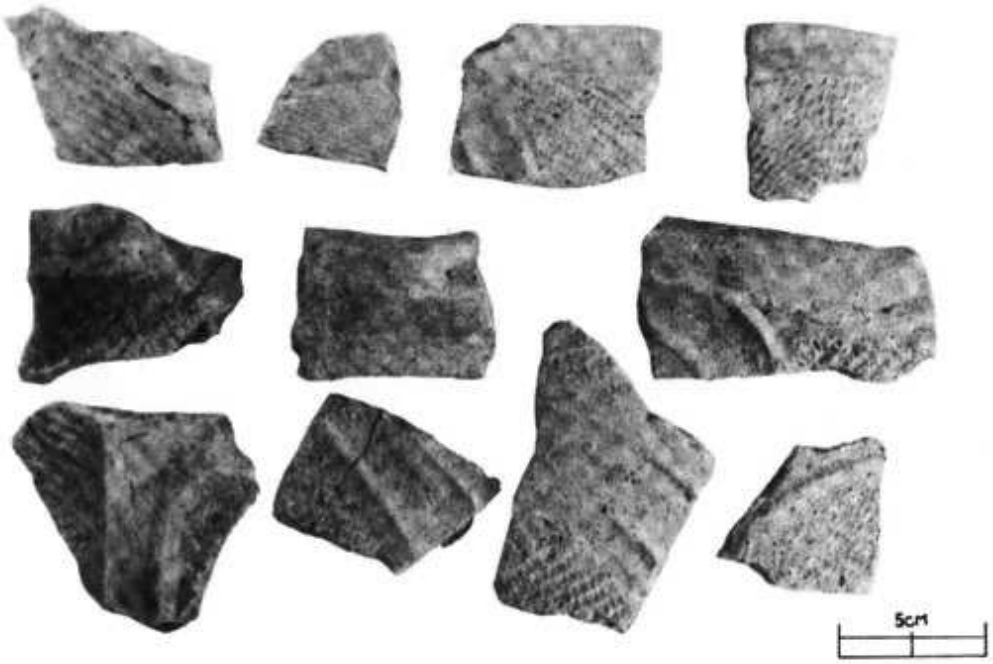
PL 68　グリット出土遺物　縄文式土器(10



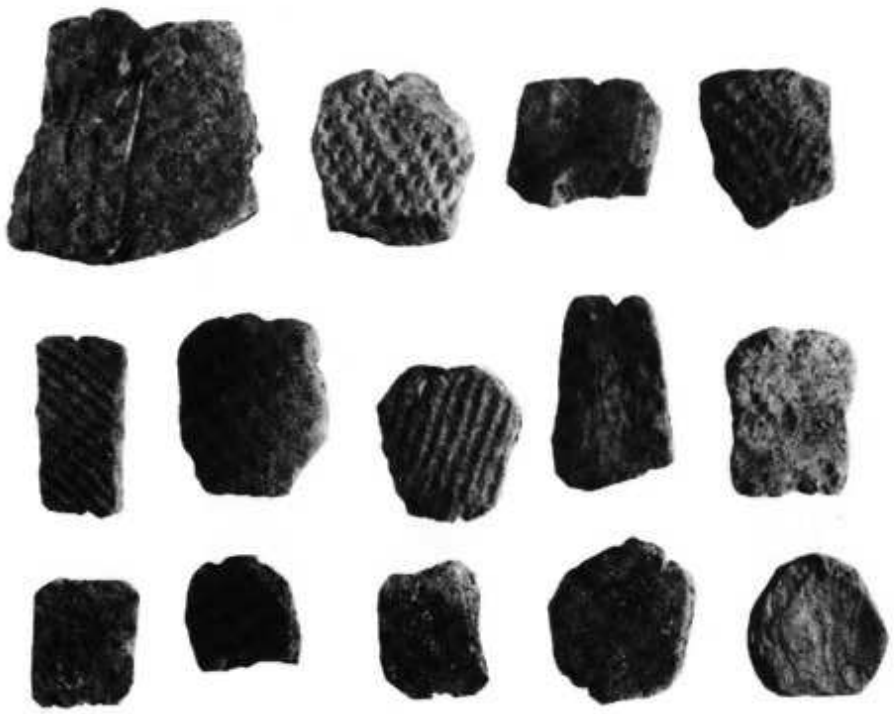
PL 69　グリット出土遺物　縄文式土器(1)



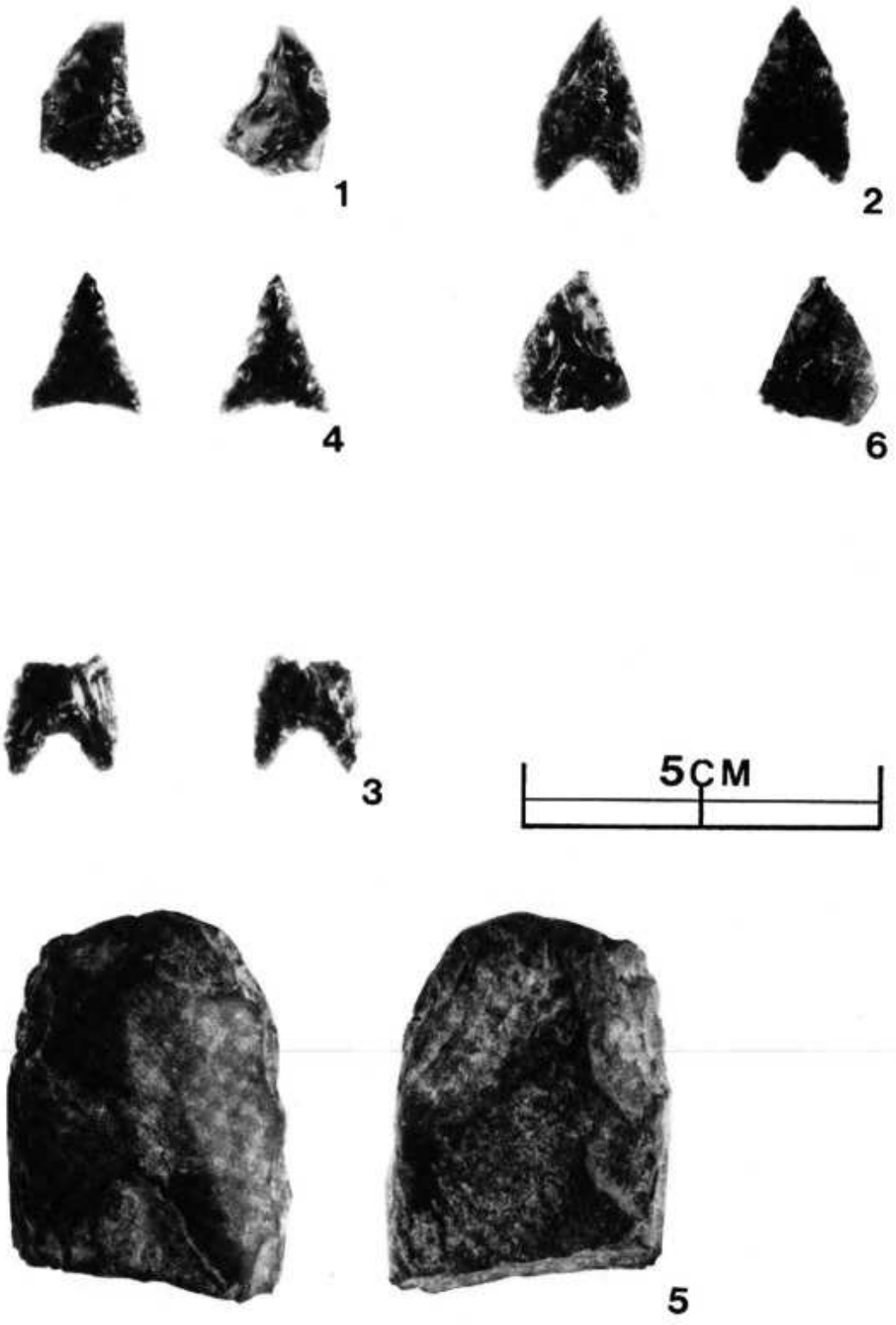
PL 70　グリット出土遺物　縄文式土器(2)



PL71　グリット出土遺物　縄文式土器(13)



PL72　グリット出土遺物　土製品



PL 73　出土遺物　石鏃・局部磨製石斧

8

10

2

1

5

4

6

PL 74　第1(8·10)・第3号住居址(1·2·4~6)出土遺物(縮尺不同)

1

2

3

5

6

10

PL 75　第4号住居址出土遺物（縮尺不同）

11

13

14

15

1

2

1

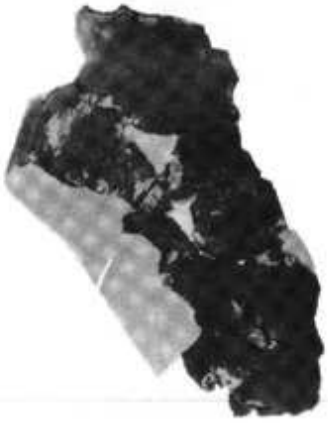
PL 76　第4(11·13～15)·第5(1·2)·第7号住居址(1)出土遺物(縮尺不同)

1

2

4

8



7

9

10

11

PL 77　第12号住居址出土遺物(縮尺不同)

1

2

4

5

7

6

PL 78　第8号住居址出土遺物(縮尺不同)

21

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告Ⅲ

— 沖 餅 遺 跡 —

昭和55年 3 月27日印刷
昭和55年 3 月31日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町 3 － 4 －57

印刷　株式会社　高野高速印刷